

埋蔵文化財調査報告書30

三王山遺跡
(第1～5次)

1999

名古屋市教育委員会

『埋蔵文化財報告書 30 三王山遺跡 (第1～5次)』に誤りがありました。お詫びするとともに、下記のように訂正いたします。

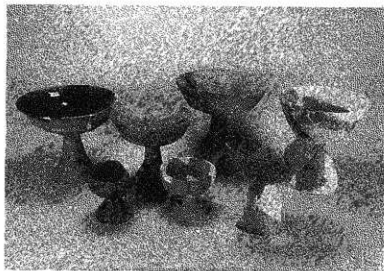
(誤)

(正)

	第三期層	第三紀層
P.1		
P.61 及び 65	遺物図 577 と 691 が同一	577 を削除 (577 は欠番)
P.63 及び 67	遺物図 632 と 743 が同一個体	632 を削除 (632 は欠番)
P.65	遺物図 669 と 671 が同一	671 を削除 (671 は欠番)
P.65 及び 67	遺物図 667 と 736 が同一	667 を削除 (667 は欠番)
P.81	遺物図 834 と 837 が同一	837 を削除 (837 は欠番)
同上	遺物図 835 と 836 が同一	836 を削除 (836 は欠番)
P.134 20 行目	I 群	①
P.147 2 行目	I b 層	II 層

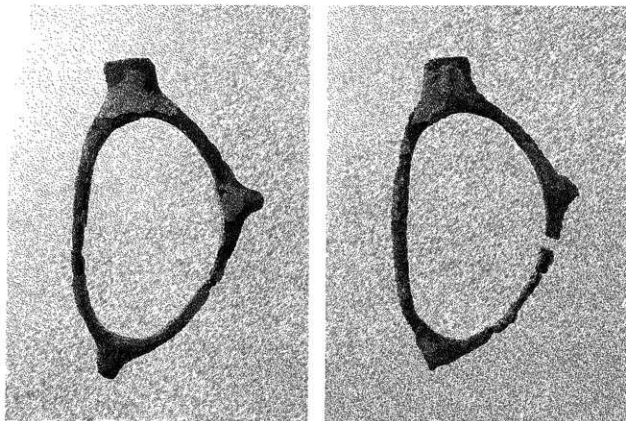
埋蔵文化財調査報告書30

三王山遺跡
(第1～5次)

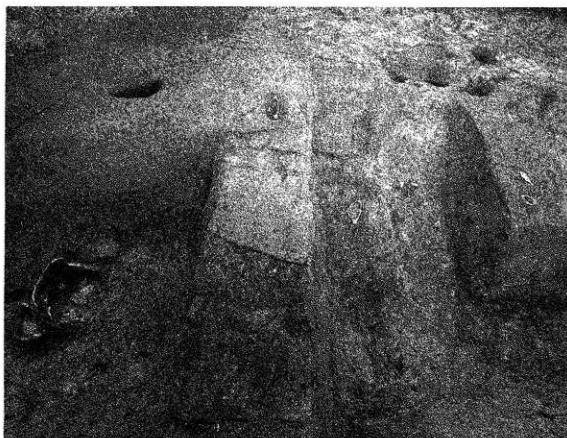


1999

名古屋市教育委員会



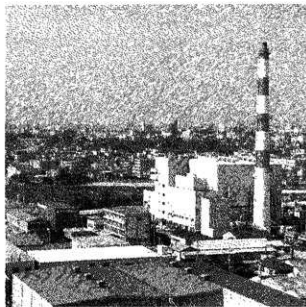
1. 2次 SD04出土の銅釦



2. 銅釦出土状況



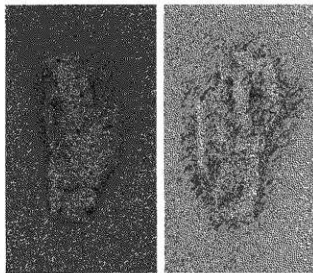
1. 三王山遺跡全景



2. 見晴台遺跡（中央の森の部分）を望む



3. 4次 SK12出土土製品

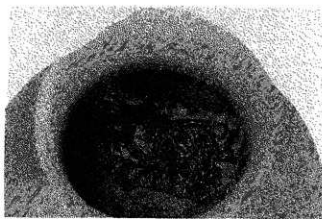
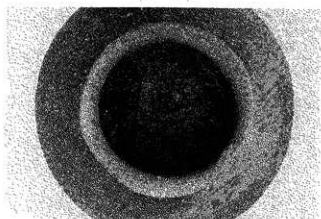
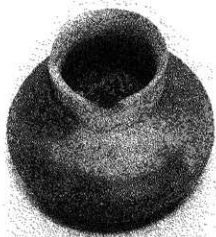


4. 盾模造品（表）

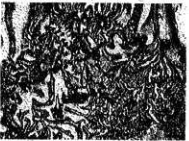
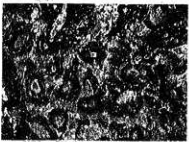
（裏）



3. 4次P479出土ミニチュア土器



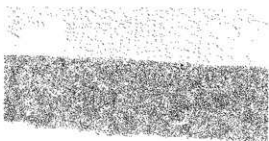
(写真1) 内面底部に黒漆様樹脂が付着固化した土器壺



(写真2) 黒漆様樹脂の表面 (拡大)



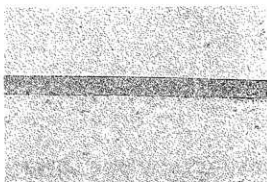
(写真3) 黒漆様樹脂の断面 (×400)



(写真4) 黒漆様樹脂の断面 (×400)



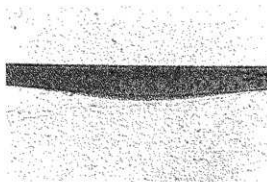
(写真5) 黒漆様樹脂の断面 (×200)



(写真6) 生漆試料No.1の断面 (×200)



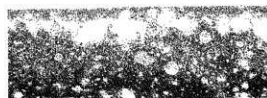
(写真7) 生漆試料No.2の断面 (×200)



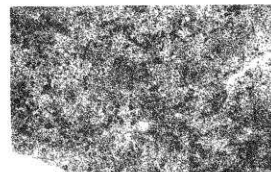
(写真8) 生漆試料No.2の断面 (×200)



(写真9) 春日町遺跡出土黒漆様樹脂の断面 (×200)



(写真10) 春日町遺跡出土黒漆様樹脂の断面 (×600)



(写真11) 春日町遺跡出土黒漆様樹脂の断面 (×600)



(写真12) 春日町遺跡出土黒漆様樹脂の断面 (×75)

■例言

- 1 本書は、名古屋市緑区鳴海町三王山に所在する三王山遺跡の第1～5次発掘調査報告書である。
- 2 調査は名古屋市教育委員会が行った。調査に関する調整事務は文化財保護室（現在、1994年度までは文化課、1996年度まで文化財課）が、発掘調査は見晴台考古資料館が担当した。各次の調査の詳細については、第2章で述べる。
- 3 本書で使用する方位は、国土座標第Ⅷ系による座標北を用いている。また、基準高は東京湾平均海面（T. P.）を用いている。
- 4 本書の作成にあたり、下記の方々にご教示、ご協力を頂いた。記して謝意を表します。
赤塚次郎、飯尾恭之、石井国男、石黒立人、井上洋一、梅本博志、榎本淳子、尾野善裕、梶山勝、形山嘉壽子、加納俊介、川合剛、川崎みどり、河野一隆、北野信彦、北野博司、久保和士、白敷真也、杉浦秀昭、鈴木敬則、千田嘉博、高橋健太郎、中野晴久、新美倫子、西本豊弘、長谷川達、林順一、肥後弘幸、山野幸治、平尾良光、星野茂次、丸山竜平、森勇一、森岡秀人、山田正夫、吉田裕子
岩滝町教育委員会、名古屋市農政緑地局、名古屋市緑土木事務所
- 5 本書は、見晴台考古資料館および文化財保護室職員の協力のもと、各次の調査担当者および名古屋市文化財調査員稲田望子が執筆し、村木が編集した。執筆の分担は目次に示した。まとめは、遺構については、各次の調査担当者との協議のうえ、村木が執筆した。それ以外は、文書を目次と、本文末に示した。また、土器に付着した漆の分析を委託した（財）元興寺文化財研究所と、土器の胎土、粘土の分析を委託した（株）パレオ・ラボから提出された報告は付編として掲載した。銅鋼の分析をして頂いた東京国立文化財研究所の平尾良光、榎本淳子の両氏、動物遺体の鑑定をして頂いた名古屋大学大学院新美倫子氏から頂いた原稿も付編に掲載した。また、カラー図版 PL.1 の銅鋼写真は名古屋市博物館杉浦秀昭氏に撮影して頂いた。
なお、執筆者を除く、発掘調査、整理作業の参加者は以下の通りである。
伊藤香代、大矢頭、金澤考明、神谷悦子、川原則子、小浦美生、小柳伸亮、近藤和子、笹岡卓也、佐々木佳子、佐藤美穂（奈良大学）、清水育子、中上幸子、中野いづる、前川紗沙理、山本雅代、若井晴子
- 6 出土遺物及び調査の記録類は、見晴台考古資料館が保管している。

■目次

第1章 遺跡の位置と環境	(村木誠)	1
位置		1
歴史的環境		2
第2章 調査の歴史	(村木)	5
第3章 本書の記述の方針	(村木)	6
第4章 第1次調査	(服部哲也)	9
第5章 第2次調査	(服部)	29
第6章 第3次・第4次調査	(村木・田原和美)	51
第7章 第5次調査	(伊藤厚史)	101
第8章 まとめ		122
遺構	(村木)	122
遺物	(水野裕之・稲田望子・村木)	129
鳴海丘陵の遺跡の動向と三王山遺跡	(村木)	150
付録1 三王山遺跡の鋼銅について		153
付録2 名古屋市三王山遺跡から出土した鋼銅・鋼鉄の自然科学的研究		160
付録3 土器壺の内面底部に付着同化した黒漆様樹脂の分析		167
付録4 出土髹胎土の材料分析		171
付録5 名古屋地域における弥生時代後期土器と環濠集落の動向		179
付録6 三王山遺跡出土の動物遺体		197
付録7 第5次調査出土土器胎土および粘土採掘坑粘土の材料分析		199

■カラー図版目次

PL 1	4 磨板造品	写真6 生漆試料No.1の断面
1 2次 SD04出土の鋼銅	5 4次 P479出土ミニチュア土胎	写真7 生漆試料No.2の断面
2 鋼銅出土状況	PL 3・4	写真8 生漆試料No.2の断面
PL 2	写真1 内面底部に黒漆様樹脂が付着同化した土器壺	写真9 春日町遺跡出土黒漆様樹脂の断面
1 三王山遺跡全景	写真2 黒漆様樹脂の次層	写真10 春日町遺跡出土黒漆様樹脂の断面
2 見晴台遺跡を望む	写真3 黒漆様樹脂の断面	写真11 春日町遺跡出土黒漆様樹脂の断面
3 4次 SK12出土土製品	写真4 黒漆様樹脂の断面	写真12 春日町遺跡出土黒漆様樹脂の断面
	写真5 黒漆様樹脂の断面	

■図版目次

図版1 1次調査遺構(1)	図版12 1次調査遺物(1)
図版2 1次調査遺構(2)	図版13 1次調査遺物(2)
図版3 2次調査遺構(1)	図版14 1次調査遺物(3)
図版4 2次調査遺構(2)	図版15 2次調査遺物(1)
図版5 3・4次調査遺構(1)	図版16 2次調査遺物(2)
図版6 3・4次調査遺構(2)	図版17 2次調査遺物(3)
図版7 3・4次調査遺構(3)	図版18 2次調査遺物(4)
図版8 3・4次調査遺構(4)	図版19 3・4次調査遺物(1)
図版9 5次調査遺構(1)	図版20 3・4次調査遺物(2)
図版10 5次調査遺構(2)	図版21 5次調査遺物(1)
図版11 5次調査遺構(3)	図版22 5次調査遺物(2)

■表目次

第5章	
表1	高杯の出土遺構……………132
表2	主要な遺構の形式構成……………133
表3	三王山遺跡の石塔……………143
表4	貝原の植名……………146
表5	2次サンプリング検出遺物構成表……………147
表6	3次サンプリング検出遺物構成表……………148
表7	5次サンプリング検出遺物構成表……………148
表8	検出貝原の生息環境と群衆……………149
付録1	
表1	貝輪探掘出土遺物一覧……………154
付録2	
表1	有効断面の蛍光X線分析法で測定された 元素のX線強度比……………161

■挿図目次

第1章	
第1図	名古屋市の地形と二王山遺跡の立地……………1
第2図	三王山遺跡の位置……………2
第3図	周辺の遺跡……………3
第2章	
第4図	調査地点位置……………5
第3章	
第5図	三王山遺跡遺構平面図……………7～8
第4章	
第6図	主要遺構配置図……………10
第7図	縄文時代出土遺物……………11
第8図	SD01周溝出土遺物……………11
第9図	SD01実測図……………12
第10図	SD02実測図……………13
第11図	SD02周溝出土遺物……………13
第12図	SD03実測図……………14
第13図	SD03周溝出土遺物……………15
第14図	SD01実測図及び出土遺物……………16
第15図	SD02実測図……………17
第16図	SD02出土遺物……………17
第17図	SD04実測図……………18
第18図	SD04下層出土遺物 その1……………19
第19図	SD04下層出土遺物 その2……………20
第20図	SD04下層出土遺物 その3……………21
第21図	SD04上層出土遺物 その1……………22
第22図	SD04上層出土遺物 その2……………23
第23図	SD04上層出土遺物 その3……………24
第24図	SD04上層出土遺物 その4……………25
第25図	SK01出土遺物……………25
第26図	SK01実測図……………25
第27図	SB01実測図……………26
第28図	SB01出土遺物……………26
第29図	SB02実測図……………27
第30図	SB02出土遺物……………27
第31図	SK04・05実測図……………28
第32図	SK04・05出土遺物……………28
第5章	
第33図	主要遺構配置図……………30
第34図	縄文時代出土遺物……………31
第35図	SK08・SK09実測図……………31
第36図	SK08出土遺物 その1……………32
第37図	SK08出土遺物 その2……………33
第38図	SK20出土遺物……………33
第39図	SK12・13・14・15・18実測図……………35
第40図	SK15出土遺物 その1……………36
第41図	SK15出土遺物 その2……………37
第42図	SK15出土遺物 その3……………38
第43図	SK18下層出土遺物……………39
第44図	SK09出土遺物 その1……………40
第45図	SK09出土遺物 その2……………41
第46図	SD01実測図……………42
第47図	SD01下層出土遺物……………43

表2	三王山遺跡出土有鉤銅劍および銅製の鉛同位体比……………166
付録4	
表1	検討した土器資料……………171
表2	発掘土の材料およびその他の特徴……………175
付録5	
表1	縄文貯蔵表……………185
付録6	
表1	左上製坯日輪計測表……………197
付録7	
表1	検討した土器および粘土層試料……………199
表2	土器胎土および粘土中の粒子径数値一覧表……………203
表3	土器胎土および粘土層試料粘土の特徴と砂粒組成……………206

第48図	SD01上・中層出土遺物……………44
第49図	SD02実測図……………45
第50図	SD04出土金銅器……………46
第51図	SD02中・下層出土遺物 その1……………47
第52図	SD02中・下層出土遺物 その2……………48
第53図	SD02中・下層出土遺物 その3……………49
第54図	SD02上層出土遺物……………49
第55図	SK02・P12実測図……………50
第56図	P12出土遺物……………50
第57図	SK18出土ガラス小玉とP99出土勾玉……………50
第6章	
グリッド設定図……………51	
第59図	トイレ跡平面図・断面図……………52
第60図	トイレ跡出土遺物……………52
第61図	基本層序……………53
第62図	西側外面上層図……………53
第63図	土層断面位置……………54
第64図	第3次・第4次調査区全体図……………55
第65図	3-SX03・3-SD06断面図……………56
第66図	3-SX05断面図……………56
第67図	3-SD06A-A'断面図……………57
第68図	3-SD06C-C'断面図……………57
第69図	3-SX03出土遺物……………58
第70図	3-SX03, SX05出土遺物……………59
第71図	3-SD06遺物出土位置図……………60
第72図	3-SD06出土遺物(1)……………61
第73図	3-SD06出土遺物(2)……………62
第74図	3-SD06出土遺物(3)……………63
第75図	3-SD06出土遺物(4)……………64
第76図	3-SD06出土遺物(5)……………65
第77図	3-SD06出土遺物(6)……………66
第78図	3-SD06出土遺物(7)……………67
第79図	3-SD06出土遺物(8)……………68
第80図	3-SB01……………69
第81図	4-SB04・05……………70
第82図	4-SB03・06……………71
第83図	4-SB07……………72
第84図	4-SB08・09……………73
第85図	3-SK06断面図……………73
第86図	弥生時代型穴住居出土遺物……………74
第87図	4-SK12……………75
第88図	4-SK12出土遺物……………75
第89図	4-SK46……………76
第90図	4-SB01……………77
第91図	古墳時代型穴住居出土遺物……………78
第92図	3-SB02・SK03……………79
第93図	4-SK11……………79
第94図	4-SK28……………80
第95図	4-SK28出土遺物……………80
第96図	3-SK03・4-SK11出土遺物……………81
第97図	4-SD11断面図……………82
第98図	4-SD22断面図……………82

目 次

第99回	4-SD24断面図	83
第100回	4-SK25断面図	84
第101回	4-SK47断面図	84
第102回	4-SK45断面図	85
第103回	4-SK50断面図	85
第104回	4 柱穴列 1-4	86
第105回	3-柱穴列 1-2	86
第106回	中世の遺物 (1)	87
第107回	中世の遺物 (2)	88
第108回	4 SB10	89
第109回	4-SB11	90
第110回	4-SX12	90
第111回	4-P66出土遺物	91
第112回	4-SX13	91
第113回	4-SK27出土遺物	92
第114回	4-SK29及びSK41	92
第115回	F 3及びG 3 Gr.	93
第116回	H 2, 3及びI 2, 3 Gr.	94
第117回	I 8 Gr.	94
第118回	J 4, 5 Gr.	95
第119回	4-P352遺物出土状態	96
第120回	K 2, 3及びL 2, 3 Gr.	96
第121回	K 4, 5 Gr.	97
第122回	M 2 Gr.	98
第123回	3・4次ピット出土遺物 (1)	99
第124回	3・4次ピット出土遺物 (2)	100
第125回	その他の遺物	100
第7章		
第126回	追分平断面図	102
第127回	調査区東部断面図	104
第128回	SD08平断面図	105
第129回	SD06断面図	105
第130回	SD06遺物出土状態図	106
第131回	SD06出土遺物 (1)	107
第132回	SD05出土遺物 (2)	108
第133回	SD06出土遺物 (3)	109
第134回	SD06出土遺物 (4)	110
第135回	SD06出土遺物 (5)	111
第136回	SD06出土遺物 (6)	112
第137回	SD06出土遺物 (7)	113
第138回	SK08出土遺物	113
第139回	P 4出土遺物	114
第140回	SK02・05, SK10, SX02	115
第141回	SK02・05断面図	115
第142回	SK02・05, SK10, SK01出土遺物	116
第143回	SD04付近地形図	118
第144回	SD04断面図	118
第145回	包含層出土遺物	119
第146回	トレンチ平断面図・断面図	119
第147回	北方部地形測量図	120
第148回	北方部地形測量の範囲	120
第149回	北方部地形断面図	120
第150回	竪穴の総数と赤家の位置	121
第8章		
第151回	衆生時代の遺構	123
第152回	三王山遺跡の遺構断面図	124
第153回	古墳時代の遺構	126
第154回	中世の遺構	128
第155回	土器の分類	130
第156回	高杯の型式集列	131
第157回	山田氏採集資料	137
第158回	三王山遺跡の石葬 (1)	144
第159回	三王山遺跡の石葬 (2)	145
第160回	貝層ブロック・サンプリング位置図	147
第161回	2次貝層断面図	147
第162回	3次貝層断面図	147
第163回	5次貝層断面図	147
第164回	縄文層出土遺物	152
写真1	ブロック・サンプリング状況	149
写真2	貝類	149
写真3	縄文層出土遺物 (1)	152

写真4	縄文層出土遺物 (2)	152
付録1		
第1回	貝輪系銅器の分布	154
第2回	貝輪系銅器の中で「異形」さ	155
第3回	立貝型貝輪とのシルエット比較	156
第4回	2タイプの立貝型貝輪の分類	157
付録2		
図1	分析資料と試料採取地点	160
図2-a	有鉤銅鏡の蛍光X線スペクトル図	162
図2-b	有鉤銅鏡の蛍光X線スペクトル (図2-a)の拡大図	162
図3-a	豊岡市稲原城遺跡出土有鉤銅鏡の蛍光X線スペクトル図	163
図3-b	豊岡市稲原城遺跡出土有鉤銅鏡の蛍光X線スペクトル図 (1-a)の拡大図	163
図4	有鉤銅鏡の鉤同位体比 (A式区)	165
図5	有鉤銅鏡の鉤同位体比 (B式区)	165
付録3		
図1	直口密実銅鏡	169
図2	黒漆琺瑯製の赤外線吸収スペクトル	170
図3	日本産煤の赤外線吸収スペクトル	170
図4	油酸類 (エゴマ油) の赤外線吸収スペクトル	170
図5	日本産煤・油酸類 (エゴマ油) の赤外線吸収スペクトル	170
図6	漆の赤外線吸収スペクトル	170
図7	漆の赤外線吸収スペクトル	170
図8	黒漆琺瑯製の電子線マイクロアナライザ・分析結果	170
図9	黒漆琺瑯製のX線分析結果	170
付録4		
第1回	焼粘土および粘土中の粒子組織図	175
図版1	土器粘土中の粒子組織写真	177
図版2	土器粘土中の粒子組織写真	178
付録5		
第1回	窯の組列	181
第2回	窯と高杯の組列	182
写真1	竪穴遺跡断面	194
写真2	竪穴遺跡断面写真	194
第3回	竪穴遺跡断面	196
付録6		
図版1	動物遺体 (約1/2) イノシシ頭蓋骨	198
付録7		
第1回	土器粘土および粘土中の粒子組織図	204
図版1	三王山遺跡より出土した土器中の粒子の蛍光線写真	206
図版2	三王山遺跡より出土した土器中の粒子の蛍光線写真	207

第1章 遺跡の位置と環境

位置

笠寺から鳴海に向かう旧東海道は、天白川を越えたところで鳴海丘陵にあたり南におれる。三王山遺跡は、ちょうどこの旧東海道が南に折れる地点の丘陵上に所在する。

鳴海丘陵は、第三期層である東海層群と、その上を覆っている砂礫層の八事層から構成されており、名古屋市東部に広がる尾張丘陵のうち、天白川の南にあたる部分である。この丘陵は、標高60~80mを計る所が多いが、天白川に面した、三王山遺跡が所在する地点の標高は25~28mほどであり、丘陵下の天白川沿いの低地部との比高差は25mほどある。こ

この三王山遺跡眼下の低地部は、市街化が進んだ現状からは想像もできないが、古代から中世までは入江であり、鳴海潟と呼ばれた。鎌倉時代には、多くの歌に鳴海潟が詠まれている。

「なるみかたさみち時になりぬれば野並のさにと人つどふなり」景綱

この歌から当時の海岸線の位置も推測される。

三王山遺跡付近の現状は、丘陵の先端は削られ、崖となっており、本来の地形はとどめていない。その崖の上、三王山遺跡が所在する地点は千句塚公園となっている。所在地は緑区鳴海町三王山である。



第1図 名古屋市の地形と三王山遺跡の立地



第2図 三王山遺跡の位置 (国土地理院発行 1:50,000地形図名古屋南部)

歴史的環境

三王山遺跡付近の鳴海丘陵の縁辺部には、縄文時代の貝塚が多く分布する。縄文海進の際には海岸線がこのあたりまで進んでいたものと推測されている。縄文時代の貝塚は、三王山遺跡から小さな谷をはさんだ北の丘陵に、前期の上ノ山式の標式遺跡である上ノ山貝塚があり、三王山遺跡のすぐ南でも前期の鈴ノ木貝塚が見つかっている。貝はハイガイを中心としている。これらの貝塚は、何れも小規模なものであり、短期間のキャンプサイトのようなものとも言われている。

縄文時代でも晩期になると、城遺跡付近に當貝塚が築かれる。雷式土器の標式遺跡である。発見当初は、貝層の広がり方が1万㎡、厚さが0.5mほどあったと言われ、かなり大規模な貝塚であったようだ。貝は、ハマグリを主体としており、ハイガイが多かった前期の貝塚とは貝種が異なる。貝種の違いは、海岸線の後退など環境の変化を反映していると言われる。これまでに、野村三郎、小栗鉄次郎をはじめ、酒誌伸男、清野謙次らの調査がなされ、30体を超える人骨や数百点の石鏃など大量の遺物が出土している。現在では、遺跡の大部分が滅失している。

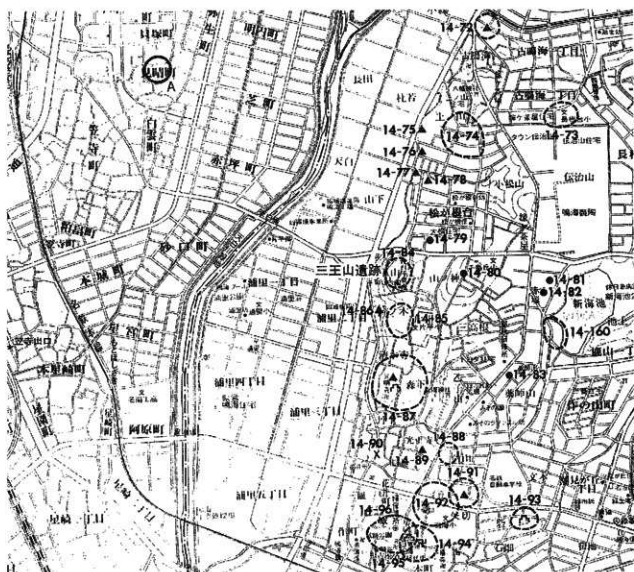
鳴海丘陵の弥生時代は、その前半についてはまったく不明である。中期中葉の貝田町式期になると、三王山遺跡のすぐ南の清水寺遺跡から遺物が出土するようになる。この清水寺遺跡では、名古屋教育委員会の5回にわたる調査によって、中期から後期初頭にかけての遺構、遺物が豊富に見つかっている。近年行われた5次調査で、中期後葉の高蔵式期に属する竪穴住居が見つかっているほか、1次調査で検出された方形層溝墓らしき溝からは中期末あるいは後期初頭に比定できる土器群が出土している。更に、弥生時代後期末（いわゆる欠山式）の土器も出土している。

一方、三王山遺跡の北にある上ノ山貝塚付近には、弥生時代後期の住居址が見つかっている上ノ山遺跡がある。住居址から出土する土器は細片ではあるが、後期前半の山中式に比定してよいものである。

更に、三王山遺跡の1.5kmほど南には、ほぼ同時代の環濠集落である城遺跡が存在する。城遺跡では環濠がわずかに見つかっているのみで、環濠内部はまったく不明である。環濠からは後期末の土器が大量に出土している。環濠の掘削時期、機能していた時期は不明だが、濠から出土する遺物から見ると、三王山遺跡の環濠集落と同時併存した時期があったものと推測される。城遺跡に隣接し、一連の遺跡と言われる欠切遺跡では後期末の竪穴住居が見つかっているが、環濠が埋没をはじめたころのものであろう。

次の古墳時代の初頭については遺構も遺物もほとんど見られなくなり、あまりはっきりしないが、古墳時代前期も後半の塔の越期から西北出期になると、城遺跡に隣接する鳴海廃寺や先述した清水寺遺跡で竪穴住居が営まれている。清水寺遺跡では、西北出期の良好な一括資料が出土している。中期では、城遺跡の環濠上層から大量の土師器が石製模造品などを伴って出土している。後期については、清水寺遺跡から多くの須恵器が出土しているほか、三王山遺跡の東に狐塚古墳、更に東の新海池付近に赤塚古墳、大塚古墳、薬師山古墳が築かれている。大塚古墳は、前方後円墳の可能性も指摘される20m程の円墳であるが、南東に開く横穴式石室を持つ。この石室は、玄室が前後に二つ連なるものである。鳥形の装飾をもつ須恵器蓋や、金環などが出土している。赤塚古墳も東に開口する横穴式石室をもつ。須恵器や金環、土製の玉類、鏃や刀子等の鉄製品が出土している。また、三王山遺跡のすぐ北には、既に滅失しているが横穴式石室を持つ大根古墳が存在した。

古代の遺跡では、城遺跡付近に8世紀代の造営と言われる鳴海廃寺が知られている。鳴海廃寺は、後の



14-72 古鳴海遺跡 14-73 伝治山遺跡 14-74 上ノ山遺跡 14-75 上ノ山貝塚 14-76 上ノ山第2貝塚
 14-77 上ノ山南貝塚 14-78 大槻貝塚 14-79 大槻古墳 14-80 狐塚古墳 14-81 大塚古墳 14-82 赤塚古
 墳 14-83 菜葉山古墳 14-84 三王山遺跡 14-85 鉦ノ木遺跡 14-86 鉦ノ木貝塚 14-87 清水寺貝塚、清水
 寺・森下遺跡、月下砦跡、鳴海代官所跡 14-88 白山遺跡 14-89 光正寺貝塚 14-90 北瀬出土地(五輪塔) 14-91
 番貝塚 14-92 矢切遺跡 14-93 普照寺礎跡 14-94 鳴海庵寺 14-95 鳴海城跡 14-96 城遺跡 14-160
 新海流遺跡 A 見晴右遺跡

第3図 周辺の遺跡

鳴海城等のために大きく削平を受け、遺物の出土は多いが、遺構ははっきりしない。瓦から見ると、尾張国分寺との関わりが見られ、梶山勝氏によって、この地域の豪族が尾張国分寺造営に協力した結果が反映しているとの考察がなされている。

中世になると、鳴海丘陵一帯では山茶碗が生産されるが、白山遺跡では、大量の山茶碗が出土し、製品の集積場とも言われている。また、次章で紹介するが、三王山遺跡周辺で多くの遺物を採集した山田正夫氏のご教示によると、三王山遺跡北側でも、窯壁の付着した山茶碗がまとまって採集されたとの事であり、窯跡が存在した可能性もあると言う。

室町時代末から戦国時代にかけてになると、鳴海丘陵上に城や砦が数多く築かれる。これは、この地が織田氏と西上をはかる今川氏の接触する場となったためである。城遺跡に隣接する鳴海城は応永元年(1394年)に安原宗範によって築かれたと言われ、その後しばらくはよくわからないが、16世紀中頃には今川氏

によって修復され、尾張侵攻の拠点となったと言われる。最近の調査によって、徐々にその実態が明らかになっている。一方、織田信長は清水寺遺跡の地に、古屋敷を改修して丹下砦を築いたほか、普照寺砦、丸根砦などを築いている。丹下砦跡といわれる清水寺遺跡では、『信長公記』に「古屋しき」を「御取出にかまえられ」と記される通り、12世紀から15世紀ころの「古屋しき」に関わる溝などが見つまっている他、16世紀代の丹下砦に関わる遺構が検出されている。この丹下砦については、蓬左文庫所蔵の、本地・鳴海古城之図に描かれているが、ちなみに三王山遺跡の地点には「島」と書かれているだけである。

なお、こうした周辺の遺跡については、三王山遺跡の動向と関わりが強いので、まとめの部分で、三王山遺跡の調査の成果も含めて検討する。

さらに、江戸時代には、東海道が整備され、清水寺遺跡の辺りに代官所(陣屋)があったという。また、三王山遺跡のすぐ南東には、松尾芭蕉の存命中では唯一の翁塚である千鳥塚が建てられた。これは、寺島安信宅での歌仙「星崎の間を見よや鳴く千鳥」の巻が満尾した記念に建てられたものという。

参考文献

- 川合 剛 「旧石器時代」『新修名古屋市史』第一巻 1997
安達厚三 「縄文時代」『新修名古屋市史』第一巻 1997
加藤安信 「弥生時代」『新修名古屋市史』第一巻 1997
犬塚康博 「古墳時代」『新修名古屋市史』第一巻 1997
梶山 勝 「地方豪族と仏教」『新修名古屋市史』第一巻 1997
名古屋市教育委員会編 『名古屋の史跡と文化財(新訂版)』 1990
野口泰子 『清水寺遺跡第5次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会 1997

第2章 調査の歴史

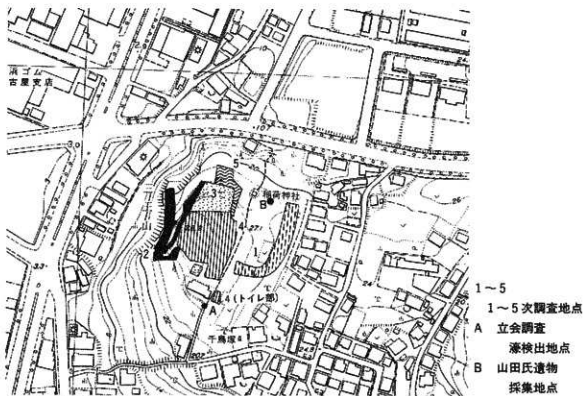
今回報告する第1～5次までの調査の歴史を整理しておく。三王山遺跡において初めて遺構が確認されたのは、1978年の下水道工事に伴う立会調査の際である。(第4図のA地点)この時、幅2m、深さ1m程の溝状の遺構が発見された。この溝からは、弥生時代後期から古墳時代後期の土器が出土している。この溝は、弥生時代の環濠の一部であると思われるが、出土遺物の多くが、古墳時代の土師器、須恵器であったことから、当時環濠とは確定されなかったようである。

また、この遺跡からの出土遺物については、山田正夫氏が1969年に採集されたもの(第157図)が、見晴台考古資料館『館藏品図録』Ⅲのなかで紹介されている。山田氏によれば、須恵器、土師器ともほぼ同一地点(第4図B地点)から出土し、須恵器が上位にまつまり、土師器はその下位にあったとのことである。ここでも中心は土師器、須恵器であり、三王山遺跡は主として古墳時代の遺跡として知られることになる。

その後、1990年～1997年の間に、公園整備と急傾斜地の擁壁工事に伴って、名古屋市教育委員会が5回の発掘調査を実施した。その結果、三王山遺跡は、古墳時代の集落跡であるだけでなく、弥生時代の環濠集落であり、更に中世にも大規模な遺構があることが明らかになった。今回報告するのは、その5回にわたる発掘調査の成果である。1次調査の概要報告書が刊行されている他、見晴台考古資料館の刊行物などで調査成果の概要を報告してきたが、本報告をもって正報告とする。5回の調査の期間、原因、面積、担当者は以下の通りである。(調査地点は第4図参照)

第1次 1990年11月～1991年1月 公園整備 約900㎡

担当者 平出紀男, 川合剛, 木村有作, 服部哲也



第4図 調査地点位置

- 第2次 1994年10月～1995年1月 急傾斜地擁壁工事 約900㎡
 担当者 松村冬樹、水野裕之、服部哲也
- 第3次 1996年1月～3月 公園整備 約700㎡
 担当者 水野裕之、服部哲也、村木誠
- 第4次 1996年7月～12月 公園整備 約2000㎡
 担当者 村木誠、田原和美
- 第5次 1997年10月～12月 公園整備 約400㎡
 担当者 伊藤正人、伊藤厚史

第3章 本書の記述の方針

本報告は、各次の調査担当者が調査後の整理作業も行ったうえ、執筆している。そのため、調査次ごとに、整理の方針、記述の体裁等が必ずしも一致しない。しかし、報告書という性格上、最低限の統一は必要不可欠であると考え、以下の方針で執筆、編集した。

まず、報告については、調査次毎に行い、まとめは最後に一括して行った。遺構番号は通番ではなく、調査次毎につけてある。同一の遺構に別の遺構番号が与えられ、出土遺物も別れてしまうなどの問題が多いが、整理の都合上致し方ない。紛らわしいので、初出の際と必要に応じて、頭に調査次をつけて区別した。同一の遺構に調査次が異なるため別番号がついているものがあるが、まとめに一覧を示したのでそちらを参照して頂きたい。全体の平面図は第5図に示した。

また、各報告の時期区分であるが、弥生時代については、加納俊介氏の編年案（注1）にそって、山中式期を後期前半、瑞穂期から能田旭期を後期後半（後期中頃～末）という表記を取る事にした。東海地方の当該期の土器編年案としては、赤塚次郎氏の山中式、廻間式の編年（注2）が細分等の点で最も整備されているが、S字状口縁付甕がほとんど見られない名古屋台地ではそれをうまく活かす事ができないと判断したからである。また、名古屋台地で従来用いていた大参義一氏の編年案（注3）との対比が比較的容易で、複数の執筆する際に混乱が少なく考えたからでもある。

古墳時代についても、土師器は、加納氏の編年を軸とし、松河戸期を古墳時代中期、宇田期を後期と表現している。また、執筆者の一人である村木が示した名古屋台地の編年案も一部に併用している。（注4）

須恵器については、斎藤孝正氏、尾野善裕氏の研究成果（注5）を参照して、基準の窯跡資料と対応させた。中世については、個別に参考文献を示した。

（注1）加納俊介 「土師器の編年 東海」 『古墳時代の研究』6 雄山閣 1991

（注2）赤塚次郎 「廻間式土器」 『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 1990

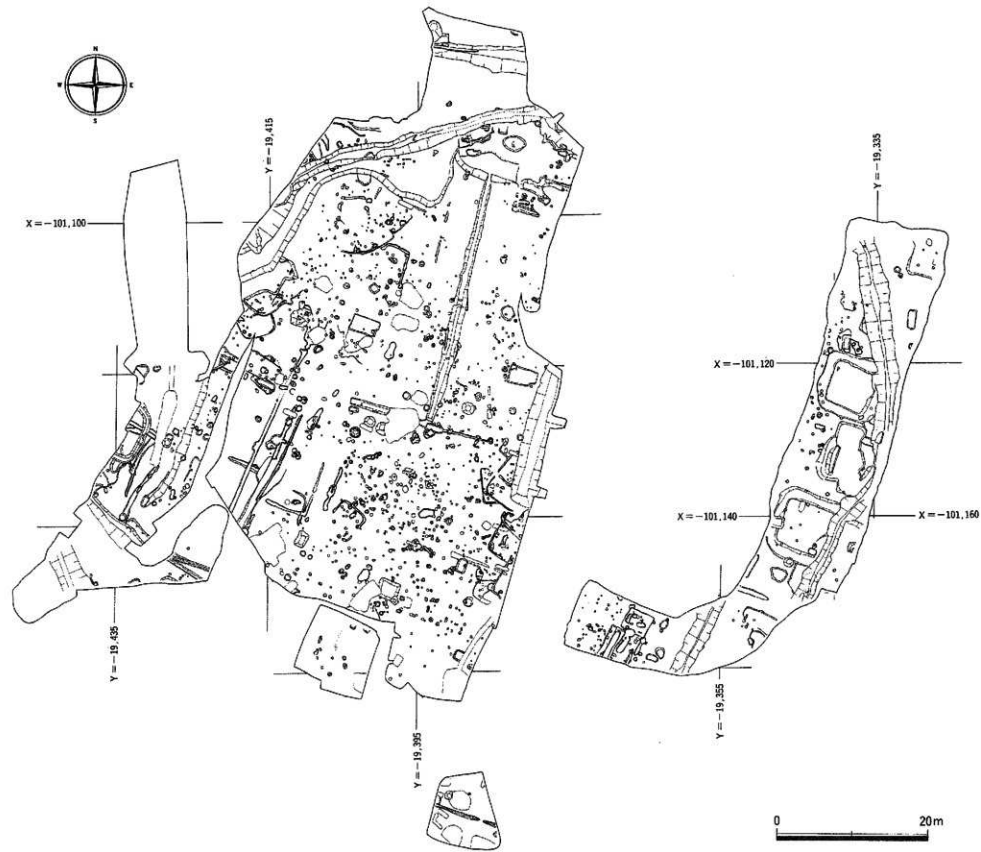
赤塚次郎 「山中式土器について」 『山中遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集 1992

（注3）大参義一 「弥生式土器から土師器へ」 『名古屋大学文学部研究論集』X LVII 1968

（注4）村木 誠 『曾池遺跡』 名古屋市教育委員会 1996

（注5）斎藤孝正 「古墳時代の雄投窯」 『斯夫山古墳とその時代』 1989

尾野善裕 「尾張・西三河（窯跡） 雄投・尾北・その他」 『古代の土器5-1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）』



第5图 三王山遗址遗构平面图

第4章 第1次調査

I 調査の概要

1 調査に至る経過

調査前の遺跡地は、一部稻荷神社と公園になっている以外広く荒地となっていた。名古屋市農政緑地局ではこの荒地を順次公園（千句塚公園）として整備する計画にあり、地下の埋蔵文化財については教育委員会文化課と協議を重ねてきた。結果、平成2年度中に整備にかかる公園東半は、遺跡を破壊しない浅い掘削と盛土の工法により、グラウンド（ミニスポーツ広場）と築山（俳諧の森）を造る事となった。ただし、現状の公園に至る道は極めて狭い事情から、新たな園路の整備は不可欠で、この部分のみは埋蔵文化財に影響が出る事となった。従って、この新規の園路部分が1次調査地点となった。

園路は北の丘陵下の一般道路（標高約10m）から丘陵上の公園（標高約25m）に登るため、道路幅のみを対象とするわけにはいかず、道路のノリ面部分を含めて約900㎡が対象となった。さらに園路は大きく湾曲するため、調査区も変則的な形となった。また、調査後の工事の日程等から調査予定地の北半は早い引き渡しが必要されたため、調査は前後の2回に分けて行なった。

2 調査日誌抄

11月19日	北半を前半区とし、表土除去開始。	1月8日	SD02検出。上層土師器の土器群。
12月3日	壕と考えられる大溝検出。	1月9日	SX07, SD03検出。いずれも方形周溝墓（SZ02・03）の溝。
12月4日	壕（SD01）掘削。遺物少ない。		
12月5日	基準点測量。	1月11日	SD04検出。上層から土師器多量に出土。
12月10日	水準点引張。	1月12日	SB01検出。掘削。上層に土師器。
12月11日	SX01掘削。佐呂峠（SB02）と判明。	1月22日	SD04下層から弥生土器出土。
12月19日	SX02とSX08は方形周溝墓の溝と判明。SZ01とする。	1月25日	空堀。完撫金景写真。
12月21日	空堀。全景写真。	1月26日	現地説明会開催。約130人参加。
12月22日	前半区終了。埋め戻し開始。	1月31日	後半区終了。埋め戻し開始。
1月7日	後半区表土除去開始。		

II 遺構と遺物

1次調査のおもな遺構は、弥生時代後期の方形周溝墓、環濠、古墳時代中～後期の竪穴住居、中世の井戸、土坑などである。

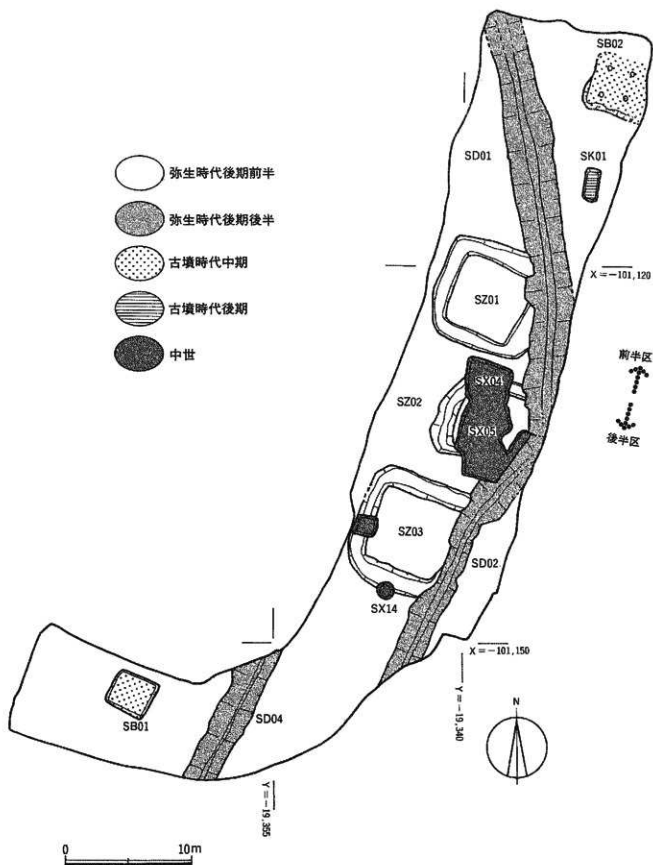
なお、遺構の検出面は調査区北端が最も低く標高約24m、南西部が最も高く26.5mである。

1 基本層序

最も高い南西地点では、表土から地山面までが25cmから40cmと極めて浅く、その間は表土と旧耕作土が堆積するのみである。したがって、遺構の検出も地山面に限られた。

中間の南東地点では表土・旧耕作土の下に灰褐色シルト（古墳から中世の包含層）灰色シルト（弥生の包含層）が堆積していた。上層包含層はひろく遺構をバックし、下層包含層は古墳時代・中世の遺構に切られる。

最も低い北東地点では、表土が50cmから100cmと深くなるのに加え、その下にも橙色の整地土が厚いところで80cm堆積する。地表から地山面までは深いところで180cmにも達する。橙色土以下には灰褐色の上層包含層と灰色の下層包含層が遺存する。

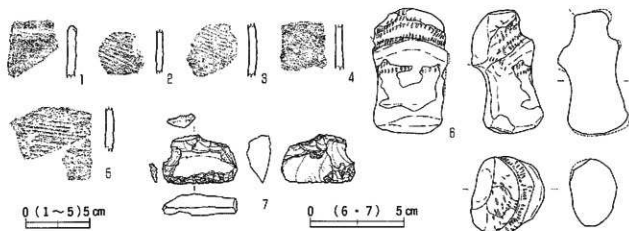


第6図 主要遺構配置図 (1 : 300)

2 縄文時代以前 (第7図・図版14)

縄文土器と考えられる小片が、約10点出土した。いずれもかなり摩滅しているが、大半の器表面には条痕文が観察できる。条痕文は、貝殻によるものが多いようである。口縁部は1点のみで、端部を外面に折り返してなでている。右脚部と推定される土偶片が、1点出土している。腰の外側に二段の突帯があり、突帯の上下及び腰部の上面に、刺突列を加えている。この土偶は、従来体部の下方に脚部がつく形態を推定していたが[名古屋の縄文時代資料集]、再観察の結果体部の外側に脚部がつくものと考え、図を改訂した。(7)の石匙はチャート製。

これらの遺物の出土状況は、弥生時代以降の遺物と混在しており、本来の様相は不明である。いずれも時期を特定できず、縄文時代晩期後半と捉えておく。



第7図 縄文時代出土遺物

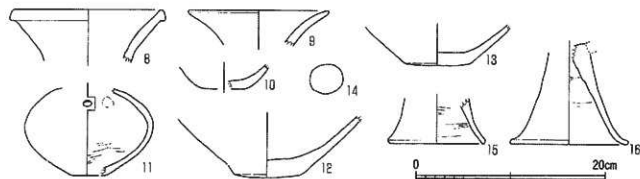
3 弥生時代後期から古墳時代前期

方形周溝墓

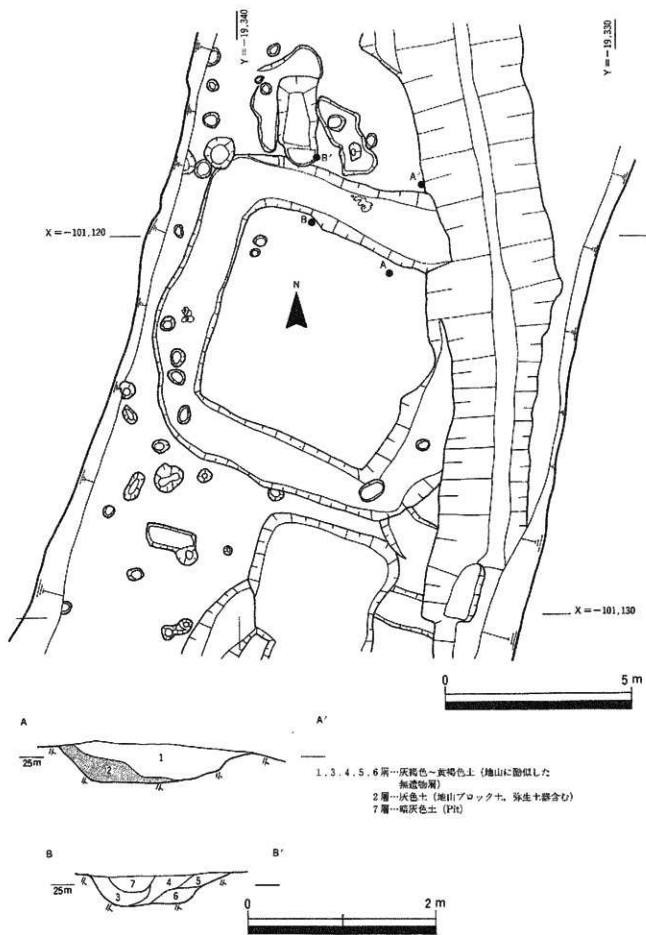
1—SZ01 (第8、9図・図版1, 12)

標高約25mにて検出。幅約1.5m、深さ30~40cmの溝を方形に巡らせた遺構で、東コーナー部分はSD01(環濠)によって切られている。その形態から、一辺約6mの方形周溝墓と考えられるが、主体部は削平の為遺存しなかった。SD01に近い溝内埋土は、地山に類似した無遺物の灰褐色土・黄褐色土が厚く堆積しており、SD01掘削に伴う排土により周溝が一気に埋められた状況である。

溝底からは、供獻土器と思われる弥生土器を数箇所検出したが、遺存状況はきわめて悪い。おおむね山中式期の土器であり、弥生時代後期前半頃の時期が推定できる。



第8図 SZ01周溝出土遺物 (1:4)

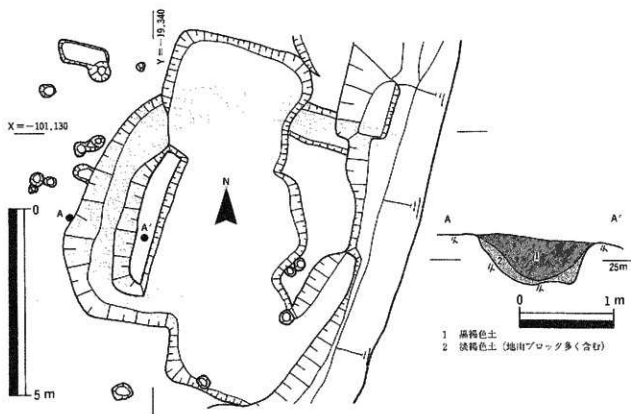


第9図 SZ01実測図（平面図1：100・断面図1：40）

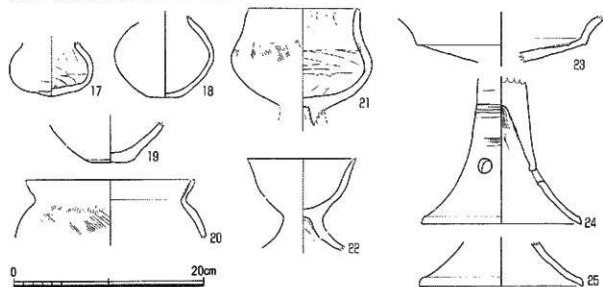
1-SZ02 (第10, 11図・図版2,12)

標高約25mにて検出。SZ01南2mに隣接して築かれている、4～5mの小規模な方形周溝墓。SD01・02と中世の浅い土坑 SX04・05によって大きく壊されており、西辺と北辺の溝がわずかに残るのみである。主体部も勿論確認できなかった。溝の埋没状況は SZ01と同じであり、SD01掘削時の排土によって大半が埋められている。

溝内からは供献土器と思われる土器が出土したが、遺存状況は悪い。山中式期の土器であり、弥生時代後期前半頃の時期が推定できる。



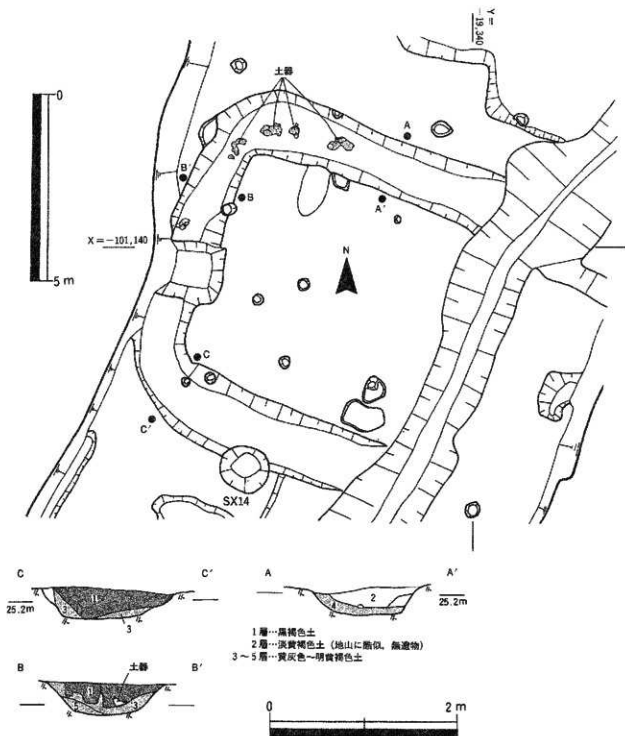
第10図 SZ02実測図 (平面図 1:100・断面図 1:40)



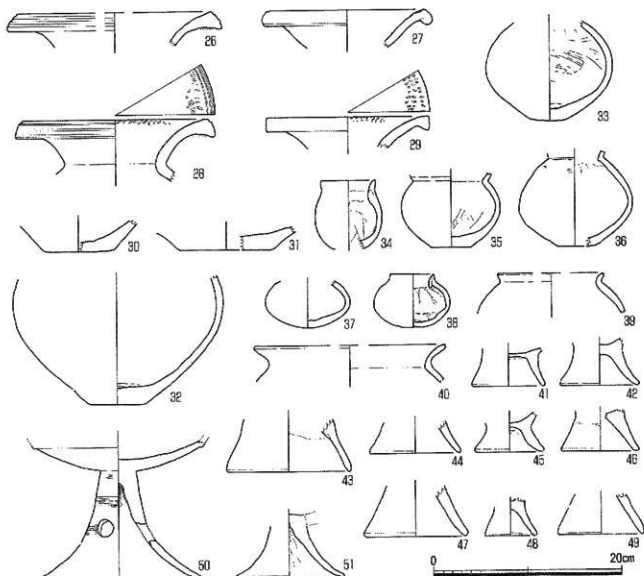
第11図 SZ02周溝出土遺物 (1:4)

1-SZ03 (第12, 13図・図版1, 12)

標高約25.3mにて検出。SZ02南2mに位置する。SZ01と同規模(辺約6m)の方形周溝墓で、中心軸の方向もSZ01・02と同じである。四周の溝のうち、東側の一辺はSD02によって切られている。埋土の堆積状況もSZ01・02と同様で、SD02掘削に伴う拵土によって、周溝の大半は埋められたと考えられる。北コーナー周辺の溝底にて、遺物のまとまりがみられ、供献土器と考えられたが遺存状況は悪い、SD01・02同様、弥生時代後期前半頃(山中式期)の年代が推定できる。



第12図 SZ03実測図 (平面図1:100・断面図1:40)



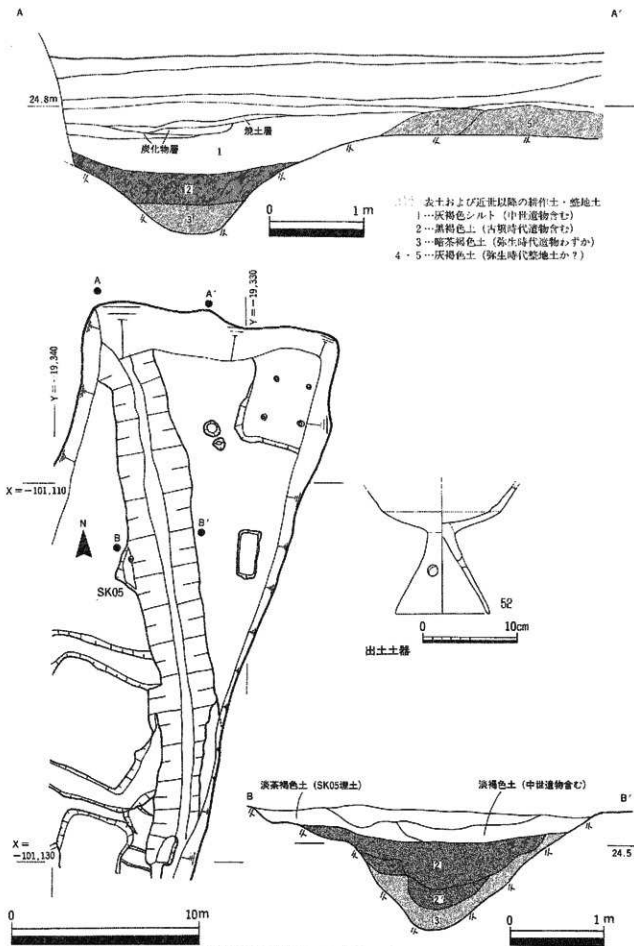
第13図 SZ03周溝出土遺物 (1:4)

環濠

1-SD01 (第14図・図版1, 12)

調査区北半をほぼ南北に斜行する大溝。形態・規模から、集落を取りまく環濠の一部と考えられる。標高は24~25m。幅約3m、深さ約1.3mを測る。断面は「V字形」~「逆台形」であり、その角度も100°から110°とさほどきつくない。溝底のレベルは北端が標高23.2mに対し南端は24mであり、南に向って高くなっている。埋土は上層に古墳時代から中世の包含層である灰褐色シルト・淡褐色土が覆い、中層には弥生土器~須恵器を含む黒褐色土、下層には弥生土器を僅かに含む淡褐色土が堆積していた。下層の堆積は底から30~40cmまでであり、環濠の機能停止後も永らく窪んだ状況であったことがわかる。なお、周辺に土塁や櫓の痕跡は検出できなかった。

山中式期の周溝遺構を壊して掘削されていることや、廃絶時期を示すと思われる下層からの出土土器の年代観 (= 瑞穂期) から、山中式期の終わり頃か瑞穂期の初め頃 (弥生時代後期後半) の掘削を考えるとすることができる。



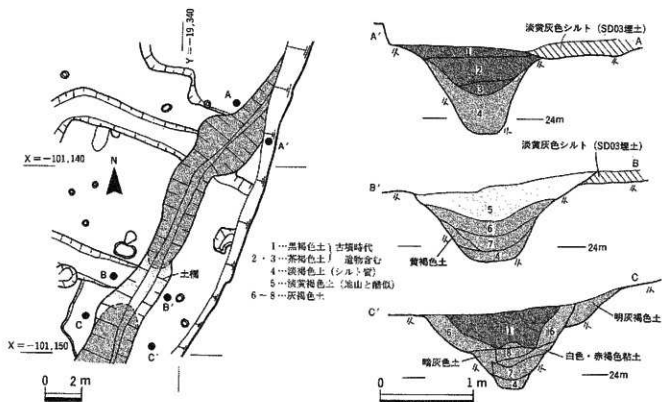
第14図 SD01実測図及び出土遺物 (平面図1:100・断面図1:40・土器1:4)

I—SD02 (第15, 16図・図版1)

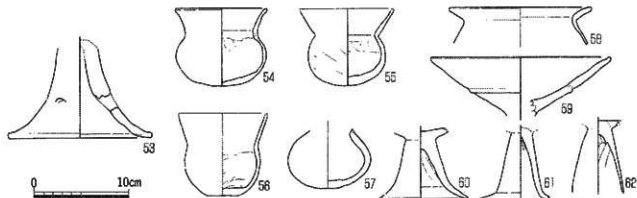
調査区中央東を北東から南西に延びる溝。標高は約25m。幅2~2.5m、深さ約0.9mを測り、断面は「V字形」~「逆台形」を呈している。埋土は北と南の地点では上層に黒褐色土・茶褐色土（古墳時代土器を多く含む）が堆積していたのに対し、中ほどの長さ約3mの部分の上層には地山に酷似した淡黄褐色土が堆積していた。そして、下層は淡褐色から淡灰褐色のシルト質土がどの地点も堆積しており、弥生時代後期の土器がわずかに出土した。

したがって、①掘削は弥生時代後期。②廃絶後下層堆積。③その後のある時期に一部を埋めて土橋状にする。④古墳時代の中頃すべてが埋没、の変遷が考えられる。

なお、溝 SD01との関係は、両溝の接する地点が調査区外となったため不明であるが、規模の違いから異なる溝と考えたい。



第15図 SD02実測図 (平面図 1 : 200・断面図 1 : 40)



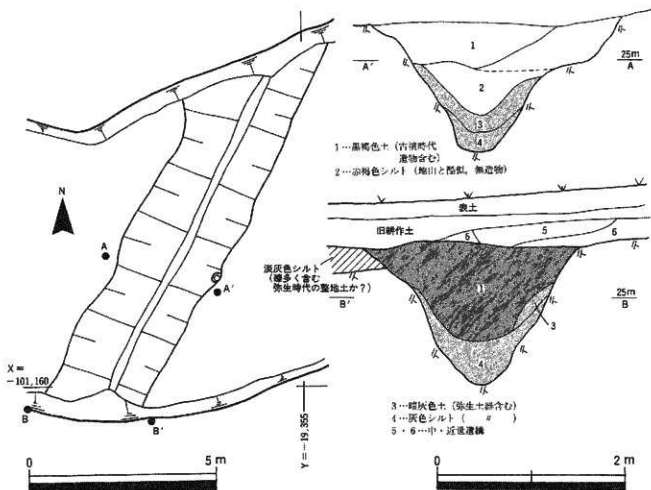
第16図 SD02出土遺物 (1 : 4)

1-SD04 (第17~24回・岡版2,12~14)

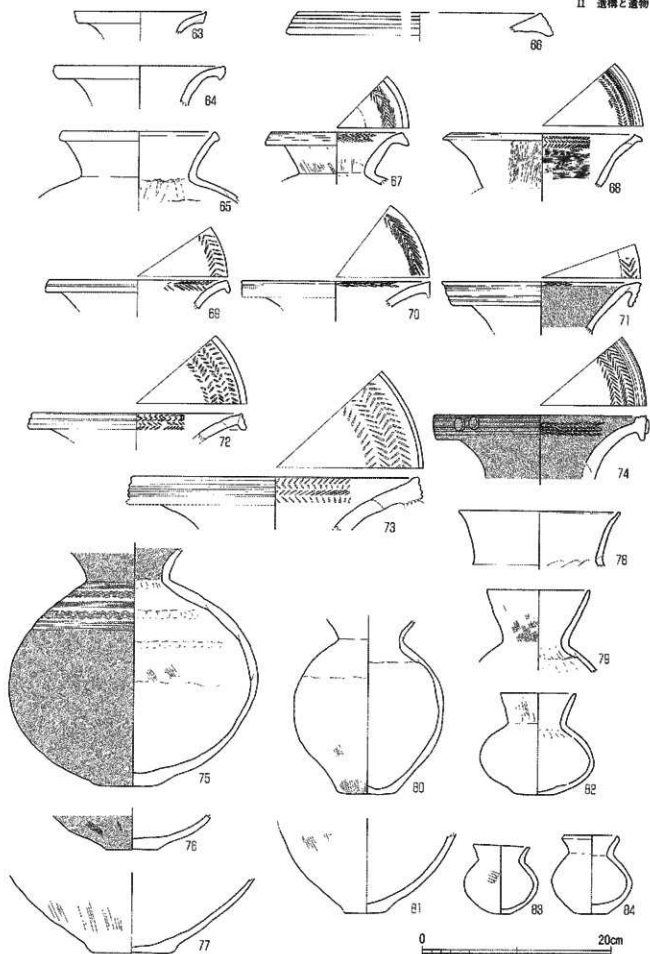
調査区南の標高約25.5mに位置する。北東から南西に向って延びる溝で、SD02西約8mを並行している。幅約2.5m、深さ約1.5mを測り10mほどを検出した。断面は「V字形」を呈し、その角度は80°ほどである。埋土は、北側では上層黒褐色土(古墳時代土師器を多量に含む)、中層赤褐色シルト(地山と酷似する無遺物層)、下層暗灰色土・灰色シルト(弥生土器含む)と明瞭な分層が可能であったが、南へむかって徐々に中層の無遺物層が薄くなり、調査区の南端では上層黒褐色土の直下に下層の灰色シルトが堆積する状況であった。また、上層黒褐色土は深さ50cmから1mを測ることから、深さまちまちの窪みが永らく残っていたことがわかる。

規模や形状から環濠の一部と推定でき、とすればSD01=外濠、SD04=内濠の二重の環濠となる。なお、中層の赤褐色シルト(地山と酷似する無遺物層)を上層状施設の埋め戻し土と考えるならば、西側からの流入であることから西側(集落内)に土塁があったこととなる。

下層からは、弥生時代後期(山中中期~瑞穂期)の土器が出土し、環濠としての機能の停止を瑞穂期に推定できる。また、上層では古墳時代の土器(主に土師器)がまとめて出土した。溝内の上層からの出土ということで、一括資料とするには慎重にならざるを得ないが、松河戸期新相(5世紀前から中頃)を中心とする土器群である。

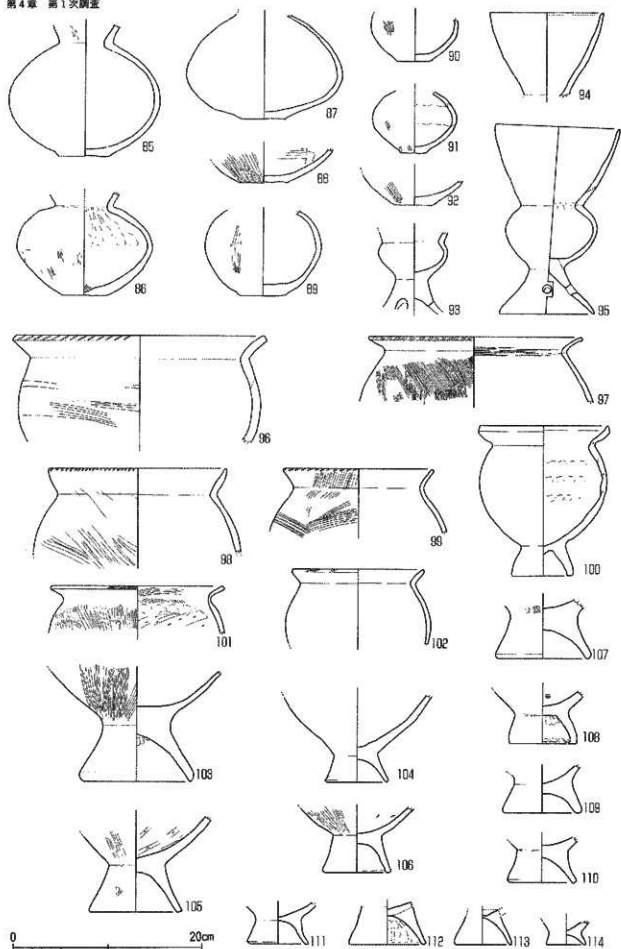


第17図 SD04実測図(平面図1:100・断面図1:40)

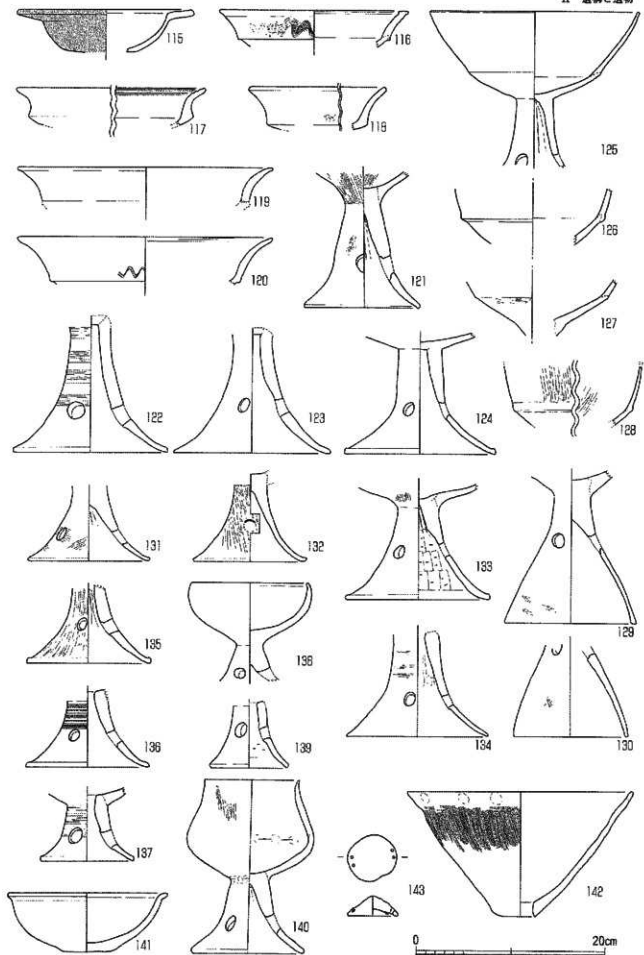


第18図 SD04下層出土遺物 その1 (1:4)

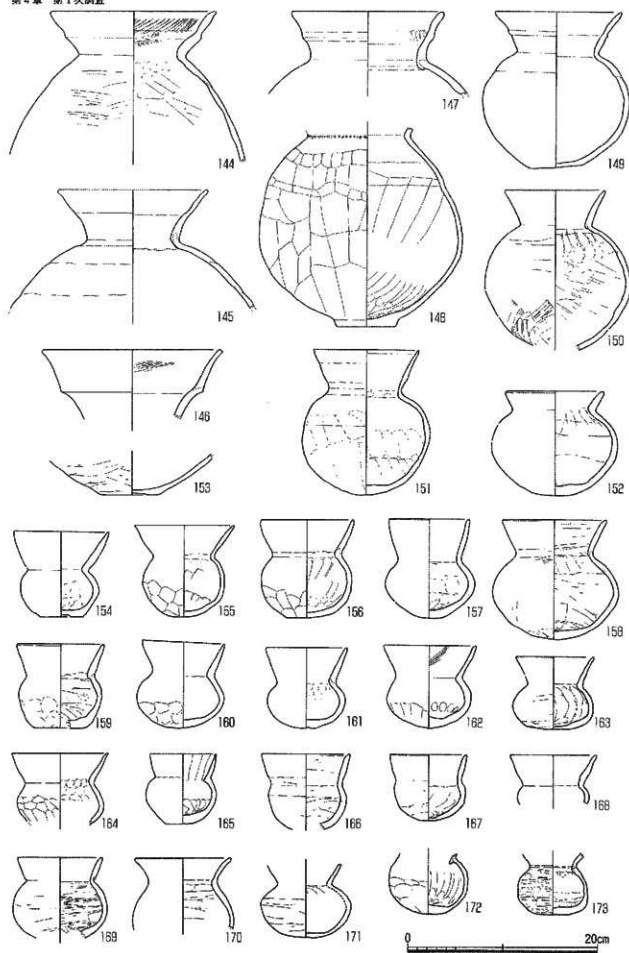
第4章 第1次調査



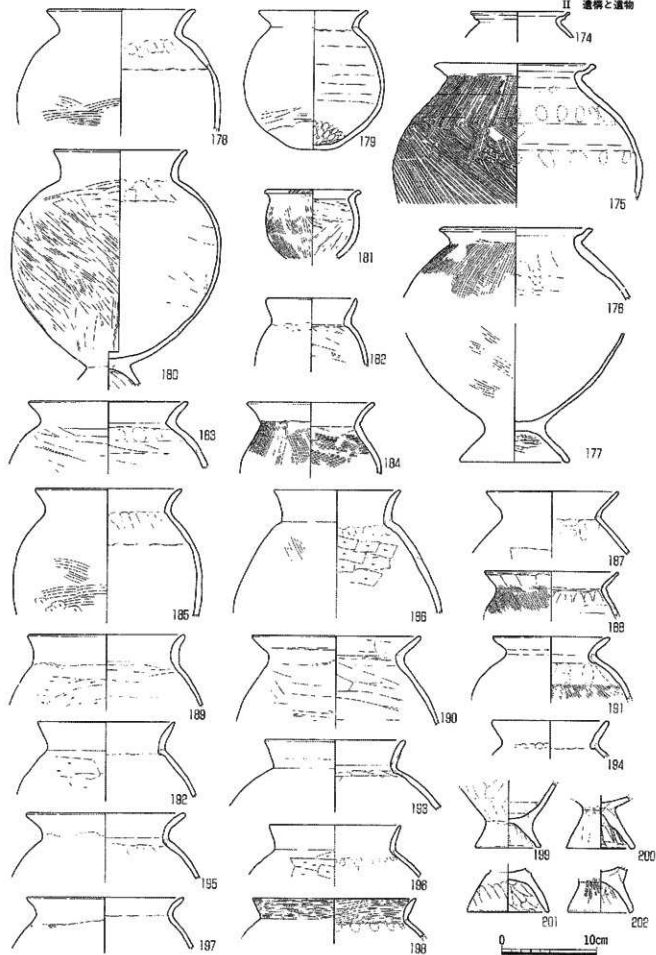
第19図 SD04下層出土遺物 その2 (1:4)



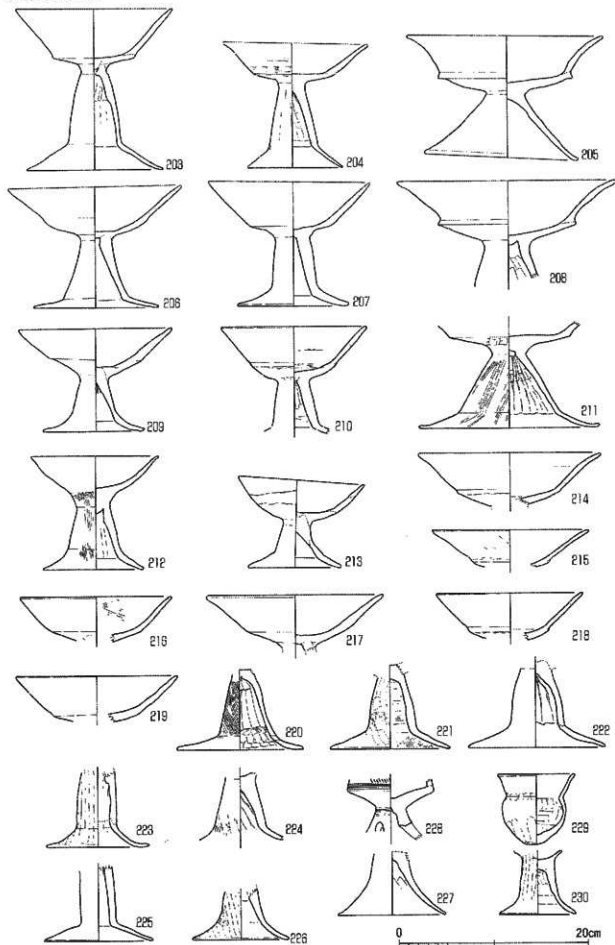
第20図 SD04下層出土遺物 その3 (1:4)



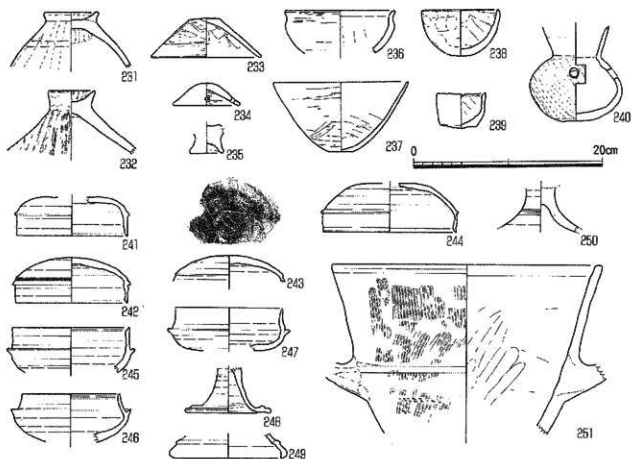
第21図 SD04上層出土遺物 その1 (1:4)



第22図 SD04上層出土遺物 その2 (1:4)



第23図 SD04上層出土遺物 その3 (1:4)

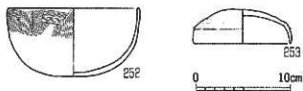


第24図 SD04上層出土遺物 その4 (1:4)

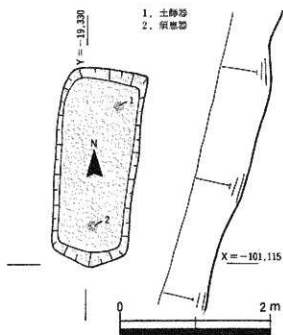
4 古墳時代中～後期

1—SK01 (第25, 26図・図版2, 14)

SB02南約5mに位置する。長辺約2.5m短辺約1mの長方形土坑で、長軸方向はほぼ南北を示す。埋土は淡灰褐色砂質土一層が堆積した。埋土中の北東隅に土師器碗が、中央やや南よりに須恵器杯蓋が出土した。これらの土器の年代観(H44号窯からH50号窯)から、古墳時代後期(7世紀前半～中頃)の時期が考えられる。



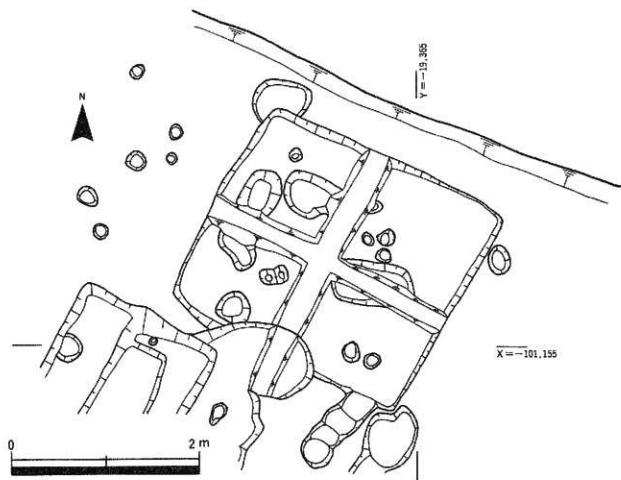
第25図 SK01出土遺物 (1:4)



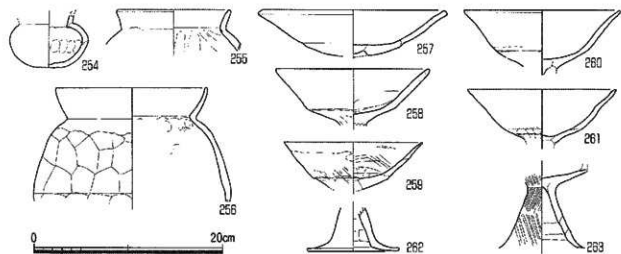
第26図 SK01実測図 (1:50)

1-SB01 (第27, 28頁・図版2)

調査区西の標高約26.3mに位置する。一辺3~3.5mの小規模な竪穴住居跡で、方形の平面プランを呈す。埋土は暗茶褐色土一層が堆積する。床面では、いくつかのピットも検出したが、いずれも主柱穴とは考え難い。炉・竈、壁際の溝等も無く、小規模なことをも考え合わせれば、居住の家ではなく小屋風の簡易な建物と推定できよう。上面にて、古墳時代中頃(松河戸期)の土師器が出土した。



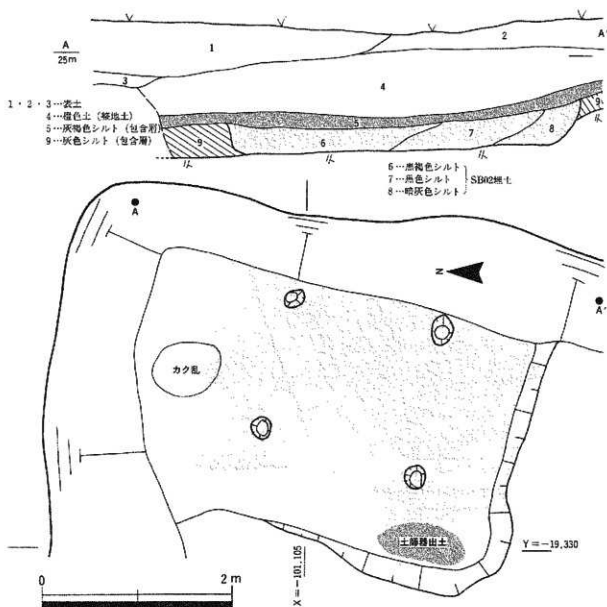
第27図 SB01実測図 (1:40)



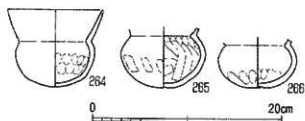
第28図 SB01出土遺物 (1:4)

1-SB02 (第29, 30図・図版2)

調査区北端の標高約24mに位置する。一辺約4.5mの竪穴住居跡と考えられるが、東壁は調査区外の為、又北壁は調査開始直後の試掘の為不明である。平面プランは方形もしくは隅丸方形で、4本の支柱穴(柱間は約2m)が遺存した。壁溝や炉・竈はない。床面直上の遺物には、西コーナー部分から出土した古墳時代中期の土師器小型壺3点がある。



第29図 SB02実測図 (1:40)

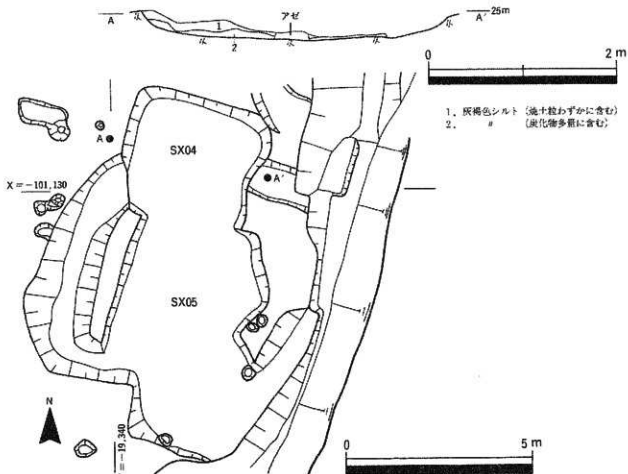


第30図 SB02出土遺物 (1:4)

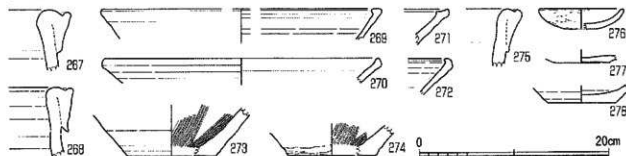
5 中世以降

1—SX04・05 (第31, 32図・図版2)

調査区のはば中央に位置し、標高は約25m。SZ02・SD02を切る。どちらも方形の竪穴状落込みで、SX05が04を切る。SX04床面には焼土・炭化物層が堆積していたが、用途は不明である。埋土中より15世紀後半頃の陶器片が出土した。



第31図 SX04・05実測図 (平面図1:100・断面図1:40)



第32図 SX04 (267~274)・05 (275~278) 出土遺物 (1:4)

1—SX14 (第12図)

SZ03周溝を切る。直径約1.3mの素掘りの井戸と考えられたが、1.5mまで人力、その後機械により3mまで掘削したが底には達しなかった。出土遺物は量的には弥生時代から古墳時代の土器類が多いが、僅かながら山茶碗等が出土し、中世の井戸と考えられた。

第5章 第2次調査

I 調査の概要

1 調査に至る経過

公園予定地の北西側は長さ約100m、比高差約15mにわたって土むき出しの崖面であった。今回千勾塚公園として整備を行なうに伴い、崖下の住宅の安全確保を兼ねて、その急傾斜地の擁壁工事をも実施することとなった。そして、実際の工事は崖面のみでは行なえず、崖面にそった一部の平坦地も対象となったため、その部分の埋蔵文化財を発掘調査する必要が生じた。

したがって、発掘調査区は崖面に沿った細長い変則的な形で、約900㎡が対象となった。さらに、調査の対象地点は標高19mから27mにまたがることとなり、その標高差は8mに及んだ。

2 調査日誌抄

10月12日	調査区設定後、南端より表土除去開始。	11月29日	北溝 (SD02) 掘削、銅器出土。
10月13日	南端にて濠と考えられる大溝検出。	12月1日	SD02より2点月の銅鏡出土。
10月17日	北端でも濠検出。	12月2日	P99より勾玉出土。
10月24日	基準点測量。水準点引照。	12月5日	SD02より鉄器出土。
10月26日	南溝 (SD01) 掘削開始。	12月13日	SD02はく完掘。
11月1日	SD01下層よりバネス蓋、高杯等出土。	12月20日	空撮。全景写真。記者クラブ発表。
11月8日	SD08検出。方形罫溝墓の可能性あり。	12月21日	SD02土層観察アゼより銅器出土。
11月18日	SK12検出。竪穴住居跡の可能性あり。	12月23日	現地説明会開催。約200人参加。
11月21日	SK13・14・15検出。SK13・14は竪穴住居跡と推定。	1月9日	堀め戻し開始。
11月24日	SK15より弥生土器 (山中式期) 多数出土。		

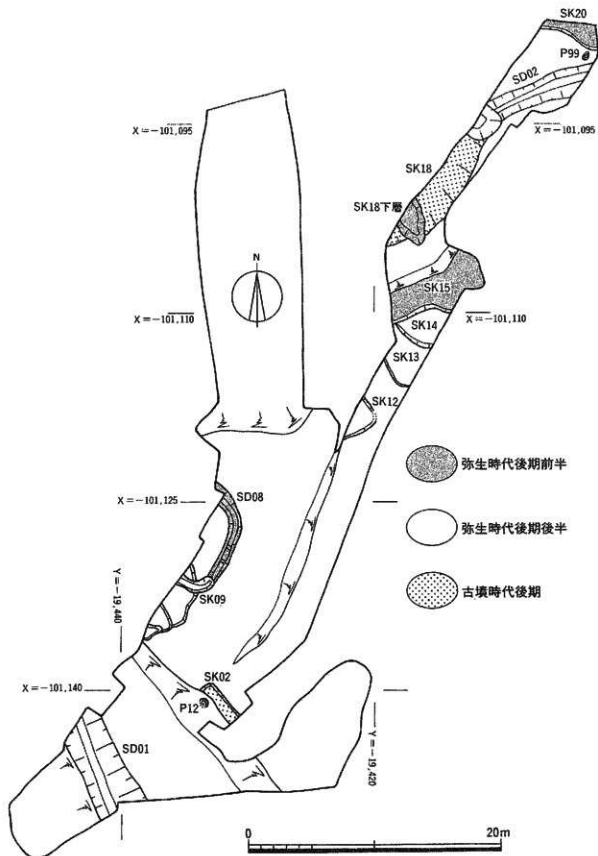
II 遺構と遺物

2次調査のおもな遺構は、弥生時代後期の環濠・溝・土坑・住居跡、古墳時代後期の竪穴状落込みなどである。

なお、遺構の検出も標高23mのSD01を検出した地点を最低とし、24.5m、26m、27m地点と段々畑状に行なっている。

1 基本層序

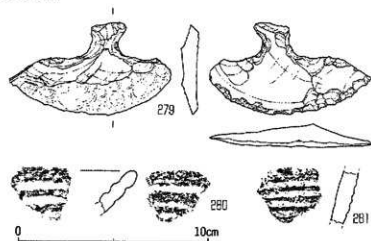
全体的に地表から地山面までは20～40cmと浅く、ほとんどの地点で表土及び旧耕作土が堆積するのみであった。わずかに南・北の地点では表土・旧耕作土の下に黄灰色土 (中世から近世の包含層) の地積がみとめられたが、この包含層を切る遺構は近現代以降の掘り込みに限られた。したがって、それ以前の遺構の検出は地山面もしくは遺構の埋土上に限られている。



第33圖 主要遺構配置図 (1 : 300)

2 縄文時代以前 (第34図・図版18)

遺構の検出には当たっていないが、弥生時代の住居跡の可能性ある SK12・13・14 掘土中より、縄文時代土器片や石匙が出土した。280は浮線文系の鉢 (晩期末), 281は条痕文土器 (晩期?) と推定される。279の石匙はサヌカイト製である。



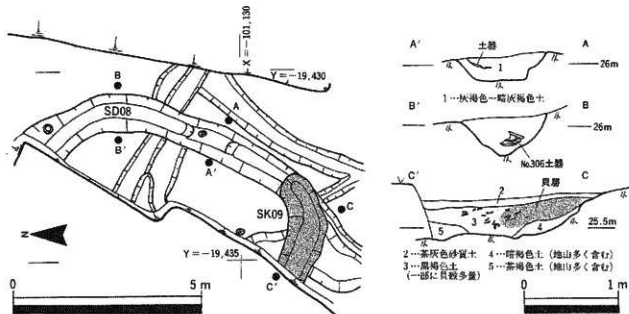
第34図 縄文時代出土遺物 (1:2)

3 弥生時代後期

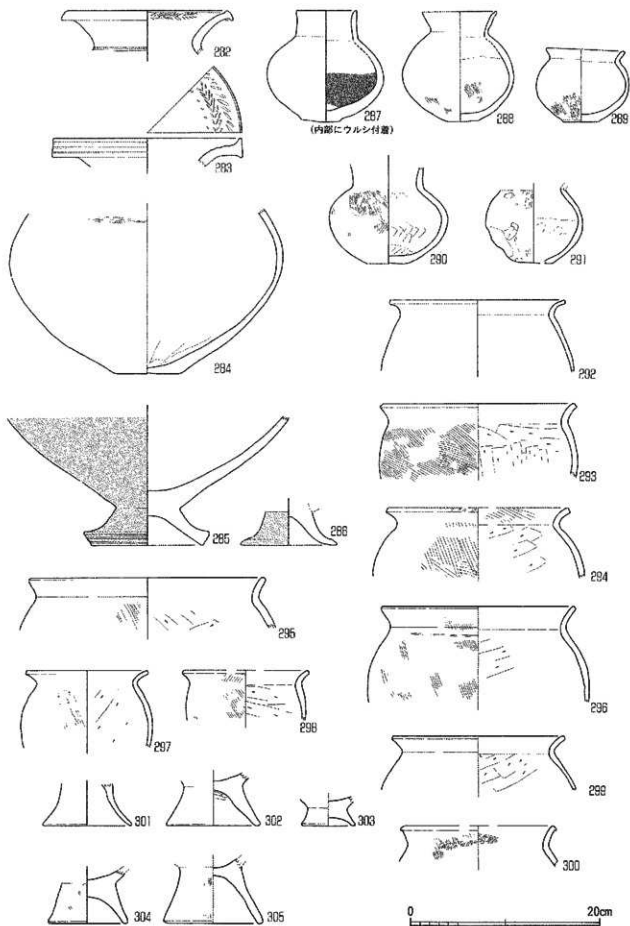
方形周溝墓

2-SD08 (第35-37図・図版3, 15)

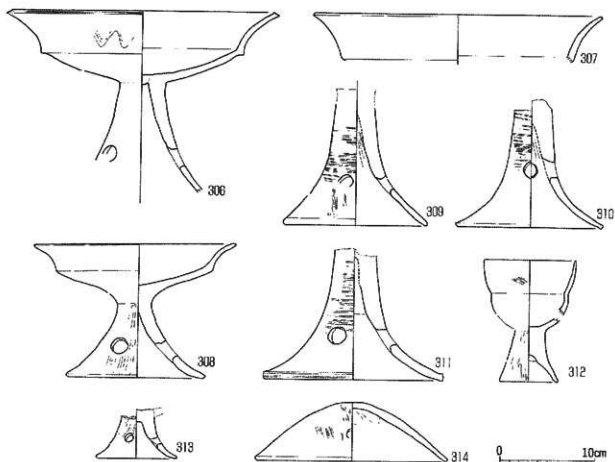
標高約26mにて検出。幅90~100cm, 深さ20~40cmの「コ」の字状に屈曲する溝。西半分は崖のため消失, また南辺はSK09によって切られているため確実なことは言えないが, 方形周溝墓をめぐる溝の可能性を考えた。断面は「逆台形」を呈し, 灰褐色~暗灰褐色土一層が堆積する。東辺のほぼ中央約1m部分は, 他より底が10cmほど高く (浅く) なっており, ブリッジ風であった。出土遺物はこのブリッジの前後に集中してみられ, 山中式期 (弥生時代後期前半) の土器が多く出土した。なお, 第36図287の壺内部には漆が遺存しており注目された (付編3参照)。



第35図 SD08・SK09実測図 (平面図1:100・断面図1:40)



第36図 SD08出土遺物 その1 (1:4)

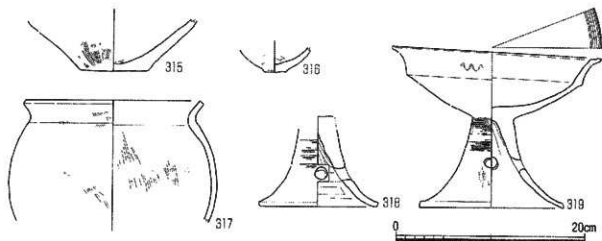


第37図 SD08出土遺物 その2 (1:4)

整地土

2-SK20 (第38図・図版15)

調査区北端、北環濠 (SD02) の北側に位置し、標高24.2~24.7mにて検出した。不定型の落込みで、埴土は灰褐色土が堆積する。山中式期の土器のみを含むことから、環濠が機能した時期には埋没していたと考えられ、環濠の掘削排土を利用した「斜面の整地」を推定する。



第38図 SK20出土遺物 (1:4)

住居跡

住居跡の可能性ある遺構は、調査区中央附近の最も高い地点（標高27m前後）にて検出している。

なお、すべて一部分のみの検出であったため、遺構番号はSKを付け調査した。そして、その後の整理作業においても変更しなかったため、報告書でも踏襲する。

2-SK14（第39図）

東は調査区外、西は斜面でカットされているため平面形・規模は不明である。床がフラットであること、壁際の溝と思われる幅30～40cm深さ10cmほどの溝が遺存したことから竪穴住居跡の一部と推定した。ただし、主柱穴にあたるピットや炉址ははっきりしない。埋土は茶褐色土一層が堆積する。

切り合い関係はSK15より新しく、SK13よりは古い（第39図断面図参照）。出土遺物はすべて埋土中からで、弥生土器の破片のみである。山中式期のものが目立ったが、年代の確定な根拠にはなりえない。

※その後3次調査で東側を調査し、方形住居跡であることを確認した。（3次調査SB09の項参照）

2-SK13（第39図）

SK14南に位置し、SK14の一部を切る。東西とも調査区外に延びるため、平面形状・規模は不明である。浅い竪穴状の落込みで、床がフラットであることから、住居跡と推定したが、壁際の溝・炉址・主柱穴は不明である。埋土は淡茶褐色土一層が堆積した。

出土遺物はすべて埋土中からで、弥生土器の破片のみである。時期は不明である。

※その後の3次調査で、一辺約4.6mの隅丸の方形プランであることと、一部壁際の溝が遺存することを確認した。（3次調査SB08の項参照）

2-SK12（第39図）

SK13南に位置する。西側は調査区外のため平面形状・規模は不明である。竪穴状の落込みで、床がフラットであること、壁際の溝が一部に残っていることから住居跡と推定した。ただし、検出部分も近世以降の溝や土坑によって大きく壊されているため確実なことは言えない。炉址・主柱穴も不明である。埋土は灰茶褐色土一層が堆積する。

出土遺物はすべて埋土中からで、弥生土器の破片が多い。時期は不明である。

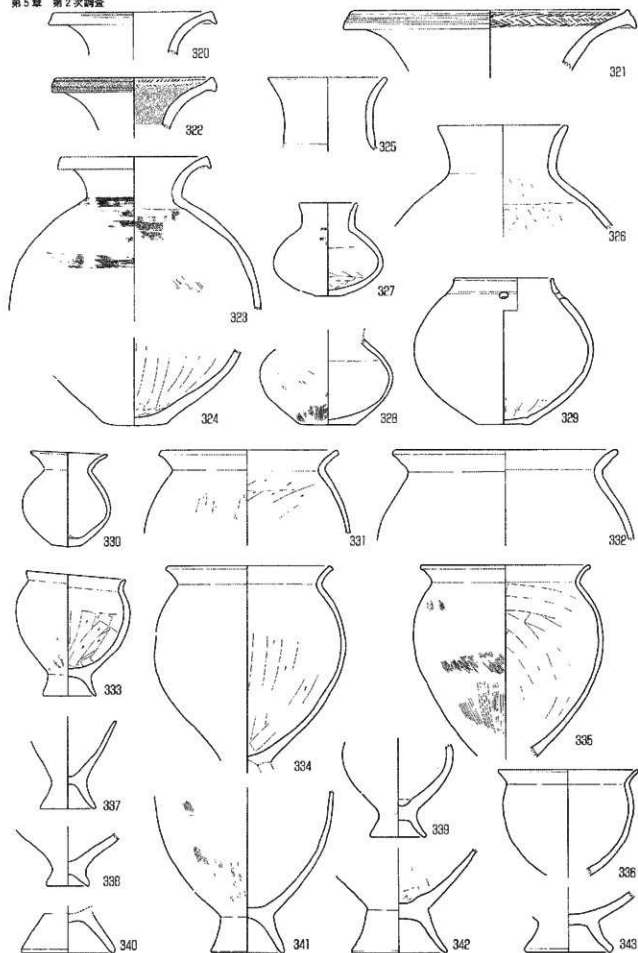
廃棄土坑

2-SK15（第39～42図・図版3, 15）

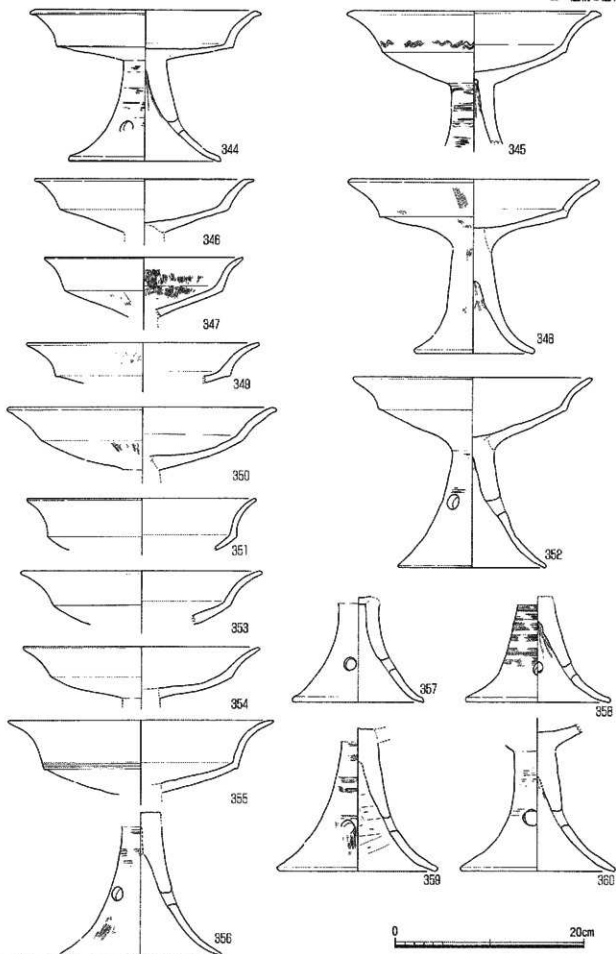
調査区中央やや北寄りの、標高26～26.7mの斜面に堆積した土器群。竪穴住居跡と考えたSK14以前の遺構である。灰褐色土一層が堆積するが、平面形は不定形で、土坑というよりは斜面への土器廃棄と考えられた。山中式期の土器群であり、弥生時代後期でも前半代の年代が推定できる。

2-SK18下層（第39図、第47図・図版16）

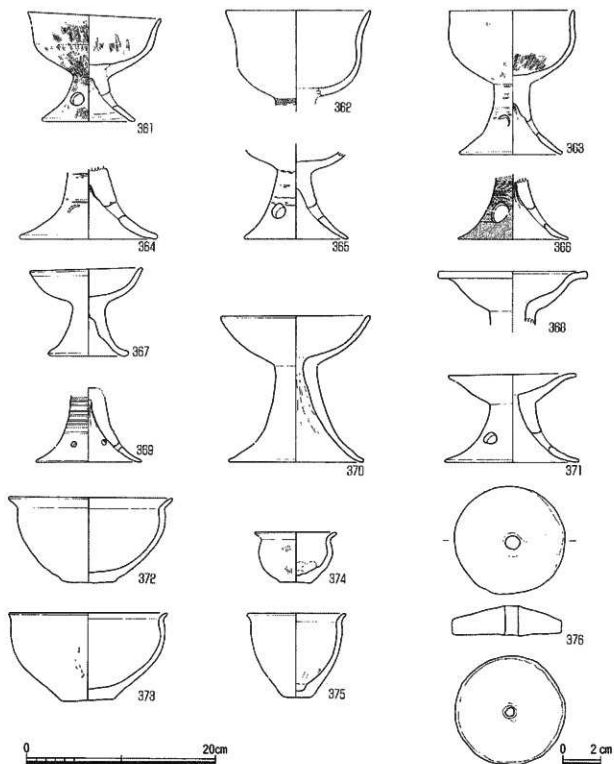
SK15北3mに位置する。地形的にはSK15からは一段下がったテラスの上であり、SK15検出面との比高差は約1.7mを測る。ただし、埋土はSK15と同じ灰褐色土が堆積しており、土器の時期差も顕著でないことから同時期（山中式期）に投棄された土器群の可能性があらう。



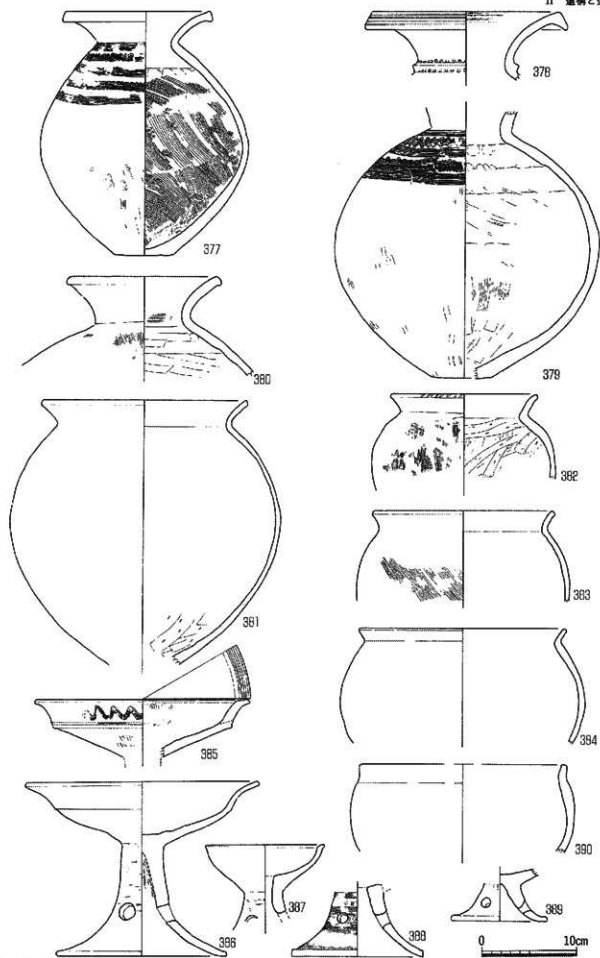
第40図 SK15出土遺物 その1 (1:4)



第41図 SK15出土遺物 その2 (1:4)



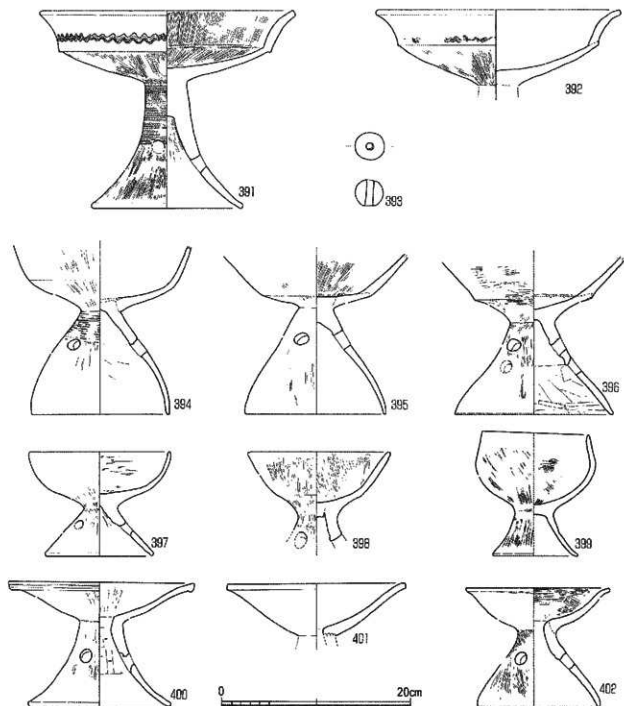
第42図 SK15出土遺物 その3 (1:4, 土製紡輪車(376)=1:2)



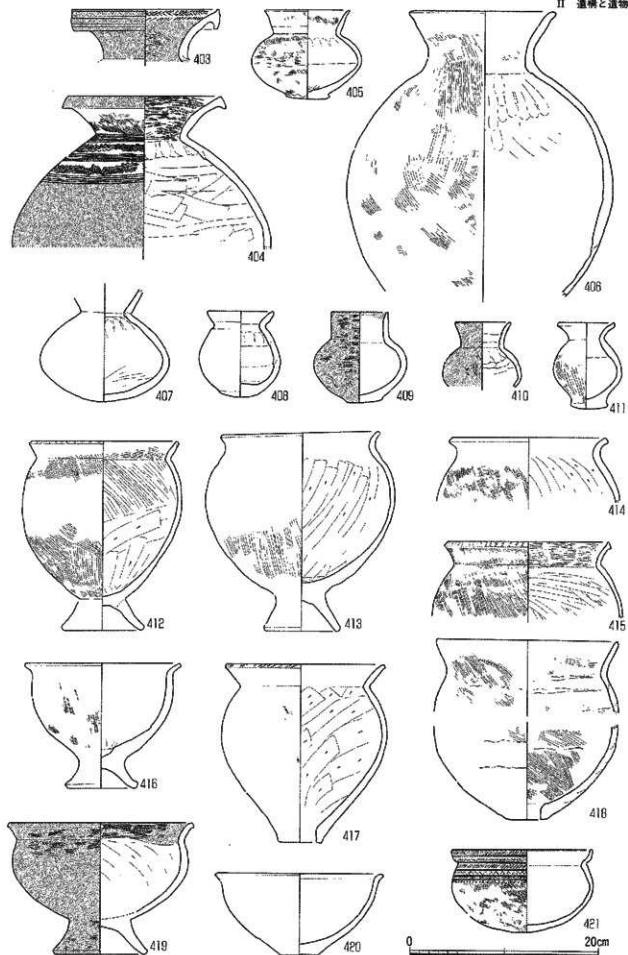
第43図 SK18下層出土遺物

2-SK09 (第35, 44, 45図・図版3, 16)

標高約26mにて検出。幅約1m深さ約40cmの溝状の土坑。西側は崖のため消失、東側は方形周溝墓の溝SD08を切る。上層には遺構をバックするように茶灰色の砂質土が堆積し、以下黒褐色土、暗褐色が堆積する。また、黒褐色土中には、シジミを主体とした貝が集中する箇所が認められた。SD08を切ったためか山中式の土器を多く含んだが、能田旭期の高杯(第44図394~396)器台(402)の存在から弥生時代後期末頃の埋没と推定できる。環濠の機能停止後の遺構であり注目される。



第44図 SK09出土遺物 その1 (1:4)



第45図 SK09出土遺物 その2 (1:4)

環濠

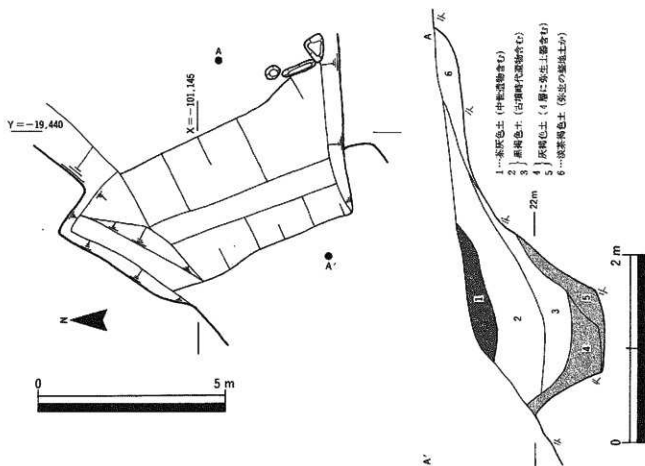
環濠は調査区の南と北の2ヵ所で検出したが、規模には差が認められ、溝底のレベルも2.5mから3mの比高差（南濠が低くて大きい）があることから、直接つながるかどうかは不明である。

2-SD01（南濠）（第46～48図・図版4，16）

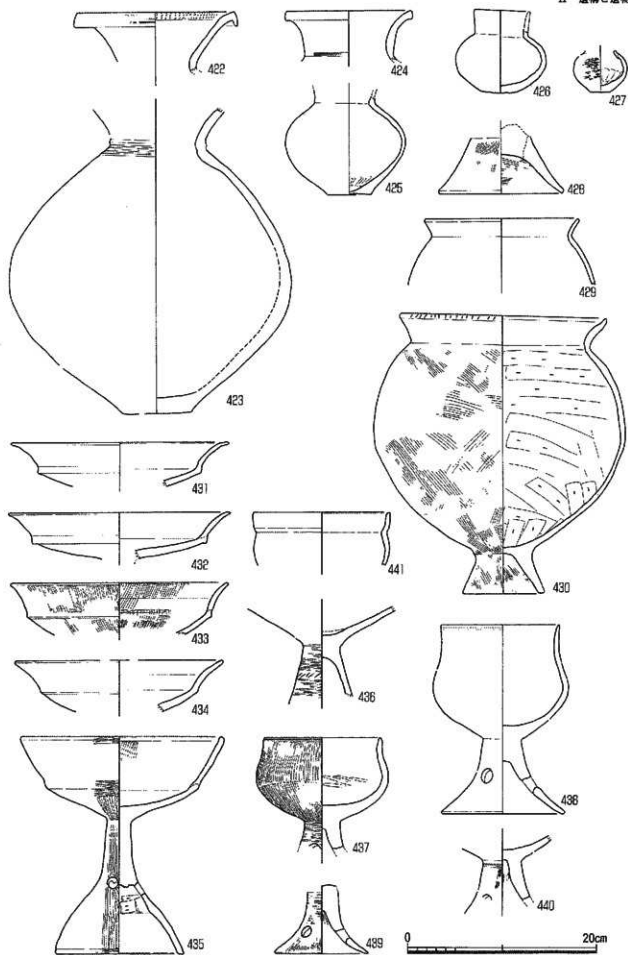
調査区南端で検出した南北方向の環濠。検出面の標高は約23mで、検出した遺構の中では最も低い位置にあたる。上面幅約4m、底幅約1mを測り、断面形は「V字」というよりも「逆台形」ある。現状では丘陵斜面の途中に位置するため、底から肩までの高さが北側は約2mあるのに対して南側は約80cmと低い（現状での標高は北肩23.3m。南肩22m）。ある程度削平されているのであろうが、現地地形がさほどの改変を受けたとも思われず、斜面上に掘削された環濠であった可能性が高い。周辺に土塁や柵の痕跡は検出できなかった。なお、掘削された地山面は固い砂礫層であり、環濠を造る工事が大事業であったことがうかがい知ることができる。

埋土は上層茶灰色土、中層黒褐色土、下層灰褐色土の三層である。上層は20cmから30cmほどの薄い堆積で中世陶器片が僅かに含まれ、中層は約1mと厚い堆積で、古代までの須恵器片がまばらに含まれた。下層は40から50cmの堆積で、上面附近には完形に近い弥生後期の土器が数点出土した。以上のことから下層中の遺物は環濠としての機能が停止した直後の廃棄と推定できることと、環濠はすぐに埋め立てられたのではなく、永らく放置された状況であり、完全に埋没したのは中世の時期であることを確認した。

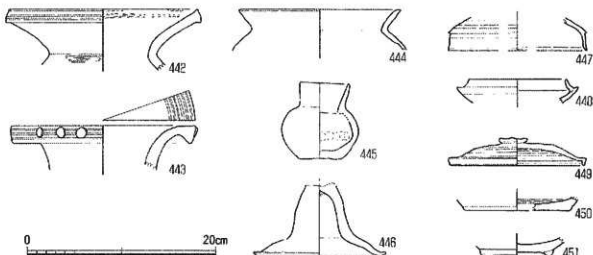
下層からの出土土器は山中中期～環濠期であり、環濠の機能停止は環濠期に考えられる。



第46図 SD01実測図（平面図1：100・断面図1：40）



第47図 SD01下層出土遺物 (1:4)



第48図 SD01上・中層出土遺物(1:4)

2-SD02(北濠)(第49-54図・図版4, 17, 18)

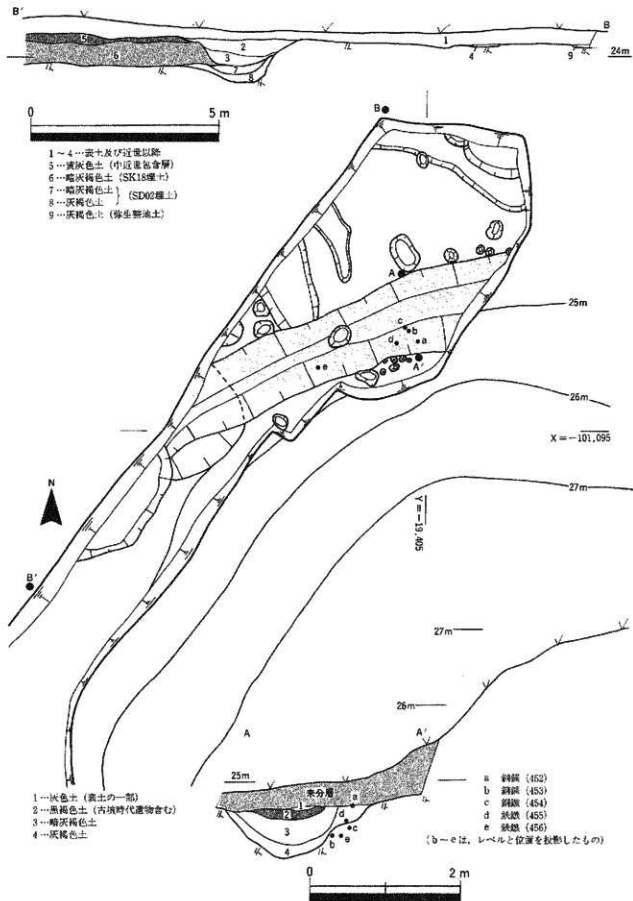
調査区北端に位置する。地形的には上位平坦面(標高約27m)からは一段下がった、標高24~25mのテラス上に立地している。一段上の崖面を捲くように南西から北東に延びており、検出面の標高は24.3~24.8mほどである。東は調査区外、西は崖外へ延びるため検出した長さは8mほどであった。

幅約1.8m・深さ約1mの規模を測り、断面は「V字形からU字形」を呈している。埋土は上層黒褐色土、中層暗灰褐色土、下層灰褐色土の三層であるが、中層と下層の区別は微妙であり、中下層遺物が接合も可能なことから基本的には同一層と考えた。また、中層以下の土器類は弥生土器に限られたが、上層には古墳時代の須恵器が含まれ、SD01(南濠)同様、環濠としての機能停止後も永らく甕んだ状況であったことがわかる。

出土遺物は弥生土器のほか鉄鍬2本、銅鍬1本、青銅製腕輪(銅釧)2個の金属製品が見つかり注目された。いずれも南層近くの下層中で1mの範囲内(鉄鍬1点はやや離れて出土)にまとまっていたが、意図をもって掘え覆かれた状況ではなく、環濠より内側の上位平坦地から落込んだものと考えられた。金属製品のみ投込んだのか、埋め土(中下層土)と一緒に流れ込んだのかの判断は難しいが、埋土中でやばらつきがある(土を挟む)こと、また、土器が集中して出土した地点とは重ならず土器類と一緒に投棄されたとも考え難いことから、銅釧等は環濠を埋める土とともに流れ込んだものと推定した。

すなわち、これら金属製品が環濠埋土中から出土したことは二次的な移動の結果であり、本来納まっていた場所は環濠内側に別にあつたものとする。そして、銅釧の複数出土と銅鍬・鉄鍬との共伴という点からは本来納まっていた場所に「墓」を想定することが最も妥当であり、墳墓に副葬(銅釧は被葬者が装着)されていたものが壊され、盛土と一緒に環濠内へ流入したと推定しておく。ただし、「墓」の破壊が意図的なものかどうかは不明である(1次調査では、方形周溝墓の溝が環濠によって壊されている例を確認している)。なお、墓の壊された時期と環濠内に流入した時期との同時性は確認できない。

さて、環濠の機能停止は、廃棄された土器の年代観(瑞穂期)から弥生時代後期中頃と推定されるが、二次的な流入であった銅釧等の年代は当然それよりは古く考えるべきである。検出されている方形周溝墓の年代(すべて山中式期)と、中期の土器がほとんど無いことを参考に弥生時代後期の前半頃と考えたい。

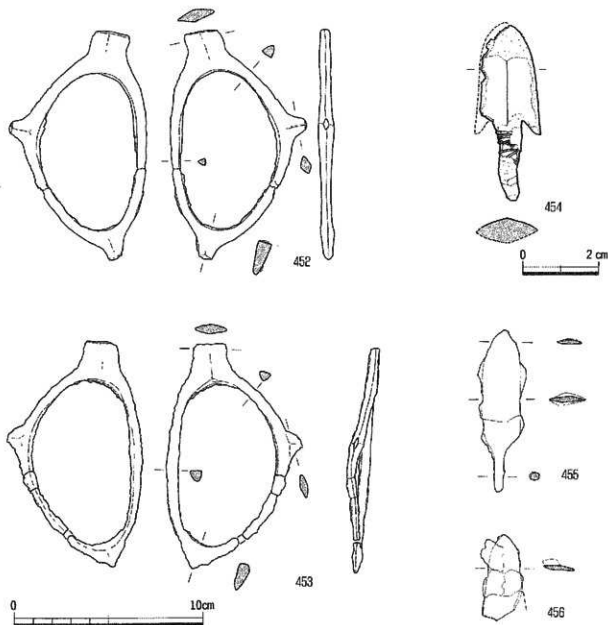


第49図 SD02実測図 (平面図 1 : 100・断面図 1 : 100・1 : 50)

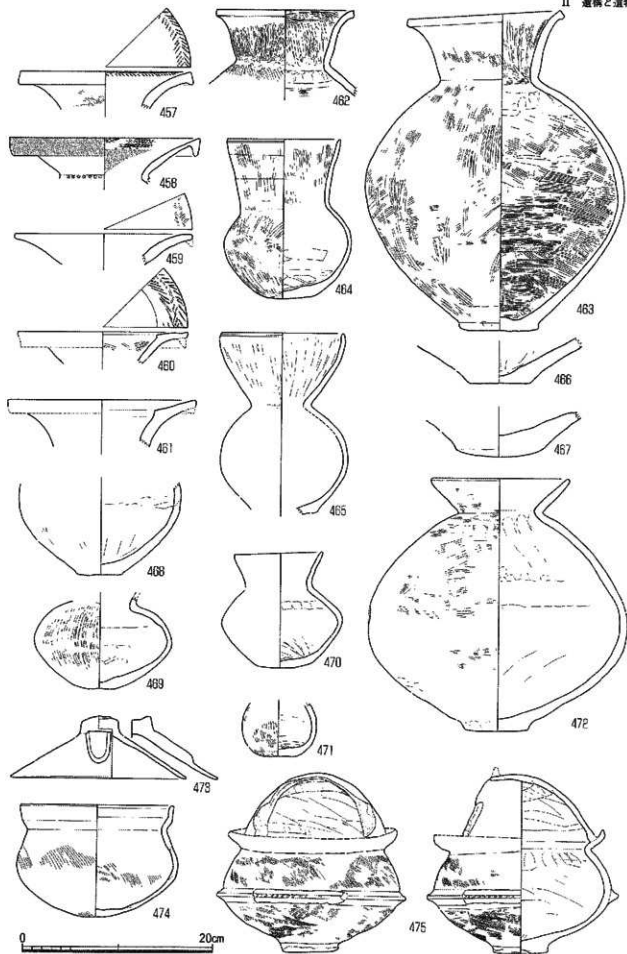
青銅製の腕輪は所謂貝輪系の銅製で、上部に方形、横と下には三角形の3ヵ所に突起があることが大きな特徴である。出土した2点は、突起の形状等細部が微妙に異なることから同範ではないが、同型の鑄造品である。環部の断面形状は三角形を呈し、底辺部分が内側、頂点部分が外側を向く。突起部分の断面形状は菱形である。外面は白っぽい青緑色の錆びに覆われるが、錆びの進行はさほどでなく断面の観察ができた452はきれいな銅色を呈していた。452は全長12.1cm、幅7.4cm、中の穴の大きさは長径8.3cm短径5.1cm。453は全長12cm、幅7.1cm、中の穴の大きさは長径8.5cm短径5.1cmでねじ曲った状態で出土した。

銅鐮(454)は、有茎の逆刺のある長三角形鐮で、全長4.7cmを測る。ブロンズ柄が進行しており、極めて脆い状況であったが、茎の部分には「木質片(柄の一部か)」と「糸(滑り止めか)」が遺存していた。

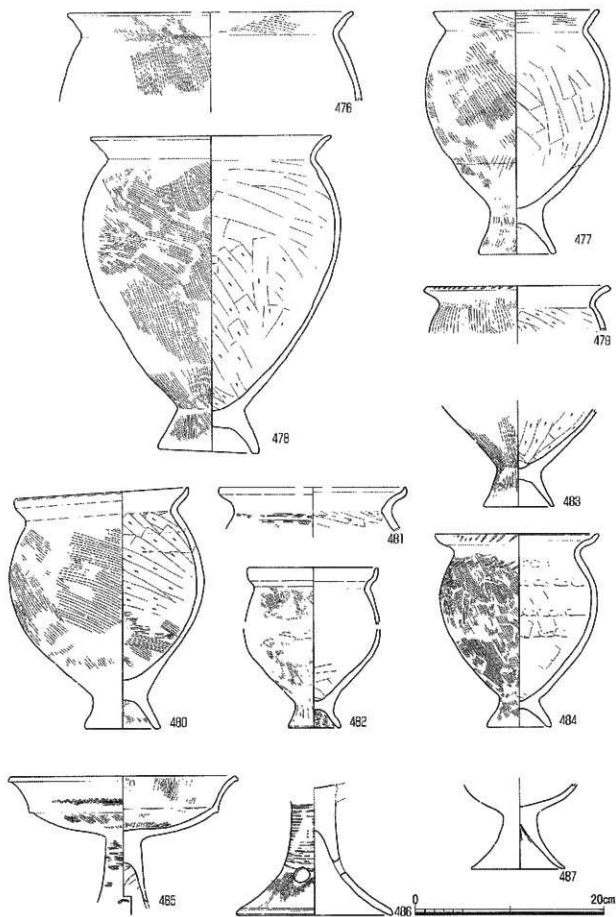
鉄鐮(455)は有茎の柳葉鐮で柄は明瞭でない。全長8.5cm幅2cmを測る。456も鐮と推定されるが形状不明。



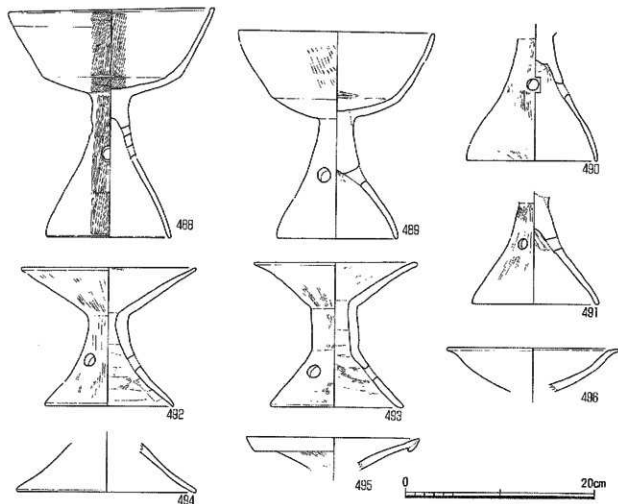
第50図 SD04出土金属器 (452・453・455・456=1:2, 454=原寸)



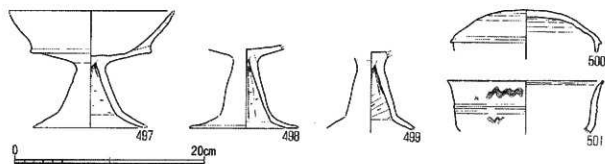
第51図 SD02中・下層出土遺物 その1 (1:4)



第52図 SD02中・下層出土遺物 その2 (1:4)



第53図 SD02中・下層出土遺物 その3 (1:4)



第54図 SD02上層出土遺物 (1:4)

4 古墳時代後半

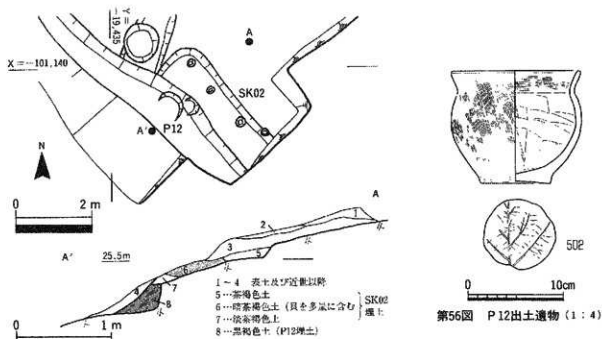
2-SK02 (第55図)

調査区南に位置する。東側は調査区外、南側は近世溝と斜面によって削られているため、形状・規模は不明である。竪穴状に約10cm落込むが、南と北とでは約10cmの高低差があり、住居と考えるにはやや傾斜がある。埋土は分層可能ではあるが基本的には茶褐色土一層で、部分的に貝殻を多量に含んだ。落込み際の床面でピットを3個検出したが、作竈小屋風の建物跡の可能性は残る。埋土中からは土師器・須恵器片

が出土したが、いずれも小片である。P12を切ることから古墳時代後期以降の年代が推定できる。

2-P12 (第55, 56図)

SK02南に位置し、SK02に切られている。径70cm程の規模で、深さ25cmが遺存した。黒褐色土を埋土とし、土師器甕が出土した。古墳時代後期の年代が推定される。



第55図 SK02・P12実測図 (平面図1:100・断面図1:40)

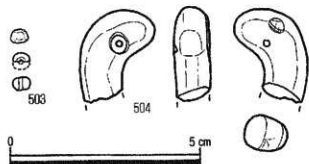
第56図 P12出土遺物 (1:4)

2-SK18 (第57図)

北濠 SD02南に位置し、標高24~25mのテラス上に立地している。長さ12mに渡る落込みで、暗灰褐色土が堆積する。人工的な掘り込みというより、自然な落込みを埋立てた整地土的な埋土と思われた。遺物は少なく破片のみであったが、古墳時代土師器片や須恵器片も若干含まれることや、北濠 SD02埋土をバックしていることから、古墳時代後期頃の堆積と推定する。なお、埋土中より径3mmほどの小さなガラス製小玉が出土した。

2-P99 (第57図・図版18)

調査区北端、SD02北側に位置する。径30~50cm深さ25cmのビットで、埋土は暗灰褐色土が堆積する。埋土上位より勾玉が出土した。勾玉は先端が欠損しているが、碧玉製もしくは緑色凝灰岩製で深い緑色をしている。



第57図 SK18出土ガラス小玉 (左) とP99出土勾玉 (原寸)

第6章 第3次・第4次調査

I 調査の経過

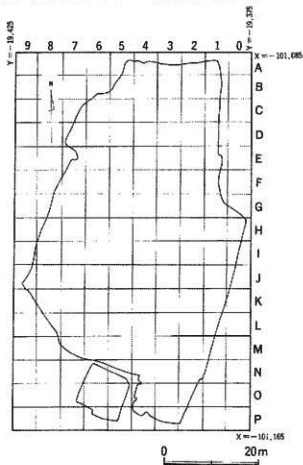
3次及び4次調査は、千冢公園整備に伴う発掘調査であり、公園整備に伴い埋蔵文化財の調査が必要な範囲を、任意にわけたにすぎない。調査も、平成8年の1月から3月まで（3次）と同じく7月から12月まで（4次）と年度は異なるが、ほぼ連続して行われたため、まとめて報告する。報告は、中世の一部を田原が執筆し、その他の執筆と編集は村木による。

3次調査は、遺跡が立地する丘陵上の平坦面のうち北側部分を対象とし、4次調査はその南側で行った。4次調査は、排土置場の確保と、2次調査後に行われていた崖面の擁壁工事の工事車両通路を確保するため、3回に分けて実施した。また、4次調査では、公園内に設置されるトイレの予定地も調査した。

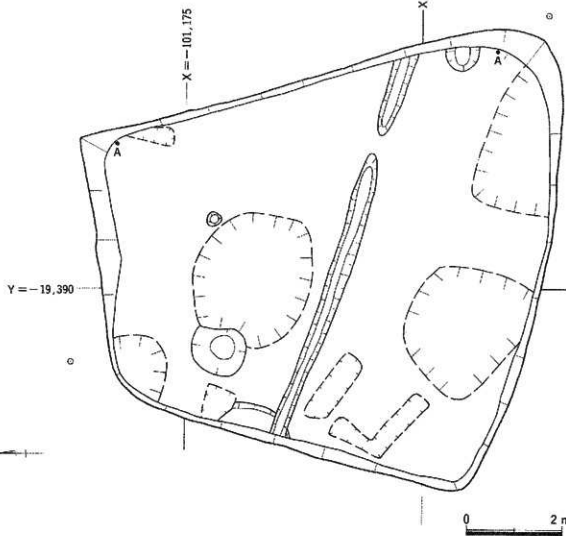
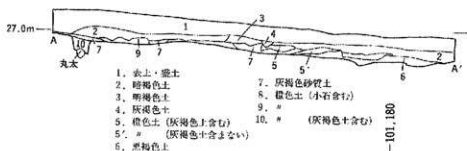
調査区内には、3次調査区の北東端にあたる、国土座標 $X=-101,085$ 、 $Y=-19,380$ を原点とし、5mを単位とするグリッドを設定した。原点から西にむかって、1、2、3……、南にむかってA、B、C……というように、グリッドの各辺に対して名称を与え、A1、B2という具合に呼んだ。しかし、3次調査のためのグリッド設定のため、4次調査の際に、グリッドを設定した部分より東側が調査の対象となった。そこで、1列の東側の列にはやむを得ず0の列を設定した。グリッド名称に0列があるのはそのためである（第58図）。

また、4次調査の際に調査を行った、公園内に設置されるトイレの予定地は、3、4次調査地点からやや離れているが、調査の結果、大部分が攪乱を受けており、攪乱されていない部分でも遺構は認められなかった。1978年の立会調査で環濠らしい溝が見ついている地点の僅かに北の、環濠の内部にあたるこの地点で、まったく遺構が見られないのは、大きく削平を受けたからであろうか。弥生時代の遺構に限らず他の時代の遺構もまったくないことからそう考えるのが妥当であろう。3、4次の調査地点と比べると、トイレ予定地は、1mほど低いが、必ずしも本来の地形ではないと考えた方がよいだろう。

ここでトイレ部の平面図と調査区壁面断面図（第59図）を掲載する（図版5）。なお、断面図に示した各層は、何れも現代の遺物を含む。遺物は、攪乱土中から山茶碗の破片が出土している（第60図）。



第58図 グリッド設定図



第59図 トイレ部平面図・断面図

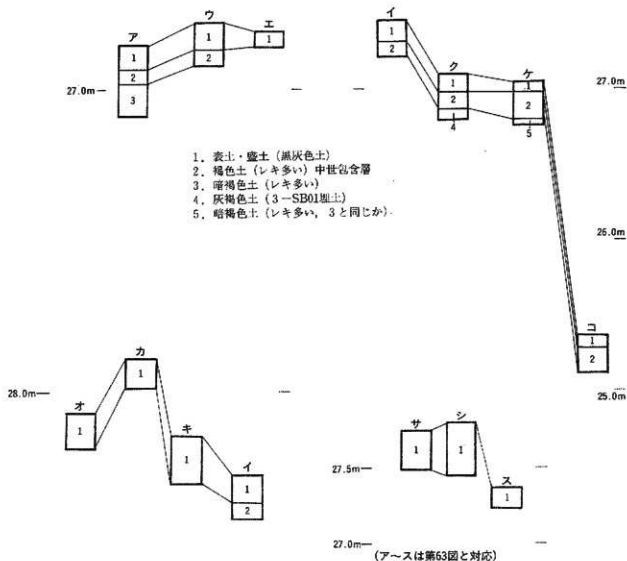


第60図 トイレ部出土遺物

II 基本層序

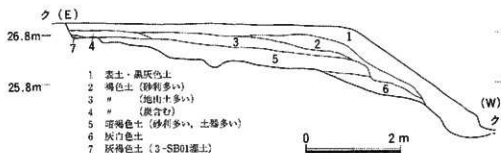
3次及び4次調査の基本層序は模式図に示した通りである(第61図)。調査区内の層序の観察は、調査区の周囲の壁面や、任意に設定したアゼで行ったが、以下に述べるように、層序が極めて単純な部分が多いため、調査区内の敷地点の状況をつなぐことで十分理解できる。

3次調査区の西部から北部にかけてには、1.5mほど高さの差がある小さな崖が走っている。この崖は、



第61図 基本層序

人為的に作られたものの可能性が高く、5次調査で報告する丘陵北側斜面を段状に削った造作の最上段にあたる可能性もあり、そうだとすれば中世に行われたものである。一方、環濠が部分的にこの崖に沿って巡っている様にも見えるから、弥生時代には既に崖があったとも思われる。この崖の上側については、近現代に極めて大規模に削平を受けているようで、礫層である八事層の地山の上に、近現代の表土が乗っているに過ぎないという状況である。近現代の遺物を含む黒灰色の砂質土が調査区全体にわたって見られたが、これも表土として扱っている。弥生時代から中世までの遺物包含層はほぼ完全に削平されている。中



第62図 西側斜面土層図 (位置は第63図と対応)

世の大溝などから多くの弥生土器、土師器が出土していることが、中世までは良好な包含層があったことを示唆するに過ぎない。遺構の報告の際にも述べるが、竪穴住居の壁の立ち上がりもほとんど削平されており、周溝すら残っていない場合が多いようで、本来は住居の床面にあったであろうピットが地山面でも多く見つかっている。わずかに、調査区北、西の崖に近い部分で、中世の遺物を包含する褐色土が残っている（第61図3層）。

西側の斜面については、弥生土器を中心とし、須恵器までを出土する遺物包含層が比較的良好に残っている。特に、3次調査区西側の崖斜面からは、かなり多量の弥生土器、土師器、須恵器、山茶碗などが出土した。下位には、弥生土器のみを出土すると思われる包含層が遺存していたが、これは、崖が中世以前に存在していた事を示すのか、中世に削られた残りなのかはわからない。北側の崖では弥生時代の包含層は遺存していない。

西側の斜面部分の断面図を示しておく（第62図・図版5）。

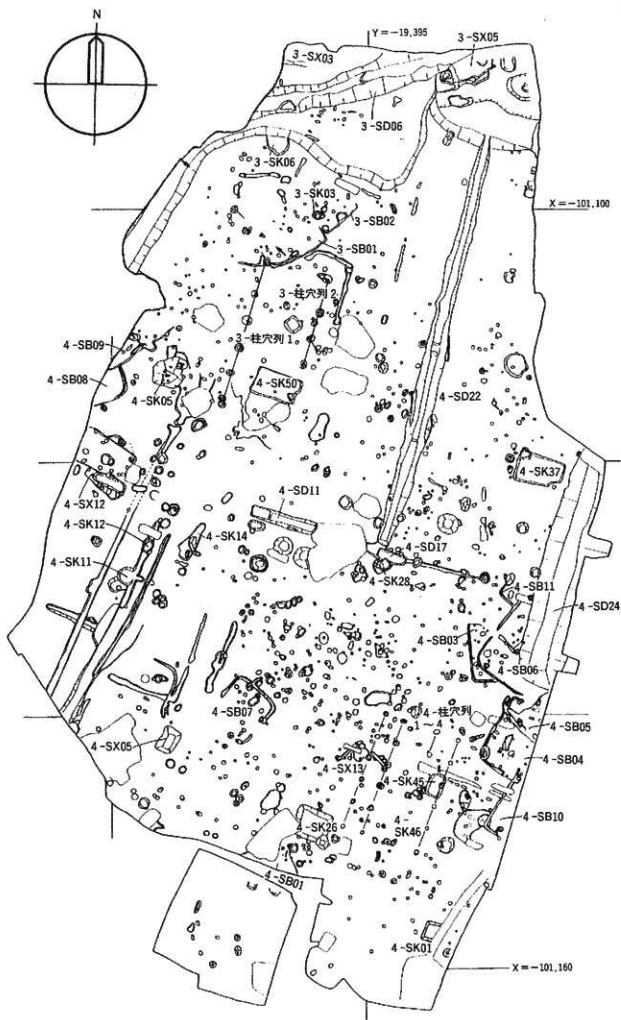


第63図 土層断面位置

III 遺構と遺物

調査で見つかった遺構は、弥生時代後期及び古墳時代中期から後期、中世（室町時代～戦国時代）に火きくわけられる。それ以外の時期の遺物はいくらかあるが、遺構はなく、この3時期において報告することに不都合はない。竪穴住居やその周溝には、時期が特定できないものもあるので、それについては時期不明のものとしてまとめて述べる。また、3,4次調査ではあわせて1000個ほどのピットが見つかっており、極めて多いと言えるだろう。これらの多くは、竪穴住居の床面にあった柱穴ではないかと考えるが、住居の輪郭すらわからない上に、はっきりした竪穴住居でも必ずしも規則的な柱穴配置というわけではないため、ピットの配列から竪穴住居を復元することは極めて困難と言わざるを得ない。また、出土遺物の少ないピットの時期を考えるのは容易でない。そのため、本報告では、遺存度の高い遺物の出土量が多く、時期が確定できそうな、ごく限られた数のピットについて、最後にまとめて述べる。

先述した三時期以外の遺物としては、小片のため図化はできなかったが、縄文時代晩期のものと思われる。条痕をもつ土器片がある。3-SK09の埋土から出土したが、遺構の時期を示すものではない。



第64图 第3次・第4次調査区全体图

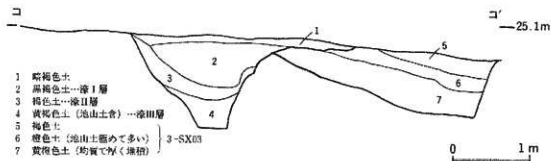
弥生時代

弥生時代の後期の遺構としては、環濠、竪穴住居、土坑などがある。環濠に関連すると思われる遺構から順に述べる。

3-SX03 (第65, 69, 70図・図版5, 19)

環濠(3-SD06)の外側では、弥生時代後期前半の土器がまとまって出土した。当初、遺構についてはわからなかったが、トレンチを掘削し、断面を精査したところ、環濠掘削の外側に盛土がなされたらしいこと、環濠は盛土を切って掘削されていること、土器群はその盛土の上面付近にのみ集中していることが判明した。SX03としたうち、5層は褐色土で、盛土であるとは言えないが、6層は地山土を多く含む褐色土、7層は均質な黄褐色土であり、この6層及び7層は盛土と考えた。大量の土器が出土したのは、6層の上面である。それ以下の盛土中からはごく僅かに破片が出土したに過ぎない。出土遺物は、甕、壺、高杯であるが、甕に対して壺、高杯の比率が高いことが特徴である。こうした器種構成と出土状況と合わせて考えると、盛土、環濠掘削にともなう地盤のマツリの痕跡とすることも許されるだろう。弥生時代後期前半の山中式、中でも高杯の特徴等から、中頃から後半にあたるのではないかと考える。

この遺構については、環濠がこれを切っていることから、環濠掘削時期の上限を特定するものであること、環濠掘削にあたって行われたらしいマツリの痕跡が明らかになった点が特筆される。



第65図 3-SX03・3-SD06断面図

3-SX05 (第66, 70図・図版5, 19)

環濠の内側(集落側)でも、環濠に切られている土から土器の出土があった。遺構の輪郭ははっきりしないが、環濠の最上層によって切られているこの遺構を3-SX05とした。SX05とした部分の土はSX03とは異なり、盛土とは考えにくく、性格は不明であるが、切り合いから見て、環濠掘削以前のものである。出土した遺物は後期前半の山中式に比定できる。

3-SD06 (第67, 68, 71~79図・図版5, 19)

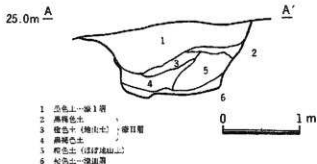
3次調査では2次調査で見つかった環濠の延長部分を12mほど調査した。環濠の内側は高さ1mほどの崖面になっている。検出面での幅は、2mから2.5m、検出面からの深さは0.8m、環濠内側の崖上からの比高は2m弱をはかる。内側の崖面が弥生時代から存在したならば、土塁の役割を果たしたであろう。断面



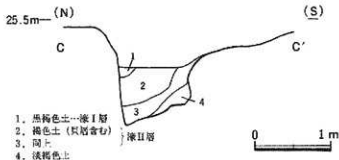
第66図 3-SX05断面図

形は、底がわずかに平出面を持ち、その幅によって逆台形と呼ぶのがふさわしい部分とV字形と呼べる部分があり、一様ではない。

埋土は、掘削中には大きく3層（I—III層）に分けた。このうち、II層については、その下位から残りの良い土器群が多く出土したため、II層下位として遺物を取り上げた。その後の断面観察により、II層下位は、II層と土質は近いものの、黒色を呈する色調の点でII層と区別できた。（第71図）ただし、遺物は完全に分離できたわけではないので、確実なもののみII層下位として扱うこととした。また、3次調査区の西端部分では、地山土の境が漆下層に堆積していた。集落の内側方向から地山土が崩落したような状況であった。この下位からも確実に土器は出土する。ごく部分的で



第67図 3—SD06 A—A'断面図（第63図と対応）



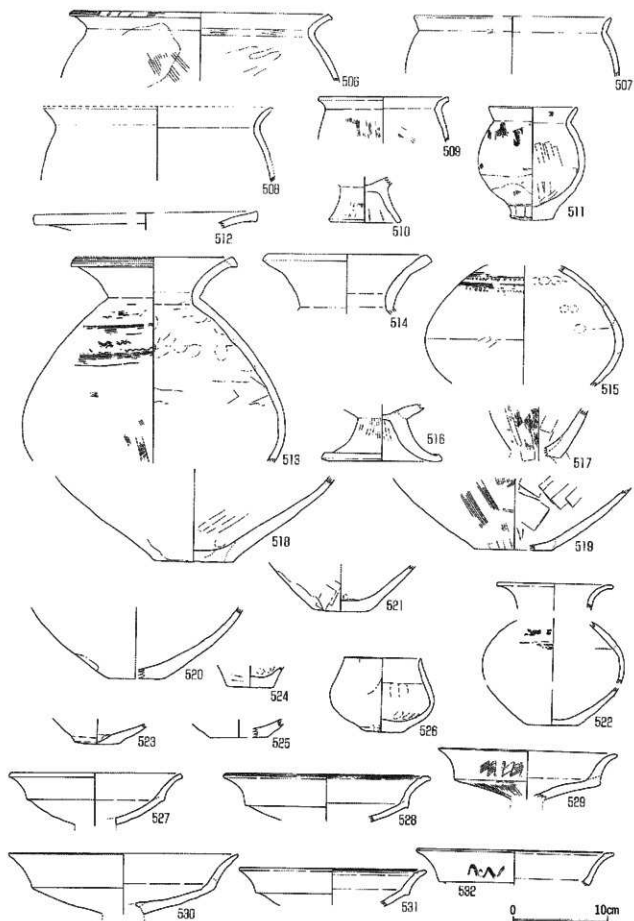
第68図 3—SD06 C—C'断面図（第63図と対応）

ある亭から、土壁などを崩した意図的な埋め戻し土とは考えず、漆の壁面の崩落上ではないかと考える。

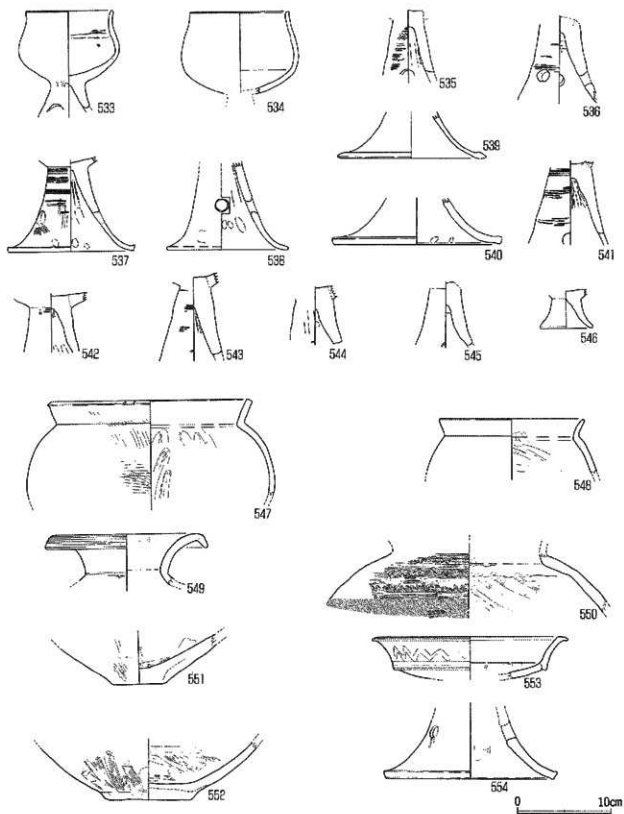
環漆の最下層は、遺物をほとんど含まない黄褐色土が堆積していた。僅かに出土する破片は、山中式の特徴を持つものが多いが、瑞穂期の特徴を持つものも見られる。遺存度の高いものではなく、小片が中心である。

その上位のII層下位から出土した土器は、遺存度の高いものが多いが、出土状況としては雑然としており、土器の位置関係や個々の土器の向きなどに規則性は見出せなかった。出土位置と高さを記録しつつ取り上げたが、すべてのものについてできたわけではなく、不十分であるが、その記録を第71図に示す。土器は、すべての場所から均等に出土しているわけではなく、4 AGr.に集中している。この4 AGr.の土器群は、高さの点でもまとまりを持っている。器種構成としては、甕、壺、高杯、直口壺、鉢、手焙形土器(475)等、この時期に存在したと考えられるものはほぼ網羅している。図化した遺物は、個体の識別を行った上で、残存が図化部の1/6を目安とした。識別されたが図化されなかったもの多くは、甕の口縁であるが、それらは脚部の数でカバーされているから、ここで図化した個体数が各層位での組成をかなり忠実に反映していると考えられる。II層では、甕が中心で、高杯、壺はそれほど多くない。高杯の中では、ブランドグラス形の高杯や杯部に襷を持たない形の高杯が、有段、有稜の典型的な高杯よりも目立つ点が特徴である。台付の直口壺は、この地域ではあまり見られない器形である。類例を探すと、大きさがまったく異なるが、器形的には鳥取県西柱見四隅突出型墳丘墓(注1)、広島県中畦遺跡(注2)などの例に近いと言えるだろうか。遺物の時期は、弥生時代後期前半から後半、山中式から瑞穂期を中心とする。土器以外の遺物としては、658の土器内につまった土の中から鉄片が1点出土している。本来土器内にあったものではないだろう。器種は不明。

2層からも土器の出土は多い。しかし、土器の遺存度の点ではII層下位に比べると破片が多い。II層として示した中の遺存度の高いもの多くは、本来II層下位出土のものである。

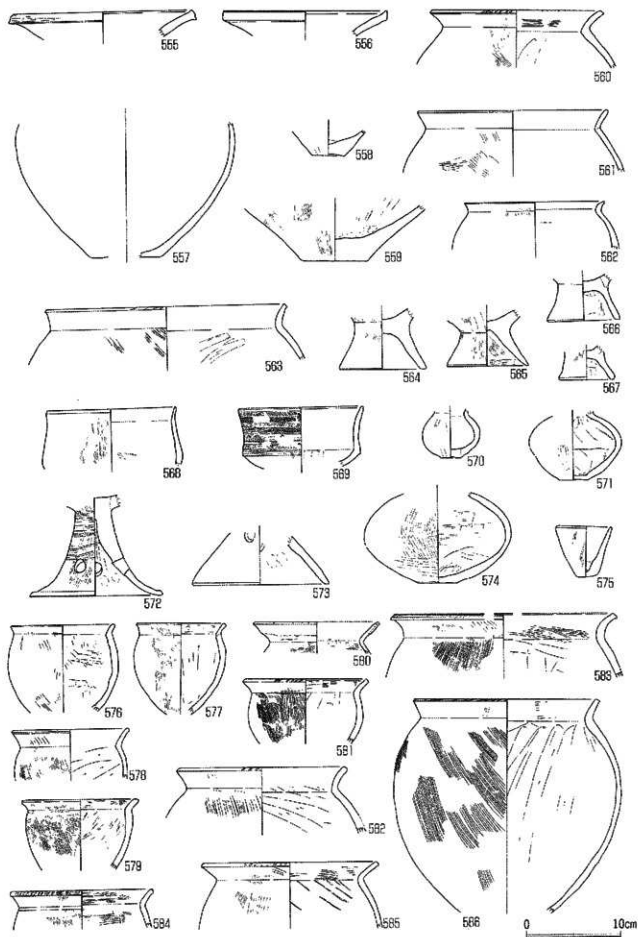


第69図 3—SX03出土遺物

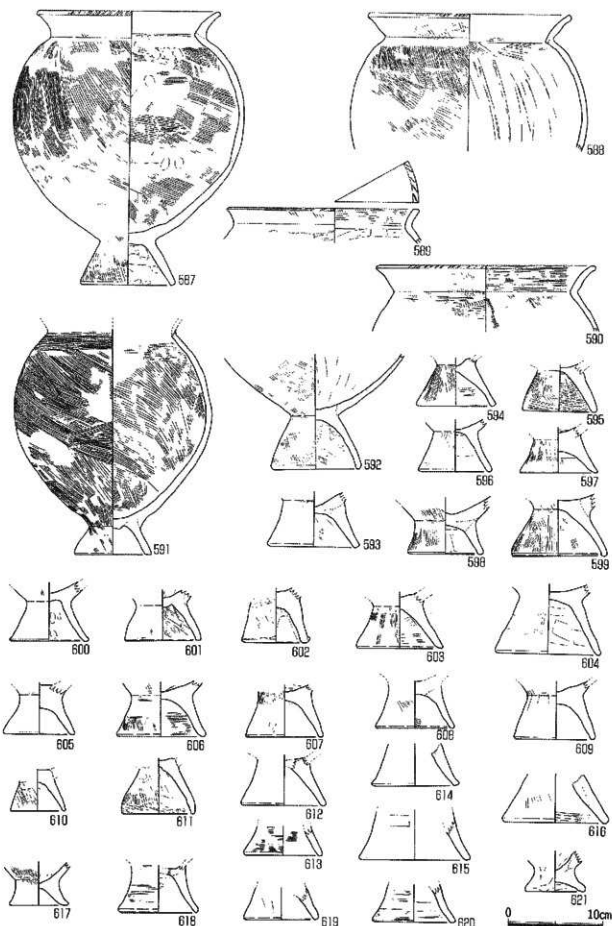


第70図 3-SX03 (533~546), SX05 (547~554) 出土遺物

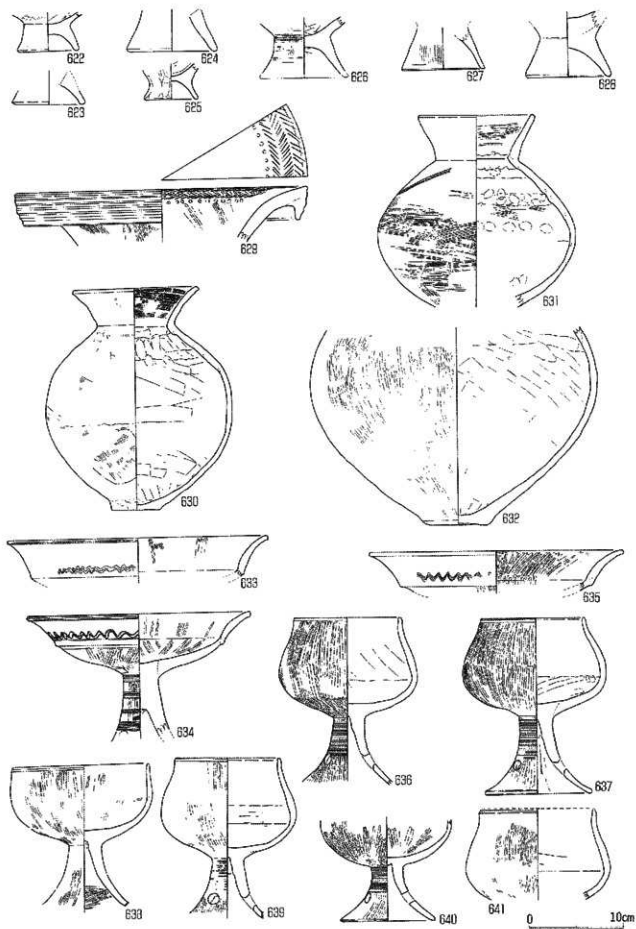
また、この土層上位に、貝層が築かれており、その中からは遺存度の比較的高い土器が出土した。調査時点では、この貝層は、I層形成時のものと考えたが、濠内の中下位にまで及んでいる状況と出土遺物の検討、更に5次調査の成果を考えて、II層中に築かれたものとするに至った。II層および貝層中の土器は、後期後半の能田旭期に属するものが中心で、それより新しいものはない。貝層は、ヤマトシジミを中心とし、その他には鹿角等が出土している。II層中からはヒスイの勾玉(741)も出土している。



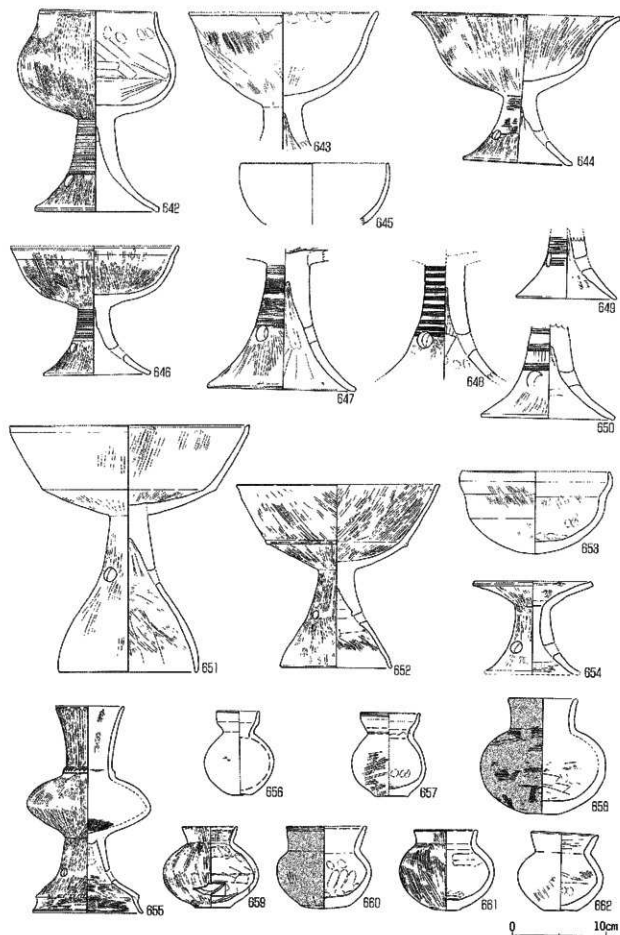
第72図 3—SD06出土遺物(1) (553~575: III層, 576~586: II層下位)



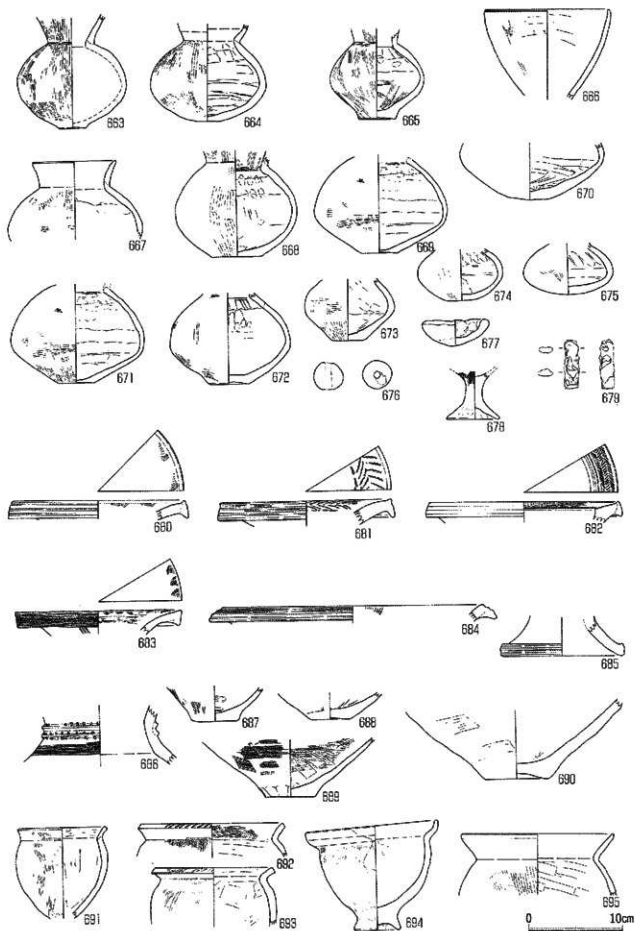
第73図 3—SD06出土遺物(2) (587～621: II層下位)



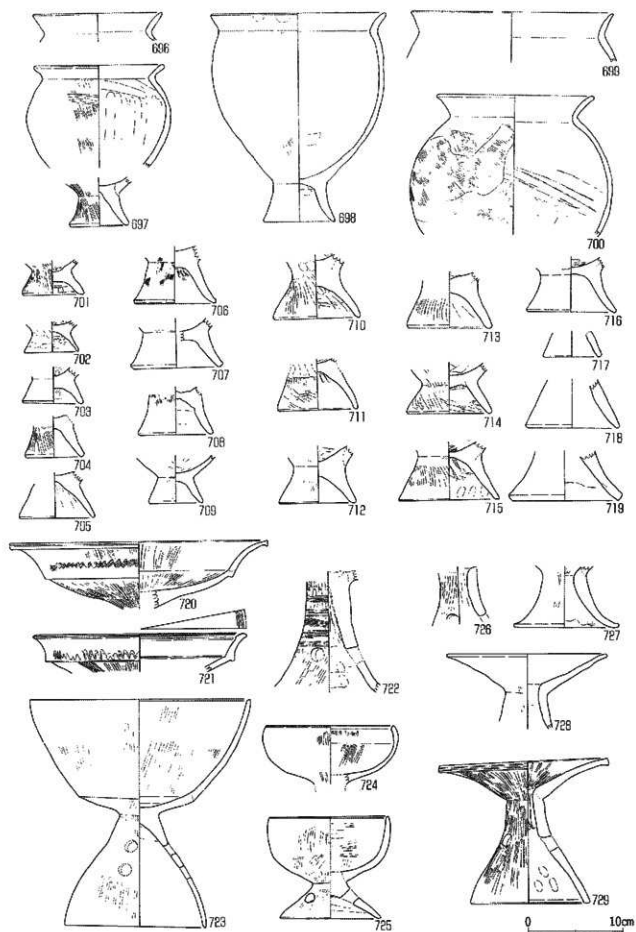
第74図 3—SD06出土遺物(3) (622—641: II層下位)



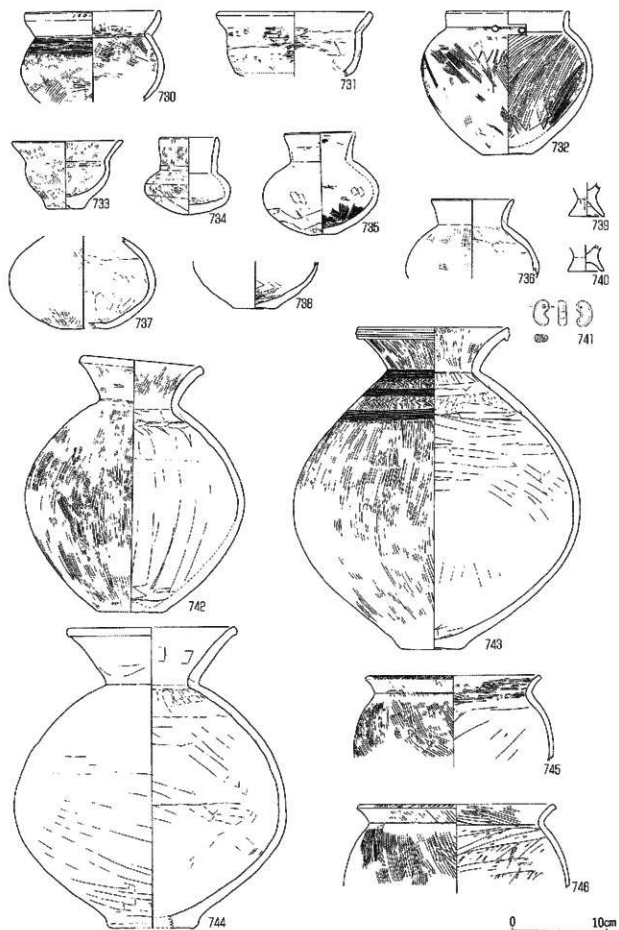
第75図 3—SD06出土遺物(4) (642~662: II層下位)



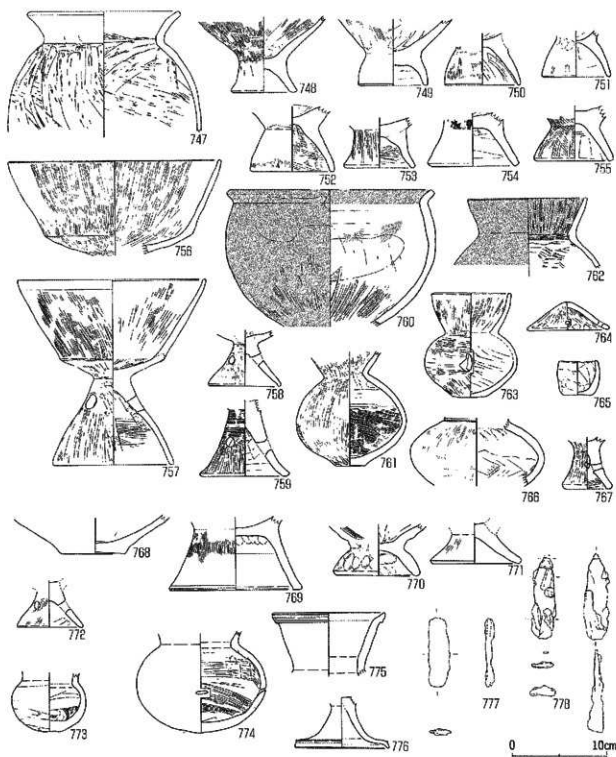
第76図 3—SD06出土遺物(5) (663～679: II層下位, 680～695: II層)



第77図 3-SD06出土遺物(6) (696~729: II層)



第78図 3—SD06出土遺物(7) (730~741: II層, 742~746: 貝層)



第79図 3-SD06出土遺物(8) (747~757: 貝層, 768~781: I層)

竪穴住居

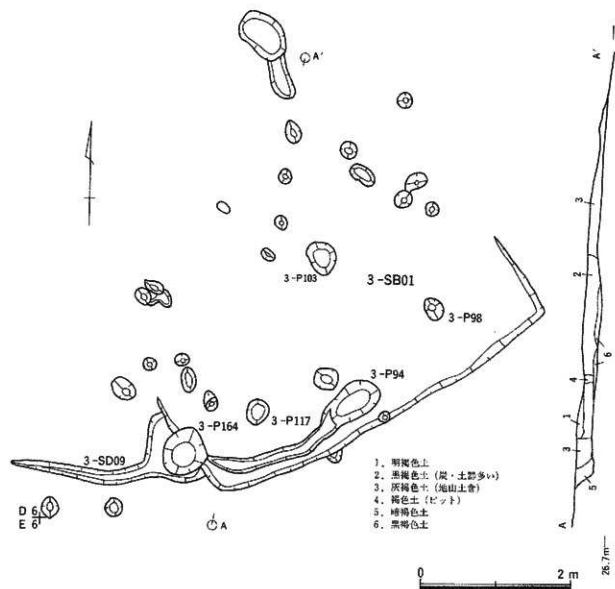
3-SB01 (第80,86図・図版6,20)

D4,5Gr.で検出した。検出できたのは、住居の南側だけで、北半については壁の立ち上がりは遺存していなかった。残存する一辺は約5mをはかり、直交する他の一辺も、この住居の埋土と思われる灰褐色土の広がりから推測すると5mほどとなる。遺存している壁は、N-60°-Eという方向を示す。住居の周溝らしき溝は、壁からわずかに離れた位置で見つかった。床面上でいくつかのピットを検出したが、不

規則にならんでおり、住居の柱穴と特定できたものはなかった。また、中世の柱穴に切られており詳細は不明であるが、住居の西側から住居の外側にも細い溝が繋がっており、住居内から外部への排水溝の可能性はある。こうした住居外に伸びる溝についてあまり類例を知らないことと、住居埋土上層から5世紀代の土師器が多く出土したため、別の住居が切り合っている可能性も検討してみたが、その証拠は見いだせなかった。

3-SB01に所属する遺物としては、住居の床面付近から、弥生時代後期前半山中式の米から後半の瑞穂期と思われる高杯や甕が出土した。779の甕は、住居の床面直上の出土であり、この住居の時期を決める遺物である。その他のものの中には、上層の土師器と一緒に取上げてしまったものもあるが、明らかに弥生時代の土器は上層の遺物から分離した。遺物から見て、濠機能中の住居の可能性が高い。

この住居の上層（第80図の2層）からは、古墳時代の土師器がまとめて出土している。断面図から見ると、何等かの掘り込みを伴っているように見えるが、平面の広がりには明確な輪郭は確定できなかった。土器群には、甕、壺、高杯、小型壺、直口壺がある。小型壺は、器壁が薄く、胎土中に砂粒をあまり含

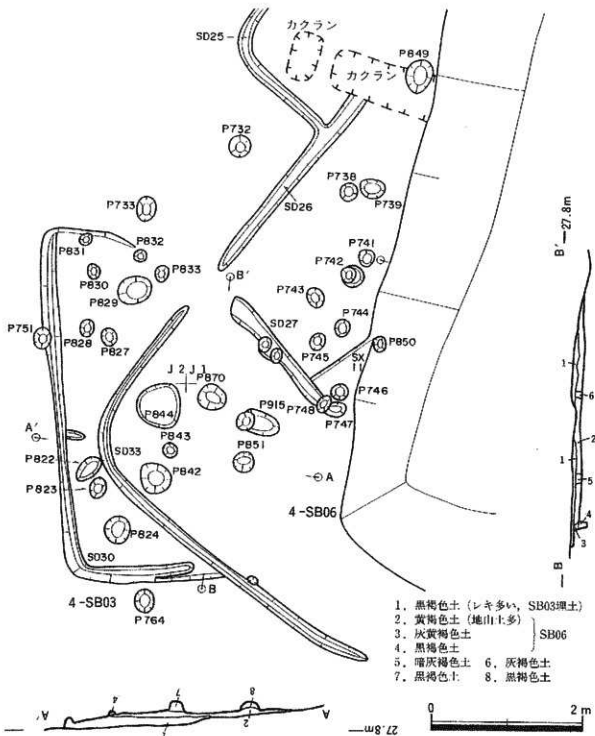


第80図 3-SB01

4-SB05 (第81図・図版6)

4-SB04の北に位置し、SB04を切っている。周溝のごく一部が見つかっているに過ぎず、規模は不明である。周溝の方向は、N-45°-Wを示す。周溝の内部で焼土を一箇所検出しており、これがこの住居の炉にあたるのではないかと考える。

出土遺物は小片がわずかあるに過ぎない。図化はできなかったが、弥生時代後期前半山中式の特徴をもつ土器片が見られるため、弥生時代の竪穴住居として報告する。



第82図 4-SB03・06

4-SB06 (第82図・図版6)

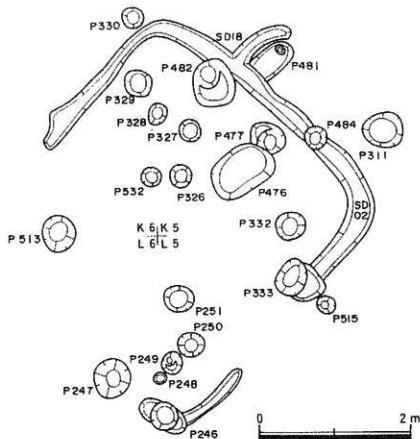
J 1 Gr. 周辺で検出した。古墳時代の竪穴住居である4-SB03が重なって作られているが、この住居の方が床面が低いため、埋土の下位が遺存していた。また、住居の東半は、中世の大溝4-SD24によって切られている。周溝も、途中でとぎれたり、擾乱を受けたりしており、規模は正確にはわからないが、遺存がよい方の一辺は6mほどである。

出土遺物は、弥生土器の小片ばかりで、図化できたものはないが、弥生時代後期前半、山中式の特徴をもったものがあり、住居の時期も弥生時代後期前半に求めてよいのではないかと考える。

4-SB07

(第83図・図版6)

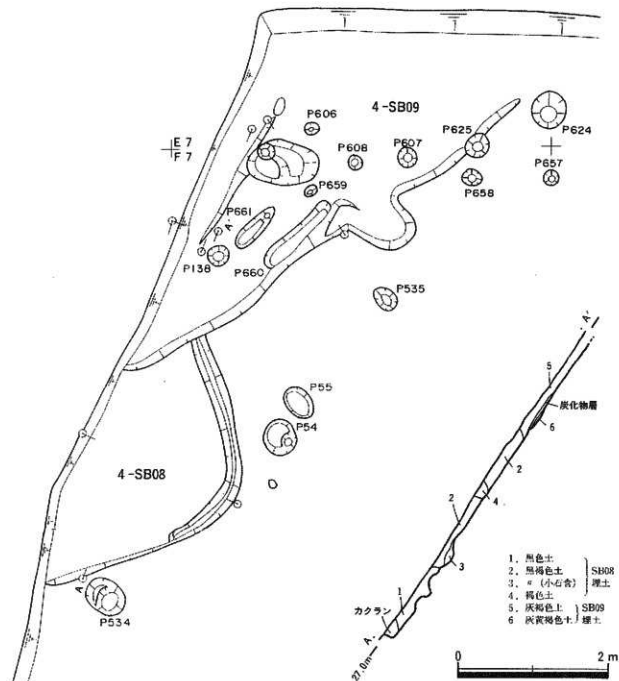
K 5 Gr. 周辺で検出した。検出できたのは、住居の周溝であろう方形に巡る浅い溝と、その内部に位置するピット群である。周溝からは遺物の出土はなく、住居の時期を決める材料は得られていないが、周溝に区画された内部のP477は、この住居の貯蔵穴と考えてもよいのではないかと考えるが、弥生時代後期前半の土器が出土している。また、その他のピットの時期はわからないが、この住居が弥生時代のものであったとしても積極的な不都合はない。



第83図 4-SB07

4-SB08, 09 (第84, 86図・図版6)

ともに F 8 Gr. で検出した。2次調査でも一部検出されている。共に黒い埋土で、切り合いの判断が難しかったが、平面及び断面の観察では SB08が09を切っていると考えた。出土遺物は、共に少量でかつ、埋土中からのものではあるが、08からは小破片ではあるが後期後半の瑞穂期以降ものが、09からは後期前半山中式のものが出土している。SB08は2-SK13, SB09が2-SK14とそれぞれ同一の遺構である。SB08は一辺4.6mのわずかに隅の丸い方形の住居である。



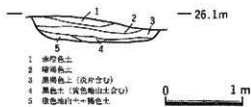
第84図 4-SB08・09

土坑

3-SK06 (第85図、図版6)

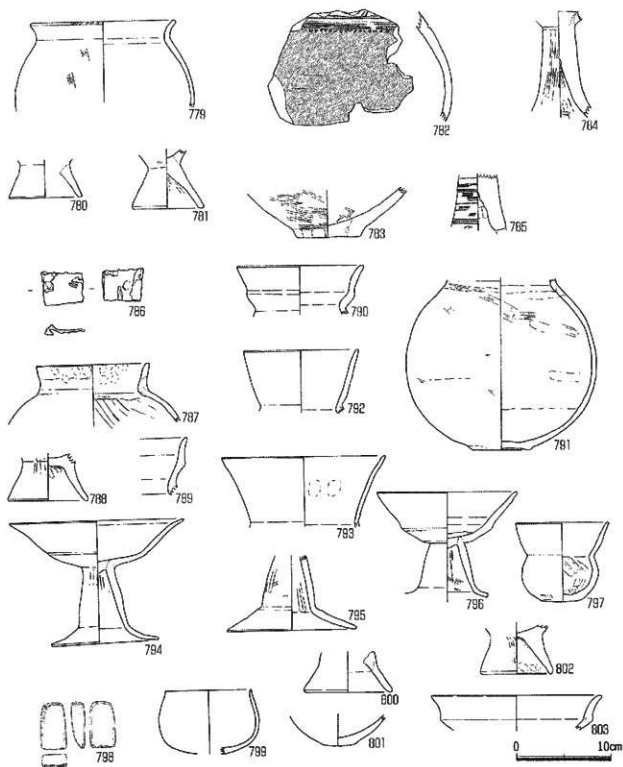
5 B, CGr. で検出した。ちょうど環濠の内側の斜面上に位置する。ちょうど、環濠内で銅鋼や銅鐵が出土した地点の直上にあたる。直径1.8mの円形を呈する。

埋土は地山のブロック土を多く含んでいた。遺物は細片ばかりであるが、弥生土器が出土している。時期は不明であるが、土師器らしい土器片がないため、弥生時代ではないかと考える。



第85図 3-SK06断面図

- 1 赤褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 黒褐色土 (灰かき土)
- 4 黒色土 (灰褐色土)
- 5 褐色土 (赤褐色土)

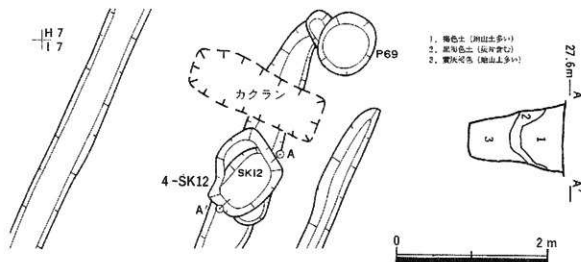


第86図 弥生時代堅穴住居出土遺物 (779~785: 3-SB01, 786~797: 3-SB01上層, 798: 4-SB04)
 (799~801: 4-SB07, 802: 4-SB08, 803: 4-SB09)

4-SK12 (第87, 88図・PL. 2・図版6)

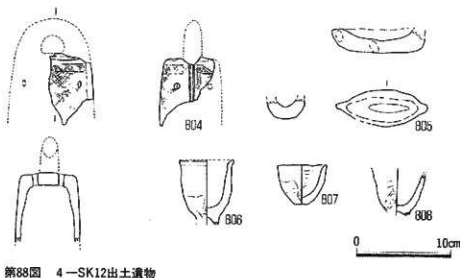
I 7Gr. で検出した。平面は、一辺が1 mほどの方形に近い形をしている。掘り上りの深さは1.2 mと極めて深い。下位の埋土がいくらか汚れた感じの地山土であったため、埋土と地山の判断がつきにくく、掘り過ぎがあったかもしれない。

埋土は大きく3層にわけた。遺物が多く出土したのは2層である。この層からは、銅鐸形土製品1点、



第87図 4-SK12

船形土製品1点と手捏ねの土器3点が出土した。銅鐸形土製品は、身の上半部分の破片である。身には、袈裟櫛文が表現されており、型持孔も表現されているなど、銅鐸の特徴をよく表現している。この銅鐸形土製品は、SK12の埋土中位から出土しているが、他の



第88図 4-SK12出土遺物

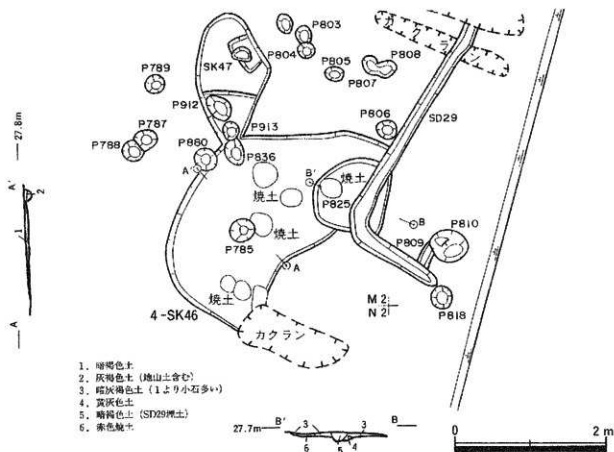
破片はまったく出土していない。船形土製品はほぼ全体が残っている。

手捏ね土器は、3点あり、脚があるように見えるものと丸底のものがある。

4-SK46 (第89図・図版6)

M2 Gr.で検出した。土坑として扱っているが、掘り込みはほとんどなく、焼土とその周辺の、土器片を比較的多く含む灰褐色土の広がりをもSK46と呼ぶ。焼土は地山上で4ヵ所とP825上で1ヵ所検出した。P825は、SK46を掘削後検出したものであるが、こちらも埋土は薄く、SK46と同一遺構の、深くなった部分であるのか、SK46に先行する別の遺構であるのかはわからない。ただ、焼土がすべて一連のものであると仮定すれば、P825はそれに先行する遺構となる。

SK46の性格は不明と言わざるを得ないが、竪穴住居など何等かの遺構が、上部をほとんど削平された結果残った部分ではないかと考える。出土遺物は、破片が多く、図化するにはいたらなかったが、弥生時代後期前半の山中式の特徴をもつものが認められた。



第89図 4-SK46

古墳時代

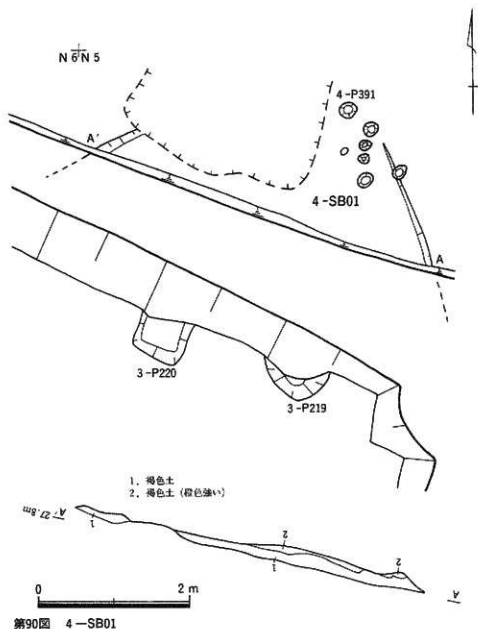
古墳時代の遺構としては、竪穴住居と土坑が検出された。順に報告する。

竪穴住居

4-SB01 (第90,91図, 図版6,20)

4次調査区の南端N-5Gr.で検出した。3次調査で検出した3-P219とP220もこの竪穴住居に関わるものであろう。住居の壁が検出できたのは北東の角のみである。一辺の方向は、N-20°-Wである。埋土は、褐色土であるが、下位はいくぶん橙色が強かったため、分層した。何れの層にも地山土の小粒が混じっている。出土遺物は、ほぼ下位の土層図の2から出土しており、住居の時期を示していると考えられる。

出土した遺物は、須恵器の杯身、高杯脚、甗であり、H61号窯、H44号窯を基準とする時期に比定できるだろう(809~811)。その他には、袋状鉄斧(802)が1点出土している。また、3-P219,220からも、同時期と思われる須恵器、土師器の小片が出土しており、4-SB01に伴うものである可能性が高い。

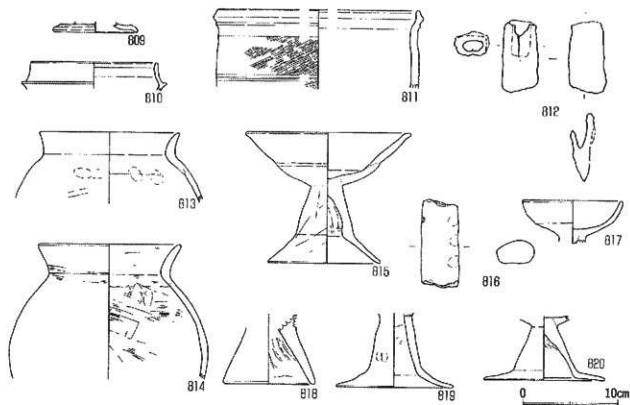


第90図 4-SB01

4-SB03 (第82,91図・図版6,20)

J 2, K 2 Gr.にある。4-SB06の上に作られている。検出できたのは西側の壁のみであるが、N-5'-Wを示す。一边は4.5mをはかる。小さな礫をやや多く含む黒褐色土を埋土とする。P842とP829からは土器器が出土しているから、この住居に伴うピットの可能性が高い。

この住居の埋土下位から、甕、高杯が出土した。また、P842からもほぼ同時期と考えてよい高杯の脚部と、用途不明の棒状土製品が出土している(813~820)。土器は、床面とわかった面からは浮いているようであり、住居廃絶後の土器と考えるべきであるが、埋土の下位からの出土であることと、P842からもほぼ同時期の遺物が出土していることから考えて、住居廃絶直後のものとするのが妥当だろう。であるから、この住居は古墳時代中期、名古屋市の編年では4期(古)に比定してよいものとする。



第91図 古墳時代聖穴住居出土遺物 (809~812: 4-SB01, 813~820: 4-SB03)

土坑

3-SK03 (第92,96図・図版7,20)

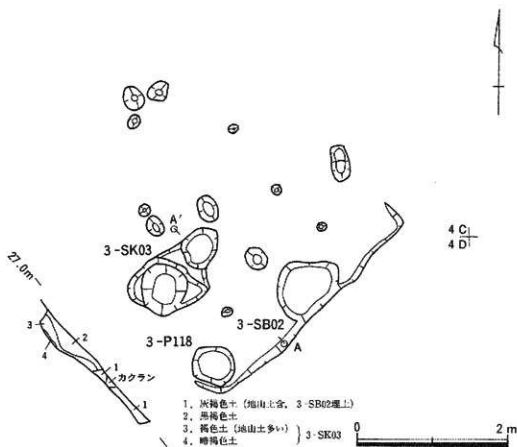
5 DGr. で検出した。3-SB02の埋土を切って掘られている。検出したプランは、長軸1.2m、短軸0.8mの不整な楕円形をなす。礫を多く含んだ黒褐色土を埋土とする。楕円形の両端がいくらか深くなっており、土器は西側の深い部分から集中して出土した。

遺物は、須恵器杯蓋、土師器甕、壺であり、各個体毎にまとめて出土した(823~828)。須恵器杯蓋は、口径が13.2cmをはかる。H61号窟を標式とする時期に比定できるだろうか。土師器の甕は、単純に外反し、丸く終る口縁をもつもので、よく被熱し器壁が赤変している。内面にも炭化物の付着が目立つ。台部も出土している。827は、形態の特徴から壺と分類しているが、内外面ともに被熱の痕跡が顕著であり、煮沸に用いられたことは明らかである。

4-SK11 (第93,96図・図版7,20)

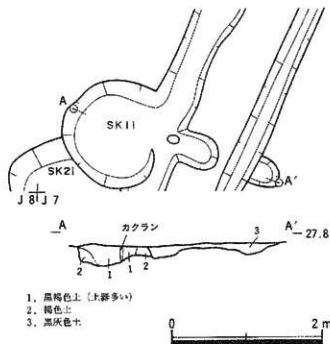
直径が1.2mほどの円形の土坑である。西側の壁は比較的まっすぐ立ち上がっている。底は、西側が深く、東側は浅くなる。こちらは、近現代の溝4-SD01に切られている。埋土は、黒褐色土の上層と褐色土の下層からなり、上層を中心に、須恵器、土師器が多く出土した(829~842)。

出土遺物では、須恵器は杯蓋1点と杯身が7点図化できた。H61号窟からH44号窟の遺物に類似している。一方、土師器は、宇田型甕と呼ばれる甕2点(829,830)とその脚部が出土した。この宇田型甕は、口縁部がほぼ直立し、端部に幅の広い面をなす、宇田型甕の中でも後出のものであり、共存した須恵器と時期の違いはない。



第92図 3-SB02・SK03

平底の甕の底部(840)は小片であり、他の須恵器、土師器と共存するものかどうかわからない。弥生土器壺(841, 842)は混入である。

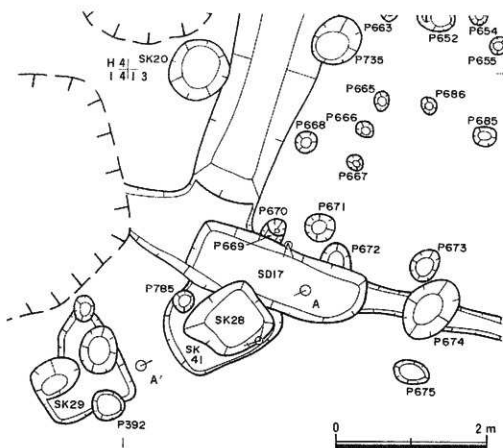
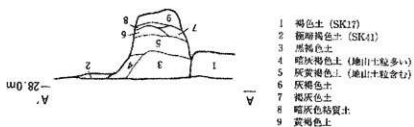


第93図 4-SK11

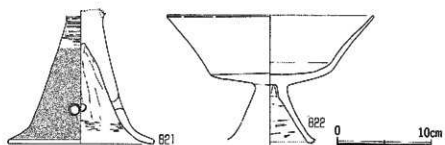
4-SK28 (第94,95図)

I 3 Gr. に所在する。SK41を切って造られ、SD17に切られている。一辺が1mほどの方形で、深さは検出面から0.8mほどである。埋土は、全体に地山土粒を多く含む。埋土中からは、竪に掲げた弥生時代後期前半山中式の特徴をもつ高杯脚部(821、図化部はほぼ全存)と古墳時代中期の高杯(822、こちらも図化

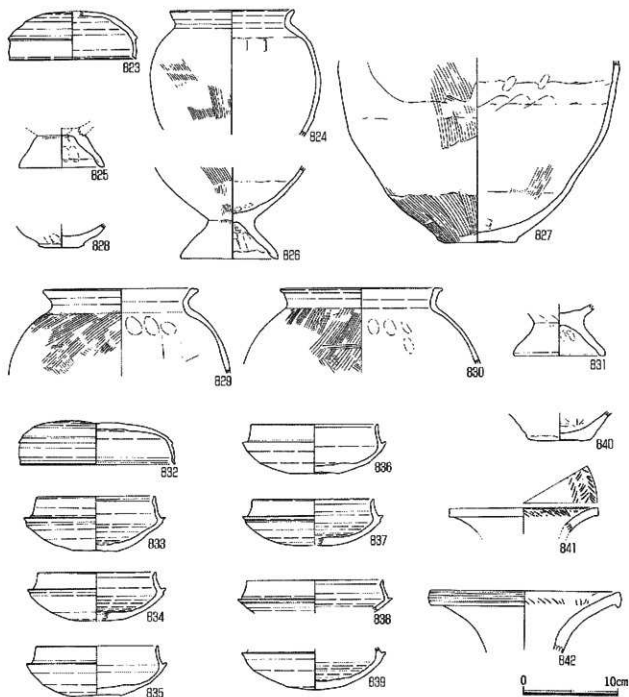
部はほぼ全存)が出土している。遺構の時期としては、古墳時代中期と考えることになる。この遺構では、遺存度が比較的高い弥生土器が出土しているが、時期は古墳時代である。時期比定の難しさを示す遺構である。



第94図 4-SK28



第95図 4-SK28出土遺物



第96図 3—SK03 (823~828)・4—SK11 (829~842) 出土遺物

中世

中世の遺構は、大規模な溝をはじめとして、竪穴状の遺構、柱穴列などが見つかった。

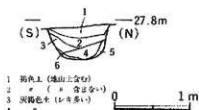
4—SD11 (第97, 106図・図版7)

H5およびI4・5Gr.に位置する。長軸約5.2mで取束するが、溝として扱った。長軸の方位はN-14°-Eである。幅は約1m、断面形態は半円形に近く、検出面から約40cmの深さがある。

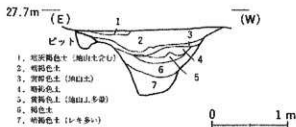
埋土は、上層の茶褐色土層と下層の灰褐色土層とに大きく分けることができる。

埋土中から土師器皿が1個体(843)出土しているのみである。

遺構・遺物の帰属時期は特定できないが、出土している土師器皿は他の遺構と同時期(15世紀代)に存在しても違和感の無い器形である。



第97図 4—SD11断面図



第98図 4—SD22断面図

4—SD17 (第94図)

I 3Gr.に所在する。幅1.2m、長さ2.4m程で溝とするよりは長方形の土坑といった形である。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは20cmほどである。図化できた遺物はないが、天日茶碗の破片が出土しており、また方向的にもすぐ北の4—SD22に直交しているように見える事から、中世の遺構ではないかと考える。

4—SD22,3—SD08 (第98,106図・図版7,20)

およそN-14°-Eの方位に伸びる。幅は最小約1.2m〜最大約1.9m、深さは検出面から約75cmを測る。断面は上に向かって大きく開く逆台形で、底面は狭い。溝の北端は、ちょうど小さな崖面のところで途切れている。本来更に北に続くものなのか、この崖部分で開口したまま終るものなのかはわからない。

埋土の堆積状況は、断面を観察した地点によって少しずつ違うが、基本的には最下層に暗褐色土があり、後は地山土の層、あるいは地山土を多く含む層と暗褐色又は黒褐色で地山土を含まない層が交互に堆積していた。中世の遺物は、主に褐色〜暗褐色の埋土下層から出土した。常滑甕の底部(859)や古瀬戸天日茶碗(846)などは遺構底面で検出されている。

瀬戸美濃窯産陶器は古瀬戸後IV期(注3)に該当する。常滑窯産陶器は図示したもの他、20点前後破片が出土しているが、口縁部はなかった。うち1点がSK37から出土した破片と接合している。

土師器皿が最も個体数が多いと思われるが、だいたいが小破片のため明確な数字はわからない。土師器皿にはロクロ成形のもの(853,854,856)と非ロクロ成形のもの(857,858)とあるが、ややロクロ成形のものが多いようだ。856は口縁の一部を焼成後欠損させてあり、その部分にタールが付着している。小破片にもスズやタールが付着したものが4点ほど出土している。

その他の土師器としては、内耳鍋が2点(860,861)と加工円盤(862)などがある。内耳鍋はいわゆる尻張型と呼ばれるもので、底部と胴部の境の稜線が明瞭である。特に860は比較的良好な残存状況であり、胴部の直線的な形態や沈線など15世紀のこの型の内耳鍋の特徴をよく観察できる。どちらも外面は全体にスズがこびり付いている。加工円盤は、土師器皿の底部を転用、穿孔したもので、両面に擦って平坦にした痕が残る。使用目的は不明だが、上面(皿の見込部分)の穴周辺にタールが付着している。

その他に、中国磁器を2破片確認している。

SD22の層属時期は15世紀代に位置づけられ、遺物は15世紀後半のものが中心となっている。

4—SD24 (第99,106,107図・図版7,20)

4次調査区の東端、G 0Gr. からK 1Gr. にかけて検出されたN-16°-Eの南北方向に走る溝である。

南は調査区の中で終わっているが、北は調査区外に続く。検出したのは直線的に伸びる部分だけであり、溝のプランについては不明である。溝の東側の肩は調査区外であったため、調査後二箇所にて幅を確認した。確認できた範囲での幅は、最小約3.3m・最大約4.5mである。断面形態は逆台形で、深さは検出面から約1.6m程である。

遺構埋土は大きく分けて上から、上位層の褐色土、中位層の茶褐色～褐色土、下位層の暗褐色～明橙褐色土、最下層の暗灰褐色土と捉ええられる。中位に、地山土のみからなる層も見られる。ほぼ全ての層位から中世の遺物が出土しており、とりわけ中位層以下に多く含まれていた。865の古瀬戸天目茶碗や土師器内耳鏡などは最下層から出土している。瀬戸美濃窯産陶器は古瀬戸後IV期に属する資料である。

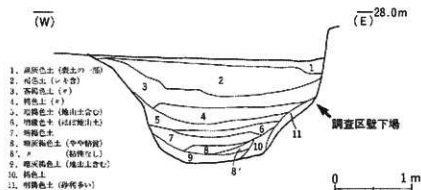
中国磁器も1破片確認している(876)。青磁でくすんだ若草色を呈し、粗い貫入がはいる。鈔銀皿もしくは盤の口縁部。体部内面に輻広の蓮弁文が展開すると思われる。

常滑窯産陶器は、SD22とは対照的に口縁部の出土が目立つ。調部片も50点程あるが、接合できるものは少なく、具体的な個体数は不明である。877,878は広口壺、どちらも10型式(注4)に属するが、878の方がやや新しいかと思われる。

土師器は小破片が多い。皿と煮沸具がある。土師器皿の個体数は少ない。

出土遺物の時期は多くが15世紀後半に相当する。常滑窯産陶器のみ注目すると、遺構埋土の下層では15世紀後半、中位層から16世紀前半に比定される資料が出土しており、時間差があると見ることができる。しかし一方で、瀬戸美濃窯産陶器では中位層から出土したもので16世紀以降の可能性がある資料を確認できておらず、土師器も概ね15世紀代に比定される資料である(注5)。このため、遺物の年代観に若干のズレが生じている。したがってSD24の帰属時期については、特定するには課題が残るが、15世紀代に位置づけられるとし、15世紀後半から埋没が始まったと考えておきたい。

また、この溝からは、紙風の都合上多くは図を掲載できなかったが、溝の時期とは関わらない弥生時代や古墳時代の土器が豊富に出土している。中世までは良好な包含層が遺存していた事を示している。盾を模した土製品(864)が出土しているが、根拠はないものの、焼成や胎土の特徴、他の遺構から弥生時代の土製模造品の出土が多い事を考えると、おそらく弥生時代後期のものであろう。



第99図 4-SD24断面図

土坑

4-SK05

F 6・7 Gr. に所在する。直径2.5m程の不整な円形を呈する。古瀬戸と思われる瀬戸美濃窯産陶器の小破片が2点出土しているが、器種・時期ともに不明。そのため、遺構の時期も中世であろう、と推定されるにとどまる。

4-SK14 (図版7)

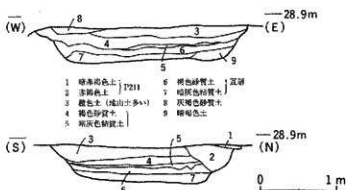
I 6 Gr. に所在する。楕円形に近い不整形な平面形態を持つ。長軸は約3.2mをはかる。幅は最大で約1.3m程である。検出面からの掘削深は浅く、底面に半大の石が敷き詰められている状況であった。後世の削平をうけて、本来の遺構の上部が失われた可能性がある。

遺物としては、常滑窯産陶器の小破片1点、古瀬戸と思われる瀬戸美濃窯産陶器の小破片1点、土師器皿の小破片が2点出土している。何れも敷石の間からの出土である。常滑と古瀬戸は器種不明。遺物の帰属時期は不明であり、遺構の時期も中世であろうと推定されるにとどまる。

4-SK26 (第100,107図・図版7,20)

M 4・5 Gr. で検出した。長軸の方位はN-70°-Wで、長軸約2.9m×短軸約2.6mのほぼ方形の平面形態を持つ。深さは検出面より約45cmを測る。

埋土は上部の橙褐色土層と、褐色砂質土と暗灰色粘質土の互層部分に分けられる。遺物は最下層の暗灰色粘質土から多く出土している。



第100図 4-SK26断面図

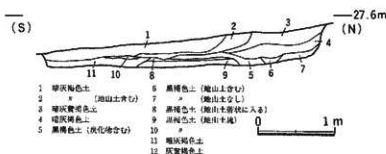
銅製燗台と瀬戸美濃窯産陶器の天目茶碗、土師器皿がある。

銅製燗台(888)は、皿の口縁部が一部欠けていたものの、ほぼ完形で出土した。出土時の状態で重量は約90g。心棒はやや歪だが断面円形、後から溶接したものらしい。

瀬戸美濃窯産陶器の天目茶碗は高台部分が欠損しているが、高台臺に錆軸の化粧掛けが僅かに残っている。古瀬戸後IV期に属する資料と思われる。

4-SK37 (第101,107図・図版8,20)

H 0・1およびG 1 Gr. に位置する。長軸約3.8m×短軸約2m、南東角が内面に引っ込むような少々変形した長方形の平面プランを持つ土坑である。長軸の方位はN-74°-Wを向く。深さは検出面より約40cmを測る。



第101図 4-SK37断面図

埋土は、大きく上層の灰褐色土と下層の黒褐色土にわけられるが、地山ブロック土の混じり方によって更に細分した。

全体として見ると、地山土の混入は多い。

中世の遺物はどちらの層からも出土している（895～903）。

遺物は、土師器皿、古瀬戸と思われる瀬戸美濃窯産陶器や常滑窯産陶器などが出土している。

常滑窯産陶器は比較的大きな破片で20点近く出土したが、図示した896、897以外は胴部破片であり、器形復元に至るものはなかった。胴部破片の一つが、SD22から出土した胴部破片1点と接合している。

土師器皿は他の遺構に比べ器形復元可能な資料が多かった。しかし、非ロクロ成形の小形皿は見当たらない。898～900をみると、丸みを帯びて大きく張り出しながら立ち上がり、体部中央で屈曲したのち口縁部が外反する器形が主体のようである。

遺構・遺物の時期は、常滑窯の口縁部や土師器皿の形態などから、15世紀代に属するといえよう。

4-SK45（第102,107図・図版7）

L2およびM2・3Gr.にかけて位置する。長軸約2m×短軸約1.3mの長方形の平面形態をとる。長軸の方位はN-26°-Eを示す。検出面からの深さは約60cmを測る。

埋土は比較的単純な堆積状況であった。遺物はそのうち下層の暗褐色土～暗橙褐色土から出土している。

遺物は、土師器皿の小破片が出土遺物の殆どを占めるが、数量は多くない。904はロクロ成形、丸みをもって立ち上がる器形を成すと見られる。905は非ロクロ成形。小破片の中にも非ロクロ成形と思われるものがあるが、ロクロを使用して製作された皿の破片が多い。

この他に、焼成が甘い常滑窯産陶器片が1点出土している。

遺構・遺物の時期を特定する判断材料が少ないが、SK26やSK37と同時期ではないかと考える。

4-SK50（第99,107図、図版7）

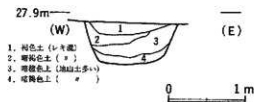
F5およびG5Gr.に所在する。南側については攪乱を受けており、不明である。長軸の方位はN-72°-Wを示す。SK26・37と同方向である。

常滑窯産陶器の胴部破片が2点と土師

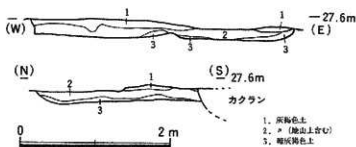
器皿1個体（906）が出土している。906

はロクロ成形、丸みのある立ち上がり部分に、外反する口縁をもつ。SK37出土の資料と比べて扁平である。

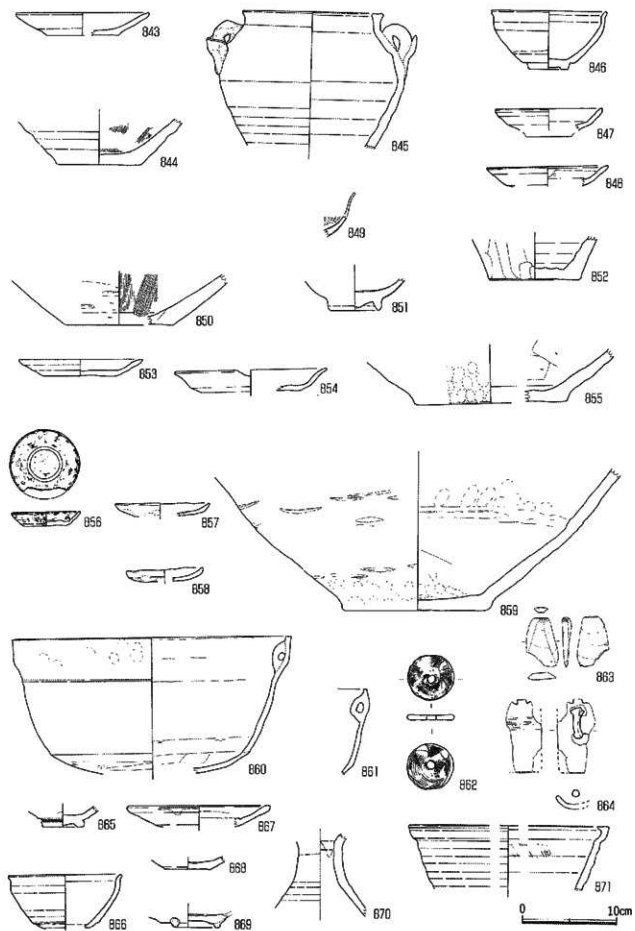
遺構・遺物の帰属時期を特定する材料が少ないが、遺物から見るとSK37などとほぼ同時期かやや新しい時期に位置すると考える。



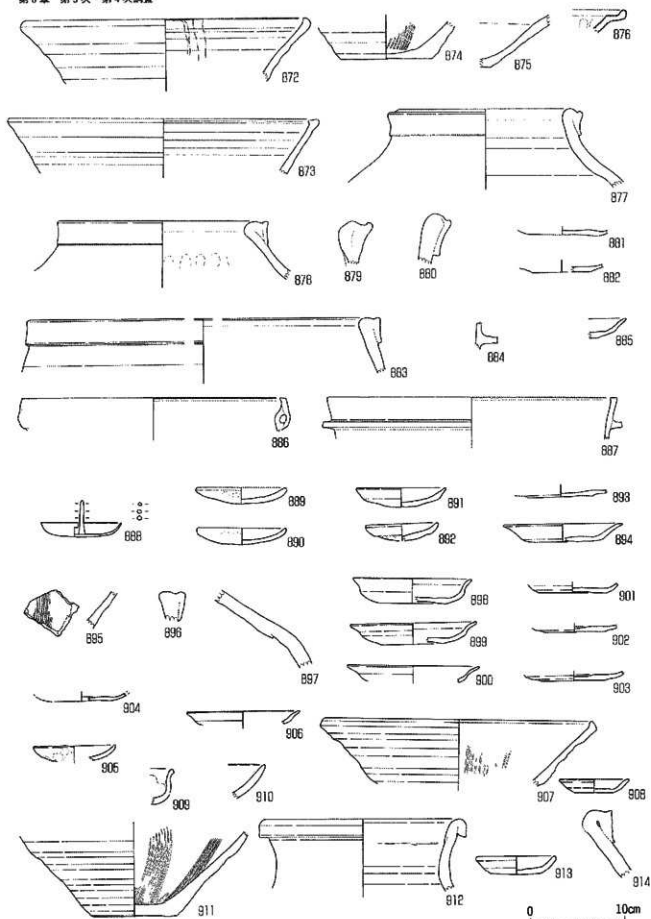
第102図 4-SK45断面図



第103図 4-SK50断面図



第106図 中世の遺物(1) (843 : 4-SD11, 844~862 : 4-SD22, 863~871 : 4-SD24)



第107図 中世の遺物(2) 872~887 : 4-SD24, 888~894 : 4-SK26, 895~903 : 4-SK37
904~905 : 4-SK45, 906 : 4-SK50, 907・908 : 4-P790, 909~911 : 4-P854
912 : 4-SX03, 913・914 : 4-SX05

の時点では、掘立柱建物であろうと考えた。しかし、4次調査の結果、それぞれの柱穴列の柱穴数にも違いがあることが明かとなった。そのため、掘立柱建物の可能性も否定できないが、この柱穴配置をもつ遺物が報告者には想定できないため、二列の柱穴列として報告する。柱穴列2の北端のピットから15世紀頃の天目茶碗が出土すること、他の遺構と方向が一致する事から、中世のものだと判断する。

その他の遺構

4-SX05

L7 Gr. に所在する。平面形態は長軸約3.7m×短軸約2.3mの長方形である。長軸の方位はN-29°-Eを示す。

遺物には、山茶碗の小皿(913)、常滑窯産陶器(914)、土師器皿があり、時期は、913は13世紀前半(注6)、その他は15世紀代に属すると思われる。遺構の帰属時期は、15世紀代と考える。(第107図)

時期不明の竪穴住居

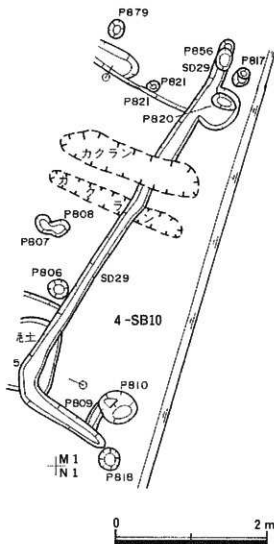
出土遺物が少なく、弥生時代とも古墳時代ともわからない竪穴住居について示す。

3-SB02 (第92図)

D4 Gr. で検出した。3-SB01に隣接している。この住居も、住居の南側の壁を検出したにすぎない。この住居については、当初古墳時代の土坑3-SK03との区別ができなかったため、3-SB01とSK03の切り合いをSB01とSB02の切り合いと誤認し、SB01→SB02と判断した。しかし、のちにSB02とSK03が別の遺構と判明したため、住居どうしの切り合いは不明となってしまった。方向は、N-45°-Eを示す。埋土は、直径1~2cmの地山土の粒を含む灰褐色土であった。出土遺物は、埋土中から弥生土器、或いは土師器の小片が出土したのみで、特定は困難である。ただし、古墳時代後期の須恵器、土師器を出土する3-SK03によって切られているから、それ以前であることはわかる。

4-SB10 (第108図)

M1 Gr. で検出したL字状の溝は、住居の周溝の可能性が高いため住居の番号を与えた。方向は、N-30°-Eを示す。遺存している深さは3cmから5cm程度である。4-SB04と切り合いを持つが、



第108図 4-SB10

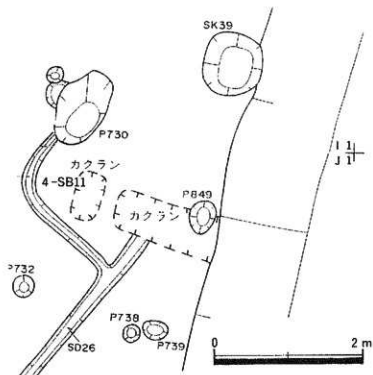
前後関係は不明。検出部の北端でP856と重なっていたが、こちらも切り合いは不明である。4-SK46を切る。この溝からの出土遺物は、弥生土器或いは土師器の小片ばかりで、時期の特定は困難であった。

4-SB11 (第109図)

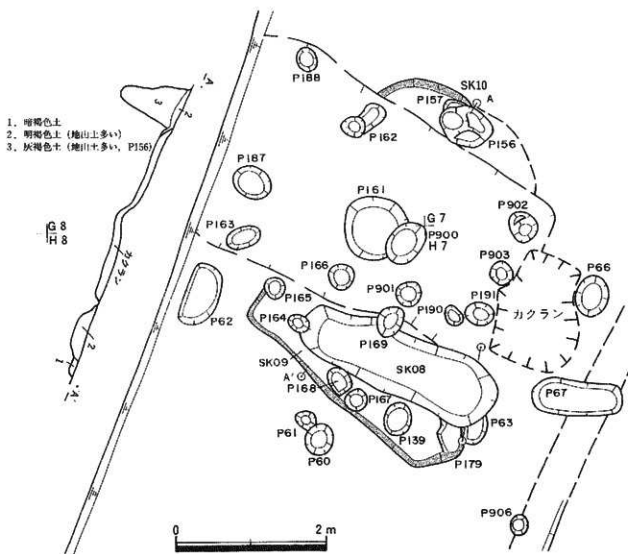
I, J 1 Gr. で検出したL字状の溝を住居の周溝と認めた。

4-SB06 (SD26) と切り合いを持つが、前後関係は不明である。

一辺の方向は、 $N-50^{\circ}-W$ である。深さは3cm程で、周溝の下位がごく僅かに残っているに過ぎない。



第109図 4-SB11



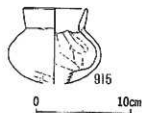
第110図 4-SX12

不明遺構

性格不明の遺構について述べる。この中には、調査時には、竪穴住居の一部、或いはその周溝の一部ではないかと考えたが、竪穴住居であると確信するにいたらなかった遺構も含んでいる。

4-SX12 (第110図, 図版8)

中央部が攪乱されているため関係はよくわからなかったが、4-SK09, SK10をつなぐと、方形の竪穴状に復元できることから、竪穴住居の可能性を考えた。しかし、炉や貯蔵穴など竪穴住居と確定できる施設は見つからなかったし、ピットの配列からも竪穴住居と積極的に考え得る材料は得られなかった。しかし、それでも竪穴住居の可能性は否定できないので、取り敢えず不明遺構として挙げる。攪乱の南側を SK09, 北側を SK10として調査したが、

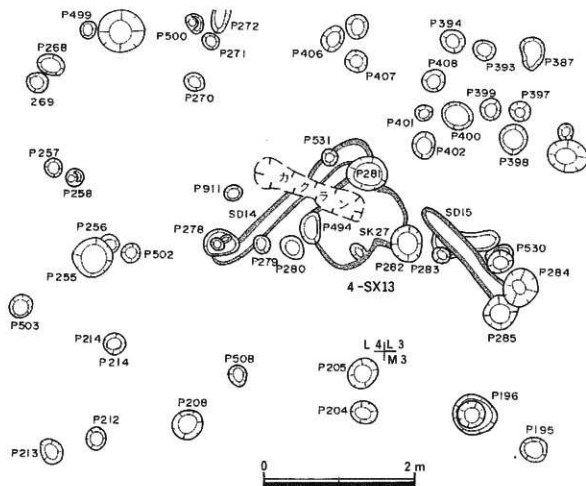


第111図 4-P66出土遺物

埋土は何れも地山土の塊を多く含む点で共通するが、色調はやや異なっていた。出土遺物は小片のため、時期は不明である。また、この両遺構の底および、周辺で検出したピットでは、4-P66から古墳時代中期の土師器小型壺が出土し(第111図)、僅かに時代の手掛かりとなるが、それ以外のピットからは時期を特定できるような出土遺物はなかった。

4-SX13 (第112図)

4-SX14及び SD15は、何れも竪穴住居の周溝状の細い溝で、両者がほぼ直交するような位置関係



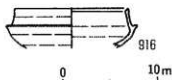
第112図 4-SX13

にあることから、竪穴住居の一部ではないかと考えた。また、両溝に挟まれた4-SK27も深い土坑ではなく、竪穴住居埋土の残りの可能性があると考えた。両溝の底の水準値が27.9m程度であり、溝の延長上がほぼその高さまで削平されていることから、両溝が僅かしか残っていないことも説明できる。しかし、やはり竪穴住居と確定できるだけの施設や柱穴の配列はわからず、ここでは不明遺構として示す。なお、溝の方向はSD14が、N-50°-E、SD15がN-45°-Wである。

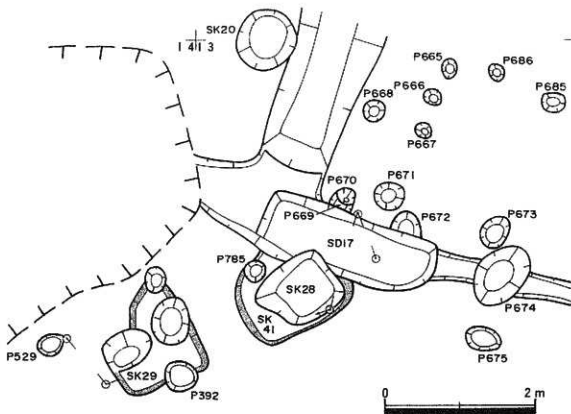
溝およびピットからは、時期が特定できるような出土遺物はなく、時期は不明である。4-SK27からは須恵器杯身が出土した(第113図)。小片ではあるが、H61号窯の時期であろうか。

4-SK29及びSK41(第114図)

この両遺構の南側の辺はまっすぐで、同一直線上にあるように見える。竪穴住居のごく一部分が遺存している可能性も考えたが、柱穴らしいピットもなく確認を得る事ができなかった。また、SK41を切るように、古墳時代の土坑SK28が築かれているが、SK28はSK41の深い部分の可能性もある。



第113図 4-SK27出土遺物



第114図 4-SK29及びSK41

ピット

ピットについては、数Gr. をまとめた上で、その中で時代を分けて報告する。特に、遺物の出土量が多く、住居の貯蔵穴と考えたものが中心である。報告するピットと周辺の遺構の関わりが検討できるよう、図はできるだけ広い範囲を掲載した。

なお、住居の貯蔵穴と考えたのは、二種類ある。3-SB01, 4-SB07のような、径のわりに深い場合(この場合位置は住居の壁のどれか一边に近接し、その辺の中央にあたる)と、4-SB04の貯蔵穴 SK48のように、径が大きく、その割には浅いものである。後者の場合は、住居のコーナーにある可能性が高い。

F 3 及び G 3 Gr. (第115図)

弥生時代

4-P553

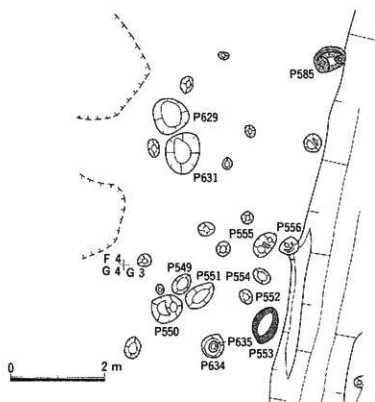
長径0.8m、短径0.5mの楕円形を呈する。深さは、0.5m程である。ピットの埋土下位には、炭化物が集中している部分があった。遺物は、埋土の中下位から多量に出土した(第123図・図版20)。図化できたものには、パレス壺、直口壺、高杯の脚部などがある。その他に、大型の壺の胴部片もまとめて出土している。遺物の時期は、弥生時代後期前半の山中式であり、ピットの時期としてもその頃を考えて良いだろう。周辺のピットでは、P550から山中式の可能性が高い蓋(929)が出土しているが、遺存度がそれほど高くなく、この遺物

がピットの時期を示しているとは言い難い。P553の規模や遺物の出土状況からは住居の貯蔵穴の可能性もあるが、住居の存在を確定することはできなかった。

古墳時代

4-P585

上部を僅かに4-SD22に切られているが、長径0.7m、短径0.5mの楕円形を呈し、深さは0.4m程である。埋土中から、古墳時代中ごろの土師器高杯2個体分が出土している。何れも4-SB03出土の高杯に近く、名古屋市の土師器編年の4期(古)くらいである(第123図)。遺存度からみて、ピットの時期もその頃と考えてよいだろう。これについても、竪穴住居に伴うものではないかと考えたが、周りのピットからは竪穴住居を復元することはできなかった。



第115図 F 3 及び G 3 Gr.

H2,3及びI2,3Gr. (第116図)

弥生時代

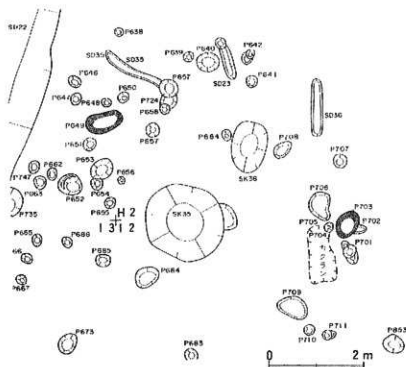
4-P649

長径0.8m, 短径0.4mの楕円形を呈する。深さは0.5mを計る。埋土中からは、甕の脚, 高杯杯部及び脚部が出土している。高杯の杯部(924)は, 杯底部が内湾, 体部が外反する。弥生時代後期前半の山中式の中でも終りのほうに現れる形であろう。(第123図)周囲には小さなピットが多くあるが, 関係はわからない。竪穴住居の貯蔵穴の可能性もある。

4-P703

長径0.6m, 短径0.4mの楕円形を呈する。深さは, 0.5mを計る。埋土

中から, 弥生時代後期前半山中式と思われるブランデーグラス形の高杯と甕の脚部が出土している(第123図)。このピットはP702と切り合うもの, 周囲にはあまり遺構がなく, ピットの性格も不明である。



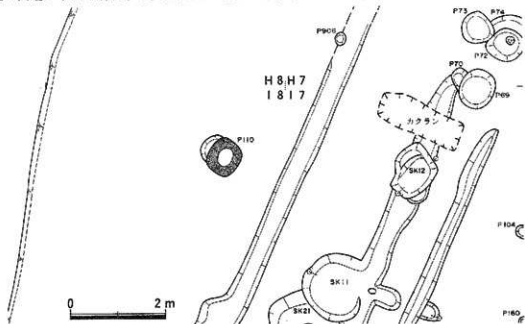
第116図 H2, 3及びI2, 3Gr.

I8Gr. (第117図)

弥生時代

4-P110

調査区の西端に単独で所在する。直径0.7mをはかる。深さは0.3m。埋土は地山ブロック土を含む暗褐色



第117図 I8Gr.

色土である。このビットからは、弥生時代後期後半能田旭期の高杯の杯部が出土している。(第123図930) ビットの時期は決められないが、この土器は比較的大きな破片のため、ビットの時期を示している可能性もある。周りにほとんど遺構がなく、このビットのみが単独で見つまっている。周りが削られているためかもしれないが、このビットの性格は不明である。

J4,5Gr. (第118図)

弥生時代

4-P262

直径0.4mほどのほぼ円形のビットである。内部から、弥生時代後期前半の直口壺ほぼ一帯体出土した(931)。土器は、ビット内部で斜めになっていた。このビットの周辺は、比較的分布が疎であり、周辺のビットとの関係はわからなかった。

4-P372

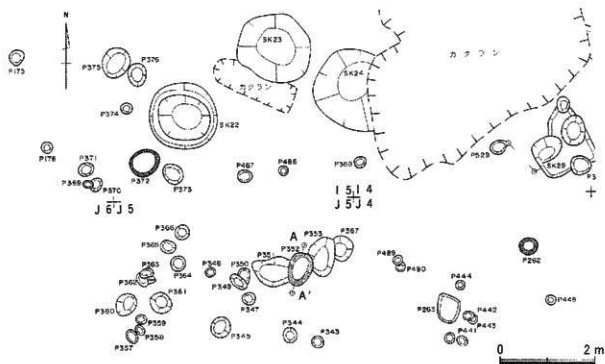
直径0.6mほどの円形のビットである。埋土の上位から台付鉢(932)が出土した。鉢は受け口になるもので、被熱によって変色している。あまり類例のない器形だが、鉢の特徴などから弥生時代後期前半に属するものだろう。

このビットについても、竪穴住居の貯蔵穴の可能性を考えたが、周辺のビットとの関わりはわからない。

古墳時代

4-P352 (第119,123図)

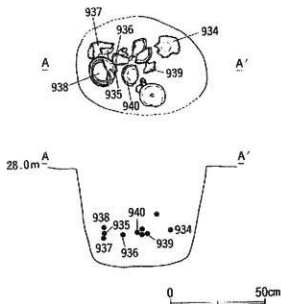
P351,353を切って掘られたビットである。長径0.7m, 短径0.5mの楕円形を呈し、深さは0.5mほどである。埋土中から、須恵器有蓋高杯、蓋杯、土師器甕片が出土した。須恵器は、比較的遺存度の高い個体が、重なるように出土している(935~940)。須恵器有蓋高杯は、脚部が全部剥離しており、埋土中からは



第118図 J4, 5Gr.

脚部の破片もほとんど出土していない。脚のない杯身として使用されていたことも想定できるだろう。H44号窟を基準とする時期であろう。土師器の甕(933)は、丸い頸部から強く外反する口縁をもつ。口縁の端部はまるく取める。胴部の破片も多く、須恵器と共存すると考えて良いだろう。

このピットについては、形状と須恵器杯類が多く出土するということから、竪穴住居内に存在した貯蔵穴ではないかと考えたが、周囲に位置する他のピットから竪穴住居を復元することはできなかった。



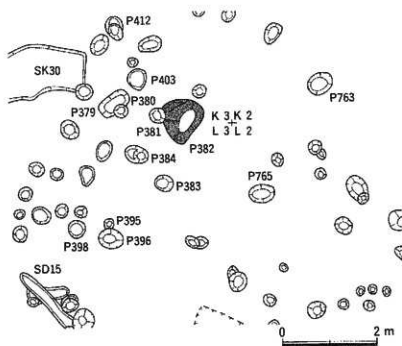
第119図 4-P352遺物出土状態

K 2, 3及びL 2, 3Gr. (第120図)

弥生時代

4-P382 (第123図)

直径0.8mの円形で、深さは0.7mをはかる。埋土中から、弥生時代後期前半の山中式の甕、高杯などが出土した(941~946)。遺物には遺存度が高いものがあり、ピットの時期も山中式期としてよいだろう。ピットの形状と遺物の出土状態から、竪穴住居にともなう貯蔵穴の可能性を考えたが、周辺のピット群との関わりはわからなかった。周辺のピットでは、P412から弥生時代後期後半と思われるような土器片が出土しているが、これをP412の年代としてよいかどうかとも疑問である。



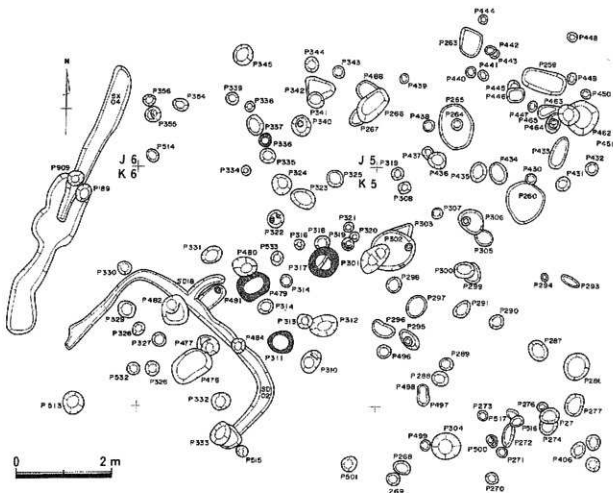
第120図 K 2, 3及びL 2, 3 Gr. (すべて4次)

K 4, 5Gr. (第121図)

弥生時代

4-P311 (第124図)

4-SB07の周溝に接するように位置する。深さが60cmを超える、深いピットである。弥生時代後期前半の甕が出土し、ピットの時期と判断する(947, 948)。すぐ北のP317は、形状から住居の貯蔵穴の可能性が高く、台付鉢、太形蛤刃石斧の破損品が出土している(949~951・図版20)。



第121図 K 4, 5 Gr.

4-P336 (第124図)

I 5 Gr.にある。直径30cm程の円形を早する。深さは40cm程である。暗灰褐色を呈する埋土中から、弥生時代後期後半、能田旭期に属する高杯(952)が出土している。周囲のピットとの関わりが不明なため、性格は不明であるが、環濠内部の集落域で、環濠埋没後の後期後半の遺物が出土している点で注目される。

4-P479 (図版20)

K 5 Gr.に所在する。長径70cm, 短径50cmほどの楕円形で、深さは50cm程である。埋土中からは、ミニチュア土器がまとまって出土している。このミニチュア土器は、何群かに別れて出土しており、中でも、(957, 961, 964)は炭化物と共にまとまって出土した(第124図)。

ミニチュア土器は、端部をヨコナデによって整えたり、器壁を薄くしあげるなど、比較的作りがよいもの(959, 966)と、手捏ねで粗雑な作りのものがある。また、高杯のようにモデルとなった土器が明瞭なものと、同じ形態の実用品がわからないものがある。甕(953)については、小さいものではあるが、実用にたえると思われ、ミニチュア品とは言にくい。時期であるが、何群かに別れて出土しており、全てが同時期とは言えない。しかし、遺構自体が大きなものではないため、同時期とみなしてよいだろう。その時期は、ミニチュアの高杯の形態から考えると、弥生時代後期前半の山中式と考える。ピット出土の実用品の年代もそれと矛盾しない。

このピットでは、炭化物を伴って、まとまってミニチュア土器が出土しているが、出土の仕方は埋土中

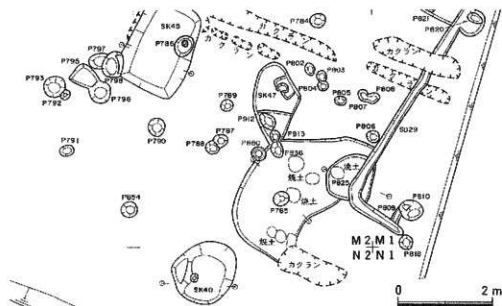
から雑然とという状態であり、ここでミニチュア土器が使われたという出土状態ではない。他所で使われたミニチュア土器をまとめて廃棄した遺構であろう。

M2 Gr. (第122図)

弥生時代

4-P880 (第124図)

4-SK46に接している。直径35cmの円形を呈し、深さは約25cmである。黄灰褐色を呈する埋土中から磨製石斧(967)が出土した。埋土上位からは弥生時代以降の遺物も出土し、時期は不明。



第122図 M2 Gr.

その他の遺物 (第125図)

遺構には伴わなかったが、銅鐔形土製品(968)が西側斜面に堆積した包含層から出土している。4-SK12出土品と比べると、小さく、写実的ではない。また、5 DGr. 検出中に石斧(969)を採集した。

(注1) 平川 誠 『西柱見遺跡』鳥取市教育委員会 1981

(注2) 伊藤 実 『弥生のかたち—土器が語る弥生時代の広島—』広島県立歴史民俗資料館 1995

(注3) 藤澤良祐 『瀬戸古窯址群Ⅱ—瀬戸後期様式の編年—』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』1991

(注4) 中野晴久 『赤羽・中野「生産地」における編年について』『全国シンポジウム「中世常滑焼」おいて』資料集 1994

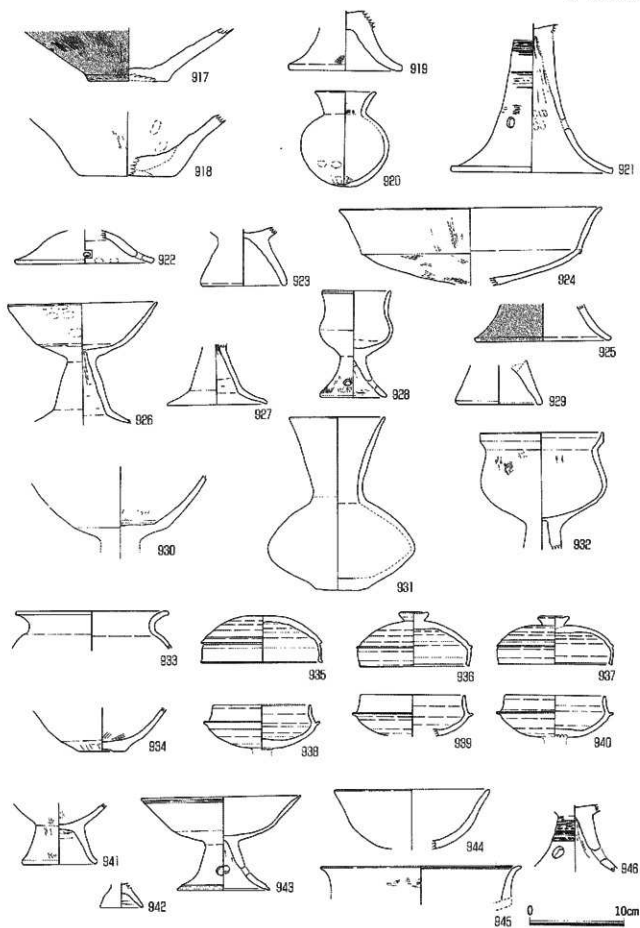
(注5) 上藤啓司・斎藤具の年代観については、以下の各氏の編年を参考とした。

佐藤公保 『中世土器研究ノート(2)』年報 昭和61年度 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1987

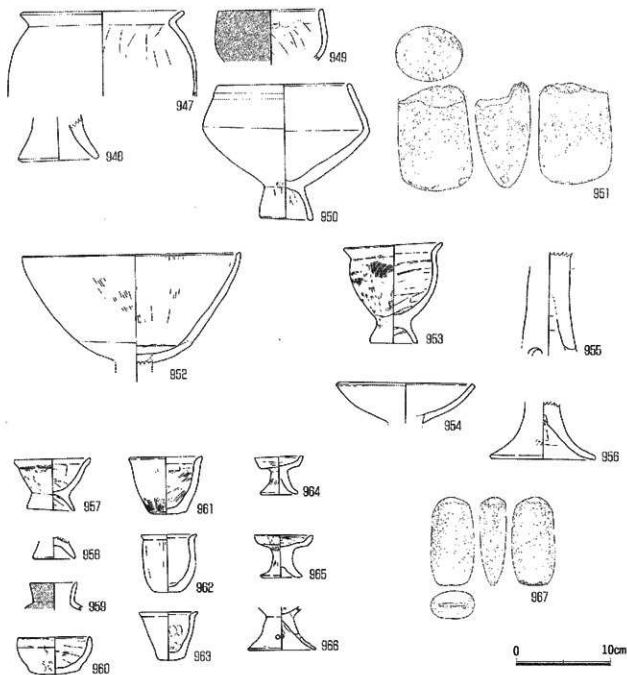
北村和宏 『尾張平野における鎌倉・室町時代の茶湯具の編年』年報 平成7年度 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1996

尾野善裕 『中世食器の地域性4—東海・濃飛—』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 1997

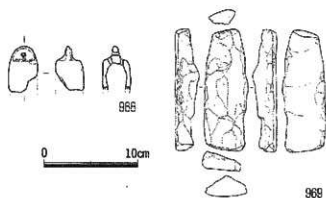
(注6) 藤澤良祐 『瀬戸古窯址群Ⅰ』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』1982



第123図 3・4次ピット出土遺物(1) (917~921: 4-P553, 922: 4-P550, 923~925: 4-P649, 926・927: 4-P585
928・929: 4-P703, 930: 4-P110, 931: 4-P262, 932: 4-P372, 933~940: 4-P352
941~946: 4-P382)



第124図 3・4次ビット出土遺物(2) (947, 948: 4-P311, 949~951: 4-P317, 952: 4-P336, 953~956: 4-P479, 957: 4-P880)



第125図 その他の遺物

第7章 第5次調査

I 調査の概要

1 調査の経過

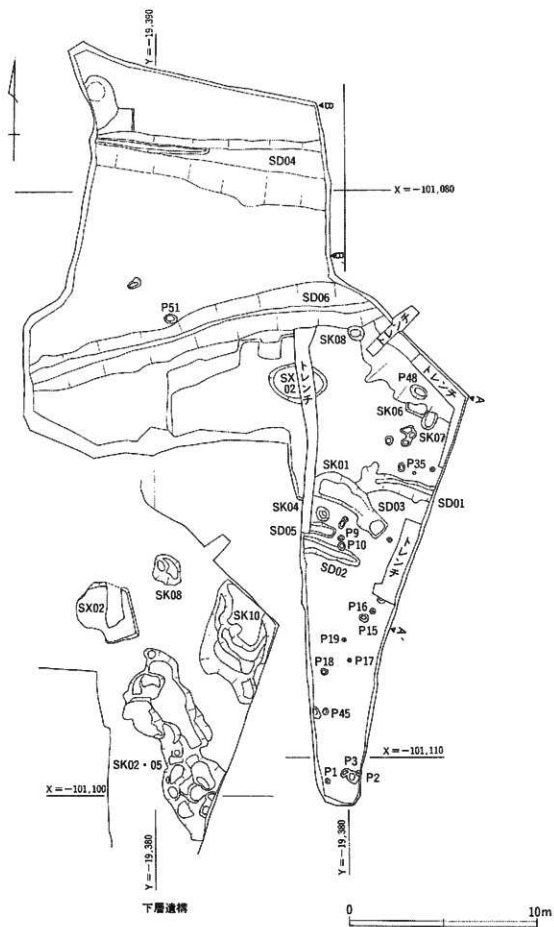
今回の調査は、北側の道路から丘陵上の公園に登る園路を築造するために行われた。調査面積は、約400㎡である。調査地は、神社境内の西側及び西北側に位置する。千句塚公園整備計画によれば、当地は展望台及び雑木林の予定であったが、変更して園路築造となった。調査地は、南端は平坦地であるが、次第に北に向かって緩やかに下がる傾斜面である。北端は、垂直なコンクリート擁壁で道路と接する。

調査は、平成9年10月20日に始めた。表土除去後、北端から遺構検出を行い、順次南側へ遺構検出を行った。11月20日には、遺構平面図作成のための空中写真撮影を行った。環濠 SD06は、撮影までに完掘できなかったため、引き続き掘削を進めた。また濠は、調査区東端より西方にかけて1区～5区に任意に区分して掘削していたが、濠底の検出が進むに当たり、1区及び2区は傾斜地形に堆積した包含層であることが判明した。さらに調査区中央で検出した SD01, SD03, SK02, SK05等付近では、汚れた地山と思われていた土が、粘土探掘跡の埋土であることが判明した。これらの遺構については、完掘後に平面図を作成した。調査は、12月26日に終了した。

なお、11月29日には、現地説明会を開催する予定であったが、雨のため中止した。

2 調査日誌抄

- 10月20日 発掘区設定。
- 10月21日 表土除去開始。第3次調査区との重複部で環濠 SD06検出。
- 10月23日 北端で溝 SD04検出。
- 10月28日 環濠 SD06掘削始める。
- 11月7日 調査区北側の草刈りを行う。テラス状の地形を確認する。
- 11月14日 濠の底と思っていた赤土が下位埋土でありさらに掘削できることが判明する。
調査区東端に試掘坑設定、下層土坑を確認。
- 11月15日 濠内貝層中より獣骨出土。
- 11月19日 高所作業車を使用し、全景写真撮影。
- 11月20日 空中写真撮影。
- 11月25日 下層土坑 SK02・05・10掘削。
- 12月10日 土坑は地山のシルト質の高い部分を掘削した粘土探掘坑と思われる。第3次調査で検出した SX02も同様の土坑であることが分り、再掘削する。
- 12月18日 (株)パレオ・ラボによる粘土探掘坑の粘土採取。
- 12月19日 調査区北側及び神社境内北半部の地形測量。
- 12月26日 調査終了。



第126図 遺構平面図 (S = 1/200)

II 遺構と遺物

調査で検出した遺構は、濠 SD06のほか小規模な溝、土坑、粘土探掘坑、丘陵縁端部の造成跡などである。遺物は、濠から多量の弥生土器が出土したほか、土師器、中世陶器、近世陶器、石器などが出土した。遺物は、コンテナケース約45箱分である。また、濠内に堆積した貝層中(第3次調査で検出した貝層の続き)からは獣骨が出土した。貝層は、今回もブロックサンプリングを行った。

1 地形環境と基本層序

地形は、南から北に向かって下るため、調査区南端は、地表面で標高約27.4mを測る。表土は薄く、約15cmで地山に至る。地山は黄褐色砂礫混じり土で、降雨があると砂礫が露出する土壌である。遺構も希薄で小穴が認められたにすぎなかった。

中央部では、表土約10~20cm下で、灰褐色砂礫土を埋土とする溝 SD01等を検出した。この付近では、赤褐色土、橙褐色砂礫土といった地山土の再堆積土を埋土とする大規模な土坑 SK02・05、SK10を SD01の下位において検出した。

北部では、濠 SD06及び SD04を検出した。濠 SD06は、第3次調査で環濠 SD06と呼んだ遺構の続きの部分である。第3次調査地点は、濠の北側肩部の地山が低いため、土を盛って整地を行い、その整地土を掘り込んで濠を形成していたが、今回の地点では、明確な盛土は認められなかった。SD04は、傾斜地下の平直面で検出した。調査区北端は、表土が約30cmの堆積で橙黄色礫層の地山に至る。地表面で標高約22.8mを測る。ここから約5.5m北方、標高約19.5~20.6mに設定したトレンチは、表土約30cmで黄灰色土の地山に至る。調査区北部で検出した平直面は、調査区北方及び東北側の神社境内地にかけて5段認められる。SD04を検出したことで、緩やかな傾斜地形を人工的に造成した可能性が強まった。

2 縄文時代以前

この時期の明確な遺構は検出されなかったが、濠及び濠削で石器、石器剥片が出土した(第158図1・第158図12)。

1は、チャート製彫器である。赤褐色を呈する。先端部、基部を欠損する。重さ約4.0gを量る。旧石器時代と考えられる。濠上面出土。12は、流紋岩質溶結凝灰岩の石器剥片である。黄白色を呈する。重さ約24.8gを量る。縄文時代と思われる。調査区北東端 SK10上位包含層出土。

3 弥生時代後期から古墳時代前期

5-SD06 (第128~137図・図版10,21,22)

調査区北寄りで東西方向で検出した濠の一部である。第3次調査で検出した SD06に続く約18.7mを検出した。上幅約1.8m、深さ約1.6mを測る。断面形はV字形で、傾斜角度55°から60°で急斜面である。濠底の幅は、約20cmを測る。ただし、東端部は約40cmとやや広い。濠底のレベルは、西端から中央付近までは標高約23.8mで水平である。東端は標高23.4mでやや低い。

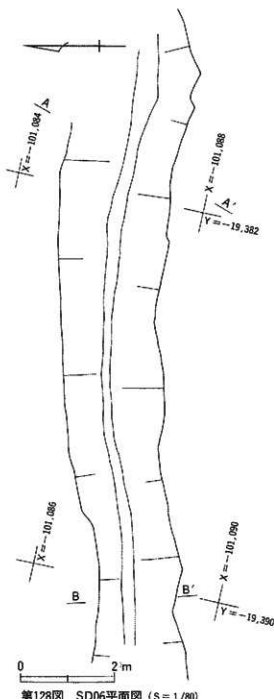
埋土は、大きく四層に分れる。断面A-A'地点では、上位層(第1~3層)は灰褐色砂質土、橙灰色砂質土で固く締った土。中位層(第5~8層)は暗褐色土、灰褐色土でややシルト質が強く、下位層(第9・

12・13層)は地山土そのものといってよい、赤褐色シルト～褐色シルトであった。また、最下層(第14・15層)は暗赤褐色シルト、橙褐色シルトである。上位層からは、土師器、須恵器、中世陶器がわずかに出土した。中位層、下位層からは弥生土器が出土した。最下層からはほとんど出土しなかった。特に標高24.0～24.2m付近からは集中して出土した(第130図)。

西端付近では、貝層を検出した。断面B-B'地点では中位層(第3・4層)にあたる。貝は、ヤマトシジミを主体にハマグリ、アカニシ、オノガイ、マガキなどである。また貝層中からイノシシ頭骨、シカの骨が出土した。頭骨は逆位で検出した。頭頂部は欠損していた。

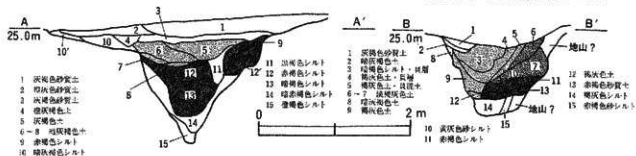
B-B'部分では、中位層は、北寄りの貝層を含む第3～5,9,12層と、南寄り(集落側)の第6,7,10層に分けられる。下位層(第11,13層)は地山シルトが塊となって堆積した状況であった。遺物が集中したのは中位層であるが、最下層からも弥生土器片は出土した。

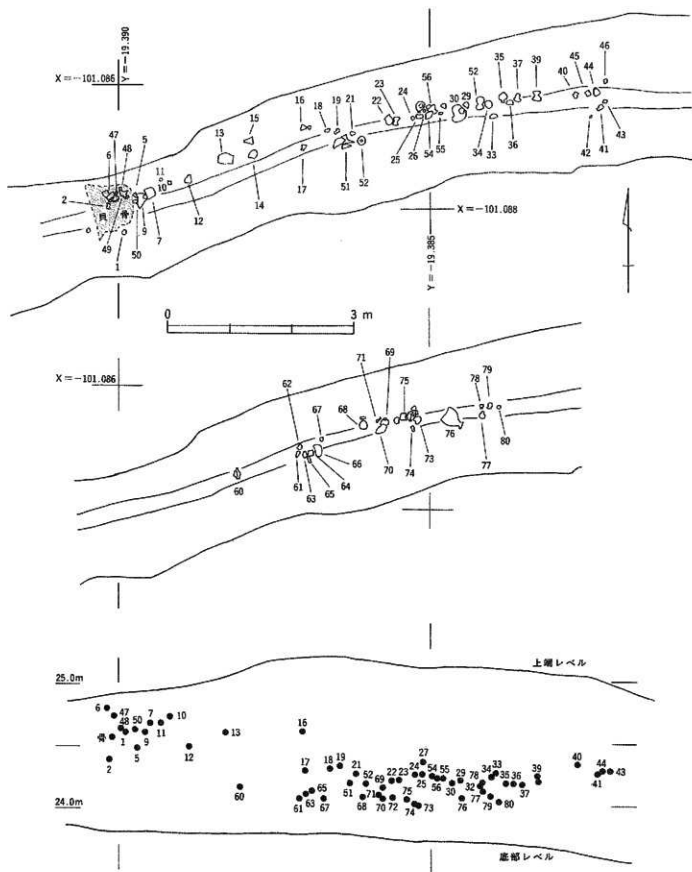
濠は、堆積土や遺物の出土状況から、掘削された後、多量の遺物と共に赤褐色シルト、褐色シルト(下位層)が堆積したが、西端付近では赤褐色シルトが早くに堆積し、また南側からの土砂の流入によって標高24.4～24.8mの南側は既に埋まっており、北寄りの窪地に有機物を含



第128図 SD06平面図 (S=1/80)

第129図 SD06断面図 (S=1/50)





第130図 SD06遺物出土状態図 (S=1/60・築造レベル1/30) (番号は第132~137図に記載)

む弥生土器を廃棄したと思われる。西端付近の方が西に向かって地形が下がっており、土砂が堆積しやすかったからと思われる。

主な出土遺物には、土師器（971・972）、石器（第159図24・第159図30）、弥生土器（973～1063）、貝類、獣骨、軽石（970）がある。

土師器の甕（971）は、外面黄褐色～黒褐色～灰色を呈する。高杯（972）は、やや浅い杯部に筒状の脚がつく。淡赤褐色を呈する。

石器は、砾石（第159図30）は、材質は石英斑岩と思われる。5区最下層出土。偏平片刃石斧（第159図24）は、凝灰岩質と思われる。重さ約8.8gを量る。濠南層出土。軽石は、表面は軟質で加工痕は明白でないが、おおまかに三角錐の形と1.0×1.4cm程の楕円状の陰刻は、人為的なものと思われる。重さ約17.2gを量る。貝層中イノシシ頭骨直下出土。

弥生土器は、壺、甕、高杯、鉢、蓋、甌などがある。

壺は、広口壺で口縁部端部の断面が三角形で下方へ垂下し、内面に羽状の刺突紋が施されるもの（979・980・997）や、口縁部が有段形態をとり、幅広の内面に羽状刺突紋が施されるもの（987・988・996）、口縁部が茶縁でラッパ状に開いたものがある。直口壺は、口縁部が外に開くもの（991・1000）、口縁端が内湾するもの（995）がある。989・990は脚部を有する。996、997は下層赤褐色シルト出土。

甕は、台付甕で、口縁径13～20cm、器高18～23cmのものが多いが、口縁径31.1cm、器高約34.0cmの大形品（1036）がある。1011は、受口状口縁部を有するが、ほかはいずれも単純口縁でくの字状に外反する。端部に面をもち刻目をもつもの（1006・1007・1014・1026・1034・1036）、口縁部の外反が緩やかで端部に刻目がないもの（1029・1030）、口縁部端部が上方へつまみ上げられるもの（1028）がある。1002は、手づくねで作られた口縁径2.8cm、器高6.9cmのミニチュア品。1003、1004は、口縁径約7.2～7.6cm、器高約7.8～8.3cmの小形品である。1005、1014、1018は下層赤褐色土出土。

高杯は、有段高杯、碗形高杯（1053・1054）がある。有段高杯は、杯部上半が外反し、脚部がラッパ状に開くもの（1052）、杯部上半が内湾するもの（1041・1044）。また、脚部は、内湾するもの（1043）と直線的になるもの（1038、1040、1042）がある。1050は赤褐色シルトの下位。1051は最下層赤褐色シルト出土。

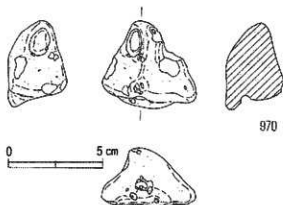
器台は、杯部が上方へ広がるもの（1056）と、杯部が浅い皿状を呈し、口縁部外周縁が肥厚し、内面に刺突による鋸歯紋がつくもの（1055）がある。

鉢は、口縁部が受け口状になるものがある。端部外面に刻目があるもの（1060）とないもの（1061）がある。1060は最下層赤褐色シルト、1061は暗褐色土出土。

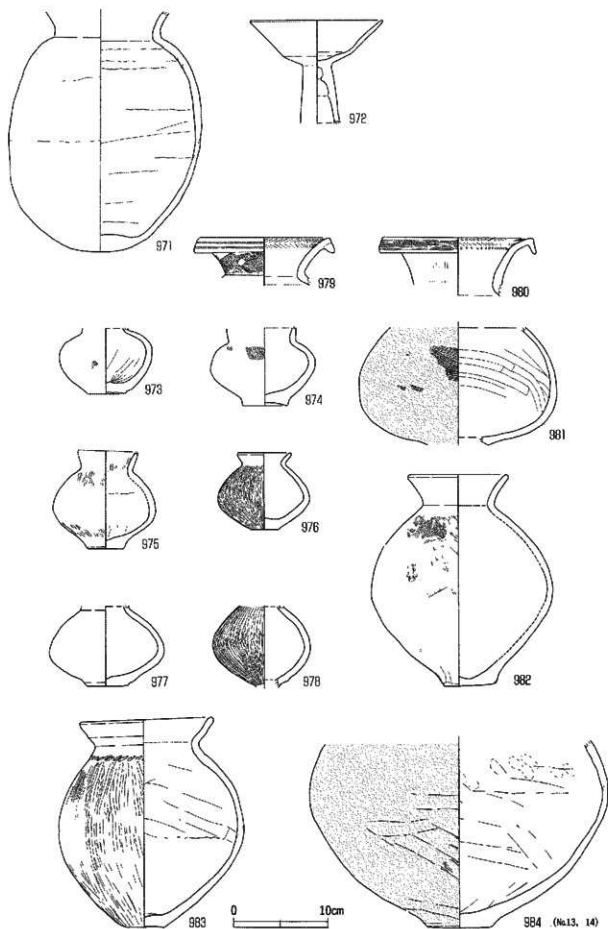
他に蓋（1057～1059）、小杯（1062）、甌（1063）がある。

5-SK08（第138図）

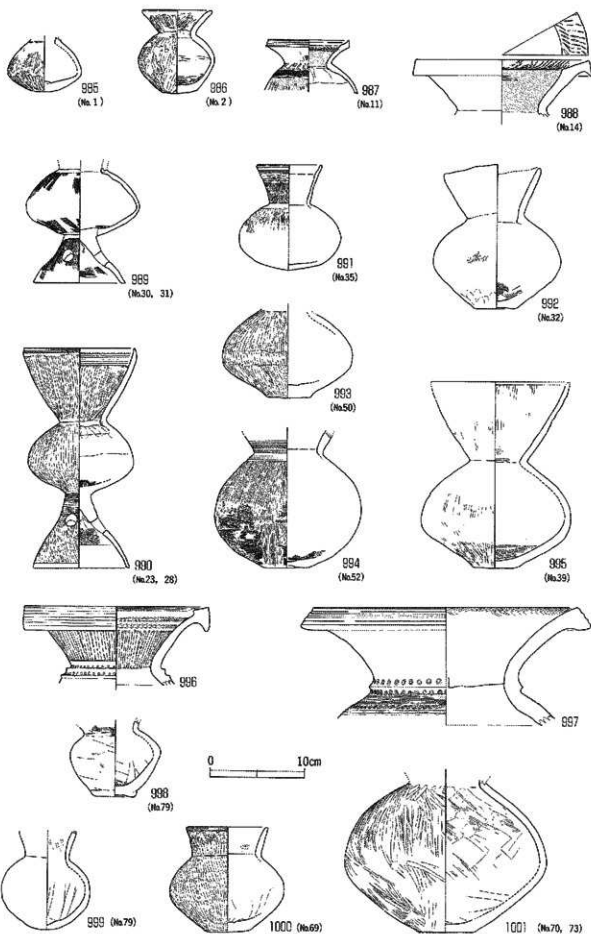
規模は、0.7×0.9m、深さ約30cmを測る。埋土は、暗灰色土で底付近で弥生土器1点が出土した。



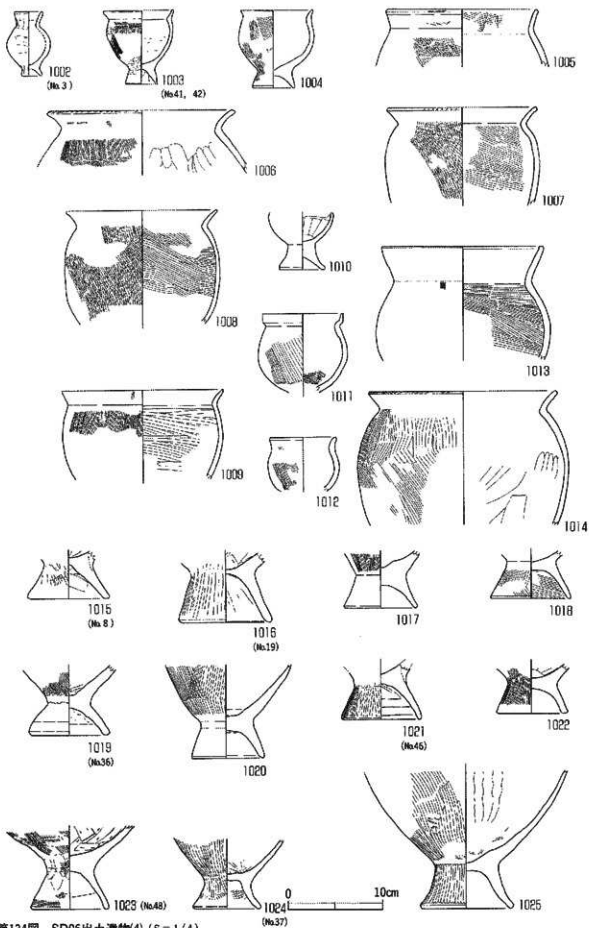
第131図 SD06出土遺物(1) (S=1/2)



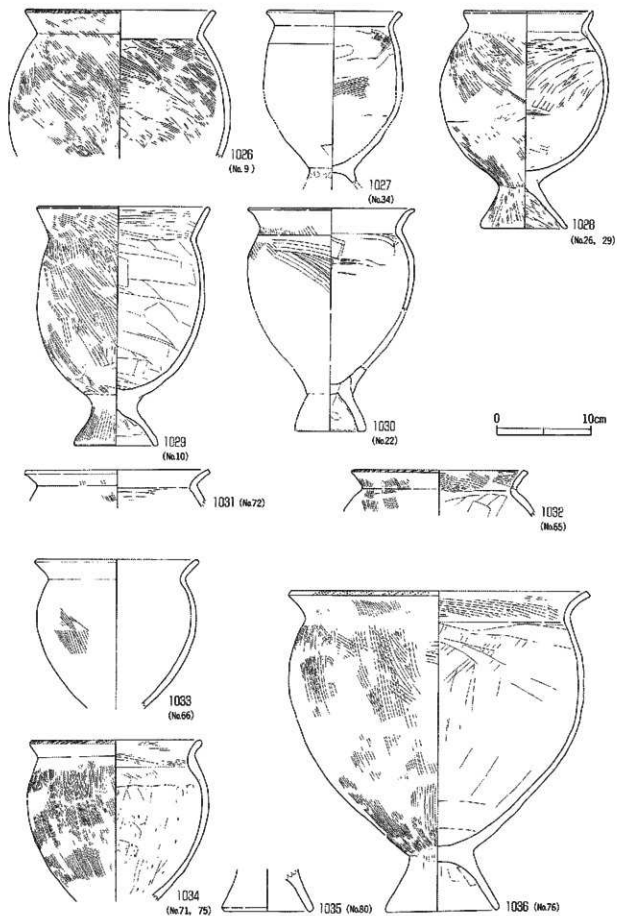
第132図 SD06出土遺物(2) (S=1/4)



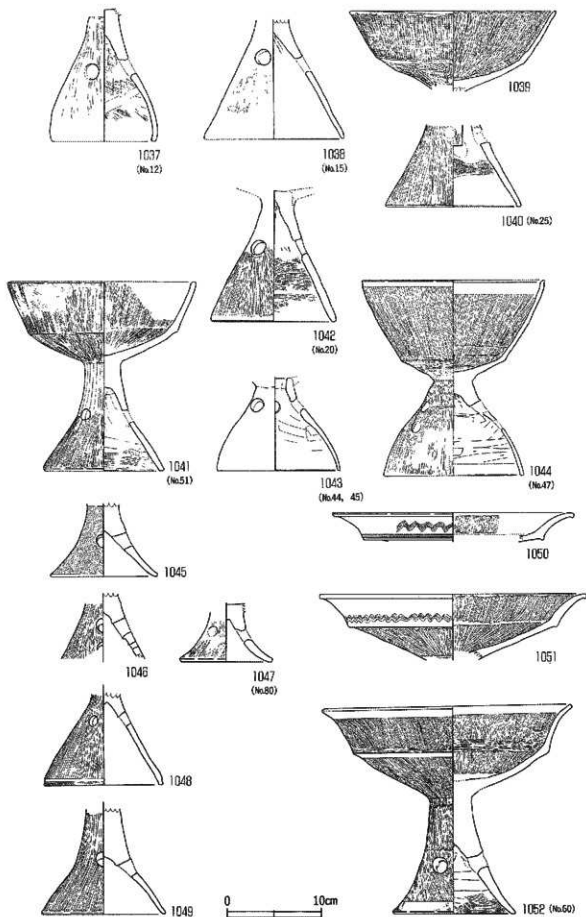
第133図 SD06出土遺物(3) (S=1/4)



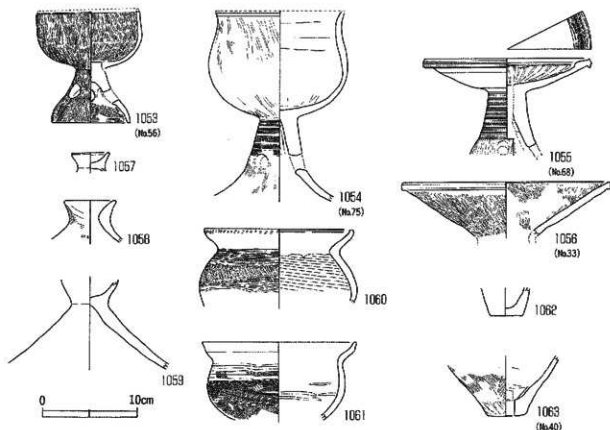
第134図 SD06出土遺物(4) (S=1/4)



第135図 SD06出土遺物(5) (S = 1/4)



第136図 SD06出土遺物(6) (S=1/4)



第137図 SD06出土遺物(7) (S=1/4)

出土した弥生土器(1064)は、壺で口縁部は欠けている。残存高約11.4cmを測る。器壁は荒れており調整痕ははっきりしない。内面には下半部の成形後、上半部を接合した痕跡が明瞭に残る。

5-SK01 (第142図)

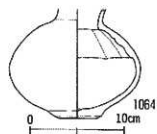
平面プランは、長方形を呈する。東西長約1.8m、南北長約1.5m、深さ約80cmを測る。埋土は黒色土、暗灰色土である。

出土遺物には、土師器の甕、高杯を含む土器小片多数がある(1085~1088)。

1087は、高杯の杯部で、口縁部は1/5ほど残るが、復元口縁部径約22.2cmを測り、杯部下半に断面三角形の貼り付け突帯がつく。1088は、高杯の脚部で、赤褐色を呈し、脚帯が外方に緩やかに開く。

5-SK02・SK05 (第140~142図、図版11,22)

調査区東壁に沿って、またSK01、SD03の下位で検出した。南東一北西方向に広がる。土坑の底部は凹凸が著しくあり、小規模な土坑が切り合った形状を呈している。土坑は、地山中に存在する粘土層を掘り込んでおり、粘土層の壁は、オーバーハングしている。このことから、粘土探掘坑と推定される。この付近の地山は、上位層(遺構検出面)は暗橙灰色砂質土、橙褐色砂質土で、その下位に橙褐色シルト、橙黄色シルト、赤褐色シルトが堆積している。赤褐色シルトは、白色シルトが網目状(キリンの皮膚模様の)に嵌入している。これは、赤褐色シルト面が地表面に露呈していた時期に、乾燥してひび割れ、そこへ白色シルトが入ったため(オープクラック)と推測される(藤根久氏のご教示による)。土坑内の堆積土層は、①土坑底面に採掘の際、取りこぼした粘土。わずかに砂礫が混じる(第141図第5層)、②粘土層を抉



第138図 SK08出土遺物

るように掘削したため、落盤した土塊(地山b~c)、③採掘の際の排土(地山上位層の砂礫混じり土を既掘の採掘坑に捨てたと思われる)(第2~4層)、④完全に埋まりきっていない穴に一定時間経過した後に堆積したもの(第1層)に区分できる。遺物は、東壁土層(第127図上段)第1層より須恵器甕、陶器、第6層より土師器小型壺、埋土下位層から高杯、台付甕等の土器片が出土した。

1067は、口縁部径7.8cm、器高11.2cmを測る。1068は、口縁部径8.9cm、器高11.4cmを測る。いずれも橙黄色を呈する。東壁第6層出土。1071は、濃赤褐色を呈し、直径約12.8cm、器高約21.5cmを測る。1076は、灰黄色を呈し砂粒を多く含む。1077は、高杯杯部で中程に突帯がつく。1079は、全体の器形は不明である。筒状を呈し、外面に直線紋が施される。

5-SK10 (第142図・図版11,22)

調査区東北隅で検出した。東西方向の検出長約3.5m、南北長約4.2m、深さは、検出面から最も深いところで約1.4mを測る。シルト質土の有るところに掘り込まれている。埋土は、橙褐色砂礫土、赤褐色土、赤褐色粘質土など地山の礫混じり土が二次堆積した状況であった。最も深い底面は、礫層に達していた。このような状況からSK02・SK05と同様、粘土採掘坑と推定される。すぐ北側は、傾斜地形のため、崖際に露呈していた粘土層から掘削を始め、南方へ粘土層を探し求めて掘削していったのであろう。SK10とSK02・05の間は橙黄色砂質土であるため掘削されていない。

出土遺物は、土師器高杯(1081・1082)、ミニチュア土器(1083・1084)がある。

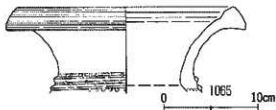
5-SK03

SK03は、第3次調査で検出したSX02・SK09の東端部にあたる。全体の規模は、約3.3×3.6m、深さ約45~70cmを測る。壁面はオーバーハングしている。SX02は、調査時には用途不明であったが、粘土層の部分に崩れていることや形状からSK02・05、SK10と同様、粘土採掘坑と推定した。

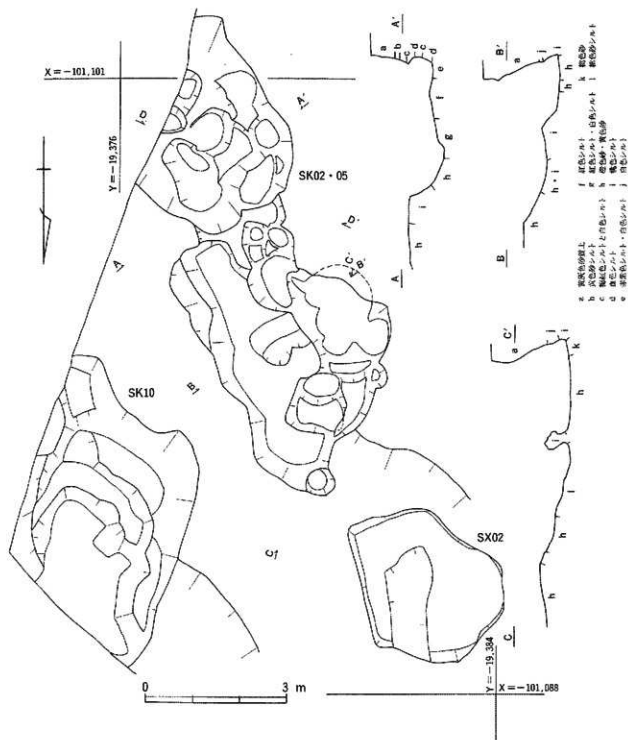
5-P4 (第139図・図版9)

SK01の北側で弥生土器片がまとまって出土した。やや黒味の強い暗褐色土で、とりあえずP4として取り上げたが、明白な掘り込みは確認できなかった。

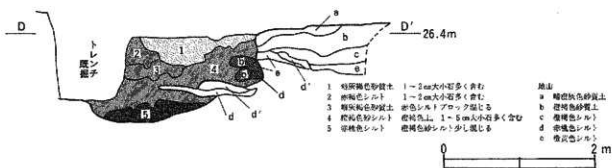
出土遺物は、壺(1065)、台付甕がある。1065は、口縁部復元径22.6cmを測り、やや大形の広口壺である。口縁部は断面三角形を呈し、外面に4条の凹線を巡らす。頸部には2条の貼付凸帯を巡らし、竹管文をその間に刻む。焼成は良好であるが、やや軟質である。外面は淡褐色を呈するが、内面は白褐色である。内外面とも磨滅しているので調整は不明である。



第139図 P4出土遺物(S=1/4)



- a 褐色砂質土
- b 灰砂質シルト
- c 褐色シルト・白色シルト
- d 褐色シルト
- e 赤褐色シルト・白色シルト
- f 紅色シルト
- g 褐色砂
- h 褐色シルト
- i 新設砂シルト
- 1 褐色シルト
- 2 褐色シルト
- 3 褐色シルト
- 4 褐色シルト
- 5 褐色シルト

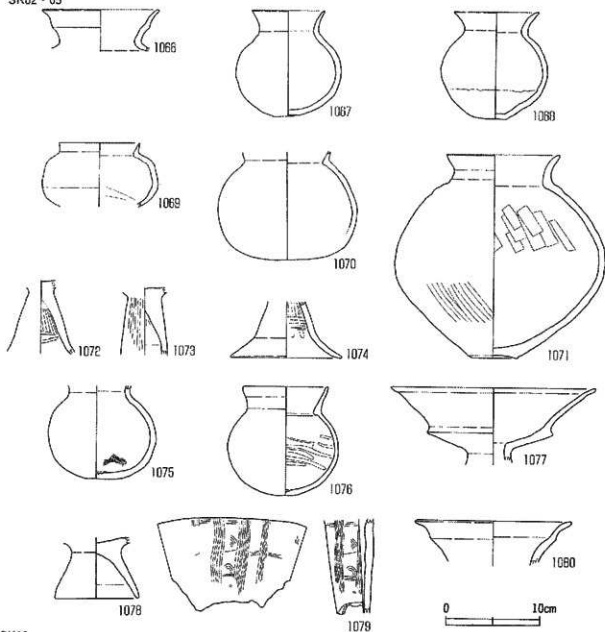


- 1 特殊褐色砂質土 1-2cm大小石多く含む
- 2 赤褐色シルト 1-2cm大小石多く含む
- 3 褐色褐色砂質土 赤色シルトブロック状になる
- 4 褐色砂質シルト 砂質土。1-5cm大小石多く含む
- 5 赤褐色シルト 褐色砂質シルト少し混じる
- a 褐色砂質土
- b 褐色砂質土
- c 褐色シルト
- d 褐色シルト
- e 褐色シルト

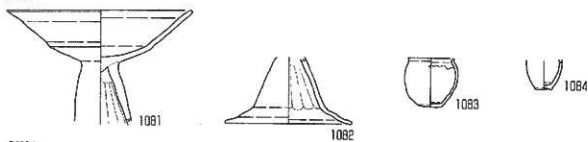
上：第140図 SD02・05, SK10, SX02 (S=1/80)

下：第141図 SK02・05断面図 (S=1/50)

SK02・05



SK10



SK01



第142図 SK02・05, SK10, SK01出土遺物 (S=1/4)

4 中世以降

5-SD01

調査区中央部で、東西方向に検出した。埋土は灰褐色砂礫土である。溝の西端は、検出ラインを明確にできず、SK01との先後関係は不明であった。SD01周辺で検出した他の遺構も同様検出ラインが明瞭ではなかった。これは、検出時に地山と考えていたのが、粘土探掘坑の埋土であったため、検出面が地山の再堆積土であったことが要因であった。検出長約3.5m、幅約1.7m、深さ約30-35cmを測る。底面は東方に向かい下がる。遺物は、出土しなかった。

5-SD02

調査区中央部で、東西方向に検出した。検出長約3.2m、幅約0.8m、深さ約18cmを測る。底面はほぼ平坦であった。遺物は、土器片が出土した。東端は不明瞭、西端は第3次調査で検出したP109部分である。

5-SD03

検出長約2.5m、幅1.0-1.2m、深さ約10-30cmを測る。西側で検出したSK1との先後関係は不明であった。遺物は、土器片が出土した。

5-SD05 東西方向に検出した。検出長約1.4m、幅約0.6m、深さ約6cmを測る。埋土は灰色土である。遺物は、出土しなかった。西端は第3次調査で検出したP112部分である。

5-SK04

検出した規模は、径約0.7m×約0.7m、深さ約15cmを測る。埋土中に炭化物を多く含んでいた。遺物は出土しなかった。西端は第3次調査で検出したP111部分である。

5-SK06

規模は、径約1.1×0.7cm、深さ約20cmを測る。遺物は出土しなかった。

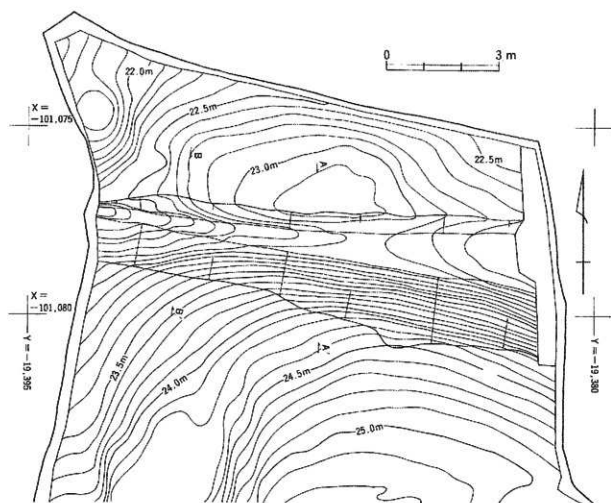
5-SK07

規模は、径約0.7×1.0m、深さ約20cmを測る。埋土は、灰色土、下位は地山ブロックを混じる黒色土。遺物は出土しなかった。

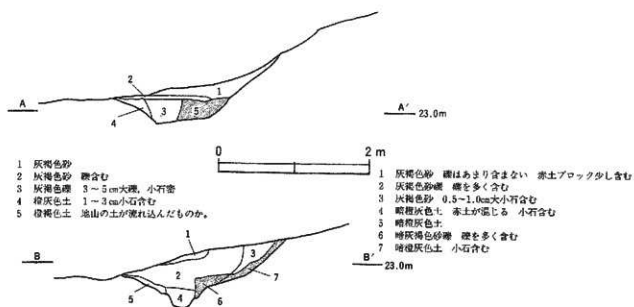
5-SD04 (第143,144図・図版11)

調査区北端で検出した。丘陵縁端部に位置し、傾斜面の下方にある平坦面に斜面に平行して掘られていた。検出長約12m、幅1.0-1.9m、深さ45-70cmを測る。埋土は、灰褐色砂、暗灰褐色砂礫である。溝内の南半部は一段浅くなっていた(第144図断面図)。溝が埋った後、北側だけ再掘削した結果と思われる。遺物は、傾斜の強くなる西端部に集中して出土した。

出土遺物は、弥生土器片が最も多く出土したが、ほかに須恵器模瓶の破片や長頸瓶の底部片、中世陶器では、山茶碗の小片、常滑産の甕の小片、古瀬戸後期の陶器鍋の小片、近世陶器では、京焼風陶器の底部片、瀬戸本業焼の丸碗底部片、瀬戸美濃産陶器の鉢の底部片、瓦片などがあつた。



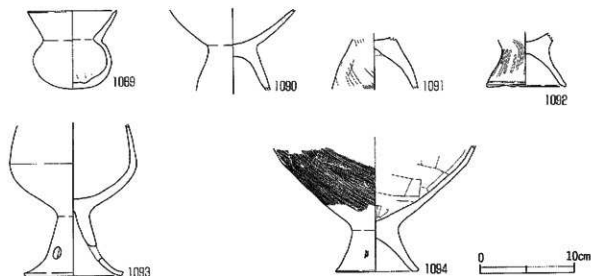
第143図 SD04付近地形図 (S = 1/100)



第144図 SD04断面図 (S = 1/50)

5 その他 (第145図、図版22)

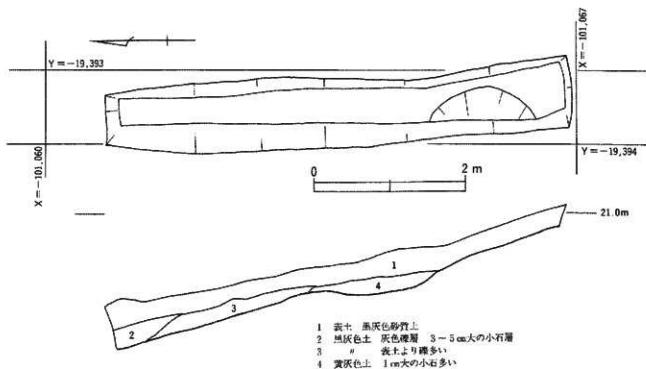
調査区東北隅は、この付近から地形が北へ傾斜しており、傾斜地に堆積した遺物包含層中からは、弥生土器、土師器が出土した (第127図上段第4層)。



第145図 包含層出土遺物 (S=1/4)

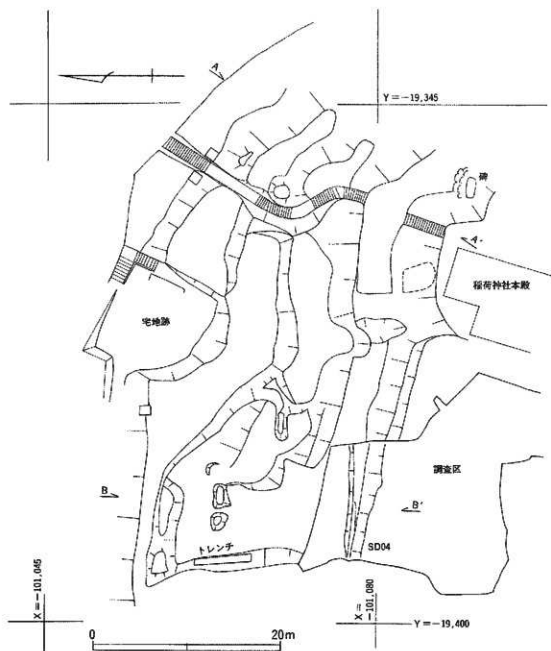
6 トレンチ調査

また、丘陵北端部に南北長約6.2m、東西幅約1.0mの大きさに、トレンチを設けた。トレンチ内では、窪みが見られたが、樹木の抜き取り痕と思われる。遺物は出土しなかった。

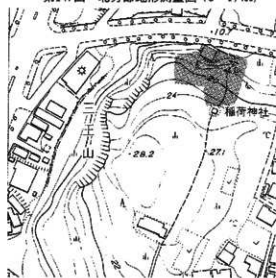


第146図 トレンチ平面図・断面図 (S=1/50)

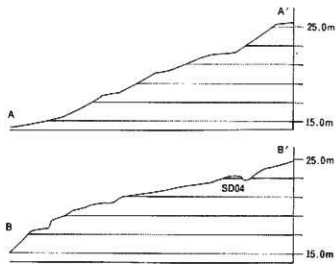
- 1 表土 黒灰色砂質土
- 2 黒灰色土 灰色礫層 3-5cm大の小石層
- 3 " 表土より礫多い
- 4 黄灰色土 1cm大の小石多い



第147図 北方部地形測量図 (S=1/400)



第148図 北方部地形測量の範囲



第149図 北方部地形断面図 (S=1/400)

III 小 結

今回の調査地は、遺跡の立地する丘陵の中で北側に小さな開折谷に面した位置にあたることから、地形環境を反映した遺構を検出した。

1 環濠 SD06の検出

丘陵線を巡っていると想定される弥生時代後期の濠の一部を検出した。この濠は、第3次調査で検出したSD06の続きにあたる。濠は、北の谷に向かって延びるやや尾根状の高まりを横切り、神社本殿に向かって掘られている。そのため第3次調査の時検出された、濠の北側を整地して濠の肩を造成するような痕跡はみられなかった。また濠の埋り方も、尾根状の所は、一時期濠の中央が窪んだ状態となっていた時、低い所では濠の南側が先に埋り、北側が空いた状況という違いがあった。この空いた所に貝類や獣骨など残滓が廃棄されていた。

2 粘土採掘坑群の検出

粘土採掘坑は、北西-南東方向に4箇所検出したが、これらは小規模な採掘坑が重複した結果である。当初は、崖面に露出していた粘土層の一部を発見し採掘が始まったのであろう。この地点は、弥生時代後期の環濠集落内に位置することから、環濠廃絶後で、出土土器から古墳時代前期のものと思われる。この時期の粘土採掘坑は、長野県中野市沢田鍋土遺跡¹⁾、岡山県総社市服部遺跡²⁾などが知られる。

3 溝 SD04の検出

調査区北端から神社境内地にかけて存在する多くの平坦面・傾斜面は、丘陵北斜面を5段にわたって人工的に造成した可能性が高まった。平坦面1つの面積は、約20~120m²ほどであることから、むしろ傾斜面を多く造ることを目的にしたものと考えられる(丸山竜平氏のご教示による)。

三王山遺跡の南には、丹下砦や鳴海城、善照寺砦が位置すること、【信長公記】に記載された「赤塚」の



第150図 周辺の城砦と赤塚の位置 (S=1/20,000)

合戦が、東方約500mに字赤塚として残る付近と想定されること等から、当地が要害の地であったことが伺える。こうしたことから、造成は敵の侵入を防ぐため行われた可能性が高く、城郭における「切岸」遺構と同種ものと考えられる(千田嘉博氏のご教示による)。

(註1) 鶴田典昭 「沢田鍋土遺跡」『上信越自動車道環濠文化財発掘調査報告書13』(附)長野県歴史文化財センター 1997

(註2) 浅倉秀昭・中野雅美 「服部遺跡」『岡山県環濠文化財発掘調査報告121』岡山県教育委員会 1997

- 1 三王山遺跡
- 2 赤塚の地名
- 3 丹下砦跡
- 4 鳴海城跡
- 5 善照寺砦跡

第8章 まとめ

遺構

これまで報告してきた三王山遺跡の調査の成果をまとめておこう。最初に、調査次でわかれた同一遺構の一覧を示しておく。

環濠関連遺構

2-SD02=3-SD06=5-SD06

2-SK20=3-SX03

竪穴住居

2-SK13=4-SB08,2-SK14=4-SB09

溝

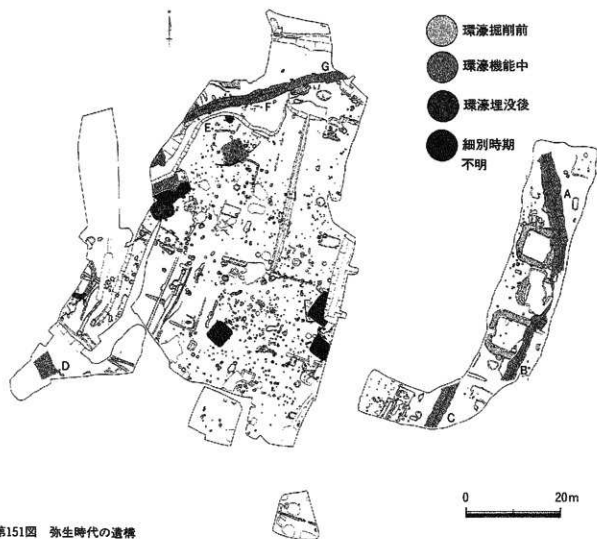
3-SD08=4-SD22

弥生時代

まず、環濠の掘削時期を基点にその前後について考えたい。遺構の切り合い関係から明らかなのは、三王山遺跡では環濠が掘削される前は方形周溝墓が営まれていた、ということである。この方形周溝墓は、濠によって切られている部分があるほか、溝の一部が環濠の掘削排土で埋められており、周溝墓の存在が明らかな時点で、取ってそれを壊して環濠を掘削した事は明らかであろう。東側では3基が接するように築かれているが、順序はわからない。西側の周溝墓は環濠との切り合いを持たず、あるいは環濠集落期のものの可能性もある。環濠機能中に、環濠内側に周溝墓を築く例は多くないが、後に検討する土器から見ると、環濠掘削に伴う盛土出土のものより後出の可能性もある。東側の方形周溝墓は、後に環濠集落内部となる部分の縁辺部分に築かれており、集落内部には営まれていない。このことから、環濠掘削以前から、方形周溝墓のない、後の環濠集落内部に住居が造られていたと考えることも可能である。3-SX05のように、周溝墓以外にも環濠に切られる遺構がある。しかし、3,4次調査の報告で述べたように、集落内部はかなり大規模に削平されており、住居についての情報の大半が失われており、どちらとも決めることができない。ただ、後に土器について触れる時にも述べるが、集落域から環濠掘削以前と思われる土器の出土はいくらか見られ、集落が存在していてもおかしくない。

また、環濠の掘削に先立って、環濠の外側で、整地、盛土がなされているらしい。西側の環濠の外は現在崖面になっており、本来の地形は失われているが、環濠の掘削時点で盛土がなされていることから、本来の地形も環濠の外側で下がっていく地形であったことがうかがわれる。この環濠掘削に伴う整地、盛土からの出土遺物は後期前半山中式に比定できるが、環濠掘削の時期を特定する上で重要である。また、この盛土上面で検出した土器群を環濠の掘削に伴うマツリの痕跡と解釈したが、こうしたマツリの存在から、環濠を掘削するという行為自体も結果として集団の一体感を高めていった事が推測される。

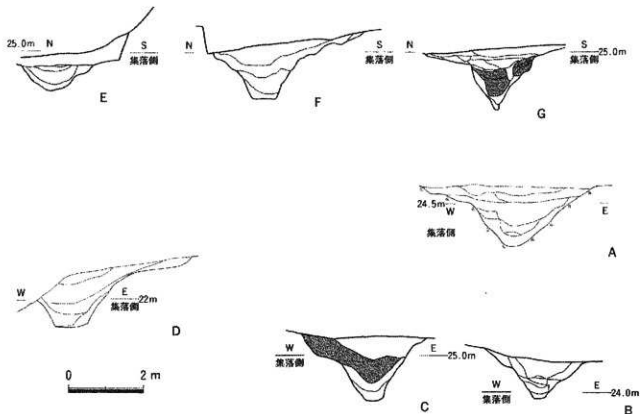
盛土後、環濠が掘削される。三王山遺跡では、東側で2条の環濠が検出されている。外側の環濠については、1-SD01と02は規模が異なるから、連続しない可能性もあり、環濠のプランは複雑なのかもしれない。一方、西側については確実なつながりは不明であるが、2次調査で見つかったそれぞれの濠の内側に



第151図 弥生時代の遺構

別の環濠が存在する可能性は低く、おそらく1条分の環濠しか見つかっていない。これは外側の環濠が、現在の崖面の更に西にあり、既に削り取られたため、とも考えられるが、先に見たように、その1条の環濠の外側に盛土がなされるような下っている地形であったとすると、西側には本来1条しか回っていなかった、という可能性も考える必要があるだろう。環濠の回り方については、少なくとも1条は集落を全周していたらしい事は推測できるが、それ以上については今回の成果からは不明と言わざるを得ない。第151図のC, D, E, F, G地点は一番集落に近い環濠であり、これを単純につないで復元すると、直径90m~100mほどの楕円形になる。

環濠に伴う施設としては、環濠内に堆積している地山に類似する土が土塁を崩したものと考えるならば、東側環濠（1次調査）については内側の環濠の集落内部側に土塁が存在したということになる。この地山土の下部からも多くの土器が出土しており、土塁を崩したのは、環濠が埋まり始めてしばらくの後になる。出入り口、櫓などの施設の痕跡は見つからなかった。環濠の各地点の断面図を第152図に示した。規模は、削平のされ方を反映しているだけの可能性が高く、図に示した規模は実際の濠から見たとときの最低の大きさを示しているに過ぎない。であるから、三王山遺跡の濠が、名古屋台地の瑞穂遺跡や見晴台遺跡に比べると小規模であるという評価については判断を下す事は難しい。ただ、北側については、環濠掘削時の盛



第152図 三王山遺跡環濠断面図 (A~Gは第151図に対応、トーンは地山土)

土の上面と判断する面が検出されており、濠掘削時からそれほど大きく削平されたとは考えにくい。であるから、少なくとも北側については、検出された規模とそれほど異ならず、小規模であったと考える事はできるだろう。西側から北側は、濠の外がすぐに急な傾斜であり、濠の機能の一つである防衛という点では、大規模な濠が不必要であったからであろう。断面は、比較的シャープなV字形をなす部分と、底の幅がひろく、逆台形を呈する部分がある。

環濠内部に営まれた竪穴住居については、弥生時代に比定でき、プランも確実なものだけで6棟ある。しかし、確実に環濠機能中と考えて良いのはわずかである。環濠は後期前半山中式のうちに掘削され、環濠から出土する遺物の量が多くなる、後期後半の環濠期に埋没を始めたと考え、環濠が機能していた時間は短く、今回の調査で得られた成果から、環濠機能中の住居を抽出するのは困難である。わずかに、3-SB01などが遺物から見て可能性が高いと言えるに過ぎない。しかし、3,4次の報告でも述べたように、集落内部で見つかったピットの数から見ても、この6棟という住居数は削平された結果であって、住居の数は本来もっと多かったと考えるのが妥当である。出土した土器の量を考えると、三王山の環濠集落が少数の竪穴住居からなる小規模なものであったという評価はあたらないだろう。

竪穴住居については、得られた情報は多くないが、一辺4~6mの方形のプランである事、周溝を持つ事、貯蔵穴と呼んでいる深いピットを伴う事が判明した。しかし、柱穴は必ずしも明瞭ではなく、火処についても不明なものが多い。

その他の遺構では、銅鐸形土製品などが一括出土した土坑やミニチュア土器が出土したピットが目されるが、時期としては環濠機能時の可能性が高いとは言うものの、環濠掘削以前の可能性もあり、正確には確定できない。また、検出したピットの多くは弥生時代のものであると考え、掘立柱建物があった

のかどうかもわからない。こうした状況のため、環濠内部のかなりの部分を調査したにも関わらず、集落の実態を把握するには至っていない。

次に、環濠が機能を停止したと考えるのは、濠内から大量に出土する土器が示す、弥生時代後期後半瑞穂期である。濠の埋没の仕方は場所ごとに異なり、一様ではないが、調査地点の多くで、濠中下層から瑞穂期頃の遺存度の高い土器が出土する。3次調査では、この下層にわずかに土器片を含む土が堆積しており、濠の機能中には遺物が埋没しなかったことが推測される。これは、濠内を常に浚えるなどしていた事を示唆するのであろうか。遺物の出土の仕方から、この瑞穂期頃が濠の機能が変化した時期と考えることに異論は少ないだろう。こうした濠から出土する土器の性格は、それがほぼ完存状態のものを多く含む事、器種構成が必ずしも竪穴住居とは一致しない事から、機能が停止した環濠に投棄したゴミと安易に考えるべきではないが、こうした土器群の時期に環濠の役割が変質したと考えるのは妥当であろう。ただ、あくまで遺物の出土の仕方に着目した場合であって、濠の下層に土器が埋まってもムラを守るという機能は果たし得るであろうから、濠の機能の停止を瑞穂期とするのは仮定に過ぎない。

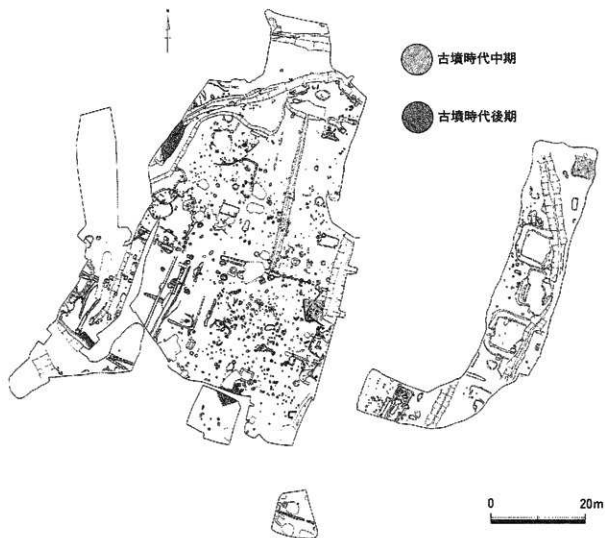
3・5次調査地点では、完形に近い土器が出土する層の上位には、同じく弥生時代後半の能田旭期の遺物が多く出土する層が堆積している。この層から出土する土器は遺存度の高いものや大型破片もあるが、層内でも上位では破片が多くなる。この層の上位には貝層がある。この貝層についてはブロック・サンプリングしたものを、水洗選別した結果を掲載する。ただし、この結果についても、この場所に捨てられた貝の種類を示すというのが第一義であり、まず貝が捨てられた脈絡を考えるべきであって、当時の食生活、生業活動あるいは環境の一端を直接に反映するとは限らない。もちろん、採らない、あるいは食べない貝は貝殻も捨てられないであろうから、何かしら反映はしているであろうが、先ほどの土器にしても、貝層にしても、第一義は環濠に埋められたものであって、これが当時の日常生活の残滓であるというのは仮定である。

1次調査の1—SD04は、濠下層の瑞穂期の遺物が多く出土する層の上に、意図的な埋め戻しと考えてよい地山土の堆積が見られる。同じく、5次調査の地点でも地山土の埋め戻しらしい堆積が見られる。この明らかに濠を否定する行為を以て環濠の機能停止と考えれば、環濠の機能停止は瑞穂期よりは後という事になるが、埋め戻しは、濠内にかなり遺物が堆積した後に行われており、ここでは既に機能を停止し、埋没を始めていたものを埋めていると判断しておく。

三王山遺跡では、環濠が土器などによって埋まり始めてからも竪穴住居は築かれており、集落としては継続する。環濠から能田旭期の土器が出土することが集落の継続を何より強く示唆するが、実際4—SB09のように、この時期に比定される竪穴住居も存在する。しかし、その集落についても住居がどの程度存在したかはわからない。最終的にいつまで集落が存在したかについても、環濠の土器から推測するしかないが、能田旭期までであり、それ以降の土器は出土していない。この時期をもって三王山遺跡の弥生時代集落は廃絶したと見て良い。

最後に、弥生時代の三王山遺跡の性格について考えておく。これまでに、三王山遺跡は、「高地性集落の一種」という評価をされた事がある(注1)。高地性集落と呼ばれる集落には大きく分けて、比高が100mを超えるような山頂等にあるもの(都出比呂志の言うAタイプ)(注2)、比高20—30mで、平野に程近い丘陵の先端にあるもの(同じくBタイプ)の二者がある。三王山遺跡が高地性集落であると言うのは、こ

の后者（Bタイプ）ということであろう。しかし、こうした定義に依れば、鳴海丘陵の遺跡のみならず、名古屋台地の環濠集落のほとんどが高地性集落に含まれてしまう。例えば、笠寺台地の先端の見晴台遺跡なども比高は15mほどある。一方、鳴海丘陵の南にある知多の丘陵上には、三王山遺跡が環濠集落であった時期とほぼ同時に営まれた中ノ池遺跡群がある(注3)。まわりとの比高は、丘陵の頂上に位置するB地点で25mほどであるが、名古屋台地の環濠集落に比べて、遺跡の存続期間が極めて短く、かつ集落も小規模である。B地点では、後期前半の山中式から後半の住居が7棟見つかった。調査の前に削られた部分があり、これがすべてではないだろうが、地形的に見てこれよりはるかに多い数の住居は想定できず、大規模な集住には不適當な場所である。それほど高い山があるわけではない鳴海や知多の丘陵については、取りあえず比高の大小は問わず、居住に適當とは言えない地点に営まれた、小規模、短期間の集落を高地性集落と呼ぶのが適當と思われ、中ノ池遺跡群こそ高地性集落と呼ぶのがふさわしいだろう。つまり、三王山遺跡等と中ノ池遺跡群をともに高地性集落として他の遺跡から区別することより、三王山遺跡と中ノ池遺跡群を区別する事のほうが重要であると考え、三王山遺跡を高地性集落とは考えない。



第153図 古墳時代の遺構

古墳時代（第153図）

古墳時代については、竪穴住居4棟と遺物を多く含む土坑2基などが見つかった。環濠の上層からも大量の遺物の出土が見られる。

古墳時代の遺構は、中期の松河戸期から後期の宇田期後半のものがある。しかし、遺物から判断して、その期間を通して存在するわけではないようだ。宇田期前半にあたる、古い須恵器を含む時期がまったく欠落している。土器については後論するが、これは土器編年の不備による見かけの現象ではなく、おそらく集落としては時間の断絶があるものと思われる。

古墳時代の集落についても、遺構がほぼ削平されており、その構成を知る事はできない。4次調査で見つかったピットから土師器や須恵器が出土する例も多いため、本来は多くの竪穴住居があったのだろう。1次調査で見つかった竪穴住居のように、居住用とは考えにくいものもあり、集落の構成や規模を考える上では注意が必要ではあるが、松河戸期、宇田期後半とも遺構、遺物は今回の調査範囲に広く分布しており、規模の大きな集落が営まれていた事も推測できる。

三王山遺跡の東には、赤塚古墳、大塚古墳などの後期古墳が造営されており、時期的には三王山遺跡の古墳時代集落と重なる。しかし、清水寺遺跡でも同時代の遺物の出土が多く見られるから、容易には決められないが、どちらかが古墳を造営したのであろう。

中世（第154図）

中世の遺構としてまとめるのは、15世紀代のものである。遺構図からも明らかなように、溝、柱穴列などは座標北から20度ほど東に傾いた共通の方向、あるいはそれに直行する方向を持つものが多く、これらは一連の施設の跡と考えるのが適当であろう。ただ、4-SK45の埋土に柱穴が掘り込まれているように、中世の遺構すべてが同一時期ではないことは明らかであるが、分ける事はできなかった。

これらの遺構については、4-SD24のような大規模な溝の存在から考えると、城や館などの施設を考えたくなる。5次調査区の北側に見られる段をなす地形も、おそらく防衛を目的とした造作であり、この中世の遺構に関わるものである可能性が高い。

ところで、今回の調査区のすぐ東側にある緒畑稲荷神社に掲げられている神社の由来には次のような内容が記されている。すなわち、桶狭間の戦いに際し、「鳴海城」とともに「三王山砦」が焼失し、それに伴って緒畑神社も焼失したという内容である。由来は大正から昭和の初めに書かれたもので、そのまま信用することはできないが、今回大規模な遺構が検出されるまで、三王山に砦等の施設が存在したことは知られていなかっただけに、「三王山砦」の記載があることは注目してよいだろう。なお、ここで「鳴海城」と言われるのは、由来の最初に「鳴海丹下城」という記載があることから、丹下砦の事だろう。また、4次の柱穴列は、由来の記述とは時期は異なるものの、各ピットが埋土に焼土を多く含んでいた事が、「焼失」という記述の内容と関連して気になるころではある。

一方、「信長公記」には、鳴海城の山口九郎二郎が兵を率いて「赤塚」に来るのを、「三の山」に上った信長が見て、赤塚で小競合いが起きた、という記載がある（注4）。「赤塚」は、現在の赤塚古墳などにその名をとどめる通り、三王山の東にあり、「三の山」が現在の三王山にあたる可能性が高い。

今回検出した遺構群は、SD24の上層遺物に16世紀代のものを含むほかは、何れも15世紀代と考えられる

ものであり、桶狭間の戦の時期に存在した施設ではない可能性が高い。しかし、15世紀代に存在した大規模な施設の存在が、後に関わりを持つ事は想定して良いのではないだろうか。三王山遺跡のすぐ南に位置する清水寺遺跡では、信長が「古屋しき」を改修して丹下砦とした事が文献に記され、発掘調査でも裏付けられている（注5）。

今回検出した大規模な遺構群と、文献などに記された織田信長との関わりはひとまずおくとしても、三王山遺跡に15世紀代の大規模な施設が存在した事は、文献ではこれまで知られていない。第1章で述べた通り、丹下砦の様子を描いた絵図にも、三王山遺跡の地点は「島」と記されているのみである。中世の遺構の評価は今後に待たねばならないが、こうした遺構の存在が明らかになった点だけをとっても、大きな成果を得たと行って良いだろう。（村木）

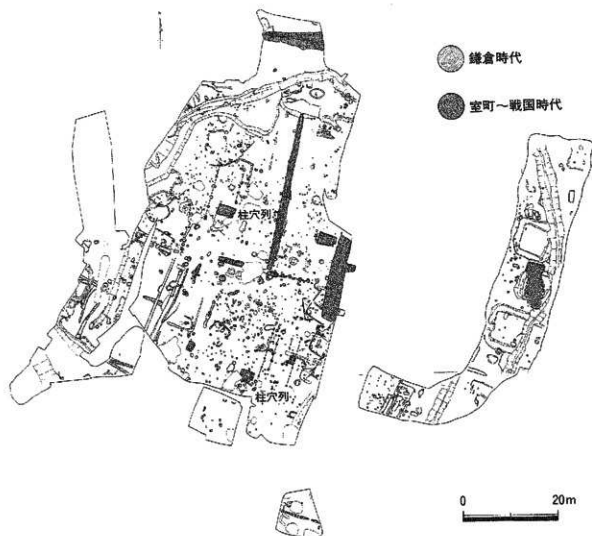
〔注1〕加藤安信 『伊勢湾地域の弥生時代後期社会』『伊勢湾と古代の東海』 古代王権と交流4 名著出版 1996

〔注2〕都出比呂志 『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店 1989

〔注3〕杉崎幸監修 『愛知県東海市市ノ池遺跡発掘調査報告書』 東海市教育委員会 1982

〔注4〕俺本博志氏と星野茂次氏のご教示による。

〔注5〕野口泰子 『清水寺遺跡第5次発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会 1997



第154図 中世の遺構

遺 物

弥生土器

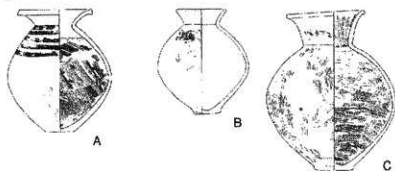
1 土器の分類

最初に土器の分類を行っておきたい。本来ならば、分類は各調査の報告の中に生かされるべきであるが、本文中では個々の土器について詳細な記述をすることができなかったため、ここで分類をする。全体を通して複数見られるものを中心にしたため、欠落しているものもある。器種としては壺、甕、鉢、高杯、器台、直口壺、台付直口壺、台付壇があり、それぞれについて形態から細分した。第155図を参照していただければ説明は不要であろうが、いくらか補足しておく。まず、甕については、四角く面をなす口縁の刺突の有無で分類した。さらに口縁端部が丸く、刺突を持たないものをCとした。これは、AあるいはBからの型式変化であるが、どちらからつながるのかわからないため、別に分類した。高杯A～Eについては、杯の口縁端部の形態、脚の高さ、脚と杯の接合部の特徴を基準とし、今回複数出土しているものだけを分類の対象とした。また、EとFについては、後述するように、過渡的な形のものを中心に介在させる事によって、EからFへの変化が降付けられるが、作り方が変化すること、形の特徴が途中で大きく変化しているため別に分類した。また、Hについては、途中で形態が分化していくものと考え、最初の形態のものを1とし、分化したものを2,3とした。また、H1には、法量の大小があるが、分化していくものの中には中間的な法量のものもあり、区分が煩雑になるため、同じ分類記号とし、大、小と呼ぶ。

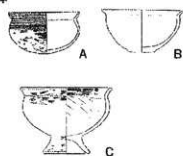
2 時間的検討

三山遺跡の土器の時間的な変化をまとめたい。ここでは、まず土器を時間順にならべるにあたって依存せざるを得ない高杯の型式的検討からはじめよう。相伴関係や出土遺構の別を問わず、形態と作り方から第156図のような変遷を想定した。これは相伴関係等を無視した仮説であり、それは後に検討するが、まず一つの時間軸としたい。中心は高杯E、Fであり、変化の方向は1～3までは杯部の深さが増していく事、脚部があまり広がらなくなる事である。そして、4は、3の杯体部及び脚部下半を内湾させるようにナデ、ヨコナデする事によって製作される。この変化は、最終的に土器の形を決定するヨコナデの時の、土器に対する手のあてかたの変化に原因を求められる事ができる。杯部で説明する。ヨコナデが常に親指を杯の内面に、残りの指を外面にあてて行われたと仮定すると、3までのものは、杯内面上端に親指を密着させて外側に開くようになでているのに対し、4以降のものは逆に杯外面の上端に外側の指を密着させて内側にむかってなでる。この指のあてかたに起因して、3までのものは口縁端部に外傾する面をもち、逆に4以降のものは内傾する面をもつものが多いであろう。ただ、口縁端部の面については、体部の形を決めるヨコナデの後に端部整形のためのヨコナデを施しており、この際4では外傾面をつくっている。その後の高杯がほぼ内傾面を持つ事からすれば、外傾面のものがより古い特徴であろうか。脚部についても同様のヨコナデの仕方の変化があったことは、脚内部のナデ、ヨコナデが及ぶ高さが3に比べると4以降は上がっていることが示している。ところで、こうした変化は何に起因するのだろうか。土器作りにあたっての指の使い方の変化は、製作者の体（体の動き）が土器作りの最も基本的な「道具」である事を考えれば、例えば工具が変る事や、作る器形が変る事より重大であると評価しなければならない。特に、ここで問題としている「内湾化」は、後に伊勢湾沿岸地域一体に広がる現象だけに、それが何故生じたのか、どうしてそれほど広がったのか、など派生する問題は多い。高杯に限って言えば、何故生じたかを解く鍵の

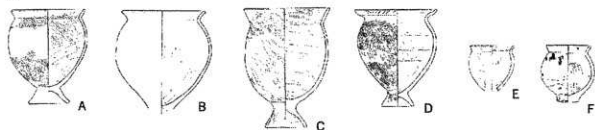
壺



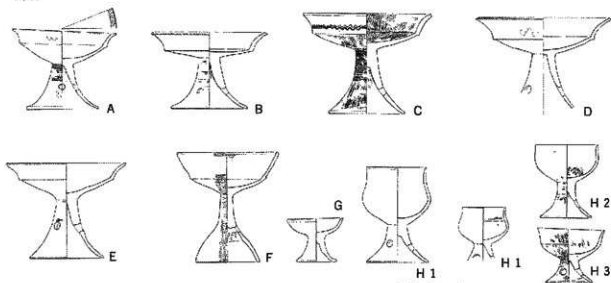
鉢



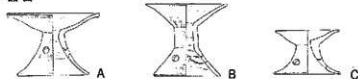
甕



高杯



器台



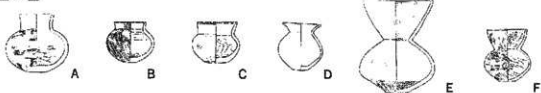
台付直口壺



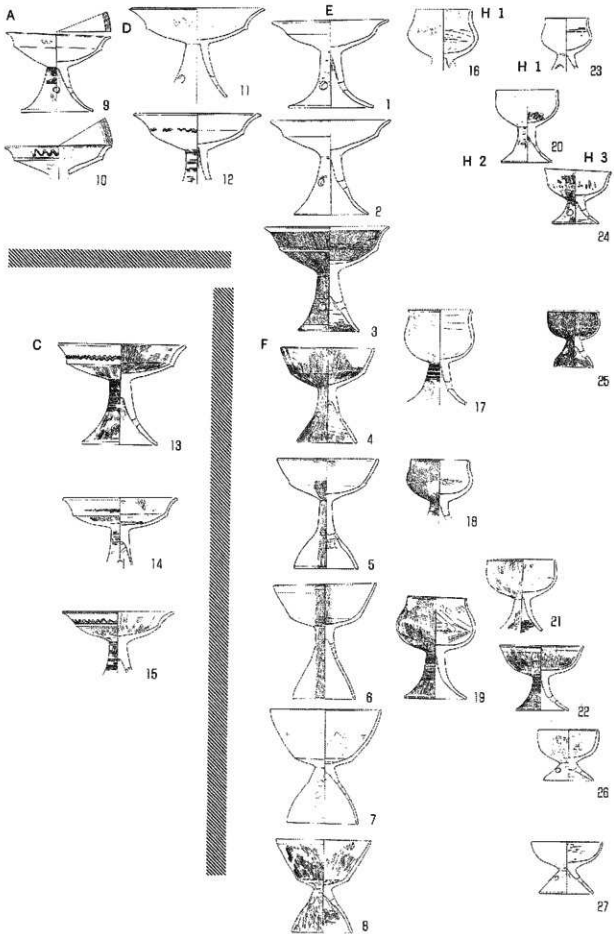
台付罇



直口壺



第155図 土器の分類



第156図 高杯の型式組列

一つは、高杯E、Fを通じた器形の変化にあるだろう。図に示した変遷からも明らかのように、この組列を通じて一貫した変化は、杯部が深くなることであり、それも杯底部を深くするのではなく、杯体部を高くして深くするという方向である。つまり、杯部については、外反させるよりは内湾させたほうが杯部は深くなるから、内湾するようになったと考える事ができるだろう。では、何故深い高杯が求められたのか、それについては不明である。ただ、内湾化は高杯だけの現象ではなく、直口壺の口縁、甕の脚部にまで及んでおり、高杯の変化だけからヨコナアの仕方の変化を説明する事は困難ではある。また、付言しておく、3と4は、端部の成形の仕方を除けばそれほど大きな器形の変化はなく、図上では比較的スムーズな型式変化に見えるが、実物では色調や重量などに大きな断絶があるようにも見える。また、今回報告した三王山遺跡ではたまたま過渡的な形態のものがいくつか出土し、組列を組み立てる事ができたが、内湾化がどこで、いつ始まったかについては不明である。

その後の高杯Eの変化は、杯部が深くなる事、脚部上位の柱状部がなくなる事によって短脚化していく事、さらに杯底部径が縮小する事が変化の方向である。

高杯H1では、杯部が、高さに対して横幅の大きな器形となり、下半が強く張るようになる型式変化として組列を考える事ができる。

高杯H3も比較的明瞭な変化をしている。外反脚が内湾するようになり、その後は直線的な脚となる。また、図の23は杯部にまだ屈曲が残るが、24からはほぼ杯体部が直立するようになり、以下は口径に対してより浅い杯部へと変化している。

図では、高杯E、Fの組列の横に、同一遺構内から一緒に出土した高杯をならべるようにした。Cについては、スペースの都合で別になったが、同じ基準でならべれば、13が最上段、14が5の隣、15が19に平行する位置である。これらのものも、単に共伴をもとに並べたわけではなく、例えばDでは、脚の上位がすぐに外側に開くものから柱状部ができるものへというEの変化に対応する変化を想定するなど、個別に前後関係を検討しているが、個体数が少ないため、確実な組列というわけではない。

高杯の組列は、出土状況を見捨てて組み立てたものであるが、遺構との関わりを見ておくと、次のように整理される(表1)。別に検討した高杯各形式の型式組列で、欠落や重なりはあるが、高杯E、Fで想定

遺 構	A	C	D	E, F	H 1	H 2	II 3
1-SZ02					16		
2-SK20=3-SX03	9						
2-SD08		13	11				
2-SK18下層	10		12	1			
2-SK15				2		20	23
5-SD06				3, 4	17		24
2-SD01				5	18		
2-SD02		14		6			
3-SD06		15		7	19	21	25
3-SD06貝層				8			
2-SK09							26

表1 高杯の出土遺構(番号は第156図と対応)

した順序と、Hから想定した遺構の順序に矛盾はなく、各形式で下のほうで数字が増えている。この組列が時間の経過を示している可能性が高い事を表している。3-SD06に多く見られる高杯H1は、他の遺跡の例から見ると高杯Fと伴っている事は多くないが、両者とも前段階から変化しており、同時である可能性が高いと言えるだろう。ただ、環濠出土のものについては、組列に組み入れられるものだけを意図的に抜き出しており、順序が逆転するものもある。環濠については、各調査次第に少しずつ時期差のある土器が出土しているという程度に考えるべきである。

その他の器種については、個体数が少なく、個体差と時間の経過に伴う型式変化を識別する事が困難であるが、器台などでも、高杯と同様、外反脚から内湾する脚部へという型式変化が見られる。

更に、出土状況から見て遺物の時期がまとまりそうな遺構について、器種、形式構成を概観しておこう。なお、環濠出土のものについては、当然ある程度の混入は避けられないが、それを恣意的に排除する事はここでの作業では不適切である。であるから、以下の基準とした。2-SD01.02については、中下位出土で、遺存度の大きなもの、3-SD06についてはII層下位としたもの、5-SD06については、出土地点が記録されているから、土器の集中部分のうち、記録のあるもののみを対象とした。また、2-SK09については、明らかな混入が多いがそのまま示した。一覧にまとめると別表(表2)のようになる。この器種、形式構成の変化を見ると、壺ではCとDを含むものと含まないもの、鉢ではBの存否、直口壺では直立する口縁のAと内湾口縁のE、Fの存否などを指標とすれば、高杯の型式変化から想定した遺構の順序とは矛盾しない。直口壺B、Cの存否も指標となり得るならば、2-SK20=3-SX03→2-SD08という順序も想定

遺構	高A	B	C	脚A	B	C	D	E	F	脚A	B	C	直口壺A	B	C	直口壺D	直口壺E
1-SZ02																	
2-SK20-3-SX03	○	○		○	○				○								
2-SD08	○			○	○			○									○
2-SK18下層	○	○		○	○												
2-SK15	○	○		○				○			○				○		
5-SD06				○	○												○
2-SD01	○				○												
2-SD02		○	○		○	○	○					○	○				
3-SD06		○			○	○	○						○				
3-SD06H層		○			○							○					
2-SK09	△		○	○	○					△	△	○	△	○			
遺物	高A	B	C	D	E	F	G	H1	H2	H3	直口壺A	B	C	D	E	F	
1-SZ02								○									
2-SK20-3-SX03	○				○			○									
2-SD08				○							○	○					
2-SK18下層	○				○												
2-SK15	○	○		○		○	○	○	○	○	○			○			
5-SD06					○	○		○		○			○		○		
2-SD01					○	○		○				○					
2-SD02			○		○										○		
3-SD06			○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
3-SD06H層					○										○	○	
2-SK09			△		○					○	△		○	○			

表2 主要な遺構の形式構成

できる。高杯では、E～Fの型式変化の中で、Fを含むものと含まないものは明瞭にわかる。偶然の不在や、遺構の性格による不在、あるいは環濠出土のための混入等はある、必ずしも器種、形式構成の変化がスムーズには跡付けられないが、先に述べた器種、形式構成の変化は、時間の経過の指標となり得るものであると考える。この器種、形式の消長も資料の時間的順序を判断する材料とした。

最後に遺構自体の関係について考えよう。先に述べたように、三王山遺跡では遺構の切り合いや、前後関係の推定からその出土物の相対的な序列を決める事ができる。まとまった遺物の出土した遺構についてまとめると、次のようになる。ア、方形周溝墓出土土器→イ、環濠掘削に伴う整地土、盛土→ウ、環濠内下層出土土器→エ、環濠内中上層出土土器という順である。ア・イの前後関係が土器からは確定できていないが、その他については、この順序はこれまで想定してきた土器の変化と矛盾するものではなく、遺構の点からも土器の序列は補強されると考えるべきだろう。ただ、注意しておかねばならないのは、2-SD08は環濠との切り合いを持たないため、遺構からはイに先行するとは言えず、器種、形式構成を指標にすると、イに後出の可能性もあり得る事である。

さて、以上まで、高杯の型式組列、器種・形式構成、遺構の切り合いと土器を時間順にならべるための指標を検討した。これらを総合的に判断し、かつ環濠資料は伴関係が不明である事を考慮すると、以下の4群に分類する事が可能である。

- ①-1-SZ02, 2-SK20=3-SX03, 2-SD08
- ②-2-SK15, 2-SK18下層
- ③-環濠下層2次 SD02中下層(3次II層下位), 5次下層出土
- ④-環濠中層(3,5次貝層), 2-SK09

遺構の切り合いから見て、1群は更に細分が可能であるが、土器のみから判断する事は困難であった。特に、方形周溝墓2-SD08については、環濠掘削に伴う盛土3-SX03より必ずしも先行するとは言えず、小型の直口壺がある点からはむしろ後出の可能性もある。③は、高杯の型式の検討からは、地点ごと時間差を見出すことができ、細分できる可能性があるが、必ずしも共伴とは言えない土器群であるから、ここでは敢えて分けずにおく。また、報文で述べてある通り、2-SK09は、本来のSK09の遺物とSD08に由来する遺物が混ざっているため、SK09出土の中のもの型式学的な操作でSD08のものと推定したものである事を断っておく。

これらの土器群を、これまでの東海地方の編年研究に当てはめるならば、②が赤塚氏の言う(注1)山中式4段階、③の大半が山中式5段階から週間I式初め、④が週間I式となる。①は位置づけが難しく、山中式の3段階に平行する可能性が高いが、赤影の高杯が少ないなど、いくらか姿が異なる。地域差を示しているのだろうか。また、①のなかでも、2-SK20=3-SX03は高杯の形や小型の壺類が見られない事から赤塚氏の3段階に近く、2-SD08は4段階に近い。加納氏の編年(注2)では、③の大部分が瑞穂期、④が能田旭期ということになる。

弥生土器の時間的な細分ができたところで、最後にもう一度遺構の評価をしておきたい。環濠から出土する③の土器は、②との間に前後関係がある事はこれまで述べた通りであるが、高杯の連続的な型式変化から考えると、①②③は連続しているとみなせる。①が環濠掘削時、③が埋没時のものであるとすると、②が環濠機能中の土器ということになる。環濠機能中に土器を集落内に捨てるような行為があったらしい

事とともに、環濠の機能した時間が極めて短かった事がわかる。

また、4次調査では、集落域から②より先行すると見ることもできる土器がわずかではあるが出土している。3-SX05のように、濠の内側で環濠に切られる遺構も存在する。しかし、少量で、本当に②に先行するかどうかは確定できないため、やはり環濠掘削に先立って集落が存在したのかどうかは分からない。

3 空間的検討

土器の時間的な変化に次いで、他遺跡と比較したときの三王山遺跡の土器の特徴について考えたい。①②の土器は、尾張低地部や名古屋台地の土器とはいくらか違った特徴を持つ。一番目につくのは、①の時点で、甕Bが主体を占めることである。比較資料が多くないので、傾向程度しか言えないが、尾張低地部では、かなり刺突の施文率が高いし、見晴台遺跡P-6（J4貝塚）（注3）でも割合は高い。もちろん、朝日遺跡（注4）や高蔵遺跡沢上二丁目SB5（注5）などでも刺突のないものは出土しており、まったくないわけではない。しかし、刺突のあるものが主体である。これが、三王山遺跡では逆転している。甕は、地域的な差違をもっとも顕著に表すと言われるから、そうした違いは何ら不思議なものではないが、ただ、その刺突のない甕の存否という違いではなく、割合の違いとして顕われている点に、この差違を生み出した背景があるのだろう。口縁端部に刺突を持たない甕は、岡島遺跡（注6）をはじめとする西三河の遺跡にも多く、系譜の問題もあるが、地理的な傾斜を示しているのかもしれない。ただ、③の土器になると、ほとんどの甕が刺突を持つようになる。また、甕の内面の調整についても三王山遺跡では、上位が右上がりのケズリとなり、左上がりが多い尾張低地とは相違する。これについても、土器作りに伴う手の動かし方か土器と体の位置関係の相違があり、地域差を生み出した背景を考える上で示唆的である。

また、③の土器の特徴としては長脚の高杯Eについて触れておきたい。これについては、名古屋台地や鳴海丘陵では多く見られる一方で、尾張低地の朝日遺跡ではあまり見られず、かつては形態の地域差の可能性が考えられた。しかし、廻間遺跡（注7）などで長脚の高杯が出土するなど、必ずしも地域差とばかりは言えない状況である。三河でも資料は増加している。先に高杯の型式組列を考えたときに示したように、山中式期の高杯Dからの型式変化であるために長脚であるのであって、いわば、必然的に長脚なのである。すなわち、長脚の高杯がないということは、高杯の型式組列に欠落があるのか、あるいは三王山遺跡のように過渡的な形態を経ずして、別形式の高杯として採用されたかのどちらかであって、その説明をすることなく、長脚の高杯の不在を地域差に求めるのには賛成できない。

4 環濠の土器群の性格

ところで、③、④の土器群の性格として、不要となった濠の窪みに捨てられた生活残滓であると言われる事が多い。そうであるならば、竪穴住居で使用していた一そろいの土器と同じ器種、形式組成を示すはずである。まず、濠から出土した遺物では、例えば3次調査II層およびII層下位の出土の器種、形式組成を見ると、II層で甕21、壺5、高杯5、鉢4、直口壺5、2層下位では、甕39、壺4、高杯15、直口壺13となり、II層下位の高杯の形式組成はCが3点、H1が10点、Fが2点であり、高杯H1やHから派生した碗状杯部のものの量が多いのが特徴である。

これが本当に住居で用いられた組成と一致するだろうか。山中式期から瑞穂期、能田旭期の、使用時の姿をとめている可能性が高い竪穴住居の一括資料は、例えば瑞穂遺跡1次N-8号住居（注8）、2次4号住居（注9）、あるいは地域が違うが廻間遺跡SB02、刈谷市半川遺跡K3号竪穴住居（注10）、豊川市郷

中遺跡2号住居(注11)などがあるが、高杯は後期前半ではA～E、後半ではFを中心としており、高杯H1はほとんど出土しない。また、こうした住居では、甕と高杯が同程度出土するのであるが、濠内では逆に高杯の出土は少ない。この時期の竪穴住居出土資料でもう一つ出土量が多い器種は、直口壺類であるが、これについては濠からも多く出土している。

データとしては十分とは言えないが、3-SD06のII層およびII層下位出土遺物は、竪穴住居で用いられたであろう土器群とはいくらか器種、形式組成が異なっていることは認めて良いだろう。甕が多いのは甕が壊れやすいからと説明するにしても、それに対する高杯CやFは極めて少ないと言わざるを得ないし、住居にはあまり存在しない高杯H1の存在は説明できない。また、出土遺物の器種、形式組成は、同じ濠でも地点によって相違している。地点ごとに土器に時間差がある事は先述したが、それが出土遺物の器種、形式組成に影響を及ぼすほど大きな違いであるとは思われない。とすると、濠の遺物がすべて同じ性格のものではない可能性も考えねばならないだろう。

濠の土器群は、その場で何かが行われたような状態では出土していないから、どこか他所での何らかの行為の残滓である事は間違いないが、日常生活の不要品とは形式組成に相違が見られる以上、生活残滓の廃棄場所であるとする考えは再考の余地があるのではないだろうか。このことは、土器群の性格が日常生活の残滓であるか否かという問題に止まらず、土器群の出土=不要品の廃棄=濠の機能停止とする仮定にも再考を迫るものである。もちろん、濠での遺物の出土の仕方から見て、土器群の前後では濠に対する意識の違いを読み取る事は可能である。(村木)

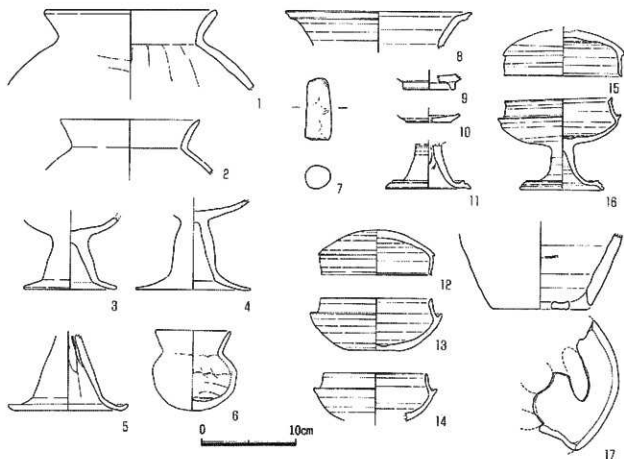
- (注1) 赤塚次郎 「山中式土器について」『山中遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集 1992
赤塚次郎 「瀬間式土器」『瀬間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 1990
- (注2) 加納俊介 「土師器の濠年 東海」『古墳時代の研究』 6 雄山閣 1991
- (注3) 銀尾忍之 「尾張における後期弥生式土器の編年的研究(Ⅰ)」『古代人』 27・28 名古屋考古学会 1973
- (注4) 宮腰健司編 「朝日遺跡」 V (土器編・総論編) 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集 1994
- (注5) 荒木実他 「高藏遺跡沢上二丁目501発掘調査報告書」 財団法人荒木集成館 1989
- (注6) 松井直樹・鈴木とよ江 「岡島遺跡」西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 1994
- (注7) 赤塚次郎 「瀬間遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 1990
- (注8) 名古屋市教育委員会 「瑞穂区瑞穂遺跡」『瑞穂遺跡・桜台高校遺跡発掘調査概要報告書』 1979
- (注9) 名古屋市教育委員会 「瑞穂区牧町瑞穂遺跡発掘調査概要報告書」 1982
- (注10) 矢田直幸編 「宇川遺跡」刈谷市教育委員会 1995
- 宇川遺跡については、使用時の組成を留めているかどうか分からない。
- (注11) 前田清彦他 「郷中・雨谷」豊川市教育委員会 1989

土師器・須恵器

土師器については、名古屋の縄年という4期(古)(注1)の土器が多く出土している。粗製の小型壺が多く見られる時期であるが、中に何点か比較的作りの良いものが存在し、3期の遺物が含まれる可能性もある。しかし、3期の特徴である膨らみの独い脚を持つ高杯の出土はない。1次調査の環濠上層から出土した遺物は、一括性と言う点で問題が残るが、杯や脚が直線的に広がる大型の高杯、多量の小型壺、宇田型甕にかなり形態の接近したS字甕D類の存在など、4期(古)の時期の特徴を備えている。有段口縁壺、文様の退化した柳ヶ坪型壺の存在も同期の特徴である。3-SB01上層の土器群もほぼ同じ時期と考えて良い。名古屋市内の遺跡では、曾池遺跡住居1(注2)や見晴台遺跡OJ04号住居(注3)が近い時期であろう。また、城遺跡の環濠上層出土遺物(注4)も近い時期であろう。しかし、高杯に杯部が内湾するもの、碗状を呈するものはなく、4期(新)以降の土師器は見られない。

一方、須恵器も4期(新)や5期(宇田式期)の前半に相当するような資料は存在しない。何れもH61号窯やH44号窯を指標とする時期であり、土師器のみの時期とは隔たりがある。須恵器と共伴する土師器については、基本的には甕のみとなっている。甕では、宇田型甕がまとまって出土した点が注目される。この宇田型甕は、形態から見ると口縁が立ち気味になる後出のものであり、濠の上層から出土したS字甕D類との隔たりは大きい。つまり、土師器も4期(新)や5期前半に相当する資料が欠落するのであり、三王山遺跡の古墳時代集落はその時期に一度断絶していると考えてよい。

鳴海丘陵では、S字甕はD類が清水寺遺跡でまとまって出土している(注5)ほか、鳴海廃寺で宇田型



第157図 山田氏採集資料

甕が出土（注6）しているが、城遺跡や三王山遺跡の例からは、S字甕（字田型甕を含む）が甕の主体となる事はなかったであろうと推測される。今回三王山遺跡で字田型甕が出土したが、堅穴住居やその貯蔵穴と思われるピットからは出土しなかった点は注意しておく必要がある。

なお、本書のはじめに述べた山田氏の採集資料（第157図）は、4期と思われる土師器高杯と5期（後半）に伴う須恵器が含まれており、これが共存する可能性は低い。つまり、二時期のものを含んでいるのであり、同一地点で採集されたものではあるが、一括とは考えない。

なお、4次調査で出土した字田型甕について、その胎土の特徴を明らかにすべく分析を実施した。比較資料として、他遺跡の字田型甕、D類以前のS字状口縁六付甕についても行った。分析の結果は付録4として掲載した。（村木）

（注1）村木 誠 「名古屋地域の土師器について」 『埋蔵文化財調査報告書24 伊勢山中学校遺跡（第5次）』 名古屋市教育委員会 1996

（注2）村木 誠 『曾池遺跡』 名古屋市教育委員会 1996

（注3）山田龍一 『見晴台遺跡第35次発掘調査』 名古屋市教育委員会 1996

（注4）伊藤正人 『鳴海城・城遺跡発掘調査の概況』 名古屋市教育委員会 1991

（注5）野口孝子 『清水寺遺跡第5次発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会 1997

（注6）名古屋市教育委員会 『鳴海康守発掘調査報告書（圓隆寺・東海銀行地点）』 1985

土製模造品

三王山遺跡の環濠集落の内部からは銅鐸形土製品をはじめとして、土製模造品が多く、しかもまとまって出土した。4-SK12からは銅鐸形土製品、船形土製品、手捏ね土器が出土している。銅鐸形土製品は、三王山遺跡の2例を加えて、名古屋市内では8例となった。見晴台遺跡、瑞穂遺跡など後期の環濠集落からも出土しており、普遍的な祭器として位置づける事ができるだろう。三王山遺跡の2例は対照的で、写実的な大型品と形だけを模した小型品が存在している。写実的なものの存在は、銅鐸の存在を抜きにはあり得ないものであろう。銅鐸形土製品から銅鐸を考えるのは本末転倒であるが、加藤安恒氏が述べるように（注1）、中期末までに銅鐸の埋納が終了したわけではなく、後期の時点で銅鐸が存在したことは疑いないだろう。ただ、三王山遺跡の銅鐸形土製品が破片であることを重視するならば、あるいはこれも銅鐸形土製品のマツリの否定として解釈する余地はあるのであるが、このことは、後期の方形周溝墓出土の可能性が高いと言われる見晴台遺跡例についてもあてはまる。

船形土製品は、久保寿一郎氏の集成（注2）から見ても類例の多いものではない。久保氏は、土製船形模造品の出土する遺跡について、海浜に近いところに立地し、海を直接生産の場とする人々のマツリに用いられたのではないかと述べているが、確かに弥生時代には三王山遺跡から近いところ海岸線があり、海浜に近いという立地はあてはまる。貝殻の出土も多く、河口から内湾部での漁撈も行っていただろう。

ところで、伊勢湾沿岸の銅鐸形土製品を集成した木村有作氏は、銅鐸形土製品の出土は、旧海岸線に近い遺跡に多い、と指摘している（注3）。内陸部の集落の調査例が少ない現状では、その分布がみかけに過ぎないのかもしれないが、銅鐸形土製品の分布が海岸線に近い場合が多い理由としては、海と関わるマツ

りに銅鐸形土製品が用いられたか、あるいは海岸線に近い集落だけが、マツリの中身に関わらず（海とは関わらない）マツリを共有したかが考えられる。どちらとも決しがたいが、前者の場合、すなわち銅鐸形土製品が海と関わる祭器である可能性があるとなると、舟形土製品と相伴しているのも偶然とは言えないだろう。

次に、手捏ね土器は、法量や小さな台をもつ点で、各務原市加佐見山1号出土のものに類似しているように見える（注4）。ただし、三王山遺跡のものはタタキ痕をもたない。赤塚次郎氏は加佐見山の墳墓出土のものを、山中式期の祭祀道具の一つと位置づけ、瀬戸内、大阪湾地域の製塩土器の系譜をひくものである可能性を指摘する（注5）。そうだとすれば、三王山遺跡の集落でも、墳墓と同じマツリが行われた可能性があり、更にこの手捏ね土器についても海との関わりがあることになる。もちろん、これについては祭器の系統とマツリの内容がまったく関わらない可能性もある。内陸部に位置する墳墓のマツリが海と関わりをもつのも想定しにくい。

この土坑から出土した土製品を使って行われたマツリの内容は知る由もないが、舟形土製品が海と関わりとすることに異論は少ないだろう。その他の遺物については、海との関わりを想定できなくもないといった程度の理由から、当時三王山遺跡の周辺にあったであろう海との関わりを想定しておきたい。

その他、中世の溝からの出土であるが、盾形土製品も出土した。この例も、実用品をミニチュア化し、土で作ると言う点で、同じ脈絡にあるものと考えて良いだろう。こうした土製品の存在は、遺跡には残らなかった武具の存在を示唆している点でも重要である。

また、ミニチュア土器もまとめて出土した。ミニチュア土器はこれまでも見晴台遺跡などの環濠集落で出土例が多く見られたが、環濠や包含層からの出土例が多く、エピソード的に扱われてきた。しかし、今回は、ほぼ当時の土器様式に対応する器種がそろって一つの土坑から出土しており、これも何らかのマツリの痕跡と考えてよいだろう。出土したピットが竪穴住居の貯蔵穴ではないかと考えたのと、当時の住居一軒に存在したであろう土器がそろっていることから、住居単位で行われたマツリの可能性も考えたが、そうであるならば、もう少し他のピットからも出土するであろう。マツリの性格については今後の類例の増加を待ちたい。

マツリの性格については、それぞれ異なっているのかもしれないが、これだけの土製模造品が出土したことは、弥生時代後期、山中式期には、マツリの性格を超えて、土製のミニチュア品を祭器としていた、という点は認めてよいだろう。（村木）

〔注1〕加藤安信 「伊勢湾地域の弥生時代後期社会」『伊勢湾と古代の東海』 古代王権と交流4 名著出版 1996

〔注2〕久保寿一郎 「舟形模造品の基礎的研究」『東アジアの考古と歴史』 下 1987

〔注3〕木村有作 「伊勢湾周辺における銅鐸形土製品について」『考古学と信仰』 同志社大学考古学シリーズIV 1994

〔注4〕渡辺博人 「加佐見山1号墳発掘調査報告書」 各務原市文化財調査報告書第7号 各務原市教育委員会 1990

〔注5〕赤塚次郎 「瑞穂寺山山頂墳と山中式式」『弥生文化博物館研究報告』 第1集 大阪府立弥生文化博物館 1992

石器

1 はじめに

三王山遺跡は、名古屋市都市公園地内にあたり、その整備などに伴ってこれまで発掘調査が5回行われてきた。その結果、弥生時代後期の環濠集落に関係する遺構、遺物や方形周溝墓、古墳時代、戦国時代の遺構が主に検出された。

弥生時代の遺構からは、磨製石斧（24～27）や硬玉製勾玉（28）など、遺構の時期と結び付く石製遺物も出土しているが、縄文時代（中期以前か）に比定されるサヌカイト製石匙（15）のほか、剥片などの石器には弥生時代以前に属すると思われるものも検出されている。1次調査地点では、縄文時代晩期の土器片や土偶脚片が検出されているが、他の地点でも晩期土器片がわずかに検出されている。ただし、縄文時代の遺構はこれまでに検出されていない。

当遺跡の約100～300m南方の同じ丘陵上に立地する縄文時代などの遺跡からは、ナイフ形石器（註1）など旧石器時代の石器が採集されていて、当遺跡地内においてもナイフ形石器が採集されている（註2）ので旧石器時代以降の資料が含まれる（散布する）ことは十分に考えられる状況にある。

名古屋市東南部の丘陵および台地では、これまで単独の地表採集が多いものの、10地点以上の遺跡からナイフ形石器、角錐状石器などが検出されている。当地では、旧石器時代および縄文時代の包含層（文化層）が層的に残存しにくい環境下にあったと思われる、今後も良好な資料がそれほど多くは望めないと思われるので、三王山遺跡の各調査地点およびその付近で検出された石器（註3）をまとめて紹介し、さらに1次調査以前に表面採集された山田正夫氏のコレクション（名古屋市民考古資料館蔵）の石器（36～41）も図示した。そして、これらの資料から見い出せる特徴を少しふれてみたい。

2 剥片・石核

当遺跡で検出された石器群は、時期の確定できるものがないが、剥片、石核には、遺跡が立地する丘陵を形成する地質（おもに八事層）のうち礫層（チャート層を主体とする）中のチャート礫を素材としたと思われるものが目立つ。石核からは、概ね5cm以下の比較的小型の剥片を作りだしていることに特徴がある。

剥片は、サイズが、長さ2～4cm、幅1.3～4cmの範囲であり、平面形は、不整形な三角形や四角形のものが多い。打面には、石核の素材となった円礫の表皮が残り、原礫面をそのまま叩いているものが多い（4、7、8、9、10、16）。また、同一の剥離作業面で打面を転位しながら剥離しているものもある（8、10）。

剥片および石核から推定される素材の原礫の大きさは、鶏卵大か拳大ほどの礫を使用したと思われる。現在でも、これ以上に大きい素材は、当地の礫層中にはほとんど見られず、しかも石器素材に適した良質のチャートはあまり多くない。このような状況から在地産のチャートはもっぱら小型の打製石器の素材として用いられたものと思われる。そして、他地域で産出する石材の石器と併用されていたものと思われる。その所属時期については明確にし得ないものの、当遺跡の主体となる弥生時代後期（山中式）以降は石斧、砥石、叩き石以外の石器（特に打製石器）が激減する時期でもあり、このようなチャート製の小型剥片については、該期のものとは考えにくい。

また、当遺跡のチャートの剥片のいくつかは、石鏃など小型の石器をつくる素材であったと想定させるものがあり、石鏃の未成品かと思われる資料（19）もあるが、発掘調査では下呂石製の石鏃（22）が1点検出されただけであった。

3 彫器 (1)

不整形な剥片の先端部から側縁部にかけて刃状に整形し、先端部に2方向からの短めの極状剥離を施した小型の彫器である。同様の彫器は、愛知県春日井市上八田町遺跡で採集されていてナイフ形石器に伴うようである(註4)。名古屋市内では数少ない器種である。

4 打製石斧 (23)

3次地点で5 DGr.の検出作業の際出土したもので、石質は安山岩である。表面の風化が激しく、粉をふいたようであり黄灰色をなす。新鮮な面の岩石の色は不明であるが、黒灰色を呈すると思われる。一枚の剥離面を打面にした縦長の剥片を素材とし、腹面から背面にむけての両側縁の剥離や、中央部に稜線をなすような剥離によって横断面が三角形をなしている。腹面には、ほとんど加工が施されていない。刃部は、まだ成形されていない状態であり、未完成の資料と思われる。風化の程度や加工の状況、形態からみると縄文時代草創期の神子柴型石斧に類似している。

5 石匙 (13,20)

13は、礫表面があばた状に風化する奈良県二上山付近に産出するサヌカイト(註5)と思われる石質の剥片を素材とした比較的大型の石匙である。

20は、チャートの厚手の剥片を素材としたもので、つまみ部のくびれが小さい。

6 勾玉 (27,28)

2点出土している。(27)は、2次調査のP19から出土した。下端部が折損していたもので、伴出遺物が無く、土器からの勾玉の帰属時期は不明であるが、碧玉質(緑色凝灰岩か)であることや、形状がやや「コ」の字形になりそうなことから古墳時代の後半にあたる可能性が高いと思われる。

(28)は、3次調査の環塚(SD06)から出土した。質の良い硬玉(翡翠)製の「半球状勾玉」で、層位および出土土器などから弥生時代後期(山中式期)のものであると思われる。

7 石器石材について

三王山遺跡の打製石器の石材には、遺跡付近で調達できるチャートの円礫と遠隔地の石材である岐阜県の下呂石(ガラス質石英安山岩)、愛知県東三河地方産と思われる流紋岩質溶結凝灰岩、二上山系のサヌカイト、その他(安山岩、石英など)があった。小型の剥片類はチャートがほとんどであり、比較的大型の石器、剥片類には遠隔地のものが持ち込まれているようであった。ただし、石器の所属時期が明確ではないので、使用された石材(石器素材や半製品または製品)の入手先、石器の種類、割合についての時期別資料化が困難である。

2次地点のSK18(古墳時代の遺構)からは、背面が礫表皮となる長さ約10cmの剥片(11)が出土しているが、この石質は上記した打製石斧(23)と同一の安山岩と思われ、風化の程度も同様である。また、4次地点でもやはり同質の石で、薄手でやや幅広い石刃状の縦長剥片(3)が検出されている。

これらと同様の安山岩を使用した石刃状の剥片が、天白川を挟んだ対岸の台地に位置する南区の扇田町遺跡からも検出されていて、やはり風化が進んでいる。この状態の石質は、ここにあげた資料のほかは、これまで名古屋の縄文、弥生時代の石器ではあまり検出されていないものである。この安山岩の原産地は現在のところ不明である。これらの安山岩製石器には、IH石器時代に属するものがあると思われる。

また、弥生時代後期の土器に伴うと思われる磨製石斧のうち25,26の石質は、三重県鈴鹿山脈付近を産出

地とするハイアロクラスタイト（玄武岩の一種）とのことである（註6）。弥生時代中期の朝日遺跡（愛知県清洲町ほか）では、ハイアロクラスタイトの磨製石斧の未成品が60点以上出土しているが、これらには破損品を再生する過程の資料と、ある程度加工された未完成のものが外から持ち込まれ、集落で製品として仕上げる段階の半成品資料とが考えられている（註7）。朝日遺跡という当地の中心的な拠点集落では、特定の原産地からもたらされた石斧の半成品石材を扱う専用工房の存在も想定されよう。

ハイアロクラスタイト石材原産地付近の工房遺跡の例には、三重県員弁郡宮山遺跡（註8）があり、こうした工房遺跡から石斧の完成品が直接各地へまわったのか、または半成品が朝日遺跡などを経て完成されたハイアロクラスタイト材の石斧は、弥生時代中期以降の伊勢湾から三河湾周辺の弥生集落でも出土しており（註9）、この地域の中期には特定の素材を使用した製品の供給システムができていたことを示している。そして、三王山遺跡の磨製石斧は、後期になっても同じような背景があったことを示唆している。なお、三王山遺跡の北西約1.2kmの見晴台遺跡でも、竪穴住居跡の床面から山中式の煮口部片に伴って、ハイアロクラスタイト製と思われる柱状片刃石斧の破片が検出されている（註10）。

8 火打石について

図の31～35は、各個体の剥離の状況や火打金との接触による特有の使用痕から火打石と考えられる資料である。調査区および付近で採集された。5点とも江戸時代後期以降に採取、販売されたと思われる岐阜県養老瀧付近に分布するチャートと同質のものである（註11）。火打石の採集地付近には、江戸時代の陶磁器片も少量散布している。34,35は鋭い稜線を再生するために割った破片であろう。（水野裕之）

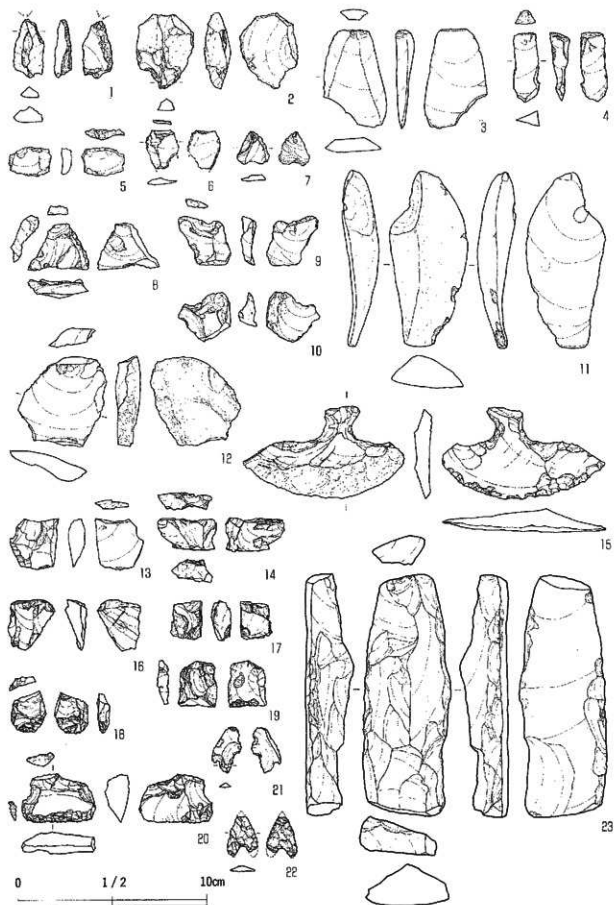
註

- 川合 剛 1997 「第一章 旧石器時代」『新編 名古屋史 第一巻』名古屋史
本誌では、鳴海丘陵に立地し、三王山遺跡に近い緑区清水寺遺跡、鉢ノ木遺跡、天白区北沢遺跡などのナイフ形石器を紹介している。
- 川合 剛 1996 「愛知県旧石器出土地名表」『名古屋博物館研究紀要 第19巻』名古屋博物館
- 三王山遺跡の石器の一部については、鈴木忠司氏（京都文化博物館）からご教示を得た。
- 安達厚三、川合剛 1992 「春日井市上八田町遺跡採集の旧石器」『名古屋博物館研究紀要 第15巻』名古屋博物館
- 筆者の内服観察による。
- （財）愛知県埋蔵文化財センターの堀木真美子さんにご教示を得た。
- 石黒立人、堀木真美子、五藤そのみ 1994 「朝日遺跡の弥生時代石器をめぐって」『朝日遺跡Ⅴ（上巻編・総論編）』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 竹内英昭 1996 「宮山遺跡（第1次調査）C地区」『東海環状自動車道 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター
このC地区からは、近辺にある豊富なハイアロクラスタイト材を使った弥生時代中期中葉の磨製石斧未成品が加工工具とともに70点検出されている。大半は両刃石斧であるが、大小の偏平片刃石斧や柱状片刃石斧も製作されていたようである。
- 註7による。
- 見晴台遺跡第12次発掘調査のRG5号住居跡出土。ただし、これも筆者の内服観察による。
- 水野裕之 1992 「火打石一名古屋市の遺跡出土品から」『関西近世考古学研究会』関西近世考古学研究会

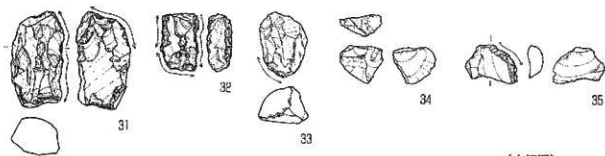
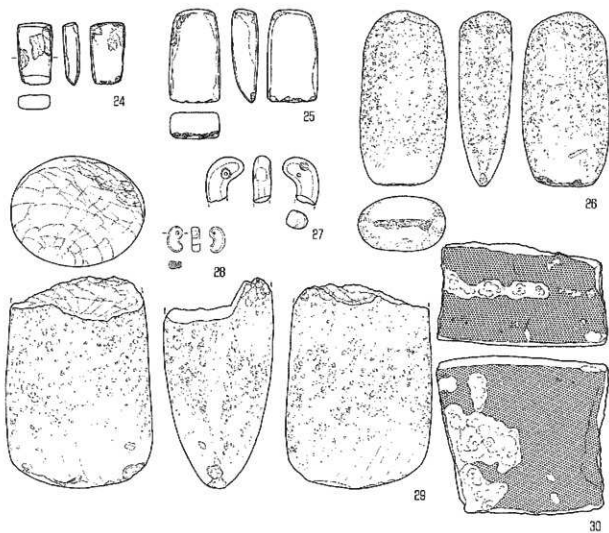
図・番号	出土位置	器種	石質	時期	備考
1	5次・深上面	彫器	チャート	旧石器	先端部に2方向からファセットがはいる
2	2次・SD01横山	石錐?	〃	旧石器又は縄文	彫器の一種かもしれない
3	4次・ ^{図1, 2} 深上面位	剥片	安山岩	旧石器?	石刃状、風化が激しい
4	3次・表採	〃	チャート	縄文?	礫表皮を打面とする
5	3次・調査区検出	〃	〃	〃	
6	2次・SD05	〃	〃	〃	横面右縁に微細な割傷痕
7	2次・北平検出	〃	〃	〃	礫表皮が背面の一部に残る
8	2次・SD14	〃	〃	〃	礫表皮を打面とする
9	3次・表採	〃	〃	〃	〃
10	3次・4B地山面	〃	〃	〃	礫表皮を打面とし、打点の位置を多方向に変える
11	2次・SK18	〃	安山岩	〃	風化が激しい。凹凹礫表皮が背面に残る
12	5次・溝1区上位	〃	当所産 礫岩(燧石)	〃	
13	3次・表採	〃	チャート	〃	
14	2次・SK18	〃	〃	〃	修理面が打面、底面となる石核による巾広の剥片
15	2次・SK12	石匙	サヌカイト	縄文	
16	2次・8J地山面	石核	チャート	縄文?	礫素材で表皮をそのまま打面とする
17	2次・北平検出	楕円石器	〃	〃	
18	2次・表採	〃	〃	〃	
19	2次・SK14	2次加工のある剥片	〃	〃	石核の未成品か
20	1次・SK08(SZ01)	石匙	〃	縄文	素材となった剥片は礫表皮を打面とする
21	3次・北西検出	石錐か	安山岩(下呂石)	縄文?	
22	3次・4E検出	石錐	安山岩	〃	
23	3次・5D検出	打製石斧	安山岩	縄文	風化激しい。石質は、No11の剥片と同
24	5次・溝南前	扁平片刃石斧	凝灰岩か	弥生後期	
25	4次・L2SK48	〃	バゾアラサイト	〃	
26	4次・P880	磨製石斧	〃	〃	体部は、敲打痕のまま、両刃
27	2次・P99	勾玉	緑色凝灰岩か	古墳時代	碧玉質、下半部を折損
28	3次・SD06, 2層	〃	菊華	弥生後期	環壕地上、「半梨状勾玉」
29	4次・J5P-317	太型蛤刃石斧	安山岩	〃	体部は、敲打痕が残る
30	5次・溝5区数下層	砥石	石英斑岩か	〃	図中のトーンは、磨耗部分を示す
31	3次・7DG.	火打石	チャート	江戸後期～明治	岐阜県美濃産のチャートと思われる
32	2次・調査区北平	〃	〃	〃	〃
33	2次・調査区中央	〃	〃	〃	〃
34	2次・表採	〃(打欠片)	〃	〃	〃
35	〃	〃	〃	〃	〃
36	表採	石錐	サヌカイト	縄文又は弥生	「山田正夫氏コレクション」
37	〃	〃	安山岩(下呂石)	〃	〃 未成品か
38	〃	剥片	石英(水晶)	〃	〃
39	〃	2次加工のある剥片	安山岩(下呂石)	〃	〃 円礫素材で表皮を打面とする
40	〃	剥片(部分磨製)	チャート	〃	〃 磨製石核の未成品か
41	〃	2次加工のある剥片	〃	〃	〃

[表 3, 11, 12, 23, 25, 26, 29の石質については、岐阜県埋蔵文化財センターの榎木真矢子さんのご教示による]

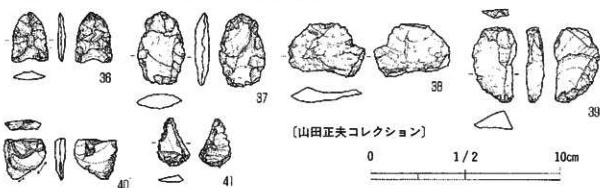
表3 三王山遺跡の石器



第158図 三王山遺跡の石器(1)



[火打石]



[山田正夫コレクション]

0 1/2 10cm

第159図 三王山遺跡の石器(2)

自然遺物一貝層ブロック・サンプリングの分析結果

1 はじめに

三王山遺跡では2次・3次・5次の発掘調査において貝層が検出され、それぞれブロック・サンプリングを行った(第160図・写真1)。本稿ではそれぞれの水洗選別の結果を報告する。なお遺構についての詳細は前述の各報告を参照された。

ブロック・サンプリングは各発掘調査ともに、タテ30cm・ヨコ30cm・厚さ10cmの大ききで実施した。また、水洗選別は2次調査分を吉田裕子氏が、3次・5次調査分を筆者がそれぞれ担当した。その結果以下の報告の通り、自然遺物と人工遺物を検出した。各サンプリングとも、自然遺物の大半を占めるのは貝類であり、人工遺物は骨角器や玉などの検出も期待されたが、今回は土器片のみが検出された。

2 水洗選別の結果

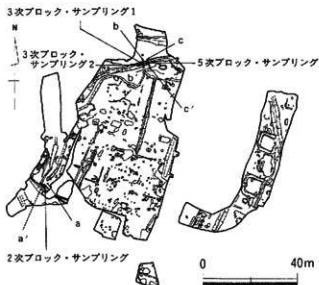
まず、各ブロック・サンプリングで検出した貝類の種名をまとめて挙げておく(表4)。合計で10種と5科(種の特定できないもの)である。この他に陸産微小貝を検出している。

腹足綱	Class GASTROPODA
アカニシ	<i>Rapana thomasi</i> CROSSE
フトナタリ	<i>Cerithidea rhizophorarum</i> A. ADAMS
イボウミナ	<i>Batillaria zonalis</i> BRUGUIERE
アケギガイ科	Family Muricidae
ウミナナ科	Family Potamididae
斧足綱	Class PELECYPODA
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> PRIME
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> RÖDING
オキシジミ	<i>Cyclina oirentalis</i> SOWERBY
シオフキ	<i>Macla veneriformis</i> REEVE
オオノガイ	<i>Mya (Arenomya) arenaria oonogai</i> MAKIYAMA
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i> THUNBERG
ハイガイ	<i>Anadara (Tegillarca) granosa bisenensis</i> SCHENCK et REINHART
シジミガイ科	Family Corbiculidae
マルスダレガイ科	Family Veneridae
フネガイ科	Family Arcidae

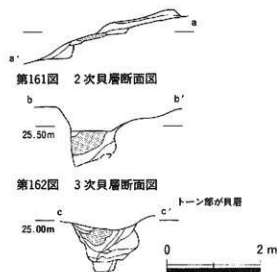
表4 貝類の種名

2-a 2次ブロック・サンプリングの結果

サンプリングはSK02の6層で実施した(第161図)。水洗選別の結果(表5)、自然遺物の大半が貝類である。その他に動物の骨(獣骨か魚骨かは不明)などがある。貝類は10種1科を検出し、その90%以上は斧足綱(二枚貝類)である。その中でも、ヤマトシジミが81.72%と圧倒的な量で、ハマグリが7.11%、シオフキ1.52%、以下オオノガイ、マガキ、オキシジミ、ハイガイと続く。腹足綱(巻貝類)は約6%であり、アカニシが2.87%で最も多く、フトナタリ、イボウミナと続く。



第160図 貝層ブロック・サンプリング位置図



第163図 5次貝層断面図

2-b 3次ブロック・サンプリングの結果

サンプリングはSD06のI b層(第162図), 2ヶ所(サンプル1,2)で実施した。サンプル1,2ともに, 自然遺物と人工遺物が検出され, 自然遺物のほとんどが貝類で, 人工遺物は土器片であった(表6)。

まずサンプル1の自然遺物, 貝類は7種4科を検出し, 斧足綱が99.37%, 腹足綱が0.65%である。さらにヒメコハクガイを含む陸産微小貝を検出した。種別ではヤマトシジミが81.90%と最も多く, ハマガリが2.05%, オオノガイ, ハイガイ, マガキと続く。腹足綱は, 個体数がカウント可能なものは1種のみでイボウミナ, 他に個体数はカウントできないがアカニシ片多数を検出した。また動物遺体として獣骨を含む骨を検出した。獣骨の種類や部位は不明である。

次にサンプル2の自然遺物についてだが, こちらもそのほとんどを貝類が占め7種4科を検出し, 他に動物遺体がある。貝類は斧足綱が96.29%, 腹足綱が1.99%であった。最も多いものはサンプル1同様, ヤマトシジミの77.19%で, ハマガリ, オオノガイ, マガキ, オキシジミ, ハイガイと続く。腹足綱ではアカニシが1.19%とウミナシ科(種特定できず)が0.27%検出されている。この他に陸産微小貝がある。また, 魚骨を1つ検出した。魚の種類は不明である。

2-c 5次ブロック・サンプリングの結果

5次発掘調査区は前述の通り3次発掘調査区に隣接しており, 貝層は3次調査におけるSD06の続きの層から検出されている(第163図)。ブロック・サンプリングを実施した場所も3次発掘調査

	種名	左殻/右殻	最少個体数	%
貝	アカニシ		17	2.87
	アカニシ片		1	
	フトヘナタリ		10	1.69
	フトヘナタリ片		+	
足	イボウミナ		4	0.68
	イボウミナ片		+	
	不明のもの		4	0.68
	小計		35	5.92
斧	ヤマトシジミ	457/436	457	81.72
	左右の分からないもの	52±2	26	
	ハマガリ	39/42	42	7.11
	ハマガリ片		+	
足	シオフキ	9/8	9	1.52
	シオフキ片		-	
	オオノガイ	2/5	5	0.85
	マガキ	4/4	4	0.68
貝	マガキ片		-	
	オキシジミ	1/2	2	0.34
	ハイガイ	-/1	1	0.17
	ハイガイ片		+	
骨	マルステレガイ科	9±2	5	0.85
	左右の分からないもの	9±2	5	0.85
	不明のもの(主産のみ)		+	
	小計		556	94.09
合計		591	100.01	
骨	微小貝		4	
	骨		1	
	炭化物		+	
	炭化植物		+	
	土器片		34	

表5 2次サンプリング検出遺物構成表

種名	サンプル1			サンプル2		
	左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%
取						
アカニシ		+		9		1.19
アカニシ片				-		
足						
イボウミニナ		1	0.13			
ウミニナ料		2	0.26	2		0.27
不明のもの		2	0.26	4		0.53
小計		5	0.65	15		1.99
網						
ヤマトシジミ	591/599	599	638	364/512	564	582
左右の分からないもの	77±2	39		36±2	18	
ハマグリ	16/13	16	2.05	23/14	23	10.48
オオシジミ				-/1	1	0.13
オオノガイ	5/1	5	0.64	6/3	6	0.80
ハイガイ	1/1	1	0.13			
ハイガイ片					+	
マガキ	1/1	1	0.13	2/1	2	0.27
マガキ片					1	
足						
シジミガイ料	36/37	37	100	48/31	48	79
左右の分からないもの	125±2	63		61±2	31	
マルスグレガイ料				4/4	4	
左右の分からないもの	4±2	2	0.26	10±2	5	9
フネガイ料(主歯のみ)		2	0.26			
フネガイ料					+	
不明のもの(主歯のみ)		9	1.16	47±2	24	3.18
不明のもの					+	
小計		774	99.37		726	96.29
腹足綱 or 斧足綱?					13	1.72
小計					13	1.72
合計		779	100.02		754	100.00
磯小貝		11			5	
ヒメコハクガイ		1				
骨		4			3	
うちら骨		1				
うちら魚歯					1	
炭化物		+			+	
不明のもの		5			10	
土器片		37			38	

表6 3次サンプリング検出遺物構成表

区のおすぐ近くである。

水洗選別の結果、3次の結果と同様に自然遺物と人工遺物が得られた(表7)。自然遺物の主なものは貝類で、7種4科である。斧足綱が98.79%、腹足綱が1.22%である。最も多いものはここでもヤマトシジミの82.50%であった。腹足綱では、個体数をカウントできるものはアカニシのみであるが、フトヘナタリ片が確認できた。この他にオカチョウジガイ3つを含む陸産微小貝を検出した。

3 おわりに

三王山遺跡の貝層は残存状態が悪く、水洗選別も困難なものであったが前述の結果を得ることができた。三王山遺跡では約8割から9割以上をヤマトシジミが占める。この他に検出されたハマグリ、アカニシ、マガキなども生息水域が内湾水のものばかりで、地理的位置は湾中央部から河口に

種名	左殻/右殻	最少個体数	%
取			
アカニシ		5	0.68
アカニシ片		+	
足			
フトヘナタリ片		+	
アクキガイ科		+	
ウミニナ料		+	
不明のもの		4	0.54
小計		9	1.22
網			
ヤマトシジミ	603/546	603	608
左右の分からないもの	9±2	5	
ハマグリ	50/56	56	7.60
オオノガイ	2/2	2	0.27
マガキ	1/-	1	0.14
足			
ハイガイ片		+	
シジミガイ料	32/21	32	80
左右の分からないもの	55±2	28	
マルスグレガイ科			
左右の分からないもの	2±2	1	0.14
小計		728	98.79
合計		737	100.01
磯小貝		+	
オカチョウジガイ		3	
魚骨?		3	
うちら骨?		2	
炭化物		+	
不明のもの		19	
土器片		20	

表7 5次サンプリング検出遺物構成表

水城	沿岸水		内湾水					
	湾の外側		湾口部	波食台	湾中央部		湾奥部	河 口
地理的位置			砂礫質	岩礁	砂質	シルト～泥質	砂泥質	砂泥質
底質	岩礁	砂泥質	砂質	砂礫質	岩礁	砂質	シルト～泥質	砂泥質
潮間帯							干潟群集 マヅキ ウネナシ トマヤガイ ヘイガイ オキシロシ イボウミヅナ	感海域群集 ヤマトシジミ カフゼンシヨウ ヌマゴドギガイ フトヘナダリ
	外海岩礁性群集 サザエ アワビ クボガイ パテイラ カコボウ	沿岸砂底群集 ベンケイガイ チョウセンハマグリ ダンベイキサ コトマガイ ワスレガイ		内湾岩礁性群集 オオヘビガイ キクサルガイ マガキ 穿孔貝類		内湾砂底群集 (ハマグリ) カガミガイ (シオフキ) イボキサゴ アサリ サルボウ (オオノガイ)	内湾海底群集 ウラカガミ イヨスダレ アカガイ トリガイ シズクガイ (アカニシ)	浅海群集 チグサガイ シキハマツボ マキミノ スズメモツボ
上部浅海帯	沿岸砂泥底群集 イタヤガイ マツヤマワスレ スダレガイ ヤツシロガイ ナガニシ チングニシ		砂礫底群集 イワガキ イタボガキ ウチムラサキ イボキサゴ				内湾停滯域群集 シズクガイ チノノハナガイ ケシトリガイ ヒメカノコアサリ マメウラシマ	

※この他に産産微小貝を検出

表8 検出貝類の生息環境と群集 (註)

至る(表8)。当時、三王山遺跡からあまり遠くないところに内湾、干潟、そして河口が存在したことの裏付けの一つとなるであろう。また、貝が当時の人々の食生活の一端を担っていたことは想像に難くないであろう。

今回の貝層ブロック・サンプリングの水洗選別、木桶の執筆にあたり、吉田裕子氏に二指導・ご教示をいただいた。木筆ながら深謝申し上げます。(稲田望子)

註

松島義章 「日本列島における後氷期の浅海性貝類群集」『神奈川県博物館研究報告自然科学』 15号 1984 所収の表「内湾および沿岸における生息環境と貝類群の区分」に加筆

参考文献

江坂輝彌 「化石の知識 貝塚の貝」 考古学シリーズ9 1983 東京美術



写真1 ブロック・サンプリング状況

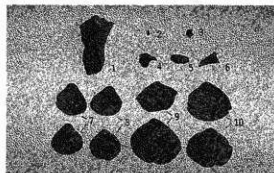


写真2 貝類 (5次ブロック・サンプリング) (S=1/4)

- 1: アカニシ 2: オカチウワシガイ 3: フトヘナダリ
- 4: オオノガイ高殻 5: オオノガイ心殻 6: マダカ高殻
- 7: ヤマトシジミ高殻 8: ヤマトシジミ心殻
- 9: ハマガリ高殻 10: ハマガリ心殻

鳴海丘陵の遺跡の動向と三王山遺跡

三王山遺跡の調査成果のまとめの最後に、今回明らかになった各時期の遺構、遺物を鳴海丘陵上の他遺跡との関わりの中に位置づけてみたい。

まず弥生時代であるが、第一に考えるべきは隣接する清水寺遺跡、谷を隔てて立地する上ノ山遺跡との関わりである。清水寺遺跡では、中期末の住居が見つまっているほか、中期末から後期初めの方形周溝墓もある(注1)。しかし、これまでの調査では後期前半、山中式の顕著な遺構、遺物は見られない。ちょうど三王山遺跡が環濠集落であった期間の遺構、遺物が存在しない事になる。清水寺遺跡は大きな遺跡であるから、これまでの調査だけからその時期を決める事は慎重でなければならないし、地理的にも数百m離れ、間に小さな谷地形もある。更に、三王山遺跡で環濠集落に先行して集落があったとすれば、清水寺遺跡とは別の集団が営んだ可能性も大きくなるが、清水寺遺跡は、鳴海丘陵の拠点集落とも見て良い集落であり、三王山遺跡と連動していることも十分考えなければならぬだろう。

一方、上ノ山遺跡では、後期前半の竪穴住居が見つまっている(注2)。遺物が細片のため、時期の特定は困難であるが、三王山遺跡が環濠集落であった時期と重なる可能性が高い。上ノ山遺跡周辺は、旧地形がまったく残っていないため推測になるが、三王山遺跡と同様に丘陵の先端にあたる。遺構は竪穴住居が見つまっているだけで、性格を考える情報が少ないが、環濠集落である三王山遺跡と300m離れて存在する同時期の集落の存在は興味深い。時期が三王山遺跡と重なる事と、出土遺物が少量である事なども考え合わせると、知多半島の中ノ池遺跡群のような、高地性集落の可能性も考えてみる必要がある。

次に、同じく弥生時代後期の環濠集落である城遺跡との関わりを考えたい。城遺跡は、環濠がわずかに見つまっているのみで、集落の内部は不明である。しかし、環濠からは、埴徳期の特徴である長脚の高杯が出土しており、三王山と近い時期に環濠が機能を停止している可能性が高い(注3)。この両遺跡は、距離的にも1.5kmほどしか離れておらず、互いに見渡せる距離にある。

城遺跡との関わりを考えるために、城遺跡の遺物を少し紹介しておく(第164図)。城遺跡では、環濠から出土する遺物の大半が、杯部に対して脚部が極めて小さい高杯や、貝殻による連弧文を施した瓢盥に代表されるように、三王山遺跡の環濠出土遺物より後出の傾向を示す。また、長脚の高杯Fは、三王山遺跡の高杯の組列では6にあたり、三王山遺跡の濠から出土する最古の遺物からは遅れている。城遺跡の濠では、脚部が短小化した高杯Fと連弧文のあるヒサゴ壺など(写真4)が比較的上位から出土する一方、長脚の高杯F(写真3)は下位から出土するなど、時間の経過にあわせた土器の変化は観察されるが、はっきり分離できるような出土状態ではない。そのため、長脚の高杯Fに伴う土器が不明であり、編年のな位置は不明と言わざるを得ない。現状では、濠から出土する土器は三王山遺跡の方がいくらか古いように見えるが、環濠の場所によっても出土遺物の時期差があるということはあることで、これが実態を表しているとは限らない。現状の資料では、三王山遺跡と城遺跡が同時に存在したことが推定できるに止まる。

三王山遺跡の土器で④とした時期の遺物は間違いなく両遺跡から出土しているが、高杯の脚部の形が、三王山遺跡では湾曲が強いのに対し城遺跡は直線的である事など、土器の細部の特徴はあまり似ていない。この時代の土器製作のあり方が想像でしかない以上、こうした違いが何を反映しているのかも想像の域を出ないが、接近して営まれているにも関わらず、土器の特徴が異なる点は注意されてよい。

ところで、城遺跡でも三王山遺跡と同様に、濠の最下層には土器が少ない層が堆積しており、その上位

から大量の遺存度の高い土器が出土するのは対照的である。ここでも、三王山遺跡と同様、漆から出土する土器が漆の機能停止後のものだとすると、城遺跡では三王山遺跡より後まで同じ地点で集落を営んでいたと言えるが、何れにしても漆が役割を終えてからも、同じ場所でも集住していたらしい。鳴海丘陵の弥生時代後期の環濠集落は、先に高地性集落の一種という評価がある事を述べたように、社会の動乱を背景とした特殊な集落の形であるかのような理解があるが、必ずしもそうとは言えない事は、漆が埋まってからも同じ場所で同じ形態の集落を営んでいる事からうかがうことができる。

環濠集落という点では、天白川の対岸にあり、今でも三王山遺跡から見渡す事ができる見晴台遺跡との関わりも重要である。見晴台遺跡と三王山遺跡は、環濠が機能していた時期、埋まり始める時期が共通である。これについては、その他の名古屋台地の環濠集落の動向とあわせて付編で考察している。

古墳時代については、三王山遺跡で最も古い4期(古)(松河戸期)に先立つ塔の越期から西北山期の竪穴住居が清水寺遺跡で見つかっている。一方、松河戸期の遺物は見られない。ここでも、三王山遺跡の古墳時代集落と清水寺遺跡のそれが関連している可能性がある。しかし、清水寺遺跡では、古墳時代後期の須臾器が比較的多く出土しており、この時代については両遺跡で集落が営まれているらしい。古墳時代後期に比定できる赤塚古墳、大塚古墳などが三王山遺跡の東方数百mの地点に造営されているが、三王山または清水寺遺跡の集落の住人が葬られた可能性もあろう。

また、城遺跡の環濠の上層からも松河戸期の土器が大量に出土している。こちらでは石製模造品や玉類を伴っている。城遺跡においても、古墳時代の初め～前期の遺物は出土していない。僅かに、隣接する鳴海庵寺から塔の越期に比定される土師器が出土している。三王山遺跡、城遺跡とも弥生時代後期以降松河戸期までの遺物はない。それぞれに近接する清水寺遺跡や鳴海庵寺跡からわずかに古墳時代前期の遺物の出土が見られるが、環濠集落期～環濠埋没期の遺物量に比べると極めて少ない。鳴海丘陵の古墳時代前期の様子は、調査が行われていない遺跡が多い事もあって不明ではあるが、環濠集落が営まれた場所と古墳時代初頭の集落が立地する場所が異なっていることは間違いない。また、遺構が見つかっている遺跡でも密度が高い様子はなく、古墳時代前期には鳴海丘陵の遺跡、遺構自体が減少している可能性が高い。

中世については16世紀代の、織田、今川の勢力が控する地となった後の遺跡については、丹下砦と言われる清水寺遺跡をはじめ、鳴海城、丸根砦、善照寺砦など多くが知られているが、それに先立つ15世紀代の遺跡はあまり知られていない。先に紹介した清水寺遺跡だけでなく、善照寺砦も寺を改築して砦としている事を考えると(注4)、三王山遺跡の15世紀代の遺構群も16世紀に再利用されたことも考えねばならない。4-SD24の上層からは16世紀代の遺物も出土しており、今回検出した遺構の中にも16世紀代の遺構が含まれている可能性もある。しかし、今回報告した15世紀代の遺構が、どういった性格のもので、鳴海丘陵の遺跡群のなかでどのような位置を占めるかは今後の検討を待たねばならない。

三王山遺跡の中世の遺構については、まだ評価が定まらない点が多いが、大規模な溝等をはじめとして、防御性が高い遺構群であることは間違いない。同じ環濠集落である城遺跡の周辺には中世には鳴海城が築かれており、戦国時代には今川氏に属していた事は既に述べた。弥生時代の環濠集落、高地性集落と中世の山城や砦などが重なる場合が多く、弥生時代のそうした集落の性格を考える上で示唆的であることは、森清一氏が指摘しているが(注5)、鳴海丘陵においてもまさにそれがあてはまると言ってよいだろう。三王山遺跡、城遺跡がまさに立地するその場所が中世の戦乱の時代に重要な場所となった事は、弥生時代の

環濠集落も争いを背景として築かれた事を示唆している。(村木)

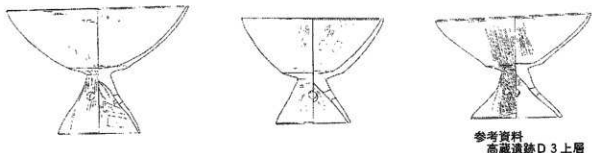
(注1) 野口泰子 「清水寺遺跡第5次発掘調査報告書」名古屋市教育局委員会 1997

(注2) 上ノ山遺跡を調査された飯尾甚之氏からは、当時の野帳を貸して頂くなどのご協力を頂きました。

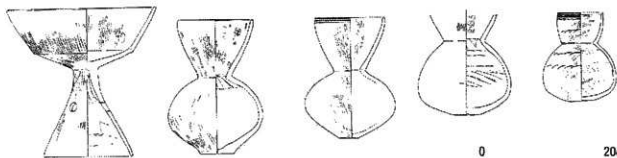
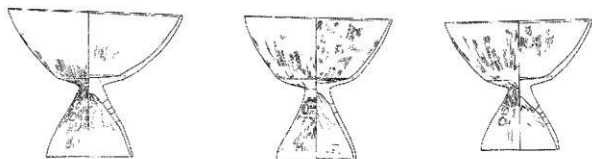
(注3) 伊藤正人 「鳴海城・城遺跡発掘調査の概況」名古屋市教育局委員会 1991

(注4) 千田嘉博 「城館が語る戦国の名古屋」『新修名古屋史』第二巻 1998

(注5) 森 浩一 「高地性集落と倭国の乱」『セミナー日本古代史』上 1979



参考資料
高蔵遺跡D3上層



0 20cm

第164図 城遺跡濠出土遺物



写真3 城遺跡濠出土遺物(1)



写真4 城遺跡濠出土遺物(2)

付編1 三王山遺跡の銅鋸について

服部 哲也

1 はじめに

2次調査SD02からは青銅製の腕輪（銅鋸）2点、銅鎌1点、鉄鎌2点の金属製品が出土し注目された。これらは報文中に述べたように、2次のな移動の結果、環濠の埋土中に包含されたもので、当初は「墓」の中に取りついていたものと考えた。また、その「墓」の年代も、環濠掘削以前の時期で、遺跡からは中期の土器がほとんど出土していないことを考え合わせて、弥生時代後期前半と推定した。ここでは以上の点を前提として、銅鋸について整理しておきたい。

2 立岩型貝輪系銅鋸

弥生時代の銅鋸は、製作技法からは鍛造と曲げ輪造りに二分され、形状からは貝輪を模したものとそれ以外に大別されている。さらに、鍛造で貝輪を模した銅鋸は、ゴホウラの立岩型貝輪系と諸岡型貝輪系、イモガイの縦切り貝輪系に細分されている¹⁾。今回出土の銅鋸をこれらの分類にあてはめれば、鍛造品でゴホウラの立岩型貝輪系ということになる。

なお、立岩型貝輪系銅鋸の特徴は、環の横に突出する「鉤」にあり、一般には「有鉤銅鋸」の名で呼ばれている。今回の出土品も、環横に突起を持つことからその範疇に含めることはできようが、突起は「鉤」と呼ぶにはあまりにも貧弱であり、全体の形状と用語がそぐわない。ここでは「立岩型貝輪系銅鋸」の用語で統一しておきたい。

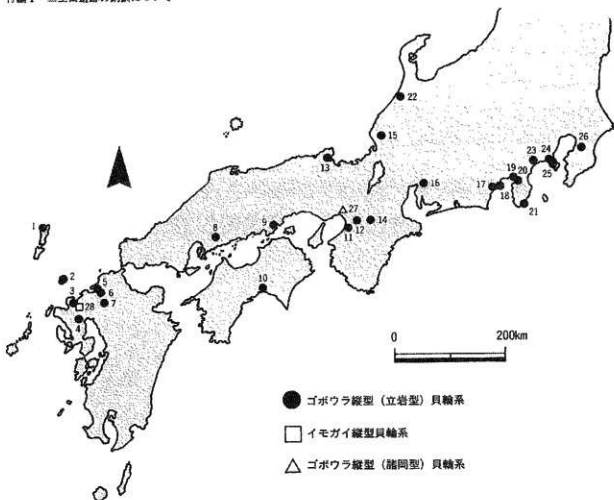
立岩型貝輪系銅鋸は、九州の佐賀県から関東の千葉県までの26遺跡（鋳型も含む。第1図・表1）で確認されている。その分布は北部九州と静岡以東に比較的多く見られるが、あとは散在的なあり方である。注目されるのは、海岸部に近い遺跡での出土が多いことで、あたかも「南海産貝輪の道」の日本海ルート沿いと、瀬戸内海ルート沿いに、黒潮沿いの地域をも加えたかのような分布状況である。いづれにしても海上交通にかかわる遺跡が多いと推測され、今後の重要な検討課題であろう。

出土の状況は、「南海産貝輪の道」の日本海ルート沿いに位置する対馬・杵岐・月後・北陸では、墓、或いは墓域から複数出土している²⁾場合が多いのに対し、瀬戸内海ルート沿いと静岡以東の南関東では居住域内や住居跡から単品で出土する傾向にある。複数出土の例がすべて墓或いは墓域から出土している点は重要で、三王山遺跡銅鋸の納まり場所としての「墓」を傍証する。

また、年代については弥生時代中期後半～末頃に立岩型貝輪が銅器化されたと考えられており、古墳時代前期まで続いている。遺構別に見れば、墓に伴うものは弥生時代中期から後期前半、住居からのものは弥生時代後期後半から古墳時代にかけてが多い傾向にある。

形態の変化は、基本的には貝輪にちかい形から抽象化されていくと考えられているが、最も古く考えられている茂手遺跡例や白岳遺跡例についても、既に貝輪には無い長い突起（鉤）となっており、立岩型貝輪を忠実に模した銅鋸は現在のところ知られない。また個々の形態差も著しく、順序良く系譜を追うことは極めて難しい。

全体の出土遺跡数が少ないため確実なことは言えないが、現状での分布・出土遺構・年代から大まかな



第1図 貝輪系銅鏡の分布

表1 貝輪系銅鏡出土遺跡一覧

I ゴボウラ線型貝輪系銅鏡

① 立岩型貝輪系

№	遺跡名	所在地	点数	遺構
1	浪の辻	長岡県巻郡戸沼町	3	墓域
2	白舟	長岡県上条郡上条町	2	墓域
3	経島場	佐賀県香津市	26	惣楯内
4	茂子	佐賀県武雄市	1	掘立柱穴
5	洞山B	福岡県筑前郡古賀町	銅型	住居跡
6	香椎松原	福岡県福岡市	銅型	住居跡
7	宮ノ上	福岡県糟谷郡夜須町	銅型	住居跡
8	浄観寺2号	広島県賀茂市	1	住居跡
9	鏡所	岡山県岡山市	1	掘立柱土坑
10	田村	高知県高岡市	1	住居跡
11	栗池	大分県東大津市	1	溝
12	門摩亮寺	大分県東大津市	1	銅状遺構
13	大黒呂南	京都府与謝郡岩滝町	13	墓域内
14	富都丸山古墳	奈良県奈良市	1	古墳
15	西山古銅	栃井県新江市	9	墓域内一箇遺跡

16	三王山	愛知県名古屋	2	銅線遺土
17	小黒	静岡県静岡市	1	居住域
18	藤府城内	静岡県静岡市	1	住居跡
19	青柳町	静岡県沼津市	1	住居跡
20	矢崎	静岡県清水市	2片	包含層・住居跡
21	了仙寺溝穴	静岡県下田市	1片	埋葬人骨
22	南新保C	石川県金沢市	1片	墓域内溝
23	榎丸島	神奈川県東野市	1片	住居跡
24	千広八反目	神奈川県鎌倉市	1片	住居跡
25	持川	神奈川県足子市	1片	田所遺
26	北尾台	千葉県市原市	1	住居跡

② 諸岡型貝輪系—無銅鏡類

27	川窪	兵庫県尼崎市	1	木棺墓
----	----	--------	---	-----

II イモガイ線型貝輪系銅鏡

28	千々賀	佐賀県唐津市	8-	墓域
----	-----	--------	----	----

傾向を抽出すると、以下の2グループに大別することが可能であろう。

① 南海産貝輪の日本海ルート沿いに位置。墓もしくは墓域内から出土。出土点数は複数。年代は弥生時代後期前半が中心。

例 原の辻、白岳、桜馬場、大風呂南、西山公園

② 南海産貝輪の瀬戸内ルート沿いと、南海産貝輪とは関係の無い静岡以東の南関東に位置。居住域内や住居跡から出土。出土点数は単品。弥生時代後期後半が中心で、一部は古墳時代前期にかかる。

例 浄福寺2号・政所・御幸町・北旭台

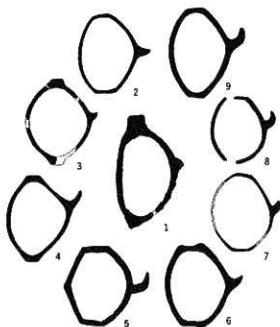
ただし、②に含めた瀬戸内ルート沿いでは、ゴホウラ立岩型貝輪の一括採納された例(神戸市夢野遺跡)や、諸岡型貝輪系銅鋼(無鈎)が墓から出土した例(尼崎市の田能遺跡)があり、今後立岩型貝輪系銅鋼が墓から複数出土する可能性は大いに残ると言えよう。

さて、三王山遺跡銅鋼の位置付けであるが、出土遺構・時期ともに問題を含んでいたが、はじめに述べたように本来は墓にあってであろうこと、時期は弥生時代後期前半と考えられることを前提に、複数出土の項を加えれば、①のグループに含まれると思われた。ただし、南海産貝輪の日本海ルート沿いという点は一致せず、また瀬戸内ルートとも、南海産貝輪の道とは関係のない静岡以東のグループとも距離をおく。分布のうえではひじょうに微妙な位置と言える。豊橋市水神貝塚からは縄文晩期末(北部九州では弥生時代前期)のイモガイ型貝輪が出土し、その出土場所・形態・時期ともに驚かされた¹⁾が、今回の銅鋼も(南海製貝輪と異なり持ち運ばれたものとは限らないが)同じ様な唐突感²⁾は否めない。さらに形態的な検討を行なった後考えてみたい。

3 三王山遺跡の銅鋼と立岩型貝輪

三王山遺跡出土銅鋼の形態の大きな特徴は3つの突起にあった。発見当初はこの突起に注目し、他の貝輪系銅鋼との比較を試みたが結果は「異形」であり、系譜等の関係を直接求めることのできそうな銅鋼は皆無であった(第2図)。そこで環部が貝輪の面影を良く残していることに注目し、貝輪との比較を試みた。

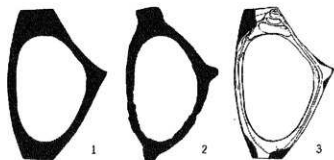
第3図1・2は隣・西小田地区13地点K-23の立岩型貝輪と三王山遺跡の銅鋼のシルエットを並べたものであるが、環内側の腕を通す(空白)部分はひじょうに良く似ており、貝輪の持つ自然のカーブを忠実に模していることがよくわかる。それは、他の銅鋼と比較することでより顕著であり、立岩型貝輪系銅鋼の中では、最も貝輪に近いシルエットと言っても過言ではあるまい。また、大きさや環の太さ、短い横の突起も貝輪にそっくりで



1. 三王山 4. 桜馬場 7. 北旭台
2. 白岳 5. 桜馬場 8. 矢時
3. 原の辻 6. 栗池 9. 西山公園

第2図 貝輪系銅鋼の中での「異形」さ(1:4)

あり、なによりも他の銅鋼との比較では異様であった上下の突起部分も、立岩型貝輪の輪郭中にうまく収まってしまふことがわかる。逆に言えば、第3図3のようなカットを立岩型貝輪に施せば、三王山銅鋼のシルエットをもつ貝輪を作ることも可能であり、こうした貝輪の存在も全く否定できるものではないとさえ思われた。いずれにしても、他の銅鋼との比較で感じた「異形」さは全く無く、形式学的に連続する形として違和感はない。



1・3 西・西小田地区13地点K-23 2、三王山

第3図 立岩型貝輪とのシルエット比較(1:3)

また、木下尚子氏は、諸岡型貝輪(中期前半の代表)から立岩型貝輪(中期後半の代表)への変化を「うずまきデザインの消滅と、角や直線のデザインの採用」とされ、具体的に「角の作りだしと一大結節の研ぎだし」の2つを特徴として挙げられている¹⁴⁾。銅鋼において鈎に発達する「一大結節の研ぎだし」だけでなく「角の作り出し」も立岩型の要素であることは重要であり、青銅器化にあっても、この2つの要素がともに取入れられているものこそ、立岩型の意識を引き継いだものと言えよう。そして、三王山銅鋼の上下の突起はシルエットの比較で分かるよう「角の作り出し」をさらに閉り出して突起状にしたものと考えられることから、立岩型貝輪のもつ「角の作りだしと一大結節の研ぎだし」の両方を意識し強調した銅鋼と理解する。

以上の点から、三王山銅鋼の形は他の銅鋼をモデルにした、銅鋼の中での変身形・退化形ではなく、立岩型貝輪に連続する形であり、立岩型貝輪を直接モデルにして製作した可能性もあると推測する¹⁵⁾。そして、銅鋼の基本的変化が「貝輪に忠実な形から抽象化していく」ものであるとすれば、銅鋼の中では古くに位置付けられよう。

4 2タイプの銅鋼

次に、最も特徴的であった上下の「突起」についてもう少しみてみたい。この上下の突起が立岩型貝輪の「角の作り出し」を強調したものであろう事は先に述べたが、上下の角の作り出し部分が他の環の部分より太く(厚く)なって強調されている銅鋼を探せば、茂手、駿府城内、原の辻、大風呂南、南新保C(上部の突起のみ遺存)などがある。そしてこれらは、大きく2つに大別することができる。すなわち、上下の作り出しは幅広く短く、横の突起は鈎状に細くて長いタイプ=茂手、駿府城内、原の辻、南新保Cと、上下の作り出しは幅狭で突起状、横の突起は太くて短いタイプ=三王山、大風呂南である。

ところで、木下尚子氏は立岩型貝輪を初期型・中期型・末期型に細分されており、中期型から末期型への変化は「一大結節(横の突起)が鋭く研ぎだされることを挙げられている。つまり、この段階で鈎の概念が加わったと推定され、逆に言えば中期型までは、一大結節は強調される程度と考えられている。さらに図示された中期型・末期型を比較すれば、環部はより細く繊細になり、長さのあった上下の角の作り出しは退化したように短くなっている。中期型から末期型への変化を「角の作り出し」重視から「突起」重視への変化と読み取ることも可能であろう。

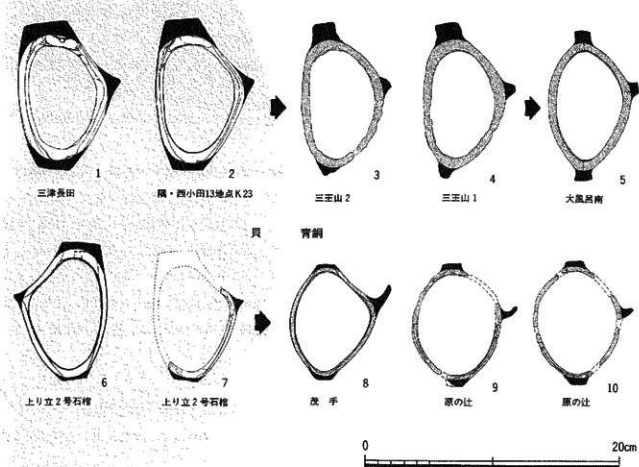
こうしてみると、前述した銅鋼の2タイプも、それぞれ立岩型貝輪の中期型・後期型の特徴を備えていることがわかる。すなわち、上下の作り出しは幅狭で長く、横の突起は短いタイプ（三王山銅鋼）は、鈎の概念が加えられる以前の「角の作り出し重視（中期型）」を模したもので、上下の作り出しが短く、横の突起は細くて長いタイプは、鈎の概念が加わった「突起重視（後期型）」を模したものと考える。銅鋼の2タイプの違いは、もともと模した貝輪が違っていたことによるものと理解する（第4図）。

なお、資料数の少ない現状では、立岩型貝輪の中期型・後期型の分類が、時期差ではなく型式差の可能性もあろう。銅鋼の場合も、三王山の銅鋼のタイプが、鈎状突起一つの所謂有鈎銅鋼に先行するかどうかについては、突起が一つの銅鋼の中に三王山例と同時期もしくは遡る例が存在する（巨摩鹿寺・駿府城内遺跡例は、中期末の年代観）ことから言い切れない。「角の作り出し重視型」（＝三王山銅鋼）と「鈎重視型」（＝突起一つの所謂有鈎銅鋼）の両銅鋼は、ほぼ同時⁶⁾につくられ、別々に変化すると考えた方が自然であろう。

さて、三王山の銅鋼と同じ「角の作り出し重視型銅鋼」の例は、大風呂南遺跡が唯一である。まだ未報告の為詳しくは触れられないが、簡単に観察結果を述べれば、

・環部は上下のカーブがきつい楕円で、対称形に近くなっている。貝輪の持つカーブからはやや離れた印象。

・3つの突起は同じような方形・台形で、端部が尖らず平坦面をもって終わっている。それは一大結節部にあたる突起についても同じであり、「鈎」は三王山例以上に意識されていない。



第4図 ニタイプの立岩型貝輪と銅鋼

- ・環内面には鋳型の合せズレがそのまま残るものがあり、調整は丁寧でない。
- ・環部の断面形は三角形で、三王山例と同じ⁷⁾。

全体的に貝輪からは離れた形であり、三王山銅鋼をよりデザイン化したものといえよう。発掘の所見である後期後半の時期を考え合わせて、三王山銅鋼に後出すると推定する。貝輪を含めて、強引に繋げれば、鈎概念以前の立岩型貝輪→三王山銅鋼→大風呂南銅鋼の形態的変遷が考えらる。

5 おわりに

三王山の銅鋼は他の銅鋼と比べて分布から離れることと、その形が大きく異なることから、出土した当初は他の銅鋼の重流でこの地方独自の形の銅鋼と考えた。ところが、以上の検討の結果、他の銅鋼から変化したものではなく、鈎の概念以前の角の作り出しを重視した立岩型貝輪を模した銅鋼で、銅鋼の中では古いものと推測した。

となれば、その製作地についても、立岩型貝輪の分布からかけ離れた場所とは考え難く、やはり、北部九州地域の可能性が最も高いと考える⁸⁾。ただし、豊橋市水神貝塚でイモガイ製貝輪の出土例があるように、立岩型貝輪が伝播し、それをモデルにこの地で製作した可能性も全く否定できるものではない。製作地については鈎の概念以前の立岩型貝輪が波及していた地域⁹⁾として含みをもたせておきたい。

また、この地方出土の弥生時代青銅製品として避けて通れないのが、三連式銅鐻・多孔銅鐻との関係である。銅鋼の「墓」への埋納時期は弥生時代後期前半頃としたが、製作の時期については立岩型貝輪との関連から、中期末頃とするのが妥当であろうか。とすれば、三連式銅鐻・多孔銅鐻以前の時期となるが、いずれにしても微妙な時期であり先の製作地の問題と合せて今後の検討課題としておきたい。

さて、「2立岩型貝輪系銅鋼」の項では、現状での分布・出土遺構・年代から2つのグループを抽出した。すなわち、

- ① 南海産貝輪の日本海ルート沿いに位置。墓もしくは墓域内から出土。出土数は複数。年代は弥生時代後期前半が中心。
 - ② 南海産貝輪の瀬戸内ルート沿いと、南海産貝輪とは関係の無い静岡以南の南関東に位置。居住域内や住居跡から出土。出土数は単品。弥生時代後期後半が中心で、一部は古墳時代前期にかかる。
- である。そして、三王山遺跡例は①のグループに属するが「南海産貝輪の日本海ルート沿い」に関してのみ一致していないことを述べた。ところが、形態の検討から北部九州地域に盛行する貝輪をモデルにしたと考えられること、丹後の銅鋼は唯一同じ系譜と考えられることが明らかとなり、北部九州一月後一尾張の交流の可能性を指摘できることとなった。勿論まだ、点と点の観は否めないが、少なくとも南海産貝輪の出土例から復原されている「海の道」の北部九州→出雲→丹後・北陸のつづきに、湖北・琵琶湖→美濃・尾張の道を書き加え得る可能性を提示しえたと考える。

本稿を作成するにあたり以下の方々・機関にお世話になりました記して感謝いたします。

石黒立人、井上洋一、北野博司、白数真也、鈴木敏則、長谷川達、肥後弘幸、平尾良光、岩滝町教育委員会

また、木下尚子著『南島貝文化の研究・貝の道の考古学』法政大学出版局1996は、執筆中の原稿の「書

であり、つねに参考とさせて頂きました。あらためて感謝いたします。

註

- (1) 分類と用語その他について、以下の文献を参考とした。
 - 小田富士雄 「日本で生まれた青銅器」『古代史発掘』5巻 1974
 - 木下尚子 「南島貝文化の研究・貝の道の考古学」法政大学出版局1996
 - 井上洋一 「銅鏡」『季刊考古学』27号雄山閣出版1989
 - 橋口達也 「腕輪・指輪」『弥生文化の研究』8 雄山閣出版1989
- (2) 西山公園、南新保C遺跡については北野博司氏に御教示をえた。
- (3) 岩瀬彰利 「南海産イモガイ製貝輪をめぐる諸問題」『水神貝塚（第2貝塚）』豊橋市教育委員会1998
- (4) 木下尚子 「南島貝文化の研究・貝の道の考古学」法政大学出版局1996
- (5) 尚、青銅器化にあたっての変化として、環部を断面三角形、突起部を断面菱形に単純化したことをあげられる。
- (6) 立岩型のみならずイモガイ縦型や諸岡型を模した銅鏡もこの時期に出現していることを考えれば、貝輪が青銅化されはじめた頃は、いろいろなタイプの貝輪が模されたと考えられる。
- (7) 環部の断面が三角形を呈す銅鏡には、茂手・政所・西山公園例がある。ここでは詳しく検討しえないが、環部断面が菱形の銅鏡（桜馬場等）とは対称的であり、製作技術からの承襲も追える可能性がある。
- (8) 貝輪系銅鏡の鋳型は、北部九州地域（福岡）から3点出土している。ただし、いずれも鈎の概念以後の所謂有鈎銅鏡のもので、三王山タイプの鋳型ではない。
- (9) 尚、九州以外の立岩型貝輪出土地としては、日本海沿岸・禁目洞穴（島根県平田市）瀬戸内海沿岸・夢野遺跡（兵庫県神戸市）があるが、いずれも中期型ではない。

図の引用（いずれも加筆・改変）

第2図の2・4・5・6・8・9、第3図の1・3、第4図の1・2・6・7・8…木下尚子「南島貝文化の研究・貝の道の考古学」法政大学出版局1996

第2図の7…木野和紀「千葉県北旭台遺跡出土の有鈎銅鏡」『考古学雑誌』75-3 1990

第4図の5…「速報展示 大風呂南墳墓 出土品説明」京都府丹後郷土資料館作成パンフレット1998

第2図の3、第4図の9・10…「原の注遺跡」長崎県教育委員会1978

付編2 名古屋市長三王山遺跡から出土した銅釧・銅鐲の自然科学的研究

東京国立文化財研究所保存科学部

平尾 良光・榎本 淳子

1 はじめに

名古屋市長教育委員会の依頼で、名古屋市長三王山遺跡の弥生時代を主とする三王山遺跡第二次調査の壕(SD02)から出土した有鉤銅釧2点および銅鐲に関して、自然科学的研究を行なった。調査はこれら弥生時代の有鉤製品が持つ考古学的な意味を明らかにするために、化学組成の測定および産地推定を試みた。

2 資料

有鉤銅釧を図1の1と2に示した。いずれも錆で覆われており、いくつかは割れている。当研究室では便宜上これら2点の資料を、A・Bと名付けて取り扱った。蛍光X線による化学組成を測定したのはAの方で、測定部分は2重丸で示した。鉛同位体比測定用の試料を採取した箇所は黒丸印で示した。合計4点の試料を採取した。

銅鐲は図1の3で示される。この資料は錆が進行し極めて脆いため、土と一緒に採取されていた。鉛同位体比測定用の試料を採取した箇所は黒丸印で示した。

銅釧は形式から弥生時代後期と推定されているが、共伴遺物については定かではない。銅鐲はその形式から弥生時代後期と推定されている。

3 分析法

化学組成の測定は非破壊で分析できる蛍光X線分析法で行なった(文献1)。蛍光X線分析法はフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置PW1404LSを用いた。機器の使用条件はスカンジウム管球を用い、60kV、50mAで一次X線を発生させて、資料に照射した。資料から発生する二次X線は元素毎に波長が異なるため、フッ化リチウムの結晶でX線を角度毎に分散させ、分散角度におけるX線強度を測定した。

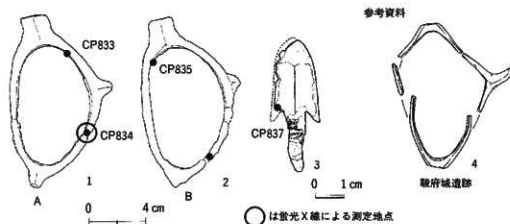


図1 分析資料(1~3)と試料採取地点(4は「ふち99-5」1.1993 静岡市長教育委員会より)

青銅材料の産地推定のためには鉛同位体比法を利用した(文献2)。鉛同位体比の測定はVG社製全自動表面電離型質量分析計 Sector-J で測定した。資料の錆の一部を採取し、含まれている鉛を電気分解法で精製分離した。この鉛を質量分析計に装着し、鉛の同位体比を測定した。

4 蛍光X線分析および結果

蛍光X線分析法では、測定部表面から約100マイクロメートルの深さまでの化学元素組成に関する情報を主として得られる。それ故、表面に錆などがあればその影響を受けやすく、化学組成は必ずしも本体金属部分を反映しない場合がある。そこでこれらのことを考慮して定性的な結果を次にまとめた。なお、測定部分は切断された断面の金属部分である。

測定された蛍光X線スペクトル図を図2 a, bで示した。図2の横軸は資料から発生したX線の分散された角度である。X線は元素毎に異なる角度に分散されるので、特定の波長は特定の元素を意味する。縦軸はX線の強度、即ち元素の量である。図2 aは全体の様子であり、図2 bは小さなピークを縦に拡大している。すなわち図2 aと図2 bとは横軸の角度は同じであるが、縦軸は図2 aが全幅で1200カウント/秒であるのを、図2 bでは500カウント/秒と1/2.4倍となっており、小さなピークを検出できるようになっている。

検出された元素は銅、スズ、鉛のほか、アンチモン、銀、ヒ素である。銅のX線強度を100とした各元素の強度比を表1で示した。

5 所見

測定結果から、この資料は銅、スズ、鉛合金でできており、アンチモン、銀、ヒ素を少量含んでいる。主成分(銅、スズ、鉛)に関しては銅の含有率が高く、鉛、スズ量が割合に少ない青銅と推測される。この資料は、当研究室でこれまで蛍光X線分析を行なった古代青銅製品と比べて、スズに対するアンチモン、銀の比率が高い(アンチモン/スズ \approx 0.7、銀/スズ \approx 0.6)ことである。その点では特徴的な化学組成を示したと言えるかもしれない。錆の上からであること、測定面積が小さいため、連断はできないが、今後類似資料との比較によっては年代的、地域的な問題を示唆するかもしれない。

参考資料として、静岡県駿府城遺跡出土有鈎銅鋼(図1の4)の蛍光X線測定結果を図3 a, bで示す(文献3)。アンチモン、銀のピークがスズの1/3以下である。また、これらの試料には鉄のピークが見られるが、ヒ素は見えない。これらのことから、錆の影響があつて断定的にはまとめられないが、2つの有鈎銅鋼は異なる化学組成の可能性がある。

表1 有鈎銅鋼の蛍光X線分析法で測定された元素のX線強度比

	アンチモン	スズ	銀	鉛**	ヒ素**	亜鉛	銅	ニッケル	鉄	銅強度
角 度**	(13.5)	(14.0)	(16.0)	(28.3)	(34.0)	(41.8)	(45.0)	(48.7)	(57.5)	(cpm)
有鈎銅鋼 (FL581)	5.0	7.0	4.0	2.0	1.0	—	100	—	—	1000

※1) 数値は角度45.0度におけるX線強度を100としたときの各元素の強度比

※2) 2θで表された各元素の励起X線の位置

※3) 鉛のピークはスズの影響を、ヒ素のピークは鉛の影響を補正した値

※4) XFL・FLは当研究室の蛍光X線測定番号

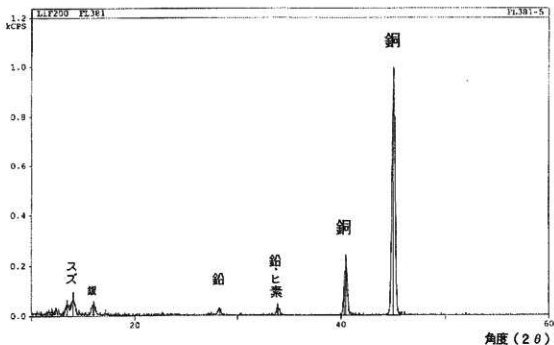


図2-a 有鈎銅鍍の蛍光X線スペクトル図

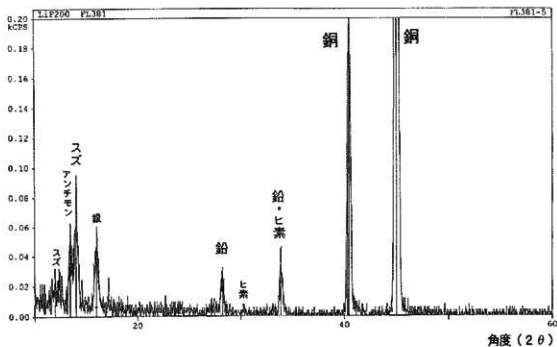


図2-b 有鈎銅鍍の蛍光X線スペクトル(図2-a)の拡大図

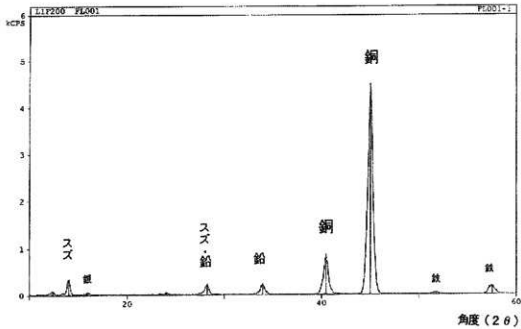


図3-a 静岡県駿府城遺跡出土有鈷銅鍍の蛍光X線スペクトル図

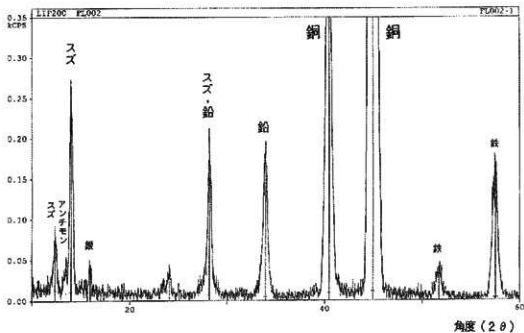


図3-b 静岡県駿府城遺跡出土有鈷銅鍍の蛍光X線スペクトル(図3-a)の拡大図

6 鉛同位体比の測定結果と考察

1) 鉛同位体比の測定

蛍光X線分析の結果、主成分のひとつとして鉛が含まれているので、表面の白色錆は塩基性塩化鉛、あるいは塩基性炭酸鉛と推定される。それ故、この白色錆の微量（1mg以下）を採取して、鉛同位体比の測定試料とした。試料を石英製のピーカーに入れ、硝酸を加えて加熱溶解し、蒸留水で希釈した。この溶液を白金電極を用いて2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解し、希釈した。0.4 μ Rの鉛をリン酸-シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、VG社製の全自動表面電離型質量分析計 Sector-J に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛 NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

2) 鉛同位体比測定値

測定された鉛同位体比を表2で示した。参考として1993年に静岡市教育委員会へ報告した駿府城内遺跡出土の有鉤銅鋼の値(文献3)もあわせて載せた。鉛同位体比による産地推定の原理および応用については「都田地区発掘報告書」(文献4・5)など、今までに幾つかの報告で述べているので省略する。得られた値を今までに測定された値と比較してみると、図4と5のようになった(文献6・7・8)。

図4は縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{209}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ の値である。この図を仮にA式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした。すなわち図4の表現方法を用いると、日本の弥生時代における東アジア地域においてAは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北の鉛である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域。Dは朝鮮半島産の多鈕細文鏡と細形銅剣が分布するラインとして示されることが判っている。また“a”は弥生時代の後期銅鋼が示した特別な鉛を意味する領域である。この図の中で有鉤銅鋼および銅鐵の値を「●」で示した。

もうひとつの鉛同位体比の表現として図5がある。この図では縦軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値である。この図をB式図と呼ぶこととする。この図5の中で、A'B'C'D'は中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。ここでも今回測定した値を「●」の印で表した。

銅鋼A、銅鋼Bから2ヵ所を採取したところ、2点ともほとんど質量分析計の誤差内で一致した。それ故、資料に問題はない。本報告で測定された3資料は互いによく一致し、しかもその3点は図4で“a”領域に含まれた。このことは、銅鋼が後期銅鐸や広形銅矛など、弥生時代後期を代表する遺物と同じ値を示している。静岡の銅鋼は図1の3で示され、形は異なっているが材料的には画一的な“a”中の値を示すことがわかっている。本資料の発掘場所のことを考えると、この地方での後期弥生時代の青銅製品の製造に関して、また一つの例を加えたこととなった。

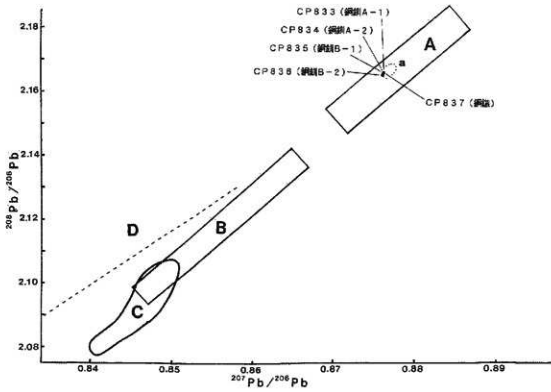


図4 有鈎銅鍍の鉛同位体比 (A式図)

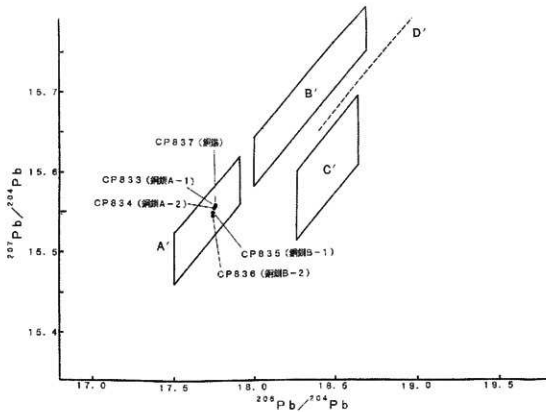


図5 有鈎銅鍍の鉛同位体比 (B式図)

表2 三王山遺跡出土有銅鋼および銅鐵の鉛同位体比

	$\frac{^{206}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$
有銅鋼A-1 (CP833)	17.735	15.557	38.456	0.8762	2.1659
有銅鋼A-2 (CP834)	17.730	15.552	38.439	0.8762	2.1656
有銅鋼B-1 (CP835)	17.746	15.547	38.425	0.8761	2.1653
有銅鋼B-2 (CP836)	17.745	15.545	38.413	0.8760	2.1647
銅 鐵 (CP837)	17.758	15.560	38.467	0.8762	2.1662
誤差範囲	± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006
(参考) 静岡県教育城遺跡出土有銅鋼					
有銅鋼-A*1 (CP279)	17.744	15.553	38.434	0.8765	2.1660
有銅鋼-B*1 (CP280)	17.723	15.536	38.402	0.8766	2.1668
有銅鋼-C*1 (CP281)	17.748	15.560	38.451	0.8767	2.1665
有銅鋼-D*1 (CP282)	17.655	15.466	38.198	0.8760	2.1636
誤差範囲	± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006

* 1) この資料は別々に出土した破片が同一個体かどうか調査することも目的としていたので、A・B・C・Dと表記し区別した。

引用文献

- 平尾良光, 榎本淳子: 銅製品の化学的研究; 『斑鳩 藤ノ木古墳 第二・第三次調査報告書』“分析と技術編” 27-39(1995)/奈良県橿原考古学研究所
- 平尾良光, 馬淵久夫: 表面電離型個体質量分析計 VG-Sector の規格化について; 保存化学28, 17-24(1989)
- 平尾良光, 榎本淳子: 静岡県駿機山および駿府城内遺跡から出土した銅製鋼の鉛同位体比; 静岡県教育委員会へ報告(1993)
- 平尾良光, 馬淵久夫: 東海地方で出土した弥生時代および古墳時代青銅器の化学的調査; 都田地区発掘調査報告書(下巻) 浜松市・浜松市教育委員会・(財)浜松市文化協会編 p590-620(1990)
- 平尾良光: 古代日本の青銅器; MAC サイエンス 4, 22-33(1990)
- 馬淵久夫, 平尾良光: 鉛同位体比から見た銅鐸の原料; 考古学雑誌68, 42-62(1982 b)
- 馬淵久夫, 平尾良光: 東アジア鉛鉱石の同位体比-青銅器との関連を中心に-; 考古学雑誌73, 199-210(1987)
- 馬淵久夫, 平尾良光: 福岡県出土青銅器の鉛同位体比; 考古学雑誌75, 385-404(1991)

付編3 土器壺の内面底部に付着固化した黒漆様樹脂の分析

(財)元興寺文化財研究所

北野 信彦・井上美知子・植田 直見

1 はじめに

三王山遺跡の環境内からは、弥生時代後期頃の集落関連の遺物が数多く検出されている。このなかに、内面底に黒漆様樹脂の溜まりが付着固化した土器壺が1点検出された(図1, PL.3 写真1, 以下写真は巻頭 PL.3, 4 参照)。今回、この黒漆様樹脂の成分や性質を分析調査したので結果を報告する。

2 分析方法

今回の調査では、上記のような黒漆様樹脂が漆であるかどうか、漆であればどのような性質を有しているのかを知ることを主目的として下記の方法で有機物および無機物の分析調査を行った。

(1) 黒漆様樹脂の同定

黒漆様樹脂の成分については、フーリエ変換型赤外分光光度計(FT-IR)(日本電子 JIR-6000)を使用してKBr錠剤法により測定した(分解能 4 cm^{-1})。

(2) 黒漆様樹脂に使用された顔料の分析

黒漆様樹脂の使用顔料に関する分析には、電子線マイクロアナライザー(EPMA)(堀場製作所 EMAX-2000)を使用した。

なお、結晶相(化合物)の同定には、X線回折分析装置(マックスサイエンス社 MXP-18)を使用した。測定条件は、対陰極にCu, X線管電圧は50kV, X線管電流は30mA, 検出器はシンチレーションカウンタを用い、走査速度は1/1(度/分)、走査範囲は 2θ , 5-90度, モノクロメータを使用して測定した。

(3) 黒漆様樹脂の表面状態

肉眼で漆様樹脂の表面の状態を観察した後、実体顕微鏡および金属顕微鏡を用いて黒漆様樹脂の使用顔料に関する細部観察を行なった。

(4) 黒漆様樹脂の内部状態

黒漆様樹脂の $1\text{ mm} \times 3\text{ mm}$ 程度の剥落片を採取し合成樹脂に包埋した後、研磨もしくはミクロトームを用いて断面を切り出し、黒漆様樹脂の内部状態について金属顕微鏡および生物顕微鏡で落射および透過観察を行った。

3 調査結果

今回調査を行なった黒漆様樹脂は、土器壺内の底面にやや傾斜した状態で付着固化していた。この樹脂の付着の傾斜角度は、土器壺側面と底部を床面に接して傾けた場合、最も安定した角度の溜まり状態である。そのため、当時壺自体は床面に傾斜した状態で静置されていたことが推察された。

この黒漆様樹脂の表面状態は、光沢のある黒色を呈し、漆樹液が溜まって固化した際にできる「ちぢみムラ」現象も極めて顕著に観察された(写真2)。

そしてFT-IR分析の結果では、3430, 2930, 2850, 1710, 1630, 1460, 1260 cm^{-1} (波数)に特徴的な吸収を示した(図2)。

つぎに、分析結果から本資料の成分を同定するため、この樹脂に相当する可能性のある物質として、漆(日本産)・油脂類(エゴマ)・漆と油脂類(エゴマ)の混合物・柿渋・膠を比較試料(標準サンプル)として同様の方法で測定した。その結果、漆は1710~20, 1630, 1450~60, 1270 cm^{-1} に、柿渋は1690, 1615, 1540, 1360, 1220 cm^{-1} に、膠は1650, 1540, 1240 cm^{-1} に、油脂類(今回はエゴマを使用)は1730, 1460, 1240 cm^{-1} にそれぞれ特徴的な吸収を示した(図3~7)。

本資料である黒漆様樹脂は、光沢があるため当初は油脂類を多く混入した物質であろうと推定したが、FT-IR分析の結果より、実際は油脂類を加えていない『漆』であると同定した。

つぎに、黒漆様樹脂の使用顔料の調査を行なったが、電子線マイクロアナライザーによる元素分析の結果では、Si(シリカ)、Al(アルミニウム)が検出され、それ以外の無機物は見い出されなかった(図8)。また、X線回折分析を行なった結果でも、 SiO_2 が検出されるにとどまり、鉄系、墨(カーボン)系いずれの黒色顔料の使用も検出されなかった(図9)。また、生物顕微鏡による断面観察の結果でも、黒漆様樹脂は透明感が強く、黒色顔料粒子は確認されなかった。また、黒漆様樹脂の断面の細部を顕微鏡観察してみると、3~4 μm 程度の球状抜け穴が僅かに、全体的には約1 μm の微細な粒が多数確認された(写真3-5)。

通常の漆工技術では漆液の成分を均一に分散させるために、生漆を「なやし」て「くろめ」る漆精製工程が行なわれる。この工程を念頭に置いて、本稿では京都市工業試験場より提供を受ける機会に恵まれた漆の樹から採取した2種類の生漆固化膜の断面薄片を顕微鏡観察して、「精製していない生漆の固化膜はどのような状況を示すのか？」を本資料と比較検討した。その結果、試料No1(1993年浄法寺採取漆樹液をそのまま蓖でガラス板に塗布)、および試料No2(1998年採取の漆を濾紙で濾過した後、33 μm のアブリケートで塗布。なお乾燥条件は20 $^{\circ}\text{C}$ 、70%RH)の生漆固化膜薄層には3~4 μm 程度の球状抜け穴は確認されなかったが、約1 μm 程度の微細な粒が多数確認された(写真6-8)。

一方、本資料の形状と類似した春日町遺跡(江戸時代後期頃)出土一括漆工材料である黒漆様樹脂の固化物質は、3~7 μm 程度の球状抜け穴が多数、約1 μm の微細な粒も多数確認されている(写真9-12)。比較試料の断面中の微細粒および大きさは若干異なるが球状抜け穴が存在する点においてこれらは本資料と類似していることがわかった。

4. まとめ

以上、弥生時代後期頃に年代が比定される三干山遺跡出土の土器壺内部に固化付着した黒漆様樹脂を分析調査した。その結果、本資料は『漆』であると同定した。しかしこれは光沢を有する黒漆であるにもかかわらず、油脂類や、鉄系もしくはカーボン系の黒色顔料は検出されなかった。

つぎに、本資料の漆の品質(精製状態)を調査するために固化膜面の断面観察を行なった。その結果、本資料は3~4 μm 程度の抜け穴と、1 μm 未満の微細な粒が多数確認される透明感がある均質な漆であることがわかった。

これらの結果からは漆の精製状態を把握することは困難であったが、今後は頻りに論議されているゴム質等の確認を行い、その形状や分布状態から漆の精製状態を把握したい。

謝辞

本調査を行なうにあたり、京都市工業試験場塗装技術研究室の阿佐見徹氏および京都工業繊維大学名誉教授（現、奈良国立文化財研究所客員研究員）の佐藤昌憲先生には試料提供をはじめ、数々のご教示を受けました。また名古屋市見晴台考古資料館の服部哲也・伊藤正人両氏には調査を行なう機会を与えていただきました。併せて厚く御礼申し上げます。

参考文献

- (1) 北野信彦・植田直見(1993) 「静岡県・池ヶ谷遺跡出土木製品の塗膜分析」『池ヶ谷遺跡2（自然科学編）静岡県埋蔵文化財調査研究所報告第46集』 P 261-266, 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- (2) 岡田文男・成瀬正和・田川真千子・北村昭彦(1994) 「平安時代前期の出土黒色漆器に利用された黒色顔料について」『古文化財之科学第39号』 P 39-48, 古文化財科学研究会
- (3) 北野信彦・菅井裕子・佐藤昌憲・肥塚隆保・谷川章雄ほか(1998) 「江戸時代における漆継ぎ修理に関する一資料」『文化財保存修復学会第20回大会要旨集』 P 96-97
- (4) 永瀬喜助(1986) 「漆の本—天然漆の魅力を探る」, 研成社

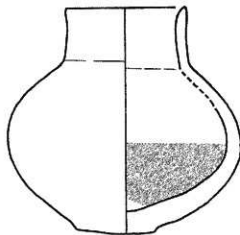


図1 直口壺実測図(1:2)

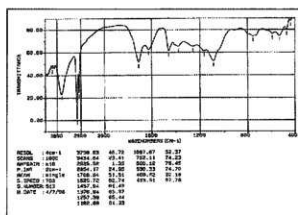


図2 黒漆様樹脂の赤外吸収スペクトル

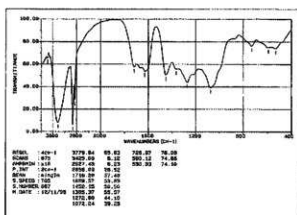


図3 日本産漆の赤外吸収スペクトル

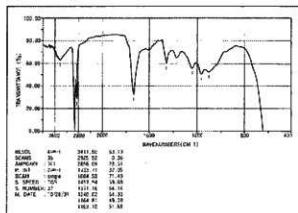


図4 油脂類(エゴマ油)の赤外吸収スペクトル

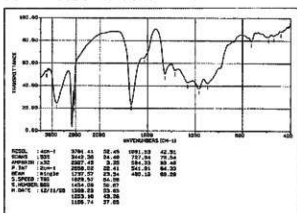


図5 日本産漆+油脂類(エゴマ油)の赤外吸収スペクトル

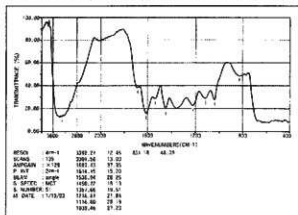


図6 漆の赤外吸収スペクトル

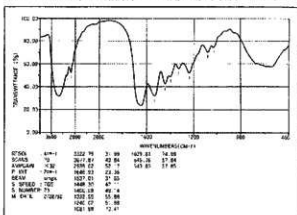


図7 漆の赤外吸収スペクトル

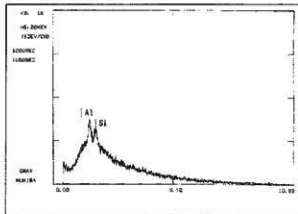


図8 黒漆様樹脂の電子線マイクロアナライザー分析結果

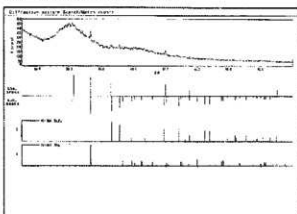


図9 黒漆様樹脂のX線回折分析結果

付編4 出土甕胎土の材料分析

森根 久・古橋美智子 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

土器の材料は、粘土と混和材から構成されるが、弥生土器や土師器などは焼成温度が低いため、元の材料粘土の起源を指標する珪酸化石や骨針化石などの微化石類が残っていることが多い。これら微化石類の記載により、材料粘土の種類を知ることが可能である。また、胎土中の砂粒は、細砂から2mm以上の礫まで含まれるが、土器製作地の岩石学的特徴などを知ることが可能である。さらに、砂粒以外の混和材の種類についても調べる事が可能である。

土器胎土の材料記載は、土器の製作に関する事柄を知ることができるなど、土器研究において重要な役割を果たすものと期待される。ここでは、三王山遺跡他から出土した甕胎土の材料について検討した。

2 分析試料

検討した試料は、6遺跡から出土した甕13試料と粘土層1試料である(第1表)。

No	遺跡	種類	備考
1.	三王山	弥生後期壺	粘土木目が細かい、にぶい黄褐色(10YR6/4)
2.	三王山	弥生後期壺	細粒多い、褐色(7.5YR6/6)
3.	三王山	宇田型甕	砂粒少ない、褐色(7.5YR4/3)、内部:明赤褐色
4.	三王山	宇田型甕	粒子やや多い、褐色粒子、褐色(7.5YR6/6)
5.	三王山	宇田型壺(5~6世紀)	細粒多い、明赤褐色(5YR5/6)、外赤み強い
6.	三王山	宇田型壺(5~6世紀)	砂粒やや多い、明赤褐色(2.5YR5/8)
7.	清水寺SB4	S字状口縁台付甕D類	細粒多い、褐色粒子、浅黄褐色(10YR8/3)
8.	清水寺SB4	S字状口縁台付甕D類	砂粒やや多い、灰褐色(7.5YR5/2)
9.	志賀公園	S字状口縁台付甕D類	粘土木目が細かい、にぶい黄褐色(10YR7/2)
10.	東古渡町4次SD05	宇田型壺	粒子やや多い、にぶい黄褐色(10YR7/4)
11.	伊勢山中学校SB16	宇田型壺	砂粒多い、にぶい褐色(7.5YR7/3)
12.	伊勢山中学校SK108	宇田型壺	砂粒少ない、黒褐色(10YR3/2)
13.	曾地住居1	S字状口縁台付甕C~D類	細粒多い、浅黄褐色(10YR8/4)、内側・内部黒色
14.	名古屋城三の丸遺跡(9次調査)		蒸焼粘土(熟田留)

第1表 検討した土器試料

3 処理と方法

ここでは、土器の薄片を作成し、偏光顕微鏡による観察を行った。各土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用薄片を各1枚ずつ作成した。

(1)試料は、岩石カッターで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。平面を作成した後、エポキシ樹脂を含浸させ硬化処理を行った。(2)研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。(3)精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。なお、Na14の粘土は、電気炉を用いて750度・10時間の焼成を行い、同様に薄片を作成した。

各薄片は、偏光顕微鏡下300倍で各分類群(菱田ほか(1993)に従う)ごとに同定・計数した。同定・計数は、100 μ m格子目盛を用いて任意の位置における約50 μ m(0.05mm)以上の鉱物や複合鉱物類(岩石片)あるいは微化石類を対象とし、石英・長石類および微化石類以外の粒子が約100個以上になるまで同定・計数した。

また、この計数とは別に、薄片全面について、微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子の特徴についても視察・記載した。

4 各變胎土の特徴および計数結果

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した（第1図）。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類の記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

No.1 : 100~500 μ m前後が多い(最大粒径1.2mm)。石英・長石類>珪晶質>複合石英類, 複合石英類(微細), 珪藻化石(海水種 *Thalassionema nitzschioides*, *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属, *Diploneis interrupta*, *Denticulopsis* 属, 淡水種 *Melosira granulata* 多産, 沼沢湿地付着生指標種群 *Stauroneis phoenicenteron*, 不明種), 骨針化石, 胞子化石, 植物珪酸体化石

No.2 : 100~700 μ m前後が多い(最大粒径1.8mm)。石英・長石類>複合石英類(微細), 複合石英類, 斜長石(双晶), 砂岩質, 珪晶質, 放散虫化石, 珪藻化石(海水藻場指標種群 *Cocconeis sculellum*, 不明種), 骨針化石多産, 植物珪酸体化石

No.3 : 100~300 μ m前後が多い(最大粒径800 μ m)。微細雲母類>石英・長石類, 複合石英類(微細), 微細褐鉄鉱粒多産

No.4 : 100~400 μ m前後が多い(最大粒径3.5mm)。石英・長石類>複合石英類(微細), 複合石英類, 大型ガラス, 雲母類, 骨針化石, 胞子化石, 植物珪酸体化石

No.5 : 100~500 μ m前後が多い(最大粒径1.5mm)。石英・長石類>複合石英類(微細)>珪晶質, 複合石英類, 斜長石(双晶), カリ長石(バーサイト), 珪藻化石(淡水種 *Caloneis lauta*, *Pinnularia* 属, *Cymbella* 属, *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属?, 不明種多産), 骨針化石, 胞子化石多産, 植物珪酸体化石

No.6 : 100~500 μ m前後が多い(最大粒径2.3mm)。石英・長石類>雲母類, 複合石英類(微細), 複合石英類, 斜長石(双晶), 胞子化石, 植物珪酸体化石

No.7 : 100~400 μ m前後が多い(最大粒径800 μ m)。石英・長石類>珪晶質>複合石英類(微細), 複合石英類, 雲母類, 珪藻化石(海水種 *Thalassionema nitzschioides*, *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属, *Actinocyclus* 属, *Denticulopsis* 属, 淡水種 *Melosira granulata* 多産, *Fragilaria construens*, *Fragilaria pinnata*, *Achnanthes inflata*, *Neidium iridis*, *Navicula cuspidata*, *Pinnularia* 属, *Gomphonema* 属, 不明種), 骨針化石, 胞子化石, 植物珪酸体化石

No.8 : 80~500 μ m前後が多い(最大粒径2.0mm)。石英・長石類>珪晶質>複合石英類(微細), 複合石英類, 珪藻化石(海水種 *Thalassionema nitzschioides*, *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属, *Actinocyclus* 属, 汽水種 *Navicula yarrensensis*, *Melosira numuloides*, 不明種), 骨針化石, 胞子化石, 植物珪酸体化石

No.9 : 100~300 μ m前後が多い(最大粒径1.2mm)。石英・長石類>複合石英類>複合石英類(微細), 片理複合石英類, 骨針化石, 胞子化石, 植物珪酸体化石

No.10 : 100~400 μ m前後が多い(最大粒径2.3mm)。石英・長石類>複合石英類, 複合石英類(微細), 複合鉱物類(含雲母類), 斜長石(双晶), 骨針化石, 胞子化石, 植物珪酸体化石

Na11: 100~400 μ m前後が多い(最大粒径2.5mm)。石英・長石類>複合石英類(微細)>複合石英類, 珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属, *Actinocyclus* 属, 淡水種 *Eunotia biareofera*, *Melosira ambigua*, *Pinnularia viridis*, *Pinnularia* 属, *Cymbella* 属, 不明種), 骨針化石, 胞子化石, 植物珪酸体化石

Na12: 100~500 μ m前後が多い(最大粒径2.7mm)。石英・長石類>複合石英類>複合石英類(微細), 斜長石(双晶), 雲母類, 斑晶質, 紋象岩, 複合鉱物類(含輝石類), 骨針化石, 植物珪酸体化石

Na13: 100~800 μ m前後が多い(最大粒径2.0mm)。砂岩質>複合石英類(微細)>石英・長石類, 複合石英類, 斜長石(双晶), カリ長石(パーサイト), 骨針化石, 植物珪酸体化石

Na14: 100~500 μ m前後が多い(最大粒径1.2mm)。雲母類>斑晶質>石英・長石類, 複合石英類(微細), 複合石英類, カリ長石(パーサイト), 軽石型ガラス, 珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属), 骨針化石, 胞子化石, 植物珪酸体化石

5. 微化石による材料粘土の分類

検討した土器胎土中には, その薄片全面の観察から, 珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類は, 土器材料となる元の粘土に含まれるものと考えられ, その粘土の種類を知るのに有効な指標になる。検討した胎土は, 微化石類により, a) 海成粘土を用いた胎土, b) 淡水成粘土を用いた胎土, c) 水成粘土を用いた胎土, d) その他の粘土を用いた胎土, に分類された。

a) 海成粘土を用いた胎土および粘土 (Na 2, Na 8, 基盤粘土Na14)

これらの胎土あるいは粘土中には, 内湾指標種群の *Thalassionema nitzschioides* や *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属などの海水種珪藻化石が含まれていた。Na 2の胎土中では, 小杉(1988)が設定した海水藻場指標種群の *Cocconeis scutellum* や外洋域で堆積した堆積物に見られる放射虫化石(1個体)が含まれていた。さらに, これらの胎土中には, 骨針化石や胞子化石あるいは不明種珪藻化石を伴う。

b) 淡水成粘土を用いた胎土 (Na 1, Na 5, Na 7, Na11)

これらの胎土中には, 沼沢湿地付着生指標種群の *Pinnularia viridis*, *Pinnularia* 属や, *Cymbella* 属あるいはこれら大型の珪藻種と思われる淡水種珪藻化石が多く含まれていた。さらに, Na 1やNa 7あるいはNa11の胎土中には湖沼浮遊生指標種群の *Melosira granulata* などの淡水種珪藻化石が多量に見られた。なお, Na 1やNa 7あるいはNa11の胎土中には, 少ないものの海水種珪藻化石が見られた。

c) 水成粘土を用いた胎土 (Na 4, Na 9, Na10, Na12, Na13)

これらの胎土中には, 少ないものの骨針化石あるいは胞子化石が含まれていた。

d) その他粘土を用いた胎土 (Na 3, Na 6)

これらの胎土中には, 粘土の起源を指標する微化石類は含まれていなかった。

6. 砂粒およびその他の特徴

胎土中には, 岩石の起源を推定できる比較的大型の砂粒が含まれていた。岩石の推定は, 複合石英類(微細)や砂岩質を堆積岩類, 斑晶質や完晶質を火山岩類, 複合石英類(大型)や複合鉱物類(含雲母類)を深成岩類, ガラスをテフラ, とそれぞれ推定した(第2表)。

7. 遺跡の地質学的状況

土器に用いられた粘土について、一応遺跡周辺の基盤類などの粘土質堆積物を概観してみる必要がある。以下では、各遺跡が立地する地質学的状況について、坂本ほか（1984）と坂本ほか（1986）に従って概観する。なお、地層の堆積時期は、古い方から東海層群矢田川累層、八半層、熱田層、完新世堆積物である。

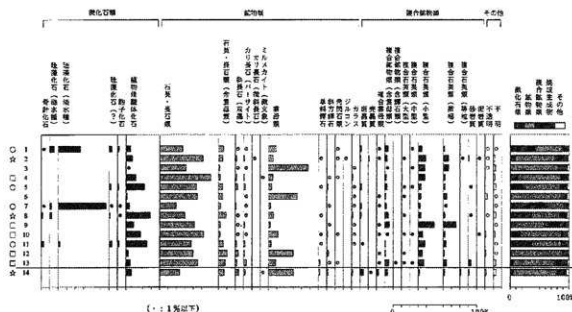
三王山遺跡や清水寺遺跡が立地する地域は、鳴子丘陵と呼ばれ、第三紀鮮新統（約520万～164万年前）の陸成層とされる東海層群矢田川累層（知多半島では常滑層群と呼ばれる）や第四紀更新統前～中期（約164万～14万年前）の八半層からなる。矢田川累層は砂層や泥質層の互層からなり、八半層はチャート礫を主体とする礫層からなる。また、更新統後期（約14万～1万年前）の礫から構成される低位段丘層も分布する。志賀公園遺跡が立地する地域は、第四紀完新統（1万年前以降）の氾濫あるいは三角州上に立地し、基盤は後背湿地や河道堆積物からなる。東古渡町遺跡や伊勢山中学校遺跡が成立する地域は熱田台地と呼ばれ、第四紀更新統後期熱田層からなる。熱田層は、粘土や砂およびシルトから構成される。粘土層は、5層準からなり、下位層2層が貝化石を含む海成層、上位3層が泥炭湿地性（河川下流域）を示す珪藻化石が検出される。曾池遺跡が立地する地域は、笠寺台地と呼ばれ、熱田層からなる。名古屋城三の丸遺跡（9次調査）は、熱田台地の北部に位置する。遺跡調査の際に採取された基盤粘土中には、骨針化石と共に海水種の *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属の珪藻化石が1個体検出された。この粘土層は、珪藻化石が希薄ではあるが海成層の可能性が高い。

8. 胎土の材料とその特徴

ここでは、各製胎土について粘土と砂粒に分けて検討した。粘土は、胎土中に含まれる微化石類により、4種類の粘土が識別された。また、砂粒組成では、起源岩石の推定により3タイプの組み合わせが識別された。

粘土について、海成粘土を用いた製2試料は、この地域に分布する海成層の熱田層が利用されたことが予想される。その他幾に見られる淡水成や水成粘土を用いた試料は、この地域に広く分布する東海層群矢田川累層の粘土が利用されたことが予想される。なお、Na1やNa7あるいはNa11の胎土中には、少ないものの海水種珪藻化石が見られたことから、海成層に隣接する地域の淡水成粘土が利用されたものと推定される。また、Na3の胎土中には、細粒鉄鉱粒子が多産するが、これらは肉眼的に赤味の強い粘土層である（平成9年度の三王山遺跡の調査において粘土採掘坑付近に見られた赤色粘土がこれに相当する）。

一方、砂粒組成では、概ね堆積岩類や火山岩類あるいは深成岩類からなり、現庄内川や天白川などの砂粒組成に似ている。なお、名古屋城三の丸遺跡の調査時において採取された熱田層粘土中には、火山岩類や堆積岩類あるいは深成岩類の砂粒が含まれることから、一連の地層中にこのような砂粒組成をもつ砂層の存在が指摘できる。一般的に、土器胎土中の砂粒は、河川の砂が混和材として混入されるとされる。しかし、土器中の砂粒と同程度の現河川砂を樹脂で固めて薄片を作成し顕微鏡で観察すると、その表面には河川種の小型珪藻が多量に付着する様子が観察される。一方、砂層においては、このような付着する珪藻は見られない。時として土器中には、こうした珪藻化石が付着・密集した砂粒が認められることがあるが、この場合のみ当時の河川砂が利用されたと推定できる（藤根, 1998）。これ以外では、粘土層の上下に挟む砂層などを利用した可能性が高く、粘土の採取と同時に砂粒を採取したと考えた方が合理的であるよ



第1図 甕胎土および粘土中の粒子組織図 (全分態群を基数とした百分率で表示)

[粘土の区分 (試料番号左)]

☆: 海成粘土 (海水種珪藻化石などの出現), ○: 淡水成粘土 (淡水種珪藻化石などの出現)

□: 水成粘土 (不明種珪藻化石などの出現, 無: その他粘土 (微化石類が認められない))

No.	遺産	種類	粘土	砂粒の特徴 (○は種類に多い場合, □は種小)	その他の特徴	地層の候補
1.	三王山	弥生後期層	淡水成(+海成)	火山岩類, 凝灰岩類, 凝成岩類	海水種珪藻化石伴う	熱田層
2.	三王山	弥生後期層	凝成(古海)	凝積岩類, 火山岩類, 凝成岩類	放射虫化石伴う	熱田層
3.	三王山	宇田型層	その他	珪砂岩類主体, テフラ	鐵屑海綿軟泥多量	矢田川累層
4.	三王山	宇田型層	水成	原積岩類, 凝成岩類, テフラ		矢田川累層
5.	三王山	宇田型層(5-6世紀)	淡水成(+海成)	地積岩類, 火山岩類, 凝成岩類, テフラ	海水種珪藻化石伴う	熱田層
6.	三王山	宇田型層(5-6世紀)	その他	凝積岩類, 凝成岩類, テフラ		矢田川累層
7.	清水寺	S字状口縁台付甕D類	淡水成(+海成)	火山岩類, 地積岩類, テフラ	海水種珪藻化石伴う	熱田層
8.	清水寺	S字状口縁台付甕D類	海成	火山岩類, 凝積岩類, 凝成岩類, テフラ	汽水種珪藻化石伴う	熱田層
9.	志賀公園	S字状口縁台付甕D類	水成	凝積岩類, 凝成岩類, テフラ, [片岩類]		矢田川累層
10.	宮宮渡町4次	宇田型層	水成	凝成岩類, 凝積岩類, テフラ		矢田川累層
11.	伊勢山中学校	宇田型層	淡水成(+海成)	凝積岩類, 凝成岩類, [片岩類, 火山岩類, テフラ]	海水種珪藻化石伴う	熱田層
12.	伊勢山中学校	宇田型層	水成	凝積岩類, 凝成岩類		矢田川累層
13.	曹池	S字状口縁台付甕C-D類	水成	凝積岩類, 凝成岩類		矢田川累層
14.	名古屋城三の内遺跡(9次調査)		海成(希薄)	火山岩類, 凝積岩類, 凝成岩類, テフラ		(熱田層)

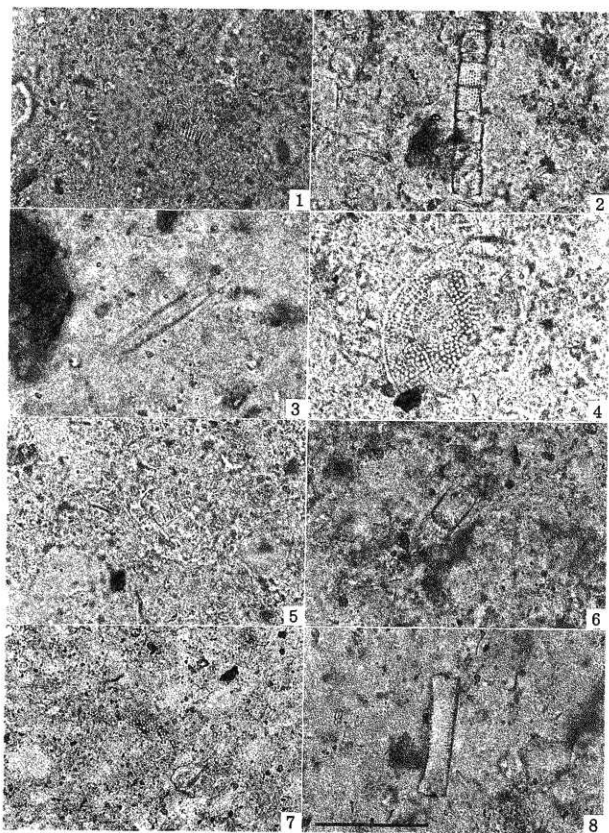
第2表 甕胎土の材料およびその他の特徴

うに思われる。砂粒を採取する方法の違いにより、砂粒組成は異なることが予想され、砂粒組成から製作地を推定するには地層中の砂層や旧河川砂(段丘砂層)などの調査・分析が必要である。なお、ここで検討した土器中の砂粒には、河川種珪藻化石が認められないことから、地層の砂が利用されたことが予想される。

土器研究は形式や施文などを中心に行われてはいるが、使用した粘土や混和材の種類など材料に関する研究は全くなされていない。こうした状況は、形のある土器であるにもかかわらず材料についての情報が欠如していることから、土器研究において大きなマイナス要素と考えている。現段階では、材料が示す意味については明確とは言えないが、重要な研究テーマと考えている。

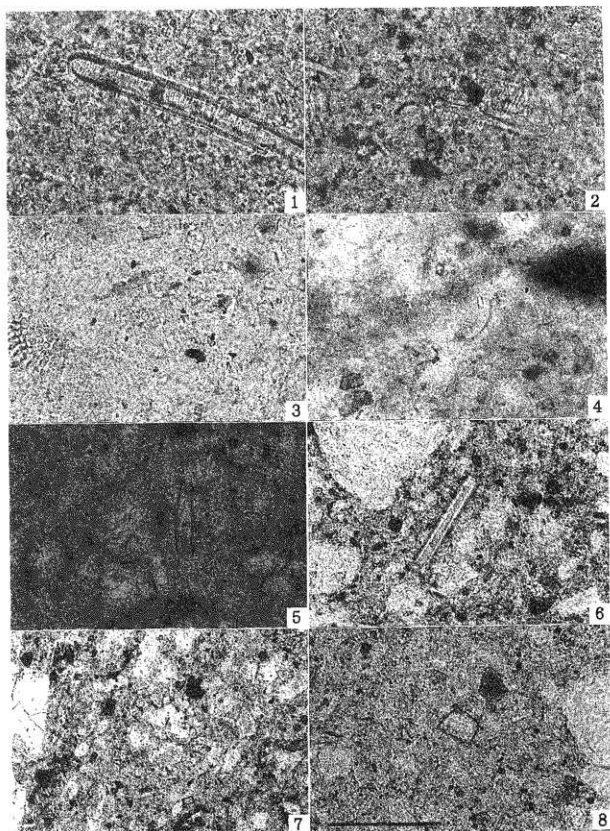
引用文献

- 菱田 量・車崎正彦・松本 完・藤根 久 (1993) 岩石学的方法に基づく胎土分析について—弥生時代後期の土器を例にして—。日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集, 34-35.
- 車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子 (1996) (39) 土器胎土の材料 粘土の起源を中心に。日本考古学協会第62回総会研究発表要旨, 153-156
- 藤根 久 (1998) 東海地域 (伊勢—三河湾周辺) の弥生および古墳土器の材料, 第6回考古学フォーラム岐阜大会, 108-117.
- 坂本 亨・桑原 徹・永魚川淳二・高田康秀・島田治二・尾上 亨 (1984) 名古屋市北部地の地質。地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 地質調査所, 64 P.
- 坂本 亨・高田康秀・桑原 徹・永魚川淳二 (1986) 名古屋市南部地の地質。地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 地質調査所, 55 P.



図版1 土器胎土中の粒子顕微鏡写真

- | | |
|---|--|
| 1. 珪藻化石(<i>Fragilaria construens</i>) No.7, スケール:40 μ m | 2. 珪藻化石(<i>Melosira granulata</i>) No.7, スケール:40 μ m |
| 3. 珪藻化石(<i>Thalassionema witzschoides</i>) No.1, スケール:20 μ m | 4. 珪藻化石(<i>Actinocyclus</i> 属) No.7, スケール:40 μ m |
| 5. 珪藻化石(<i>Denticulopsis</i> 属) No.7, スケール:40 μ m | 6. 珪藻化石(<i>Melosira ambigua</i>) Na11, スケール:40 μ m |
| 7. 珪藻化石(<i>Coccinodiscus</i> 属/ <i>Thalassiosira</i> 属) No.8, スケール:100 μ m | 8. 珪藻化石(<i>Eosotia</i> 属) Na11, スケール:40 μ m |



図版2 土器胎土中の粒子顕微鏡写真

1. 球藻化石 (*Funaria biareafera*) No.11, スケール: 40 μ m
3. 珪藻化石 (*Stauroneis phoenicenteron*) No.1, スケール: 20 μ m
5. 珪藻化石 (*Coloneis lauta*) No.5, スケール: 200 μ m
7. 放射虫化石 No.2, スケール: 200 μ m

2. 球藻化石 (*Pinnularia viridis*) No.11, スケール: 40 μ m
4. 珪藻化石 (*Cocconeis scutellum*) No.2, スケール: 200 μ m
6. 骨針化石 No.2, スケール: 100 μ m
8. 植物珪酸化化石 No.1, スケール: 100 μ m

付編5 名古屋地域における弥生時代後期土器と環濠集落の動向

村木 誠

本書で報告した三王山遺跡をはじめとして、三王山遺跡に近い城遺跡、さらに天白川の対岸に位置し、三王山遺跡から見渡す事ができる見晴台遺跡など、名古屋市内には弥生時代後期の環濠集落が多く存在する。見晴台遺跡では、毎年夏に市民参加の発掘調査を行っており、少しずつ集落の実態が明らかになっているが、それ以外の瑞穂、高蔵、城遺跡については不明な事も多く、今後の調査を待たねば評価できない点も多いが、現時点でわかる範囲で名古屋の環濠集落の動向を整理しておきたい。

これらの環濠集落の動向を考えるためには、それに先立って弥生時代後期の土器編年を確立しておく必要がある。遺跡の動向を把握するために必要な細分にはまだまだ不十分ではあるが、瑞穂、見晴台、三王山遺跡などである程度の資料が揃い、見通しくらいは立つようになった。本稿では、まず土器編年を行い、それに基づいて遺跡の動向を考えたいと思う⁽⁹⁾。

1 弥生時代後期の土器編年

弥生時代後期と言うとき、その始まりは、高蔵式を中期末としてそれ以降の土器を指す事については異論は少ないだろう。一方、その終りについては、古墳時代の始まりについて議論がわかれる他、後期の後に終末期という区分を設けることもあって、なかなか議論が定まらない。しかし、ここではそうした議論を行う予定はないため、従来名古屋台地で山中式、欠山式と呼んできた土器群⁽⁹⁾を後期とする。

中期末の土器群から順に見ていくが、土器の分類は、報告のまとめて行ったものを利用する。

1-1 中期末の土器群

中期末の高蔵式の中でも最新であろうと考えるのは高蔵遺跡14次 SD2、瑞穂遺跡4次 SD11出土である。細かな説明は省略するが、甕は、タタキ目を持つ台付甕である。これは、作業台の上で作られた後、脚台の端部を調整しておらず、潰れた面をなしている。壺では、細頸壺が目立つほか、柄杓の直線文、波状文で飾られた太頸壺があり、後者は後期の土器につながっていく。

1-2 中期末に後続する土器群

中期末に後続する土器群が後期の土器群であると述べたが、その移行期の様相ははっきりしない。赤塚次郎氏は、ここで言う後期初頭にあたる土器として山中遺跡B地点出土品を示し、それ以前についてはほとんど情報がないと述べる⁽¹⁰⁾。そして、従来この移行期の土器の一つとして考えられていた「仮称見晴台式」の土器群⁽⁹⁾は、この移行期の土器群ではなく、さらに、山中式初頭の土器は、畿内第V様式初段階まで遡って考えられるという。一方、石黒立人氏は、高蔵式の後、山中式が成立するまでに1ないし2段階を設定し、後期初頭の土器は山中式ではないと述べ、そこに「仮称見晴台式」と言われた資料をあてる⁽¹¹⁾。高蔵式最新の土器と山中式最古と言われる山中遺跡B地点の資料との間のヒアタスは大きく、ここを何等かの資料で埋めねばならないことは共通しているものの、そこにどんな資料を入れるのか、それは中期末であるのか後期初頭であるのかという点に相違がある。

名古屋台地では、この山中遺跡B地点の土器に対応する山中式の土器は見つかっていないが、高蔵式に後続する土器群が存在する。「仮称見晴台式」の基準である見晴台遺跡RJ溝3出土資料がそれであり、更に高蔵遺跡(1次)D3下層の資料である。

両者とも、高蔵式に見られた壺などの系譜を引く土器が見られる一方、甕にはタキ目がなく、脚台の端部にもヨコナデがなされ、高蔵式の特徴は失われている。高蔵式の直後に続く事は明らかであるが、これが果たして山中式の初頭に先行するものなのかあるいは平行するものなのかは決め手がない。ただ、こうした土器と特徴を同じくする土器が、朝日遺跡でⅦ期として山中式の前に設定されている事⁽⁹⁾を考えると、山中遺跡B地点の資料にいくらかでも先行するのではないかと考えられる。一方で、名古屋台地で中期末の土器がまとまって出土する東郷梅遺跡、中期末に後続する土器群を出土する清水寺遺跡では、これらの土器と共伴していないが、山中遺跡B地点出土のものに類似する高杯H1が出土している⁽¹⁰⁾。東郷梅遺跡の場合、採集資料という事もあって、不明な点が多いが、山中遺跡でこの高杯に共伴しているような他の土器の出土は知られていない。清水寺遺跡でも同様である。この高杯H1が用いられた時の他の土器は、ここで中期末から後期初頭と呼んでいる土器群である可能性もあるだろう。とすると、これらの土器群は、赤塚氏の言う山中式前期に平行すると考える事もできる。名古屋台地では山中式前期に相当する土器群はほとんどない事もあわせて考えると、ここで後期初頭と呼んでいる土器群がその時期を埋めている可能性を考えなくてはならないだろう。

1-3 後期の土器編年

後期初頭の問題はひとまずおいて、山中式以降の問題に移りたい。

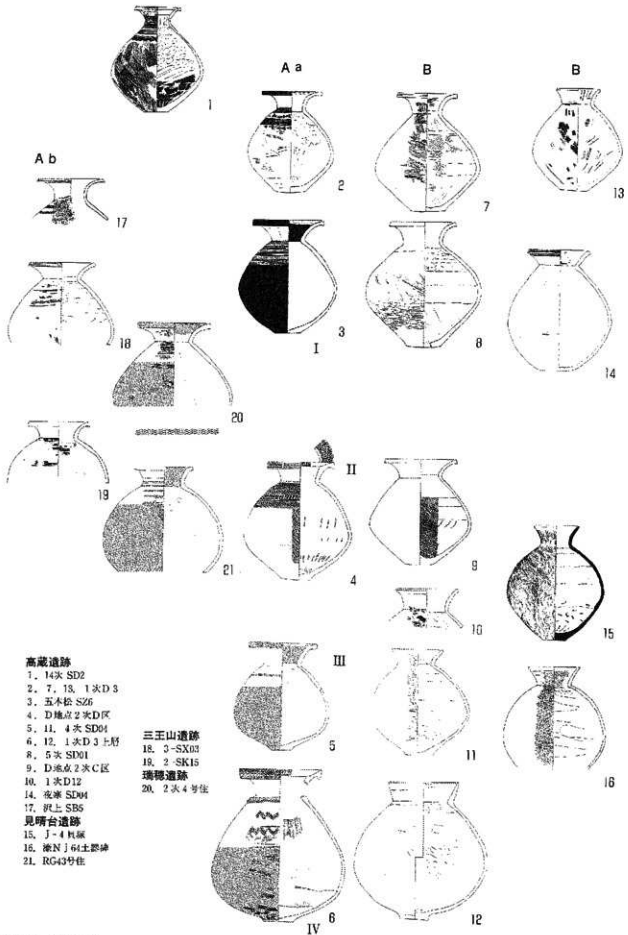
後期の土器編年については、既に述べた赤塚氏や石黒氏らの編年研究があるほか、宮腰健司氏も朝日遺跡の方形周溝墓資料をもとに後期前半山中式の土器の変化について論じている。しかし、これらの詳細な編年を適用する事は難しい。その理由は、一つは先学の対象は尾張低地部が中心であって、これから論じる名古屋台地周辺とは土器に地域差がある可能性が高い事、もう一つは、特に後期前半の山中式は、個々の土器の形態が個性的である上に、一括出土する器種、形式構成も個性的であり、ある資料で組まれた編年に、別の資料を当てはめるとき、その個性と時間差の区別が容易ではない事である。

こうした事情から、名古屋台地独自の編年の確立が急がれる。今回報告した三王山遺跡は、いわゆる名古屋台地の遺跡ではなく、いくらかの地域差を持つ事を報文中で指摘したが、土器様式の構成や個々の土器の変化の方向がまったく異なるという地域差ではないことも既に述べた。まず三王山遺跡で示した4群の編年を基本に、それを名古屋台地の資料などで補うという方法をとりたい。

最初に、編年の指標となり得る壺、甕、高杯についてその組列を検討したい。

壺(第1図)

壺は、資料が充実している高蔵遺跡のものを全体の形と口縁端部の作り等から配列した。横方向には同一遺構から出土したものが並ぶようにした。確実な組列と言えるのは壺Bであり、これは頸部から口縁への立ちかたが上方向から横に開くようになる変化であり、口縁端部にしっかり面をなすものから丸くなるという変化である。前者の変化の要因としては、石黒立人氏が前掲文献等で指摘する、頸部を絞ってつくる中期の壺から、粘土接合時点でシャープに屈折させる後期の壺へという作り方の変化と関わるだろう。壺Aについては、胴部に波状文があるものとないもので大きく二分でき、無い物を壺Aa、あるものをAbとする。Aaについては、これが果たして一系列であるのかに疑問が残るが、口縁形態が単純に外反するもの(2、3)から少し折れて平坦面を成すもの(4)、そして明瞭な段をなすもの(5)へという一貫した方向への変化が見られ、これによって組列を考えた。後の便宜のため、遺構出土のものに限定したが、3



高藏遺跡

- 1. 14次 SD2
- 2. 7. 13. 1次D3
- 3. 五本松 SZ6
- 4. D地点2次D区
- 5. 11. 4次 SD01
- 6. 12. 1次D3上層
- 8. 5次 SD01
- 9. D地点2次C区
- 10. 1次D12
- 14. 夜寒 SD04
- 17. 沢上 SB5

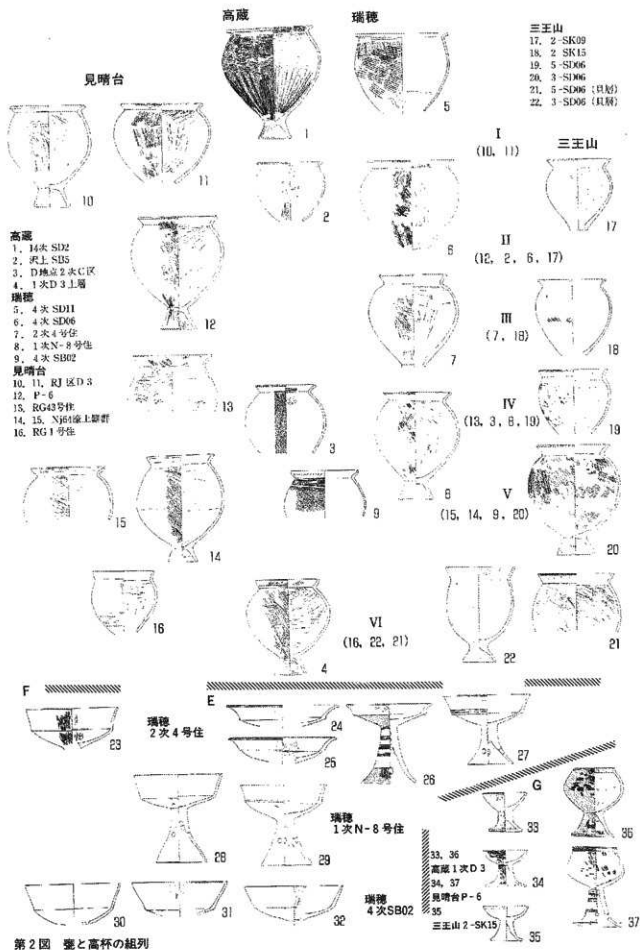
三王山遺跡

- 18. 3-SX03
- 19. 2-SK15

瑞穂遺跡

- 20. 2次4号住

第1図 壺の組別



と4の間に「弥生式土器集成」¹⁰⁾P.154の108に示されたものなどを挿入すれば、形態的にはよりスムーズな組列といえるだろう。文様も組列を考えるためには重要な要素であるが、例えば扇形文などが時間の経過の指標となる可能性があるものの、今の時点で確実な方向は見出せていない。

ここで示した組列では、中期末から後期後半までに5ないし6つの形態の変化が見出せ、これが高蔵遺跡での壺の変化を示している点について問題は少ない。しかし、他の遺跡の資料と対比したときにはつきりと時間の指標とできるのは何かを考える必要がある。他の遺跡でも認識可能な変化としては、口縁部の途中に屈折があるものの出現(Ⅱ)、その屈折が段差になるもの(Ⅲ)、段が襷となりその上位が湾曲するもの(Ⅳ)という口縁形態の変化が挙げられる。文様では、胴部の櫛歯列点か鋸歯文へというのも認識可能である。胴部の最大径を持つ部分が下降し、無花果形になるのは、個体差があり時期の特定には困難が伴う。21に示したのは、見晴台遺跡出土資料であるが、胴部は球形で、最大径の部分はそれほど下がっていない。しかし、大まかな指標としては認めてよいだろう。つまり、壺Aaについては、5個の組列を示したが、2を除く4個については各時期の指標としてよいだろう。壺Bについては、6個の組列があるが、他の資料に適用可能な指標は、口縁端部の面の有無にかぎられ、大きく二分できるに止まる。

Abについては、ほとんど指標が見出せない。凶には、高蔵遺跡、瑞穂遺跡、三王山遺跡の例を挙げたが、これらを時間的な細分に利用するのは困難である。

壺については、壺という器種すべてで同一方向の変化をするわけではないらしい。ある形式では時間の経過とともに胴部が下膨れになるのに対し、別の形式は球形化するというように、それぞれ独自の変化をしているように見える。

甕(第2図)

甕は形式分類のA、BからCへ変化していく事については、口縁部にしっかりした面を形成するものから丸くおさめるものへという変化であり、多くの器種に認められる山中式から欠山式への変化と一致し、問題ないだろう。第2図では、12と13の間で変化する。AやBの中での形の変化は、図のように考えた。甕については、その性格上遺跡差もあるものと考え、遺跡毎に組列を考えた。(17は甕ではないが)

胴部の形態は、上位が強く張り、下半が急激にしまるものから、胴部中央が膨らむ形へという変化で組列を考える事ができる。また、前半については、中期の胴下半のタテハケメとの関わりを想定させる胴外面最下位に縦方向に施されるストロークの長いハケメの有無も指標となるようだ。更に、外面にハケメのない、ナデ調整の甕は凶には入れなかったが、10、11と共伴し、その存在も時間の指標となるだろう。口縁端部の刺突の有無については、三王山遺跡について述べたように地域差があり、高蔵遺跡では両者が存在する場合もあって、無いものが古いという傾向はあっても、時期差の指標とする事はできない。胴部内面のヘラケズリについても、頸部直下までなされるものから、中位まで、そしてほとんどないものへという大きな変化は認められるものの、時間的細分の指標と為し得るほど各遺跡で共通しているわけではない。また、甕Cの中では、16や22のように、頸部の締まりが弱いものの出現する時期は限られており、時間の指標としてよいだろう。

更に受け口の甕Dについては、名古屋台地の場合、胴部が球形化した甕(14等)と共伴する例が多く、肩の取った7や18などと伴う例はない。後に器種、形式構成を考える際に述べるが、時間の指標となり得る現象であるが、尾張低地部とは時間差があるようだ。

甕の変化は緩慢な上、個体差が大きい事もあって、細分はこれ以上困難である。遺跡を超えて考えれば、組列の各個体の間に入る形態のものもあるが、それが時期差であるとは言えない。また、一括資料の中でも形態が異なるものがある事も注意しておかねばならない。甕の検討からは次の事が判明した。すなわち、中期末から後期後半の間に、名古屋の各遺跡でほぼ似たような型式変化を遂げる事、そしてその形と、特定の時期にのみ見られる形態があるものの存在から、図のように甕の組成によって、IからVIのまとまり（いわば甕の様式）に区分する事が可能であり、それが編年の指標となり得ることである。

高杯（第2図）

高杯E、Fについては、三王山遺跡の報文中で組列を提示した（第156図）。そこで触れていない、Fの後続について述べる。第156図8以降は、城遺跡の資料のような脚部が直線的で小さくなるものと、高蔵遺跡D3上層のように、内湾する形を保ったまま低くなるものがあるが（第164図）、直線的なものは名古屋台地より東に多い器形であり、その関係は時間差ではなく、地域差を表している可能性が高い。

高杯の場合も、各土器形式の型式組列がそのまま時期差を表しているわけではなく、高杯Fでは、組列の上下関係にあるものが共伴することもある。時間の指標として活用するには、共伴状況を確認しなければならない。住居からの一括資料が豊富な瑞穂遺跡の事例を第2図に示した。瑞穂遺跡では、一括と認めてよい住居が3軒あり、図で横に並んでいる高杯が出土している。高杯E、Fの共伴の仕方は、組列に沿うようには進展しておらず、2次4号住居では、高杯Eの杯部がまだ浅いものと杯部が極めて深くFに近づいたと言えるものが共伴している。N-8号住居では、Eの杯部が深くっており、確実に型式変化をしている一方で、高杯Fは整った姿を示す。次の4次SB02では、ほぼ高杯Fに限られ、N-8号住居出土品と比べて、杯底部が口径に対して小さくなるというその後一貫して続く変化をしている。瑞穂遺跡の高杯の変化を、三王山遺跡の時期区分に対応させてみると、2次4号住居が②の高杯の組成に近く、N-8号は、③のなかでも古いほうであるであると見た、第156図の3と4が出土した5-SD06の高杯に近い。そして、SB02は③の新しい時期（2-SD02、3-SD06）に近い。瑞穂遺跡の場合、住居の切り合いが激しく、住居の床面一括としているものの中にも別の住居資料が紛れ込む可能性もあり、この事例のみから高杯Fの出現時期を考えるには慎重である必要があるが、4号住居の23が高杯Fの祖形であると認めてよければ、その出現は、単純にEからの型式変化であるとはばかりは言えないし、時間の指標として過大に評価する事はできない事を示しているよう。

瑞穂遺跡の事例からわかるのは、三王山遺跡の高杯E、Fの組列（第156図）の1・2と3、3と4が共伴する事がある事、4～6も共伴し得るという事である。ちょうど後期前半から後半への変化は高杯が指標となるケースが多いが、時期の比定には個々の高杯の形ではなく、共伴の仕方が重要である事を確認した。なお、三王山遺跡の組列で、6までのものと7・8が共伴する事例（三王山3-SD06では共伴とは言えない）はないため、編年の指標となる。

その他、高杯Gと杯口縁部が直立するブランデーグラス形高杯は、文様、赤彩が不定形なものから整ったものへの変化、Gについては更にその退化という観点で組列が可能であると考えたが、資料数が少なく、確実とは言えない。しかし、後期前半の中でも前半期の細分に際して、数少ない指標である。

さて、ここで幾つかの型式組列を考え、縦方向に並んだものを横につないでいく作業になるが、これは

一括資料によって確かめるほかない。確実に一括として扱える資料は多くないが、同一遺構からの出土品を共伴と認めれば、各形式の組列を総合して、次のような遺構の順序を考える事ができる。複数の土器形式の組列でチェックできれば、遺構毎の順序として確実と言えるだろうが、条件に恵まれず、資料中の一つの土器形式の組列が、資料全体の序列となっている例が多い点は課題として残る。遺跡別に基準資料の序列を示す。

高蔵遺跡D 3

高蔵遺跡(沢上) SB5

見晴台遺跡P 6 (J 4貝塚) 5層

三王山①

高蔵遺跡5次 SD01

瑞穂遺跡4次 SD06

高蔵遺跡(夜寒地区) SD04

三王山②

瑞穂遺跡2次4号住居

瑞穂遺跡1次N 8号住居

三王山③

瑞穂遺跡4次 SB02

見晴台遺跡 RG43号住居

城遺跡環濠下位

三王山④

見晴台遺跡 RG 1号住居・Nj64土器群

高蔵遺跡D 3上層

城遺跡環濠上位

さて、基準資料となり得るような遺構の順序が想定できたところで、器種、形式構成、組成の点からこれらを幾つかのまとまりに分かつ事を考えよう。三王山①以降のものは、直口壺A～Cを多く含む場合が多い。また、三王山②以降は、高杯の中心が高杯Eとなる。そして、三王山③のなかにはE、Fが共伴す

本稿での時期	指標と基準資料	赤塚氏の案 (赤塚1990・1992)	石黒氏の案 (石黒1997)	加納氏の案 (加納1991)	三王山遺跡	
後 期 前 半	1	壺I, 壺A	山中式1段階	第六段階 第七段階 第八段階	① ②	
	2	高杯A～C 壺Aa I 壺II	山中式2, 3段階	第九段階 第十段階		
	3	高杯E, F 壺III	山中式4段階	第十一段階		
後 期 後 半	1	高杯E消滅 壺V, 壺Aa II	山中式5段階 週間I式前半	第十二段階 第十三段階	瑞穂期	③
	2	高杯Fの型式 壺VI	週間I式2, 3段階	第十四段階	能田旭期	④
	3	高杯Fの型式 瓢壺, 小型器台	週間I式4段階 週間II式1段階	第十五段階	週間期	

表1 編年対照表

る時期と、F中心となる時期がある事が分かった。受け口の甕Dは瑞穂遺跡4次SB02以降に限られる。一方、高杯Gは三王山③以降にはない。三王山③としたものは環濠出土の資料であり、厳密な共伴関係が不明であるため、器種、形式構成がどの時点で変化しているのかわからない点もあるが、高杯に関しては②と③の境というより、③の中で形式構成の変化があるらしい。三王山③は、本文中では分けなかったが、瑞穂遺跡のN 8住とSB02がその新古に対応する資料である。ちょうどこの両住居時期の時期を境に消えたりあるいは逆に出現する土器形式が多い事は明らかであり、大きな画期と認め、それ以前を後期前半、以降を後期後半と呼ぶ。そして、その内部では、高杯B、Cを欠き、赤彩も定型化しておらず、いわゆる山中式の範疇に入るとは言い難いが、次に継続する壺やブレンダーグラス形の高杯を持つ高濠遺跡D3を前半1（厳密には、その前に「仮称見晴台式」土器群を後期に含め、それらを前半1の前半、高濠遺跡D3は1の後半ということになろうか）とし、甕の形が類似し、高杯Eが増える以前の高濠遺跡（沢上）SB5から高濠遺跡（夜寒）SD04までを2、高杯Eが多い瑞穂遺跡2次4号住居からN-8号住居までを3としたい。後半については、高杯Fの共伴状況と迷文を持つヒサ壺や高濠遺跡D3上層に見られる小型器台の存在を指標として、瑞穂遺跡4次SB02から城遺跡環濠下位までを1、三王山遺跡④の行を2、高濠遺跡D3上層、城遺跡環濠上位を3としたい。城遺跡の資料は、出土状況から基準資料には含めがたいので参考資料である。各小期の中で細分が更に可能な事については既に述べた点もあるが、上記の基準資料の位置関係は、時間的な前後関係を想定しており、資料の蓄積が進めば更なる細分は可能であると思われる。また、取り上げていない遺跡の資料を含めると、更に細かな前後関係を考える事が可能ではあるが、すべてを前後関係と見てよいのか否か、まだわからない事が多いため、今回はこれ以上細分しない。先学との対象は表に整理した。名古屋台地でこれまでの名称では、後期前半1前半が「仮称見晴台式」、2、3が山中式、後期後半1、2が欠山式、3が欠山式から元黒敷式と言う事になろう。

2 環濠集落の動向

さて、名古屋台地の弥生時代後期の環濠集落の動向を考えるための前提としての土器編年はある程度整った。これに基づいて、環濠集落の動向を考える事にしたい。

環濠集落は弥生時代を通じて一般的に見られる集落の形であり、濠を掘って防御の役割を持たせているからといって、必ずしもその時代が、争いが頻発する、社会の動乱期にあたるとは限らないだろう。しかし、これから問題とする名古屋の後期の場合、遺跡の立地、濠の規模、そして環濠が機能していた時期の短さ等から見て、やはり緊張した社会状況に対応した集落であると考えられる。そうだとすれば、単に環濠集落だけでなく、環濠を持たない集落やいわゆる高地性集落との関わりや近隣地域の環濠集落との関わりが重要になってくる。近年、そうした観点から、名古屋を含む地域の環濠集落等を全国的な動きの中で評価する新しい研究が相次いで発表された⁽⁹⁰⁾。しかし、一方で、そうしたスケールの大きな論を支える発掘調査の成果が十分に整理されているかと言えば、不十分の感は否めない。以下では、なおざりにされてきた感のある基礎的事実を提示する事を中心に、名古屋の環濠集落を考えたい。

2-1 環濠集落の動向を考える前に

環濠集落の動向を考える前に、環濠集落について考える上での基礎的な問題について触れておきたい。まず考える必要があるのは、環濠集落成立の時期の特定すなわち、環濠掘削時期の特定の仕方である。名

古居の遺跡をはじめとして、東海地方では、濠のみが見つかっていて、濠の内外の様子がまったく不明な遺跡が多い。こうした場合、環濠掘削の時期は特定できない。しかし、多くの場合、出土遺物から環濠の掘削時期が推測される。しかし、三王山遺跡の調査でも明らかのように、環濠機能中に濠内に土器が埋まらない時期があったとすると、濠から出土する遺物は濠が埋まり始めた最初を示すのであって、濠の掘削時期は示さない。濠内の最下層から濠機能中のものの可能性が高い土器の破片が出土する事もあるが、濠の掘削とは関わりない、環濠掘削以前の土器が混入する事は当然あり得る事で、それを峻別する事は困難である。仮に峻別できたとしても、環濠から出土する遺物は、やはりせいぜい環濠掘削時期の下限を示しているに過ぎず、それを以って環濠掘削時期を決める事は、今後必要とされる正確さを欠いている。

それゆえ、濠の掘削時期は、濠から出土する遺物ではなく、遺構の切り合いや他の遺構との関わりに求めることになる。注9の文献中で、見晴台遺跡の環濠掘削時期を特定する事を試みた丸山竜平氏は、環濠に極めて近接する住居が、環濠とは共存し得ないということなどを根拠として環濠掘削の上限を決定する。何を根拠とするかは遺跡毎に検討しなければならないが、その特定のためにはこうした手続きが必要である。以下では、できるだけ根拠を挙げて濠の掘削時期を確かめたい。

次に、環濠が不要となった時期を決める方法を考えたい。名古屋の環濠集落では、濠の大半が埋まり、明らかに濠としての機能を喪失した時点でもまだ集落が続いている場合が多く、環濠が不要となった時期の特定は難しい。一般的には、環濠から出土する土器をもって時期を決定している。報告でも述べた通り、三王山遺跡でも、最下層とその上位層には土器の出土の仕方に明瞭な違いがあり、濠の掘削から土器が大量に埋まるまでの間に土器が埋まらない時期があったとすれば、その時期が濠の機能中であり、土器が大量に埋まる時期が、濠が機能を変化させた時期であると考えるのは妥当であろう。しかし、大規模な環濠の場合、例えば濠の下層がいくらか埋まったからと言って、集落を守るという機能が消滅するとは思われない。また、中世の研究からは、濠に「ゴミ」を捨てる事は必ずしもその濠が防御の役割を持っていない事を意味しないことが示唆されている⁽⁸¹⁰⁾。であるなら、大量の土器が出土したからといって、その土器の時期に濠が不要となっていたと無条件に考えることはできないだろう。

では、確実に濠が不要となった時期を決める事はできないのだろうか。濠の埋土中に、地山土が流れ込んでいるような堆積をしている事がある。これは、濠の掘削土で築いた土塁を埋め戻したものとと言われる。意図的に埋めたか、崩落したかは不明だが、崩落したものを取り除いていない以上、これは確実に濠が不要になった後の事であると判断してよい。この地山土が土塁の痕跡であるかどうかには議論の余地があるが、濠が埋まっている事には違わず、この地山土の堆積が濠の機能期間の下限である事は認めてよい。この地山土の流入は、濠の最下層にある例はなく、例えば三王山遺跡1-SD04では、ある程度土と土器が埋まった上に観察される。これを根拠とすれば、土器の埋没よりは濠の機能停止を新しく考える事になる。一方、見晴台遺跡や瑞穂遺跡では、最下層の遺物の少ない土の上に地山土の堆積があり、濠機能中から濠が埋まるまでに遺存度の高い土器が埋まる事はない。これらの事例から、濠が不要となった時期は、濠内に遺存度の高い土器が埋まるようになってから、地山土の堆積までというように幅を持たせて考えるしかないが、地山土の堆積がない事例も多いため、遺存度の高い土器の出土をもって濠は機能を変質させたと仮定しておく。但し、濠の遺物が地点毎に時期差がある事は当然考えねばならず、濠の機能停止の時期も、現時点でという制約を受けている。

これだけの前提をもとに、名古屋市内にある6つの環濠集落について、濠の掘削時期、埋没時期を中心に概観する。なお、各遺跡の詳細は、見晴台考古資料館で開催した特別展「よみがえる環濠集落」の展示解説にまとめたので、重複を避けるため、以下の議論に関わる概要を述べるにとどめる。

2-2 名古屋の環濠集落

名古屋市内には、後期の環濠集落と見られるのが6遺跡ある。高藏、瑞穂、桜田貝塚・貝塚町遺跡、見晴台遺跡、三王山遺跡、城遺跡である。何れも市中心部の台地、あるいは丘陵の先端部分に立地し、弥生時代にあっては海岸線からそれほど遠くない場所であったようだ。

この内、高藏遺跡、桜田貝塚・貝塚町遺跡、城遺跡では濠の一部が見つまっているのみで、その他の遺構は見つかっていない。前の議論からすると、濠の掘削時期が特定できない遺跡である。城遺跡については述べたが、桜田貝塚・貝塚町遺跡では、後期後半2を中心とする土器が多く出土している。

高藏遺跡では、濠から出土する遺物の中に明らかに後期前半まで遡る資料があり、量的にも混入とは考えられない。その上位層から、後期後半1の完形の土器群が多く出土している事も合わせて考えれば、後期後半1に濠が埋まるのに先立って、後期前半の内に濠が埋まる時期があったことになる。

さて、これ以外の見晴台遺跡、瑞穂遺跡、三王山遺跡は調査がある程度行われ、集落の評価も少しはできる。三王山遺跡以外の2遺跡について、濠の機能期間と集落の内容について概要を述べる。

瑞穂遺跡（写真1、2参照）

瑞穂遺跡では、二重に巡る巨大な環濠が検出されている。この二重の環濠は、何れも中期末の高藏式期の方形周溝墓を切って掘られており、環濠掘削の上限を決定する事ができる。そして、この高藏式期の方形周溝墓の隣に、後期前半2の方形周溝墓らしい直交する方向を示す2条の溝がある。この溝も方形周溝墓であると思われ、高藏式以後後期前半2までは、この場所が墓域として利用されていた可能性が高い。

方形周溝墓が、同じ地点で連続と造られる串の多い墓である事を考えると、墓域の連続性とその破壊という観点から、環濠は、直接切り合う周溝墓だけでなく、後期前半2の周溝墓より後出であると考えられる。

一方、環濠が埋まり始める時期の特定は困難である。瑞穂遺跡では名古屋台地の他の遺跡と異なって、環濠から土器があまり出土しない。集落内部では、後半1までは住居があり、それ以降は遺物もほとんど出土しない。環濠が不要になったのと、集落の放棄がほぼ同時であると考えられるのがよいだろう。

集落の内部では、現在まで約50軒の竪穴住居が見つまっている。住居の出土遺物では、2次4号住居が最古で、後半3の中でも古いほうである。濠掘削の上限の前半2よりは後出である。であるから、この集落では、集落がこの場所に営まれるのと濠掘削がほぼ同時である、集落の開始期に濠を掘っていると考えてよいだろう。更に、この住居に後出する1次N-8号住居、後期後半1の4次SB02があり、この時期までは集落が継続していた事は確かである。集落の内部で見つかる遺構はすべて竪穴住居であり、現時点では集落内部の機能分化の様子はないし、遺構から集落内部に階層的な分化があったことも伺えない。ただ、一括資料を出土する住居の多くが焼失住居である点が注意される。

見晴台遺跡

見晴台遺跡では、北側では濠が二重に巡っている事がわかっており、更にそれがすべて同時に掘削されたわけではなく、埋め戻し、再掘削が行われたようで、そのそれぞれの掘削時期の特定にはまだ材料不足の感否めない。しかし、最初に環濠掘削が意図された時期についてはいくらかの手がかりはある。先に

述べたように、丸山電平氏は、環濠に極めて近い地点に営まれた住居が、地山土混じりの土で意図的に埋められたような状況である事から、環濠掘削の上限をこの住居の時期におく。また、内側の濠の外側肩部から出土した遺物が、土塁の下層にあったものであるとして、この遺物の時期も濠掘削時期の上限とする。この遺構、遺物の時期は、何れも後期前半2程度とする事ができるものである。住居は直接の切り合いを持つわけではない、見晴台遺跡では竪穴住居が地山土混じりの土で埋められているのもこの住居に限ったわけではない。土塁想定地点の遺物にしても、実際に土塁にあたる土が残っていたわけではない。であるから、遺構の直接の切り合いよりは根拠としては弱い、一つの有力な意見である。

濠の掘削時期を考える上で、もう一つ重要と思われるのが、集落域で見つかっている2基の方形周溝墓である。環濠内の中央やや東よりで、後期初頭、後期前半2位の方形周溝墓が2基見つかっている。この内、1次調査P6（飯尾恭之氏が調査したJ4貝塚と同一遺構である）と30次調査のSD05からなる周溝墓について検討する。この遺構を調査した飯尾氏によれば、この遺構の最下層からは氏が「寄道I式」と呼ぶ⁽⁹¹⁾、本稿の中期末から後期前半1に近い時期の遺物が出土するという。しかし、これらの遺物は小片のものが多く、この遺構に伴うものか判然としない。その上位の4、5層の貝層からは、遺存度が高い土器が出土している。この土器については、方形周溝墓に供えられた土器と考える事に問題なく、私はこの4ないし5層から出土する遺物がこの周溝墓の築かれた時期を示すと考えている。そして、その時期は、前半2でも古い時期であろう。そして、環濠内に、方形周溝墓が営まれる例が少ない事と、これに続く周溝墓がまだ見つかっていない事から、環濠掘削の上限を決定するものである可能性が高いと考える。丸山氏が述べる竪穴住居と、方形周溝墓からの判断としては、見晴台遺跡で最初の環濠が掘削された時期の上限は後期前半2としてよいと考える⁽⁹²⁾。

濠が埋まっていく時期についても一様ではない。ここ数年の内にを行った北部の調査では、二重の内側の濠には、後期前半の土器のみが出土する地点があることが知られた。遺物は小片であり、かつ小面積の調査であるから、果たして本当に後期前半の遺物のみかどうか明らかではないが、この濠を切る形で新たな濠が掘削され、この新たな濠の下層からは後半1を中心とする遺物が出土する。とすれば、後期前半の内に、一部の濠を埋め、別の濠を再掘削した事は十分想定してよい。見晴台遺跡では、複数次に及ぶ再掘削の可能性が示唆されており、最終的に濠自体が不要となった時期は決めたいが、新たに掘削された濠からも下層で後期後半1の遺物が出土しているから、この時期に埋まり始めたと考える。濠の他の部分からの出土遺物は、遺存度の高いものは後期後半1以降に限られており、北部での想定と矛盾しない。

以上まで、名古屋の環濠集落の状況を述べたが、以下で議論するために、幾つかの点をまとめておく。

- 濠の掘削時期がある程度特定できる遺跡では、何れも後期前半2を上限としている事。
- 環濠集落の成立に際しては、それまでの集落を単純に濠で囲むわけではない事。
- 環濠集落の内部には顕著な集落機能の分化は見られない事。
- 濠の埋没開始（瑞穂遺跡の場合は集落廃絶）の時期は、高藏遺跡を別にすれば、おそらくは微妙な時期差を持ちながらも、後期前半3から後半1のなかにある事。
- 瑞穂遺跡を除く遺跡では、濠の埋没が集落の廃絶とはならない事。

最初に、濠の掘削時期が遺構から特定できる瑞穂、見晴台、三王山の各遺跡では、何れも濠が二重に巡っているため、すべての濠が一時期に掘削されたとする保証はないが、少なくともこの内の一部の濠が掘削

された時期の上限として後期前半2という時期を与える事ができる。濠が機能を変化させ、埋没をはじめた時期が後期前半3の終りから後半1前後であるならば、上限にかなり近い時期に濠を掘ったとみてよいだろう。後期前半2は細分が可能である事は既に述べたが、濠の掘削時期についてはあくまでも上限を示しているだけであり、上限の前後を論じてあまり意味がなく、ここでは後期前半2を確認しておけばよい。そして、その集落の成立に際しては、墓域を含む部分に濠を掘っており、単純に既存の集落を濠で囲んでいるわけではない。見晴台遺跡では、竪穴住居を埋めて濠を掘ったらしい痕跡があり、丸山竜平氏は先住者と濠掘削の主体が異なる可能性を述べる¹⁰²。三王山遺跡では、未だ溝として認識可能であった方形周溝墓を埋める形で濠を掘っており、方形周溝墓が世代を超えて連絡と営まれる性格の墓である事を考えると、ここでも濠掘削の主体が別である可能性もあるだろう。しかし、見晴台遺跡では、他の地点でも住居を作るために前の住居を埋めたような様子が観察されるし、周溝墓を壊し、それ以前の墓域の一部を環濠集落内とするのは前記三遺跡で共通の現象である。濠掘削の主体が先住者と異なるかどうかは、何か環境となるのか私には案がないが、一見先住者を無視するかの様に環濠を掘削しているのは特別な例ではなく、これが別の主体によるものとするのは難しいと考える。むしろ、それ以前に何が営まれていようとその場に環濠を築かねばならない程度の必要に迫られたと考えたい。

次に集落の内部であるが、こちらも調査の現状に大きな制約を受けるが、見つかるのは何れも竪穴住居ばかりであり、集落内に更に区画されたり、あるいは特殊な遺構が存在する事はない。三王山遺跡で出土した銅剣は、周溝墓の副葬品の可能性が考えられるが、そうだとすれば、周溝墓を築き得ない人、築き得る人の中でも特異な副葬品を持つ人、持たない人という程度の階層の分化が進んでいた事は当然考えてよいだろうが、集落の様子には顕われていない。遺構として残るものは本当に均質であったのか、そうではなくて分化している様子を把握できないだけなのかを決めるには、更なる調査が必要であるが、これまでの調査成果からは、均質な集落内部という評価が妥当である。

今度は濠が埋まっていく時期を考える。濠のみが見ついている遺跡も合わせて、環濠遺跡を除く5つの遺跡の濠から共通して出土するのは後期後半1の土器である。いずれも遺存度が高いもので、濠が機能を変化させたのは、何れの遺跡においても後期後半1を前後する時期である。環濠遺跡でも環濠内の最新の住居は後期後半1である。しかし、高蔵遺跡では、後期後半1の遺物が出土する下層に後期前半の遺物のみを出土する層があるし、見晴台遺跡でも、後期前半の遺物のみを出土する場所がある。見晴台遺跡の事例は、一度濠が埋まって、濠が機能していない時期があるというよりは、濠の掘削、埋め立て、付け替えといった一連の行為の中で、後期前半で埋まった濠もある、と理解したほうがよいだろう。一方、高蔵遺跡の場合、掘削時期に関する手がかりはまったくないが、濠内から出土する後期前半の特徴を持つ土器は、土器の形や同一層内に後半の土器をまったく含まない事から見て、他の遺跡と同じ時期である、後期後半まで下げて考える事は困難であり、少なくとも他の遺跡より古い時代に濠に土器が埋まったとする事ができよう。そして、その層の上位からは後期後半1の遺存度の高い土器が出土する。後期前半の土器は、時期が決定しがたいが、その上位の後半1の土器と時間的に連続してはいないようであるから、後期前半と後半に濠が埋まる事が二度あったとする事も可能である。高蔵遺跡については、弥生時代を通じて名古屋台地の中心的集落であった事が推測されるが、或いは他の遺跡とは異なる時期に濠が掘削された環濠集落だったのかもしれない。

鳴海丘陵に近接して営まれた三王山遺跡と城遺跡については、報文で述べたので繰り返さないが、濠に土器が埋まり始める時期に微妙な違いがある。前者では、報文で③とした土器群の細分が果たせなかったため、確定ではないが、それを瑞穂遺跡の資料を用いて、前項で区分できた事を考えれば、おそらく後期前半3の内に土器が埋まり始めている。一方、城遺跡の濠から出土する遺物には後期前半まで埋り得るような遺存度の高い土器はほとんどなく、後半1以降である。

瑞穂遺跡では、集落内に営まれた最新の住居が環濠集落の廃絶の時期を示すと考えるが、それは後期後半1である。

濠が機能を变化させた、あるいは集落自体がなくなった時期は、後期前半3の終り頃から、後期後半1の中にある事は確認できたが、現状ではその中で微妙に時期差がある。これが実態を反映しているとは限らないが、例えば瑞穂遺跡が継続している時点で三王山遺跡の濠が埋まり始めているのはほぼ確実であって、環濠集落の終焉は、かなり近い時期であるとはいうものの、少なくとも土器の1小期分の違いがある事は確かである。この事の意味は今はまだ良くわからないが、伊勢湾沿岸地域の環濠集落を広く見たときに、濠から出土する土器にいくらかの時期差があることは認められ、環濠集落廃絶の時期の近さを強調するだけでなく、そうした微妙な時期差を評価していかなければならないのだろう。

さて、名古屋の環濠集落では、瑞穂遺跡を除いて、環濠が埋まり始めた後も同じ場所で集住して住む形の集落を続けている。濠から後期後半2以降の土器が大量に出土することがそれを示しているし、三王山遺跡や見晴台遺跡では実際に竪穴住居も見つかっている。環濠集落以外では、遺跡も増加し、集落数が増加するようではあるが、環濠集落だった遺跡自体の規模が縮小する事はないようだ。環濠集落の動向とは直接関わらないが、環濠から出土する土器を見る限り、高森遺跡と城遺跡が後期後半3まで、三王山遺跡は後期後半2まで、桜田貝塚・貝塚町遺跡もほぼ同じ頃まで、見晴台遺跡は評価が難しいが、後期後半3以降の古墳時代まで遺物が出土しつづけ、集落としては継続しているようである。環濠の第一の機能が先に想定した通り防御であるならば、環濠が埋没した事は防御が薄くなったことを示し、濠を必要とした社会状況がなくなったことを意味している。それにも関わらず集落の動向に大きな両期は見られない。争乱の終結は、それまでの秩序を激変させる事はなかったらしい。環濠集落は、それまでにはない規模の集住を実現したが、それは単に社会の緊張状態に備えたものだけではないのだろう。

2-3 小結

名古屋の環濠集落の動向を検討した結果、根拠を示せる遺跡については、後期前半2を上限とし、おそらく2から3の内に濠を掘削した事が確認できた。そして、そのほとんどが、後期前半3から後半1の内に濠の機能を变化させている。そして、まさに濠が機能していた同じ時期の周辺地域を見てみると、知多半島の丘陵上には報告で述べたような高地性集落が現われている。そして、他地域に目を移しても、環濠掘削時期は特定できないものの、環濠から出土する遺物が名古屋の環濠集落と同時期で、少なくとも濠が機能していた時期の一部が共通する環濠集落が多数ある事もはや周知の事実である。これらの事実は、単に名古屋の遺跡だけでなく、伊勢湾沿岸一帯が緊張状態にあったことを示している。そして、その緊迫した状況とは、『魏志』に「倭国乱」と記されたものであるらしい事も確かになりつつある⁽⁶⁴⁾。その中で占める名古屋の環濠集落の位置、例えば、名古屋の環濠集落は伊勢湾沿岸のその他の環濠集落とともに一体であったのか否かという点が重要になるかと思うし、名古屋の環濠集落の終焉時期が微妙に異なる事

から、それらをすべて一連のものとして判断してよいかという問題も生じてこよう。武器類の出土が少なく、濠に囲まれていながらも「平和」⁽¹⁴⁾的な印象を与える名古屋の環濠集落の中で、極めて大規模な二条の環濠に囲まれ、武器であろう銅鐙の出土が多く、焼失住居もあるなど(写真1, 2参照)、突出した印象を与える環濠遺跡の動向も興味深い。しかし、それについて論じる事は、基礎的な事実を確定しようという本稿の趣旨から外れるし、本稿中で紹介した先学の推論を超えるための新たな事実もない。環濠集落の評価は今後に待つ事にして、最後に、本稿で取り扱った土器の変化と環濠集落の動向を関連付けるよう試みて、名古屋台地の弥生時代後期についてのまとめとしたい。

3 弥生時代後期の名古屋

今回報告した三王山遺跡の調査では、環濠集落期と環濠埋没期の土器がいずれも多く出土したが、伊勢湾沿岸地域が独自の土器様式(従来の欠山式)を発達させると言われる環濠埋没期の資料の中に、手焙形土器や台付直口壺のように、西日本地域との関わりなしには考えられない土器群が見られた。また、同じく西方の地域との関わりなしには成立し得ない受け口の甕Dも環濠内からしか出土しない。いわば、従来、環濠埋没期以降は独自の土器様式を発達させると言われていたのに対して、むしろ環濠埋没期に一気に西方諸地域からの影響が顕在化したように見える。城遺跡の環濠から、手焙形土器や近江地方の特徴を持つ受け口、平底の甕が出土しているのも示唆的である。もちろん、土器の大多数はいわゆる欠山式の土器群であり、環濠機能時の後期前半(山中式)の土器群と比べると西日本との関わりが少ない土器ではある。しかし、山中式の成立に関して西日本諸地域からの影響はあったとしても、その後半期、後期前半3の時期には、三王山遺跡では、直接西日本と関わるような土器はほとんど見当たらない。

尾張低地では、手焙形土器や受け口の甕は、赤塚氏の言う山中式後期に現われ、そのことから赤塚氏は、「新たな形式、形態を模倣(ママ)する混沌とした製作環境」を想定し、これが、社会的に大きな変動、混乱を予見するものである可能性を述べる。土器の変化と環濠集落の動向が関わりとすれば、この変化が重要であると思われるが、名古屋台地では三王山遺跡以外でも、例えば甕Dは、後期後半1の指標としたように、これを含む資料と含まない資料は明確に分かれ、赤塚氏のいう山中式5段階を待たねば出現しない。手焙形土器の出現も、現在の資料では後期後半1以降である。いわば、名古屋台地では、尾張低地部と比べると、ちょうど環濠が機能していた期間の分だけ、西日本からの新たな情報が遅れているような印象を与えている。

ところで、今まで西日本諸地域の関わりと述べてきたが、例えば甕Dが、既に台付甕として確立した形で入ってきている事を考えると、直接西日本との関わりというよりは、尾張低地を介した関わりを想定した方がよいだろう。そうすると、今述べた土器と環濠集落の関わりからは、次のような想定が成り立つかもしれない。すなわち、環濠機能中は、尾張低地部とは少なくとも土器に関しては没交渉であり、環濠埋没後にそれが急激に名古屋台地に流入したとする考えである。果たしてそうだろうか。名古屋台地では、成立の時点では西日本との関わりが強い山中式土器の成立が尾張低地より遅れる可能性が高い事は既に述べたし、後期後半では、西日本的な「薄甕」⁽¹⁵⁾であるS字甕等は名古屋台地にもたらされる事はほとんどない。しかし、では没交渉であったかと言えばそうではない事は、例えば後期初頭の甕の作り方の変化、壺の形式構成の変化はほぼ同時におきている事、環濠集落の前後の時期では高杯の型式変化などはむしろ名

古屋台地のほうが先行しているように見える程近い時期に生じている事から明らかであろう。

つまり、先に見た環濠集落期の現象は、在来のものについては情報をほぼ同時に共有している一方で、西方からの情報は、尾張低地を介してもたらされることが多く、それが尾張低地で定着するまで名古屋台地にもたらされる事はないという、名古屋台地の特徴を示していると考えたほうがよいのだろう。後期後半については、伊勢湾沿岸地域全体で、西日本からの目に見える影響は乏しいが、その中で、西日本各地で「薄甕」が生まれるのとほぼ同時に発生するS字状口縁台付甕が、尾張低地に程近い名古屋台地ではまったくみられない事も、西日本との関わりを告げていよう。ただ、S字甕については、単に影響、情報の有無が土器の有無となって表れているわけではなく、S字甕を必要とする社会の状況の有無が原因であると考えられるが⁽⁹¹⁷⁾、いずれにせよ尾張低地に比べると西日本各地と連動した動きが少ない事は否めない。そして、そうした名古屋台地と尾張低地部との関わりは、少なくとも弥生時代後期を通じて変わる事がなかったようである。

ところで、こうした尾張低地部を伊勢湾沿岸の中心とみなすような考え方からは、次のような意見も生まれる。名古屋台地では遅れると述べた山中式の成立は、周辺のその他の地域でも遅れているのだが、奈良康正氏は、山中式の広がりには時間差があるのは、「土器様式を共有することによって形成される同盟関係の中における地位の反映であり、編入の遅速により、その地域が尾張地方において重視されていたか否かが踏れるのではなかろうか」と述べる⁽⁹¹⁸⁾。しかし、山中式土器の共有が「同盟関係」を示すという根拠もないし、各地に山中式土器が成立するのが尾張地方の意図のものとなされたとする根拠もない。各地の「山中式」は、この時期に新たに出現するものだけ見ても、濃尾低地が「組み込」んだと言え得るほど普遍的ではないし、現状で、「山中式」の特徴をもつ土器の出現に地域毎に時期差があっても、その遅れている時期の別の土器がわからない以上、そのまま実態を示していると見る事はできない。

名古屋台地に関して言えば、山中式は、尾張低地部での確立なくして有り得ない、つまり名古屋台地の諸集落が、独自に山中式土器を成立させることは考え難く、尾張低地からの波及という事を考えざるを得ないが、それはこの時代には西日本からの情報が尾張低地を経由してもたらされる事が多い名古屋台地の特質であって、在来の土器についてみれば、情報の流れは必ずしも尾張低地から名古屋台地へという方向ばかりとは言えないことはすでに述べた通りである。そういう点から見れば、名古屋台地で山中式の成立が遅れるのは、尾張低地の集団の意図ではなくて、尾張低地の中でも山中式が確立していなかった事によるのだろう。

土器からこうした想定をすれば、名古屋台地の環濠集落成立が、尾張の拠点集落朝日遺跡の後期二度目の環濠掘削と近い時期であることがより重要になろう⁽⁹¹⁹⁾。西日本でまず生じたであろう争いを、尾張低地経由で知った名古屋の諸集落も、それに対応すべく環濠を掘削したのだろう。先に述べたように、高地性集落なども併い、実際の争いもいくらかはあったのだろうが、内部から武器の出土も少なく、「平和裡」の内に築かれたと解釈する余地もありながら、巨大な環濠を掘削したところに名古屋の環濠集落の特徴が表れているのかもしれない。そして、環濠集落を生み出した争乱に対するそうした関わり方、つまり、直接の当事者ではないということが、環濠埋没後も集落構成に大きな変化がなく、同じ形態の集落を営む背景となっているのであろう⁽⁹²⁰⁾。



写真1 瑞穂遺跡環濠



写真2 瑞穂遺跡焼土住居

(注1) 各遺跡の報告については、ここでまとめて掲載しておく。すべてを挙げるべきであるが、紙幅の都合で概報などの多くを割愛し、一部を挙げるにとどめる。また、遺跡の報告の内、三王山遺跡のまとめて触れたものについても割愛させて頂く。

高藏遺跡

荒木実他「高藏遺跡五本松町発掘調査概要報告書」財団法人荒木集成館 1986

荒木実他「高藏遺跡五本松町第2、3次発掘調査概要報告書」財団法人荒木集成館 1987

荒木実他「高藏遺跡五本松町11第4、5、6、7次発掘調査報告書」財団法人荒木集成館 1991

荒木実他「高藏遺跡沢上二丁目501発掘調査報告書」財団法人荒木集成館 1989

重松和男「熱田区夜寒町・高藏遺跡発掘調査報告書」名古屋市文化財調査報告XX 名古屋市教育委員会 1987

名古屋市教育委員会「熱田区高藏町高藏遺跡発掘調査概要報告書」1982

竹内孝吉「高藏遺跡第4次調査の概要」名古屋市教育委員会 1990

野口泰子「高藏遺跡第5次発掘調査の概要」名古屋市教育委員会 1994

田原和夫編「埋蔵文化財調査報告書」26 名古屋市文化財調査報告34 名古屋市教育委員会 1997

瑞穂遺跡

名古屋市教育委員会「瑞穂区瑞穂遺跡」『瑞穂遺跡-桜台高校遺跡発掘調査』1979

名古屋市見晴台考古資料館「瑞穂区牧町瑞穂遺跡発掘調査概要報告書」1982

服部哲也「瑞穂遺跡 第4次調査の概要」名古屋市教育委員会 1987

桜田貞雄・貝塚町遺跡

岡本俊朗「『桜田貞雄』の復元的再整理」『年報』1 名古屋市見晴台考古資料館 1980

見晴台遺跡

伊藤厚史・野口泰子「見晴台遺跡発掘調査報告書一遺構編一」名古屋市見晴台考古資料館 1993

伊藤正人「見晴台遺跡第32次・第33次発掘調査の記録」名古屋市見晴台考古資料館 1996

見晴台遺跡については、丸山竜平「統・執志倭人伝にみる『倭国大乱』と考古学」名古屋市見晴台遺跡の環濠集落をめぐる(上)一「東海学園国語国文」第四十九号 1996も参考にさせて頂いた。

(注2) 大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論叢』XLVⅡ 1968

(注3) 赤塚次郎「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集 1992

赤塚次郎「瑞穂寺山山頂墳と山中様式」『弥生文化博物館研究報告』第1集 1992

(注4) 大参義一「弥生式土器・土師器」名古屋市見晴台考古資料館『館藏品図録』I 1980

(注5) 石黒立人「尾張地方における弥生時代後期の土器編年」『第5回春日井シンポジウム資料集』1997

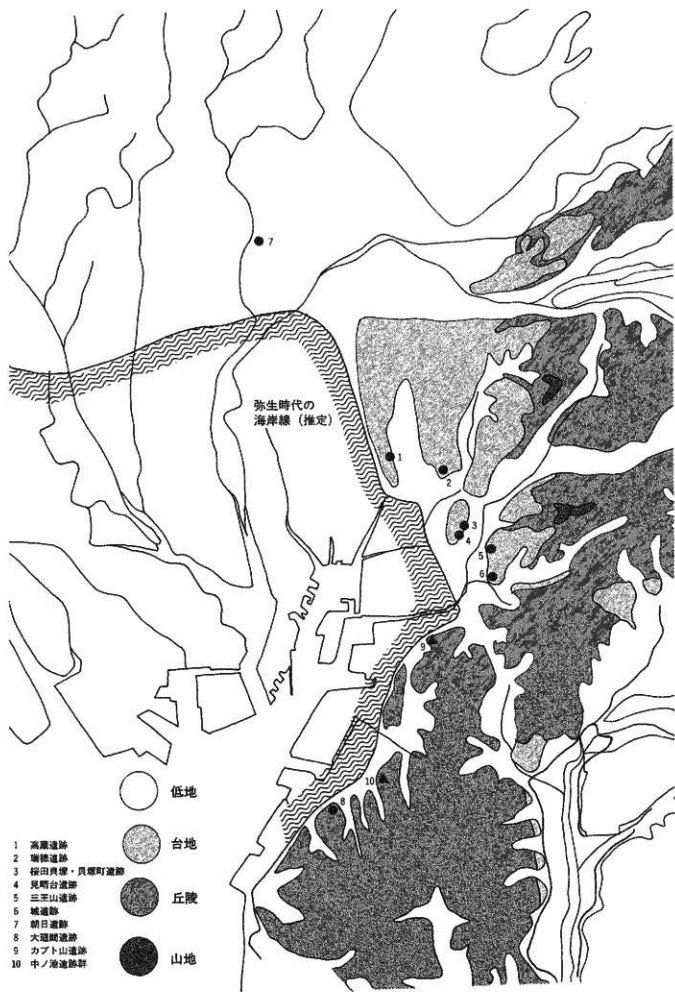
(注6) 宮原健司「VII期以降の問題点」『朝日遺跡』V(土器編・総論編)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集 1994
宮原健司「朝日遺跡における弥生時代後期方形周溝墓の変遷」『年報』平成9年度(財)愛知県埋蔵文化財センター

1998

- (注7) 名古屋市博物館『吉田富夫コレクション』1982
名古屋市教育委員会『清水寺遺跡発掘調査報告書』1976
- (注8) 小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成』本編 1989再版
- (注9) 大塚康博『戸山景観考』名古屋市博物館 1992
加藤安信『伊勢湾地域の弥生時代後期社会』『伊勢湾と古代の東海』古代工権と交流4 1996
加藤安信『弥生時代』『新修名古屋史』第一巻 1997
丸山竜平『名古屋見聞台遺跡環濠年代考』『立命館大学考古学論集』I 1997
- (注10) 千田嘉博『弥生の戦いと中世の戦い』『倭国乱る』国立歴史民俗博物館編 1996
- (注11) 飯尾恭之『尾張における後期弥生式土器の編年的研究(Ⅰ)』『古代人』27・28 名古屋考古学会 1973
- (注12) 関東では環濠内に環濠集落期の方形周溝墓が築かれる例があることが下記文献で紹介されており、方形周溝墓の存在だけでは環濠集落期特定の特異な根拠とは言えない。名古屋古地でも、報文中述べた三木山遺跡の2-SD08がその可能性がある。
大塚初重ほか『弥生時代の考古学』シンポジウム日本の考古学3 学生社 1998 P.92-93
- (注13) 前掲注9丸山氏の論文。
- (注14) 加藤安信氏のように異論を唱える研究者もある。前掲注9
- (注15) 前掲注9加藤氏の論文。
- (注16) 石野博信『古墳前期の薄葬と厚葬』『細川善教先生華甲記念考古学論集』1988
- (注17) 村木誠『葵の意味を問う—美濃の事例研究—』『美濃の考古学』第2号 1997
- (注18) 奈良康正『弥生時代後期における伊勢湾沿岸地域の一様相』『京都府埋蔵文化財論集』第3集1996
- (注19) 石黒立人『朝日遺跡のイメージ』『朝日遺跡Ⅴ(土器編・総論編)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集 1994
- (注20) 本稿執筆中に、見聞台考古資料館で特別展「よみがえる環濠集落」を開催した。その際多くの方々にご協力頂きました。また、関連事業として講演をして頂いた森岡秀人氏には多くのご教示を頂きました。更に、石黒立人氏には、高瀬遺跡D3等、後期初頭の土器について多くを教えて頂いた。赤塚次郎氏・加納俊介氏・丸山竜平氏には日頃から様々な御教示を頂いています。小島一夫氏からは、名古屋の環濠集落の性格について、示唆に富んだ話を伺いました。有り難うございました。

表1の赤塚1990は、『考察』『総遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 1990

加納1991は、『土器の編年 東海』『古墳時代の研究』6 葦山園 1991



第3図 関連遺跡地図 (木村有作「あゆみ湯の考古学」1994に加筆)

付編 6 三王山遺跡出土の動物遺体

名古屋大学大学院人間情報学研究所 新美 倫子

三王山遺跡では弥生時代後期の溝(5-SD06)中から動物遺体が出土した。ここでは、これらのうち貝類以外の資料について述べることにする。出土資料は合計6点であり、その内訳はイノシシ1点、シカ2点、種不明3点であった。以下にその内容を説明したい。

イノシシは頭蓋骨が1点出土している。資料は後頭骨から脳下底部分及び左右の側頭骨・頬骨・上顎骨が残存し、頭頂部・前頭部から鼻部にかけては欠損している。縄文時代には脳髓食のためにイノシシ頭蓋骨の大後頭孔付近や脳下底部分を壊すことが多いが、このように頭頂部を壊すのは弥生時代に多く見られる処理方法である。左上顎骨では第1～第4前臼歯と第1～第3後臼歯が残っており、犬歯は残っていないがその歯槽から見てこの個体は雄である。右上顎骨は第1・第3後臼歯が残っており、第3・第4前臼歯と第2後臼歯は残っていない。全ての永久歯の萌出が完了した成獣であり、磨滅は第3後臼歯の最後部まで及んでいる。左上顎後臼歯の計測値を表1に示した。

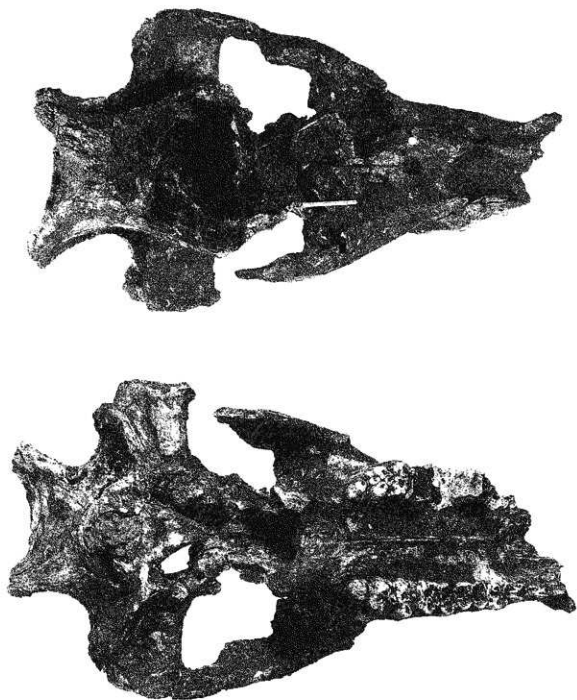
この資料については弥生時代のものであるためにブタかイノシシかという点が問題となる。この観点から資料を観察すると、歯列はまっすぐでゆがみや乱れは見られず、歯周病も認められない。前臼歯・後臼歯共に全体に平均して磨滅が進んでおり、一部の弥生ブタで見られるように第1後臼歯のみが異常に磨滅しているということはない。また、後頭骨の幅は広く、頭蓋骨の全体に骨体の肥大は見られない。以上の点から、この個体はブタではなくイノシシであると思われる。なお、これについては国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生に御教示を頂いた。

シカは椎骨1点と中足骨の中間部破片1点が出土した。椎骨は関節部の癒着していない若い個体の頸椎である。中足骨は長さ4cmほどの中間部破片であるが、中足骨前面の溝が見られる。

種不明骨片としたもの3点は、小さく割れて保存状態も悪いために哺乳類か鳥類かも判断できない資料である。

	長さ	前幅	後幅
第1後臼歯	13.9	12.7	12.9
第2後臼歯	19.6	15.6	15.7
第3後臼歯	31.9	18.5	—

表1 左上顎後臼歯計測表 (mm)



図版1 動物遺体 (物1/2) イノシシ頭蓋骨

付編7 第5次調査出土土器胎土および粘土採掘坑粘土の材料分析

藤根 久・古橋美智子 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

土器の材料は、粘土と混和材から構成されるが、縄文土器や弥生土器などは焼成温度が低いため、元の元の粘土に含まれる珪酸化石や骨針化石などが残っていることが多い。土器薄片中のこれら微化石類の記載により、材料粘土の種類を知ることが可能である。また、胎土中の砂粒は、細砂から2mm以上の礫まで含まれるが、土器制作地の岩石学的特徴などを知ることができる。さらに、砂粒以外の混和材の種類についても調べる事が可能である(車崎ほか, 1996)。

三王山遺跡の第5次調査では、弥生時代後期あるいは古墳時代の遺構・遺物などが検出されたが、台地縁辺部においては複数の粘土採掘坑も検出された。

ここでは、三王山遺跡第5次調査において出土した高杯と壺、粘土採掘坑壁面から採取した粘土について材料学的に検討した。

2 分析試料

検討した試料は、第5次調査において出土した高杯と壺および粘土採掘坑壁面から採取した粘土3試料である(第1表)。

No	種類	位置	備考
1	高杯脚部	5-SK02・05	1997/11/25
2	壺	5-SK02・05東モクシヨウ3層	1997/11/25
3	第1層粘土	5-SX02内	霜降り状粘土層
4	第2層シルト質粘土	5-SX02内	赤褐色シルト質粘土層
5	第3層シルト質砂	5-SX02内	赤褐色シルト質砂

第1表 検討した土器および粘土層試料

3. 処理と方法

ここでは、土器の薄片を作成し、偏光顕微鏡による観察を行った。各土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用薄片を各1枚づつ作成した。なお、粘土などは、電気炉を用いて750度・10時間の焼成を行い、同様に薄片を作成した。

(1)試料は、岩石カッターで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。平面を作成した後、エポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。(2)研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。(3)精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片は、偏光顕微鏡下300倍で各分類群(菱田ほか(1993)に従う)ごとに同定・計数した。同定・計数は、100 μ m格子目盛を用いて任意の位置における約50 μ m(0.05mm)以上の鉱物や複合鉱物類(岩石片)あるいは微化石類を対象とし、石英・長石類および微化石類以外の粒子が約100個以上になるまで同定・計数した。また、この計数とは別に、薄片全面について、微化石類(放散虫化石、珪酸化石、骨針化石、胞子化石)

や大型粒子の特徴についても観察・記載した。

4. 各壺胎土の特徴および計数結果

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した(第1図)。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類の記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

No.1 : 50~150 μm が多い(最大粒径1.2mm)。石英・長石類>複合石英類(微細)>複合石英類, 雲母類, 軽石型ガラス, 斑晶質, 微細黒褐色粒子高密度, シルコン, 珪藻化石(淡水種 *Melosira granulata*, 不明種), 胞子化石, 植物珪酸体化石, イネ類珪酸体

No.2 : 50~100 μm が多い(最大粒径1.6mm)。石英・長石類>雲母類, 複合石英類, 斜長石(双晶), 単斜輝石, シルコン, 珪藻化石(内湾指標種群 *Thalassionema nitzschioides*, 海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属, *Actinocyclus* 属, 淡水種 *Pinnularia* 属, 不明種多い), 骨針化石多産, 胞子化石, 植物珪酸体化石, イネ類珪酸体

No.3 : 80~300 μm 多い(最大粒径600 μm)。雲母類>石英・長石類>複合石英類(微細), 複合石英類(小型), シルコン, 単斜輝石, 斜方輝石, 微細黒褐色粒子, 胞子化石

No.4 : 60~300 μm が多い(最大粒径700 μm)。雲母類>石英・長石類>複合石英類(微細), 微細黒褐色粒子高密度, 複合石英類(小型), シルコン, 単斜輝石, 斜方輝石

No.6 : 200~600 μm が多い(最大粒径1.0mm)。雲母類>石英・長石類>複合石英類(微細)>複合石英類(小型), 黒褐色粒子, 単斜輝石, 斜方輝石, 胞子化石, 植物珪酸体化石

5. 微化石による材料粘土の分類

検討した土器胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類は、土器材料となる元の粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の種類を知るのに有効な指標になる。検討した胎土は、微化石類により、a) 海成粘土を用いた胎土, b) 淡水成粘土を用いた胎土, c) その他の粘土を用いた胎土, に分類した。

a) 海成粘土を用いた胎土 (No.2)

この胎土あるいは粘土中には、内湾指標種群の *Thalassionema nitzschioides* や海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属などの海水種珪藻化石が含まれていた。さらに、これらの胎土中には、骨針化石が多量に含まれている。

b) 淡水成粘土を用いた胎土 (No.1)

この胎土中には、少ないものの湖沼浮遊生指標種群の *Melosira granulata* や不明種珪藻化石が含まれていた。

c) その他粘土 (No.3~5)

これらの粘土や粘土質堆積物中には、粘土の起源を指標する微化石類は含まれていない。

6. 砂粒およびその他の特徴

胎土中には、岩石の起源を推定できる比較的大型の砂粒が含まれていた。岩石の推定は、複合石英類(微細)や砂岩質が堆積岩類、斑晶質や完晶質が火山岩類、複合石英類(大型)や複合鉱物類(含雲母類)が深成岩類、ガラスがテフラ、とそれぞれ推定した(第3表)。

7. 遺跡の地質学的状況

三王山遺跡が立地する地域は、鳴子丘陵と呼ばれ第三紀鮮新統(約520万～164万年前)の陸成層とされる東海層群矢田川累層や第四紀更新統前～中期(約164万～14万年前)の八事層が堆積している。矢田川累層は砂層や泥質層の互層からなり、八事層はチャート礫を主体とする礫層からなる。また、更新統後期(約14万～1万年前)の礫から構成される低位段丘層も一部分布する。坂本ほか(1986)の「名古屋南部」地質図幅を見ると、鳴子丘陵西側の矢田川累層は西ないし西南へ3～30度程度傾斜し、この上に八事層が不整合に堆積する。

調査区の粘土探掘坑断面では、層厚70cm前後の赤褐色霏降り状粘土がやや北に傾いて分布し、下位層に雲母片を多量に含む層厚約30cmほどのシルト質砂が見られた。これより北側斜面では砂礫層が厚く分布する。坂本ほか(1986)の「名古屋南部」地質図幅との比較では、この粘土層は矢田川累層上部層に対応するものと考えられる。なお、粘土探掘坑内における第1層の赤褐色霏降り状粘土は、上方に開いたオープン・クラックが明瞭に認められることから、この地層が堆積した後、ある時期において地表面であったことを示している。なお、このオープン・クラックが霏降り状構造を示す役割を果たしていることから、元の粘土層は全体に赤褐色を呈すると考える。

一方、天白川を挟んで西側には熱田台地があり、第四紀更新統後期熱田層からなる。熱田層は、粘土や砂およびシルトから構成される。粘土層は5層単からなり、下位層2層が貝化石を含む海成層、上位3層が泥炭湿地性(河川下流域)を示す珪藻化石が検出される(坂本ほか、前出)。

8. 土器胎土および粘土の特徴

微化石類の記載により、Na1の高杯は珪藻化石の少ない淡水成粘土、Na2の壺は内湾成の海成粘土を用いていることが分かった。砂粒組成の記載により、Na1の高杯は堆積岩類を主体として深成岩類や火山岩類あるいはテフラを含む。また、Na2の壺は細粒質であるため岩石学的特徴は明瞭でないが、深成岩類要素を示す砂粒がわずかに見られた(第3表)。

一方、粘土探掘坑内において採取した2層準の粘土や下位層のシルト質砂は、微化石類を含まず、雲母片を多量に含み、堆積岩類の砂粒を含むと判った特徴を示す。この粘土探掘は、土坑底部の位置関係から第1層粘土あるいは第2層シルト質粘土が探掘の対象であったと推定される。これらの粘土は、雲母片を多量に含むほか、赤味の強い特徴的な粘土である。この赤味の強い粘土の特徴は、焼成後の薄片の顕微鏡観察において細粒黒褐色粒子を高密度に含む特徴として観察された。Na1の高杯脚部胎土中には、この細粒黒褐色粒子が比較的高密度で観察されることから、こうした赤味の強い粘土を利用したことが考えられる。なお、この高杯胎土は、珪藻化石が少ないことから、この矢田川累層の粘土を利用したことが考えられる。ただし、この粘土探掘坑から採取した粘土を用いたかどうかは明らかでない。

No.2の壺は、内湾成の珪藻化石を特徴的に含むことから、この地域に分布する唯一の海成層である熱田層中の粘土を利用したと推定される。

9. おわりに

ここでは、材料粘土と混和材について検討した。土器研究は形式や施文などを中心に行われてはいるが、使用した粘土や混和材の種類など材料に関する研究は全くなされていない。

最近、ここで調査されたような袋状土坑が粘土採掘坑として注目されてきた。これらの粘土採掘坑は、その多くが土器材料に利用されたと予想されるが、ここで行ったような材料についての検討が重要であると考えている。

引用文献

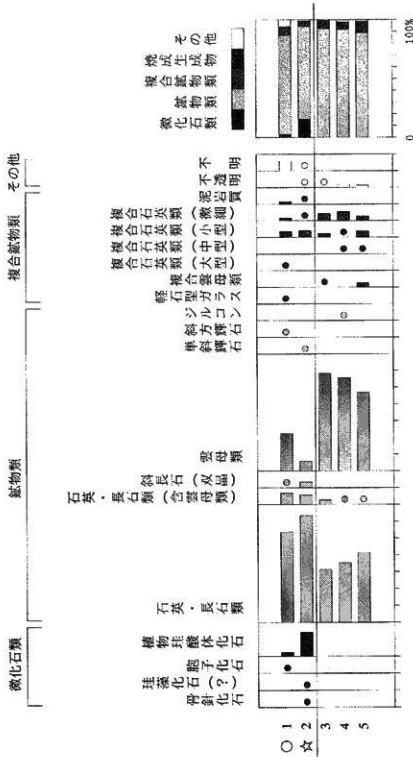
- 菱田 量・車崎正彦・松本 完・藤根 久(1993) 岩石学的方法に基づく胎土分析について—弥生時代後期の土器を例にして—。日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集, 34-35。
- 車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子(1996) (39) 土器胎土の材料—粘土の起源を中心に。日本考古学協会第62回総会研究発表要旨, 153-156
- 坂本 亨・高田康秀・桑原 徹・糸魚川淳二(1986) 名古屋市南部地の地質。地域地質研究報告(5万分の1図幅), 地質調査所, 55p.

第2表 土器胎土および粘土中の粒子計数結果一覧表

No.1 : 高杯脚部, No.2 : 壺, No.3・4 : 粘土探掘坑断面採取粘土,

No.5 : 粘土探掘坑断面採取砂層

分類群					
	1	2	3	4	5
微化石類					
骨針化石	-	4	-	-	-
珪藻化石(?)	-	3	-	-	-
胞子化石	1	-	-	-	-
植物珪酸体化石	6	78	-	-	-
鉱物類					
石英・長石類	140	348	80	78	89
石英・長石類(含雲母類)	18	31	7	1	1
斜長石(双晶)	1	19	-	-	-
雲母類	59	32	149	123	101
單斜輝石	-	2	-	-	-
斜方輝石	1	-	-	-	-
ジルコン	-	-	-	1	-
複合鉱物類					
軽石質ガラス	2	-	-	-	-
複合雲母類	-	-	1	-	6
複合石英類(大型)	1	-	-	-	-
複合石英類(中型)	-	-	-	1	1
複合石英類(小型)	9	22	6	1	8
複合石英類(微細)	4	3	11	12	6
泥岩質	4	1	-	-	-
その他					
不明	-	1	2	4	3
不透明	15	5	-	-	-
総ポイント数	261	549	256	221	215

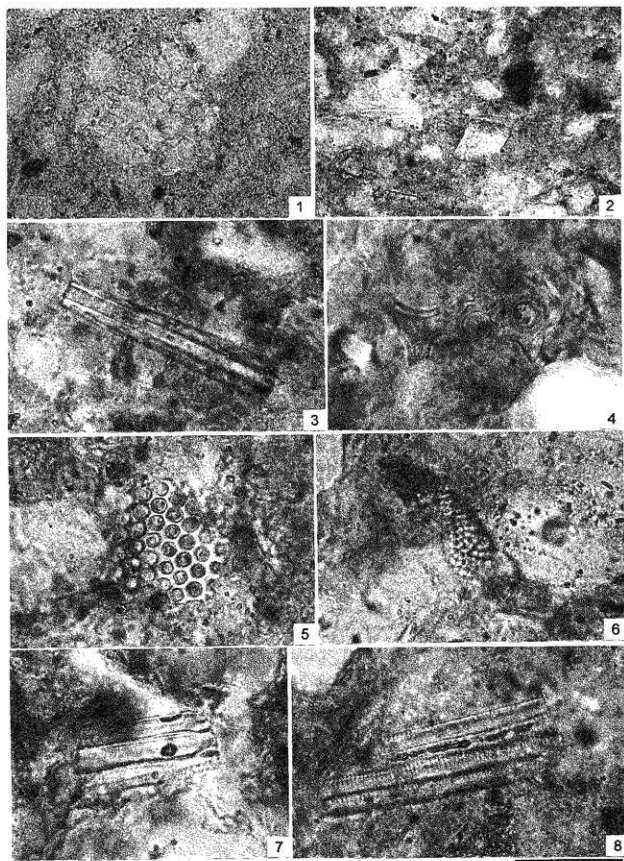


(・ : 1%以下)

第1図 土器胎土および粘土中の粒子組成図 (全分群数を基数とした百分率で表示)
 No. 1 : 高杯脚部, No. 2 : 臺, No. 3・4 : 粘土採掘坑断面採取粘土, No. 5 : 粘土採掘坑断面採取砂層
 [粘土の区分 (試料番号左)]
 ☆ : 焼成 (海水裡埋蔵化石などの出現), ○ : 淡水成 (海水裡埋蔵化石の出現), 無記号 : その他 (微化石類未検出)

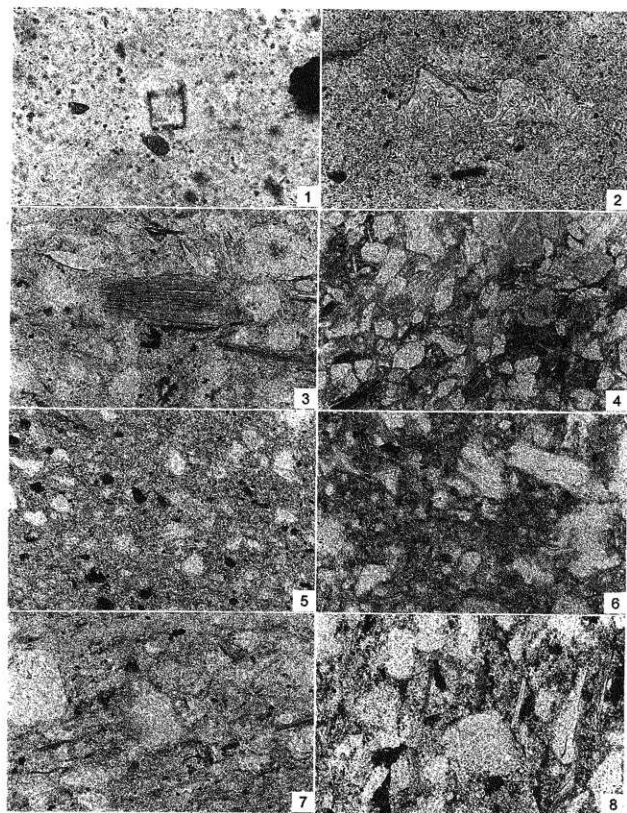
No.	種類		粘土の特徴		砂粒の特徴		その他の特徴	地層の候補
	分類	種類	特徴	粒度	(起源岩石別、)は盛増な出現。[]は極少量)			
1	高性層部	○ 淡水成	塊状心石巻層	粗粒砂含む	(起源岩石別、)は盛増な出現。[]は極少量)	微細黒褐色粒子、伴埋註腺体	矢田川黒層	
2	壺	☆ 海成	内湾埋註層心石の出現	粗粒砂含む	[源成岩類]	伴埋註腺体	黒田層	
3	第1層粘土層	その他		塊層岩類		高母質高密度、微細黒褐色粒子	(矢田川黒層)	
4	第2層シルト質粘土	その他		塊層岩類		微細黒褐色粒子・高母質高密度	(矢田川黒層)	
5	第3層シルト質砂	その他		粗粒砂		高母質高密度、微細黒褐色粒子	(矢田川黒層)	

第3表 土器胎土および粘土採掘坑粘土の特徴と砂粒組成



図版1. 三王山遺跡より出土した土器中の粒子の偏光顕微鏡写真(スケール: 1, 2:100 μ m, 3~8:20 μ m)

- | | | |
|--|--|--------------------------------------|
| 1. 軽石型ガラス No.1 | 2. 珪藻化石(<i>Pinnularia</i> 属) No.2 | 3. 骨針化石 No.2 |
| 4. 珪藻化石(<i>Coscinodiscus</i> 属/ <i>Thalassiosira</i> 属) | 5. 珪藻化石(<i>Actinocyclus</i> 属) No. 6. | 6. 珪藻化石(<i>Actinocyclus</i> 属) No.2 |
| 7. 不明種珪藻化石 No.2 | 8. <i>Thalassiomema nitzschioides</i> No.2 | |

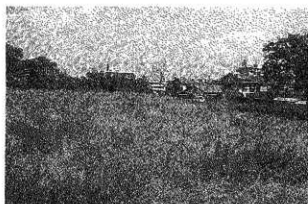


図版2. 三王山遺跡より出土した土器および堆積物中の粒子の偏光顕微鏡写真(スケール: No.1: 40 μ m, No.2: 100 μ m, No.3・5~8: 200 μ m, No.4: 1cm)

- | | | |
|--|------------------------|--------------|
| 1. 珪藻化石 (<i>Melosira granulata</i>) No.1 | 2. イネ類プラント・オパール化石 No.1 | 3. 雲母類 No.3 |
| 4. シルト質砂状況 No.5 | 5. 胎土状況(黒褐色粒子) No.1 | 6. 粘土状況 No.2 |
| 7. 採掘坑粘土状況 No.3 | 8. 採掘坑粘土状況 No.4 | |



1次調査時遠景(天白橋より)



調査前(南より)



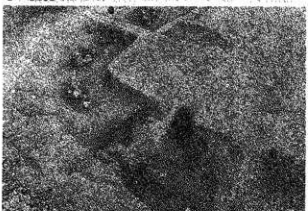
1-SZ01(南より)



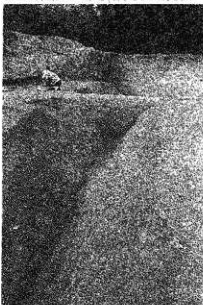
1-SZ01(北西より)



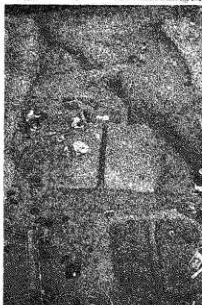
1-SZ03(南西より)



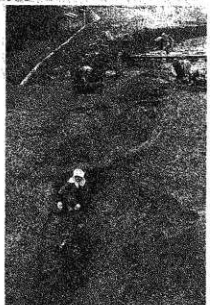
1-SZ03土器出土状況(西より)



1-SD01(南より)



前半区全景(南より)



1-SD02(北東より)



1-SD04 (南より)



1-SD04 (南西より)



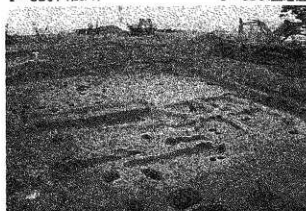
1-SD04 (北より)



1-SD04上層遺物出土状況 (西より)



1-SK01 (南より)



後半区西半 (南東より)



1-SB01 (北西より)



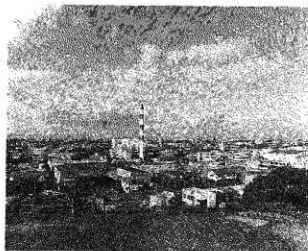
1-SB02 (南西より)



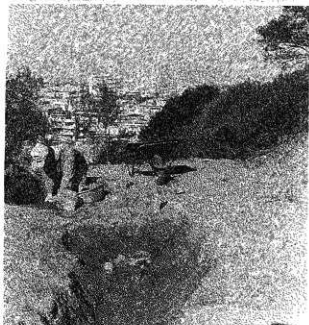
1-SX04・05, SZ02 (北より)



2次調査時遠景(南西より)



西を望む



2-SD08(南より)



2-SK09(西より)



2-SK15(左、南より、上、東より)



2-SD01 (北西より)



2-SD01出土土器 (北東より)



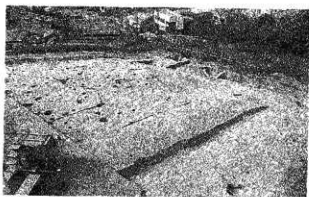
2-SD02 (北東より)



2-SD02 (南西より)



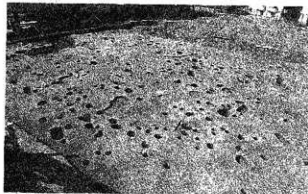
2-SD02と遺跡中央部との段差 (北より)



3次調査全景



4次調査西部全景



4次調査中央部全景



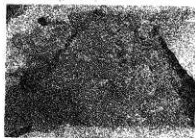
4次調査南部全景



トイレ予定地全景



西側斜面堆積状況



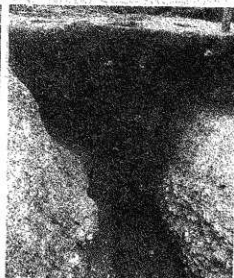
3-SX03 (左側が像)



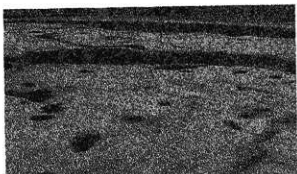
3-SX05



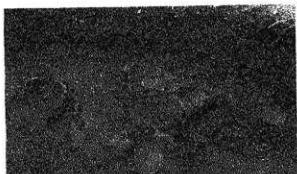
3-SD06 II層下位
土器出土状況



3-SD06断面



3-SB01



3-SB01上層遺物出土状況



4-SB04 (上) とSB05 (下)



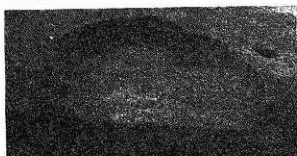
4-SB03 (上) とSB06 (下)



4-SB07



4-SB08 (右) とSB09 (左)



3-SK06



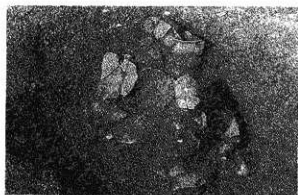
4-SK12遺物出土状況



4-SK46



4-SB01



3-SK03遺物出土状況



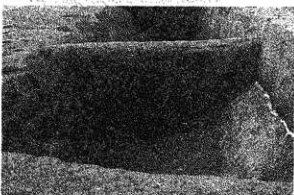
4-SK11遺物出土状況



4-SD11



4-SD22断面



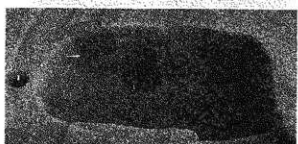
4-SD24



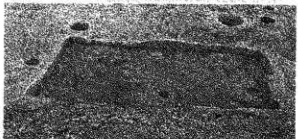
4-SK14



4-SK26



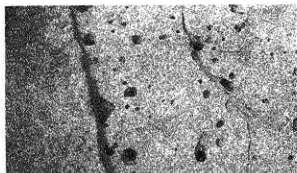
4-SK45



4-SK50



4-SK37



3-柱穴列1・2



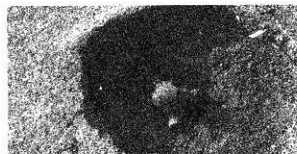
4-柱穴列1・2



4-SX12



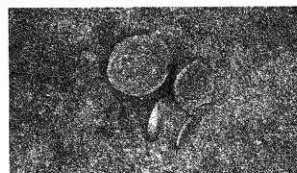
4-P 553遺物出土状況



4-P 372遺物出土状況



4-P 352遺物出土状況



4-P 479遺物出土状況



箱畑福両神社



遺物整理作業風景



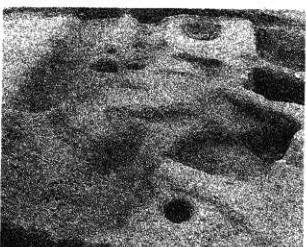
調査風景 (5-SD06の掘削)



調査風景 (5-SK10の掘削)



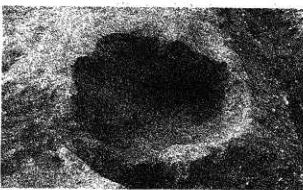
調査区北半部



調査区東北部上位遺構



調査区南半部



5-SK08



5-P 4 遺物出土状況



5—SD06 (西から)



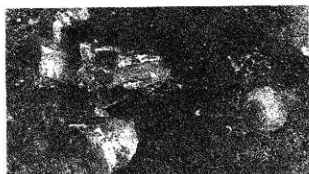
5—SD06 (東から)



5—SD06土層 (西から)



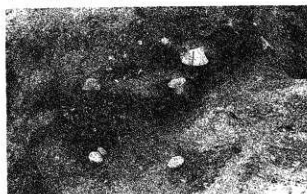
5—SD06土層 (西から)



5—SD06獣骨出土状況



5—SD06土器出土状況



5—SD06土器・貝類出土状況



5—SD06土器出土状況



5-SK02-05 (東南から)



5-SK10 (西から)



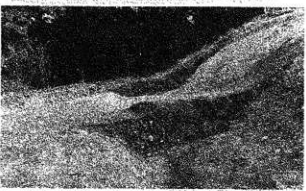
5-SK10 (南から)



5-SD04 (東から)



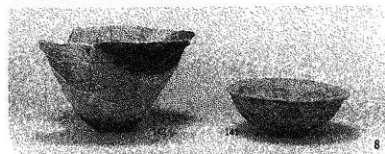
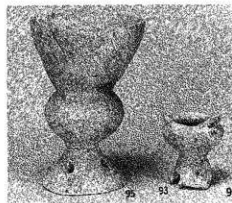
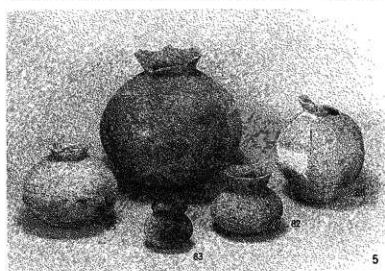
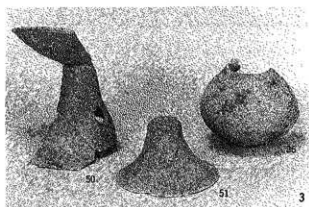
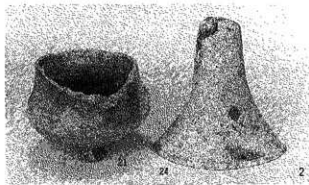
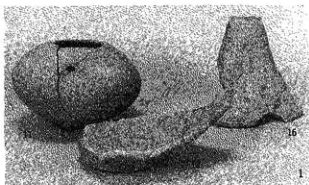
5-SK10 (北から)



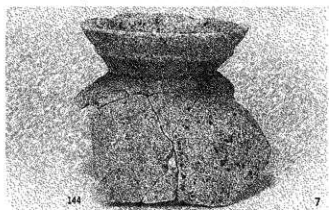
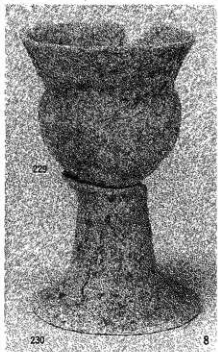
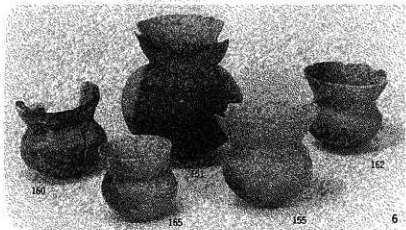
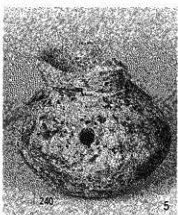
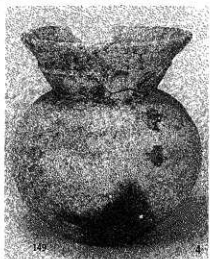
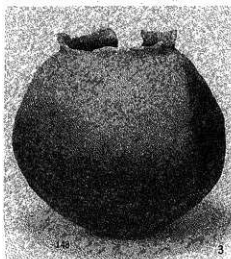
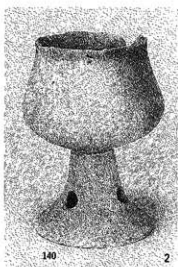
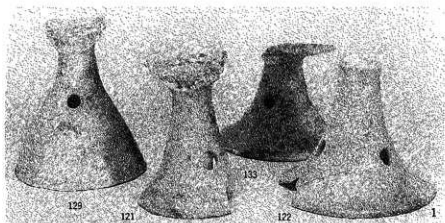
5-SD04土層 (西から)



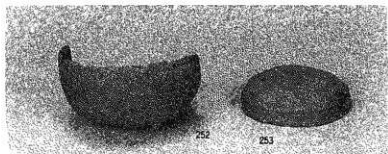
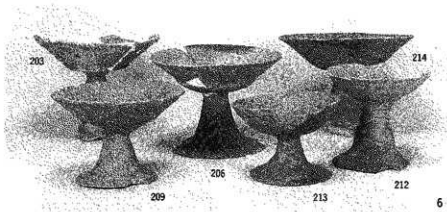
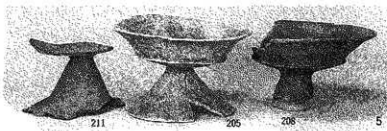
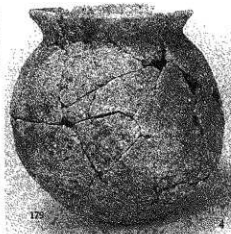
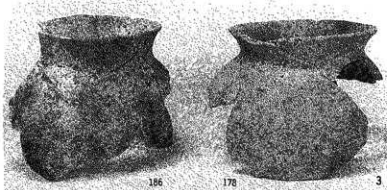
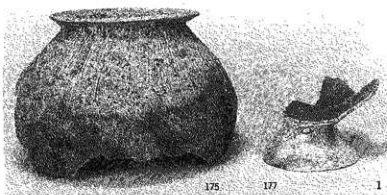
丘陵北端 傾斜地形の現状 (北東から)



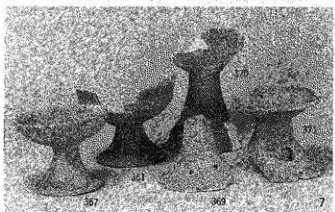
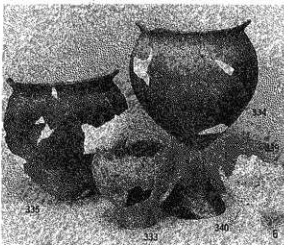
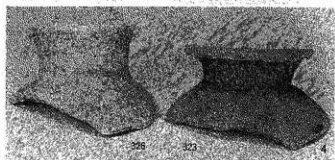
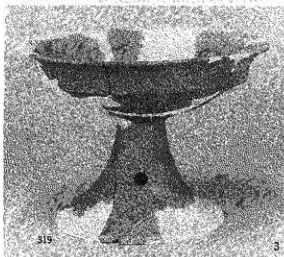
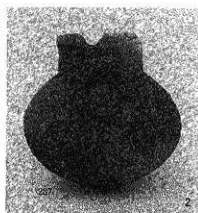
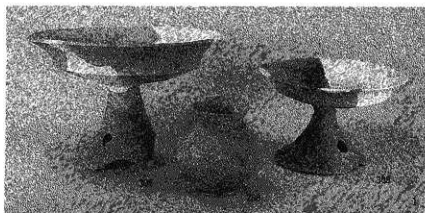
1…SZ01 2…SZ02 3…SZ03
4…SD01 5～9…SD04下層



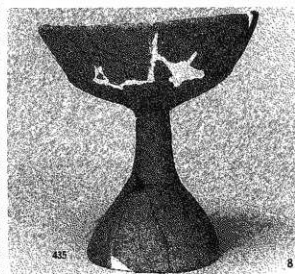
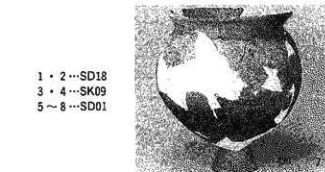
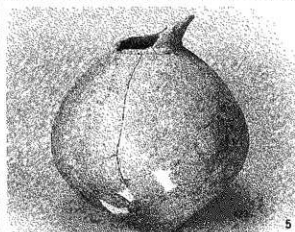
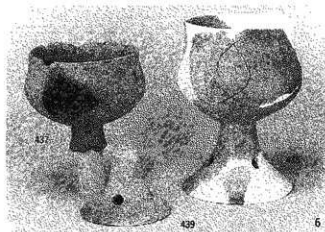
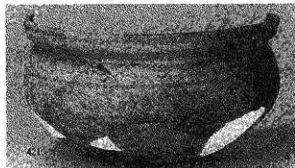
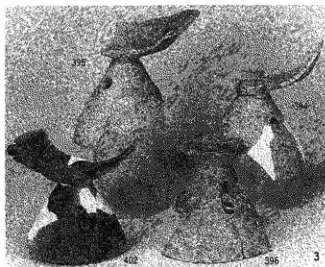
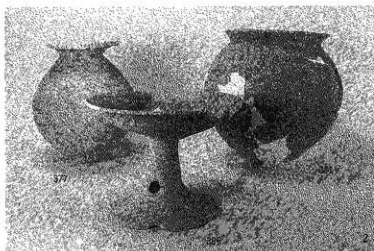
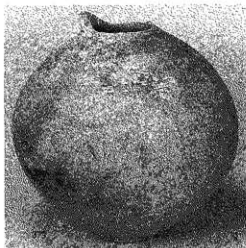
1~2...SD04下層
3~8...SD04上層



1~6...SD04上層
7.....SK01
8.....土偶



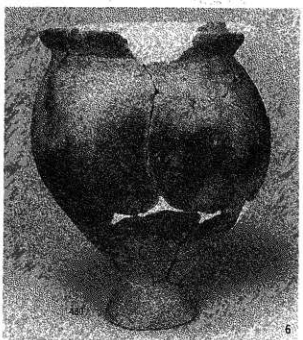
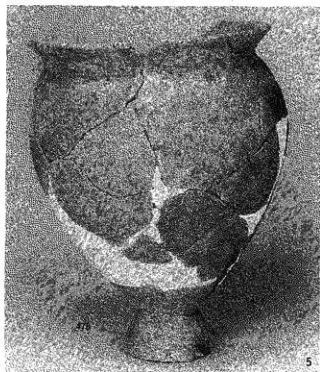
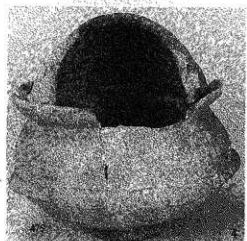
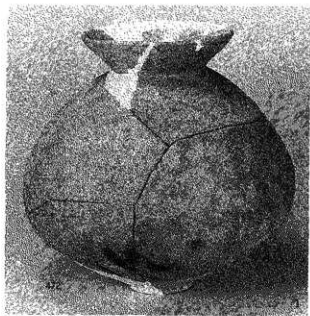
1・2…SD08
3…SK20
4～8…SK15



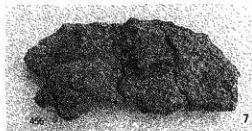
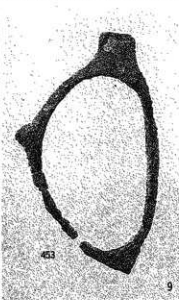
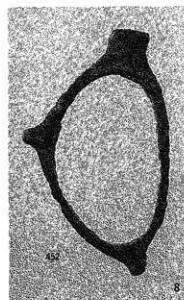
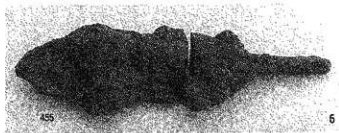
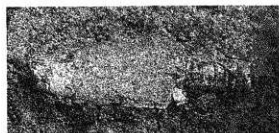
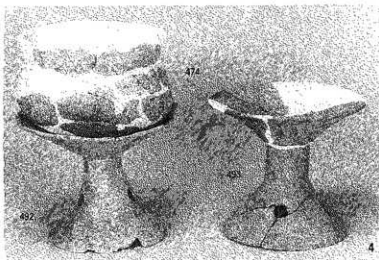
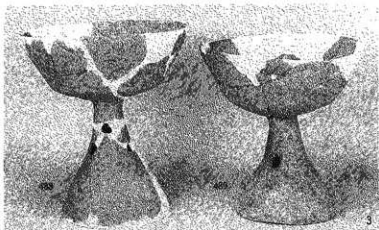
1・2…SD18
3・4…SK09
5～8…SD01

435

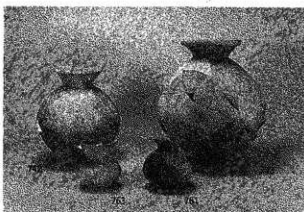
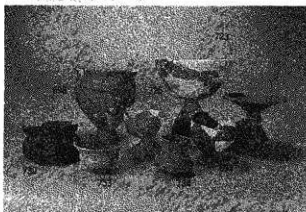
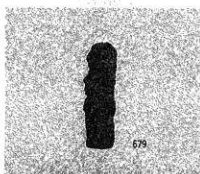
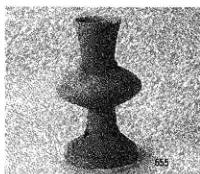
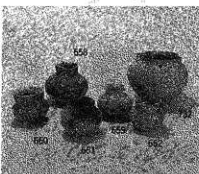
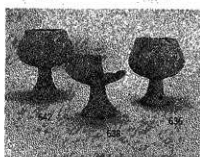
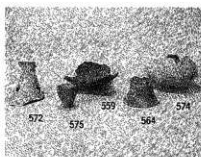
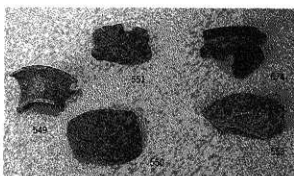
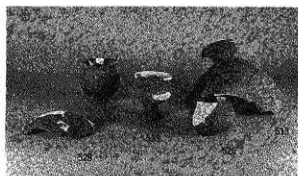
8

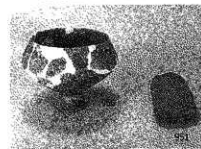
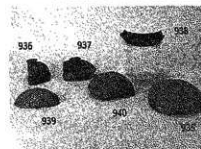
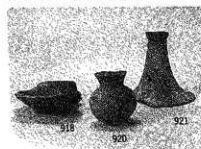
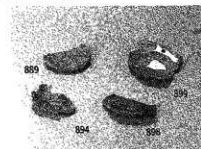
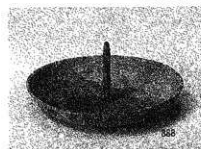
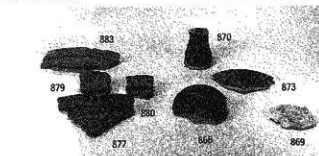
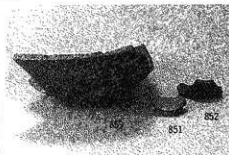
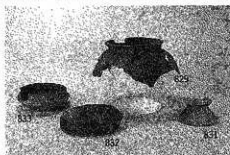
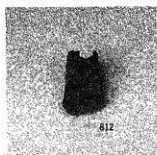
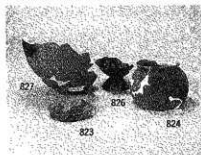
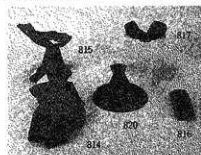
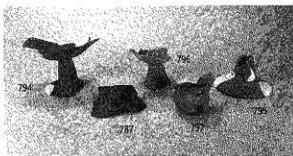
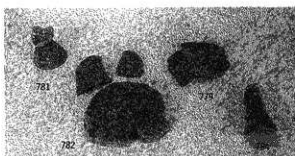


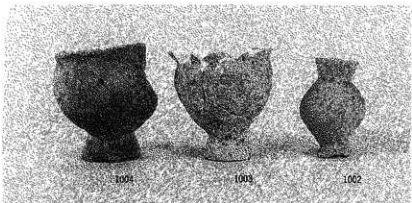
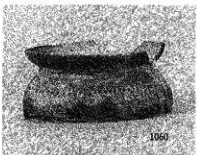
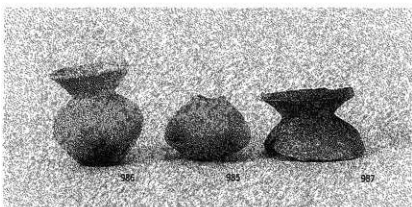
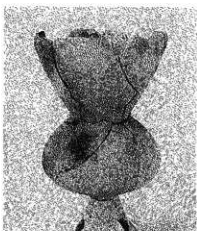
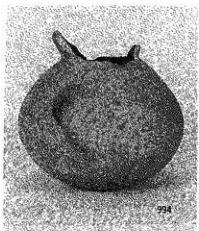
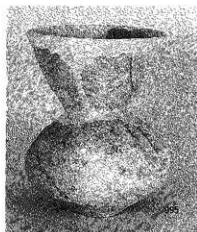
1~6...SD02

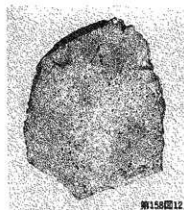
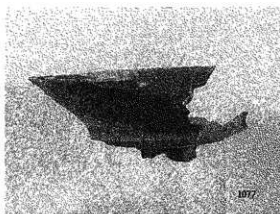
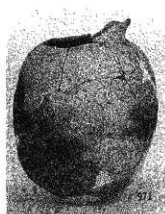
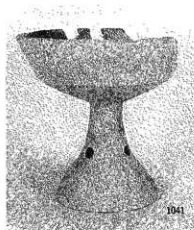
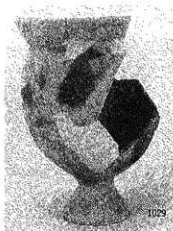


1~9...SD02, 10...SK12
11...P 99









名古屋市文化財調査報告 既刊目録

I	H-101号古窯跡発掘調査報告	1973
II	古沢町遺跡発掘調査報告—弥生時代編—	1974
III	御影町古窯跡群発掘調査報告	1974
IV	有松町並み調査報告	1975
V	NKI-34号古窯跡発掘調査報告	1975
VI	徳重西部土地地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告書	1976
VII	光真寺古窯跡発掘調査報告書	1979
VIII	小幡古墳発掘調査報告書	1980
IX	NN-278号古窯跡発掘調査報告書	1981
X	民俗文化財調査報告書(名古屋市内の山車と神楽)	1981
XI	NN-314号古窯跡発掘調査報告書	1981
XII	NN-282号古窯跡発掘調査報告書	1982
XIII	NN-268号古窯跡発掘調査報告書	1983
XIV	笹ヶ根古墳群発掘調査報告書	1984
XV	民俗文化財調査報告書(名古屋の石造物)	1985
XVI	天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書	1985
XVII	尾張元興寺遺跡発掘調査報告書	1985
XVIII	天白・元屋敷遺跡第二次発掘調査報告書	1986
XIX	吉根地区埋蔵文化財発掘調査報告書	1986
XX	高蔵遺跡発掘調査報告書	1987
21	白鳥古墳第II次発掘調査報告書	1989
22	志段味地区民俗調査報告書	1989
23	茶臼山古墳発掘調査報告書	1990
24	埋蔵文化財発掘調査報告書	1993
25	鳴海地区須志器窯発掘調査報告書	1994
26	名古屋市山車調査報告書1(筒井町湯取車)	1994
27	NN330号窯発掘調査報告書	1994
28	尾張元興寺跡発掘調査報告書	1994
29	名古屋市山車調査報告書2(若宮まつり 福祿寿車)	1995
30	名古屋市山車調査報告書3(牛立天王まつり 牛頭天王車)	1996
31	埋蔵文化財調査報告書24(伊勢山中学校遺跡 第5次発掘調査)	1996
32	埋蔵文化財調査報告書25(高蔵遺跡 第8次・第9次他)	1996
33	名古屋市山車調査報告書4(有松まつり 布袋車・磨子車・神功皇車)	1997
34	埋蔵文化財調査報告書26(高蔵遺跡 第12次～第15次)	1997
35	埋蔵文化財調査報告書27(天白元屋敷遺跡 第3次)	1997
36	埋蔵文化財調査報告書28(小幡遺跡 第1・2次)	1998
37	名古屋市内寺院の仏画	1998
38	埋蔵文化財調査報告書29(正木町遺跡第7次～第9次)	1998
39	名古屋市山車調査報告書5(広井神明社 紅葉狩車)	1999
40	埋蔵文化財調査報告書30(三王山遺跡 第1～5次)	1999

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	埋蔵文化財調査報告書							
副書名	三王山遺跡(第1～5次)							
巻次	30							
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	40							
編著者名	水野裕之・服部哲也・村木誠・田原和美・伊藤厚史・稲田望子							
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館							
所在地	〒457-0026 愛知県名古屋南区見晴町47 Tel 052-823-3200							
発行機関	名古屋市教育委員会							
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 Tel 052-972-3268							
発行年月日	西暦 1999年3月26日							
所収遺跡名	所在地名	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三王山遺跡	名古屋市 緑区鳴海町 三王山	23100	14-84	35°	136°	1990.11.19 ～1991.1.31	約 900	公園整備
				05°	57°	1994.10.11 ～1995.1.13	約 900	鉄鋼造型工事
				16°	15°	1996.1.22 ～3.29	約 700	公園整備
						1996.7.22 ～12.6	約2,000	同上
						1997.10.20 ～12.26	約 400	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
三王山遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 宗町時代	方形周溝墓、環濠、 竪穴住居、中世人溝	弥生土器、銅剣、 銅鏃、土師器、中 世陶器	丘陵先端の環濠集 落、有鈎銅剣			

名古屋市文化財調査報告40
埋蔵文化財調査報告書30

三王山遺跡(第1～5次)

1999年3月26日発行

編集 名古屋市見晴台考古資料館

発行 名古屋市教育委員会

名古屋市中区三の丸三丁目1番1号

印刷 西濃印刷株式会社

